

---

# NEXT TO YOU

灯乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

N E X T   T O   Y O U

### 【Nコード】

N 7 4 1 9 U

### 【作者名】

灯乃

### 【あらすじ】

ある朝ジョギング中に、トリップ体質の美少女、有紗はどこぞの王子様が行った「ペット代わり（ってオイ）の魔族の召喚」に巻き込まれた青年にくっついて異世界へ。「おにーさん、お仲間ですね！」大丈夫ですよー、すぐに元の世界に帰れますからね！・・・と思っていたら、今回はちよつと意外な展開が待っていた！？・・・まあ、何事も前向きに、前向きに。だって、旅は道連れが居た方がいいもんね。そう、誰か偉い人も言ってたよ。人生は長い旅のようなものだ。うん、名言。

## 第1話 体質？（前書き）

趣味全開で書いてます！

## 第1話 体質？

ひとにはそれぞれ体質、というものがある。

まあ、年代問わず、女性ならばまず太りやすいか、そうでないかというものが最も興味をそえられる分野であることだろう。

他にも教科書を読むと眠くなる体質、陽に焼け易い、焼けにくい、或いはちよつと斜めなところでは幽霊が見える見えない、ということころだろうか。

幽霊云々については、正体見たり枯れ尾花、ということも多々あるからして、自己申告と実際が異なることも多々ありそうではあるが。

ここに、ひとりの少女がいる。

名を、七瀬有紗。

美少女である。

街を歩けば十分に一度スカウトに出くわし、同世代の少年にとってはナンパなどというものをするのも躊躇われる、声を掛ける者は勇者とされるような、紛う事なき美少女である。

抜けるような白い肌は、日本人のものにしては余りに白く、元々色素の薄い栗色の髪は、柔らかくふんわりと波打っている。

完璧な造作を誇る白く小さな顔の中で、花びらのようなふっくらとした唇の淡い桃色が愛らしい。

しかし、何より印象的なのは、その長く反った睫毛に縁取られた

大きな瞳。

淡い褐色の瞳は太陽に透けると緑がかった琥珀色に輝き、その顔立ちと相俟って異国の血が混じっていると思われがちだが、真実がどうなのかは彼女自身も分かっていない。

何しろ、生まれ落ちてすぐに養護施設の前に捨てられていた、生粋の孤児である。

顔立ちだけでなく、同年代の少女らの中ではどちらかといえば長身の部類に入る体つきは、ほっそりと華奢でありながら、既にきちんと女性らしい曲線を描いている。

そんな三百六十度どこから見ても美少女と断定して差し支えない有紗だが、少々厄介な体質の持ち主であった。

ズバリ、落ちやすいのだ。

試験やマンホールといった、物理的なものではない。

所謂次元の隙間というヤツに、それはもう何度となく落ちまくっているのである。

切っ掛けは、と本人に問えば、もう思い出したくもないと即答するだろう。

どこぞの平行世界の研究者であるアホオヤジ（敬称は敢えて省く）が、どういう理由でかぴつちりと、おにぎりをくるむラップの如く完全に封鎖されているこの世界の情報を入手すべく、『次元転送に耐えられる頑丈な生き物を』という条件付けで召喚式を組んだとこ

る、現れたのが中学の入学式を終えたばかりの有紗だった、ということらしい。

新しい制服の胸に付けられた花を、同じ施設のチビ達に羨ましがられることを想像しながらの下校途中、いきなり『白くて何だか病院っぽい』建物の中、ぼんやりと光る円の上に転送された有紗は、取り敢えずパニックを起こした。

この辺り、まだスレていない自分は可愛らしいところがあった、と本人が後にしみじみ迷懷するところである。

まさか人間が現れるとは思わなかったなあ、と言って頭を掻きつつも、きらきらと知的好奇心に眼を輝かせ、思わぬ研究対象に昂奮気味のアホオヤジに理性のどこかがプツツンと切れ、有紗は生まれて初めて大人相手に右ストレートを決めていた。

それから帰せ戻せとアホオヤジを責め立てて、「だって資料を取り寄せるだけのつもりだったから、帰す方法なんて考えてなかったんだよー」とへらへら笑う彼の首を締め上げる欲求をどうにか堪えながら、耐え忍ぶこと苦節数年。

ようやくその術式が完成し、懐かしの我が家に帰り着いたときには思わず泣けてしまった。

日常って素晴らしい、平和って素晴らしいと実感しながら、元の穏やかに平和な日々に戻った有紗だったが、それ以来、ふとした瞬間にまた別の平行世界に「落ちる」ことが多々あった。

それはもうびっくりのバリエーションで、日本の戦国時代のようなところから、所謂剣と魔法の世界まで何でもござれだ。

どうも、アホオヤジが有紗を召喚したときに封鎖空間に綻びが生じたようで、そのせいであちこち歪みが生じているらしい、というのが彼の言だ。

しかし有紗は 次元転移 の術式を身につけているため、余りおかしい歪みの波に邪魔さえされなければ、すぐに元の座標に帰ることが出来る。

中々興味深い世界も多々あるし、「落ちた」先で色々と研究資料を採取して、アホオヤジの研究室に転送するのも、手軽なアルバイトのようなものだ。

因みに報酬は、彼の奥方（家事万能の超美人。許せん）の手作り料理と、そのレシピである。

そんなこんなで、高校入学を機に一人暮らしを始めた小さなアパート暮らしにも少しずつ慣れつつある今日この頃。

はふ、と伸びをしながら、履き慣れたランニングシューズの爪先を床に落として、ボディバッグに部屋の鍵を入れ、携帯電話にダウンロードしたお気に入りの洋楽を奏でるヘッドホンに掛ける。

朝の六時、一時間余りのランニングコースを今日も走り込むべくアパートの階段を降りた有紗は、まだ少しひんやりとした空気を肺一杯に吸い込んだ。

河川敷をきつちりと舗装する遊歩道に入ると、きらきらと輝く水面が眩しい。

桜並木が真つ盛りだな、と思いながら、すれ違う愛犬家の方々が連れている愛くるしいわんこたちに癒される。

他に見掛けるのは、ダイエットをしているおばさま、仲の良い老夫婦、同年代の人間もちらほらと。

今日も良い天気だなー、と平和そのもののことを考えながら、背の高い、黒いトレーニングウェアの青年とすれ違ったときだった。

「うわ!？」

引きつった悲鳴に、反射的に振り返る。

目の前の空間が、歪んでいた。

ぐにやりと眩暈のするような歪んだ景色が、青年を無理矢理吸い込もうとしているのを目の当たりにした有紗は、咄嗟に手を伸ばしていた。

(どこのアホよー!?)

内心で絶叫しながら地面を蹴って、溺れる人間のように必死に伸ばされた青年の手首を掴む。

間に合わない。

召喚の術式は、既に彼を捉えて、切り離せない。

しかし、こんな滅茶苦茶な術式では、次元を越える衝撃に耐えきれず、彼の肉体は粒子レベルまで粉々になってしまふ。お伽話のように、竜巻で巻き込んで目的を引き寄せるような乱暴なやり方に呆れる暇さえない。



構築式を計算し、展開。

取り敢えず、この式だけは無意識レベルで起動出来るというものも、少なくとも「女子高生」のスキルじゃないよね、と頭のどこかで声がするけれど。

(・・・ 絶対防御 ！！)

どこに「落ちる」にしても、五体満足ならどうにかなる。  
人間、生きてさえいれば何とかなるものだ。

多分。

## 第2話 「お仲間、キターー！」

床から一メートルほど上の空間に放り出され、超強力な掃除機並の吸引力で吸い込まれた勢いのままに床に叩きつけられた有紗は、柔らかな空気の層に受け止められるような慣れた感覚に、一秒前の自分の反射神経に拍手を送った。

しかし、同時に覚えた虚脱感と眩暈に、ぐっと息を詰める。その拍子に唇の内側を噛み切ってしまったて、鉄の味が口の中に広がる。

絶対防御 は、有紗が使える中で上位レベルの防御式だ。高度なだけに、言霊の詠唱をせずに使うとリバウンドでとんでもない負荷が体に掛かり、暫くろくな術が使えなくなるが、そんなことを言っている場合ではない。

青年はどうしただろうか、とどうにか体を起こすと、すぐ隣にぐったりと横たわっている姿が目に入った。

慌てて呼吸と首筋の脈を確認して、どちらも無いことに青ざめる。治癒系の上位術式など、今の有紗には使えない。

術力が殆ど底を突いていて、ぐらぐらと眩暈をするのをねじ伏せる。

（こんなところで死ぬんじゃないわよ！）

それでは自分が骨折り損のくたびれもうけだろうが、と人工呼吸と心臓マッサージを繰り返し施しているうちに、かは、と咳き込むようにして青年の呼吸が戻る。

「……っは……！」

「大丈夫。落ち着いて……ゆっくり、息して」

ゆっくりと、子どもに言い聞かせるように言葉を作る。

何度も大丈夫と繰り返し返して、苦しげに浅く速い呼吸を継ぐ青年の額に張りつく前髪を払う。

さらりとクセのない漆黒の髪は、有紗のそれよりも少し硬い。

(……美青年？)

今までは必死だったからよく分からなかったが、改めて見てみると、青年は野性味の強い、非常に整った顔立ちをしていた。

今は朦朧とした眼差しでぼんやりとこちらを見ているが、意思の強そうな切れ長の瞳には、既に大人の色香のようなものまで感じさせるが、それは疲労困憊した故の気怠さ故だったらしい。何度か瞬いて訝しげな表情が浮かぶと、やはり年相応の若者らしい雰囲気がある。

と、少し離れたところからひとの声が聞こえて、ようやく有紗は周囲の様子に眼を向けた。

「落ちる」ときには、大抵人気のない場所に紛れ込む。

自然のエネルギーが満ちているせいか、森や草原であることが多い、一度バカでかい湖の真ん中に「落ちた」ときには死ぬかと思ったものだが。

ゆるりと視線を巡らせると、石造りの教会のような建物の中だと気付いた。

足元には、効果限定陣の名残。  
そうして、それを組んだらしい人物と、目が合った。

金髪、碧眼。

ノーブルな美形。

着ているものも、如何にも上等そうだ。

よし、取り敢えずアレは王子と呼ぶことにしようと思いながら、  
知らない言語で話しかけてくるのをきっちり無視して、呼吸を整える。

「・・・意思疎通」

これ位の基礎術式なら、今の有紗でも組み立てられる。

ついでにこの青年にもこの術を掛けておこうと、まだ少し荒い呼吸を継いでいる彼に深く口付けた。

「・・・っ!？」

何やら一気に正気付いたらしく、じたばたと暴れ出すのを抑え込んで、混じり合った唾液を青年が嚥下するのを確認して離れると、  
青年の顔が真っ赤に染まっていた。

無事蘇生したようで、目出度い。

制御を上手く出来ない初心者が、自分に掛けた術式の影響を他者に与える場合、体の一部を媒介として相手に与えなければならぬのだが、髪や爪など食べたくないだろうし、血を与えるのは痛いから嫌だ。

消去法で唾液が一番手っ取り早いとはいえ、実際に行うのは初め

てだ。

ちゃんと効果があったのかなと首を傾げながら、あんぐりと口を開いてマヌケ面を晒している王子に視線を向ける。

「あんだ、誰？」

一拍置いて、答えがあった。

「アウノ王国国王が第四子、ヴァンフレッド」デイノ「エウザリエ」アルノ。闇の子よ。我に名を与え、契約の成就とせよ」

「……」

「……」

召喚。

はい、そーゆーコトでしたか。

というより、ホントに王子様だったんですね、と韜晦している場合ではなく。

頭痛でも覚えたかのように額を抑えた青年が、低く呻く。

「……何だコイツ。何のどつきり？」

「あの……このひとが何て言ってたか、分かりました？」

「分かってたまるか、あんな電波語。日本語上手いのは認めるけどな」

よし、成功。

「あなた、ちょっとだけ心臓と呼吸止まってたんですよ。無理しない方がいいです」

「へ？」

「心マと人工呼吸で戻しましたが、頭痛とか、吐き気とかあります？」

心配して顔を覗き込むと、途端に顔に朱を昇らせて、ぱつと顔を背ける。

・・・中々、純情な性格だったらしい。

「ひょっとして、ファーストキスだったりしました？」

「・・・っ」

図星か。

「ここはひとつ、救命活動ということで、お互いノーカンということにしませんか」

真面目に言ったのに、青年はぎしぎしと軋むような動きでこちらを見ると、両手で頭を抱えてしまった。

「ちょ・・・ちょっと、待て。何だこりゃ。どんな夢だよ」

その気持ちは、とてもとてもよく分かる。

有紗もまさに地球時間で三年前、同じことを思ったものだ。

いきなりこんなファンタジックでトリッキーなイベントに強制参加させられて、パニックに陥らない方がおかしい。

けど、すみません。

気分は正直言つて、「お仲間、キターー！」です。

この気持ちを共有出来るひとが現れてくれて、そんな場合じゃないと分かっている、とてもとても嬉しいです。

「あの、藤沢学園高校一年の、七瀬有紗です。あなたは？」

今更ながらの自己紹介に、青年が虚を突かれたように顔を上げた。

「・・・藤沢三年の、志波和馬」

その答えに、きょとんと瞬く。

「同じ学校でしたか」

というか、まだ高校生だったのか。

いい体格をしているから、てつきり大学生かと思った。

言われていれば、確かに肩幅は広いが、その厚みはそれ程でもない。

うん、実に将来が楽しみだ。

「みてえだな」

「・・・おい」

「藤沢って校舎がキレイでいいですね。去年改築したばかりでしたっけ」

「ああ。旧校舎の方にはあんま行くなよ。ろくでもねえ連中の溜まり場んなってるからな」

「おい」

「そうなんですか？気をつけます。ええと、志波先輩？あの」

「和馬」

「おい・・・お前達」

「え？」

「志波って呼ばれんの好きじゃねえんだ。和馬でいい」

「じゃあ、和馬先輩で・・・」

「おい！お前達は魔族のくせに、召喚者の僕をいつまで無視してるつもりなんだ！？」

いきなりキレた堪え性の無いヴァンフレッドに、和馬がげんなりと肩を落とした。

「誰が魔族だ、オラ」

「ええ！？」



「オレは人間やめた覚えなんぞ、一度もねえぞ」

がーん、と背景に文字が浮かびそうな程ショックを受けたらしいヴァンフレッドに、和馬は心底嫌そうに溜息を吐いた。

「つつか、オレ的には夢オチ希望なんだけど」

「和馬先輩、気持ちは分かりますけど、私はこんなアホっぽい王子様の夢を見る趣味はありません」

「奇遇だな、オレもだ」

「でも、取り敢えず現状説明出来るのってこの王子様だけみたいですし、お話でも聞いてみます？」

そうだな、と和馬が疲れた目を向けるより先に、ヴァンフレッドはがっくりと床に手を着いてへたり込んでいた。

落ち込んでいる様子が、非常に分かり易い。

「そんな・・・僕はまた、失敗してしまったと言うのか？私財をばたいて高価な魔法石を買い漁り、試行錯誤を繰り返し、寝る間も惜しんで研鑽を積んできたと言うのに・・・！」

「・・・何言ってんだ、コイツ」

「ナルシストみたいですね」

「誰がナルシストか！大体、お前達は何者だっ！？僕の感動を返せ！」

「知るかボケ。どうでもいいから、さつさとオレらを元の場所に戻せ」

「それは無理だ！」

「威張って言うな！」

「そこはふんぞり返るところじゃないと思うんですけど」

ふたりのツツコミも何処吹く風、ヴァンフレッドは何故か偉そうに腕を組んだ。

「お前達を召喚するのに使った魔法石は、どれも古代遺跡から発掘された、秘宝と言つていいものばかりだったのだ。この国広しと言えども、こんな無茶なことを出来る勇者は僕くらいのものだ！」

アホだ。

清々しい程のアホが、ここにいる。

絶句した有紗の隣で、やはり啞然としていた和馬がふるふると肩を震わすと、がっしと手近なところにあつた拳大の石を掴んだ。

「ふざっけん、なーっ！」

次の瞬間響いたのは、凄まじい轟音と鈍い振動。

もうもうと立ちこめる煙に咳き込みながら、有紗は自分が投じた石があつさりと分厚い石壁を破砕したことに硬直する和馬と、同じく凍り付いているヴァンフレッドの姿を見て、いつそ本当に夢オチだったらしいのに、と思った。

### 第3話 王子様はブラコンです。

この建物は、ヴァンフレッドの領地にある古びた教会で、数年前に新しい建物がもつと交通の便のいい場所に建てられてから、彼が隠れ家として使っているのだと言う。

「王子と言っても、僕は側室の子なものでな。弟のルカリエツドが王太子となっているから、まあ有る程度の自由はあるのだ」

「弟さん、お幾つですか？」

「もうじき十歳になる。我が弟ながら、気性の良い愛らしい子どもなのだが、少々体が弱いのだ。余り王宮から出ることも出来んのが哀れでな」

有紗の淹れたお茶を一口含み、ヴァンフレッドは軽く目を瞠った。

「美味しい」

「ありがとうございます」

「いや、実に美味しい。お前、僕付きの侍女として王宮に来るといい」

「すつとぼけたこと言ってないで、さつさと説明してください。あなたがお茶を飲みながら話をすると言ったら淹れて差し上げたんですよ。どうして和馬先輩が、こんな非常識な体になっちゃったんですか」

じろりと睨み付けると、ヴァンフレッドは分かり易く狼狽えて視

線を泳がせた。

和馬はと言えば、茫然自失状態から立ち直るなり、素手で岩の残骸を砕いてみたり、一抱えもある岩を持ち上げてみたりと自分の力を確かめた後、なんじゃこりゃー！と絶叫した。

その途端、和馬の口から吐き出された炎が一瞬で傍にあった棚を灰にした。

そうして今は、これは夢だこれは夢だとぶつぶつ呟いているわけなのだが。

「う・・・うむ。これは、あくまで憶測なのだが」

落ち着かなく組んだ両手の指を動かしながら、ぼそぼそと。

「僕は召喚の魔法陣を組む際に、火竜の牙、水竜の鱗、地竜の爪、風竜の角を封じた魔石使ったのだ」

「・・・よくそれだけ集めましたね」

「僕は金持ちなのだ。賭け事で負けたことはない」

「成る程」

つくづく、変わった王子サマである。

「ものの本には、処女の生き血を捧げると書いてあったのだが。いかな目的があろうと、そのような外道な真似が出来るわけがなからう。それで僕の知る限り、最も力のあるものを代替にしようと思

ったのだ」

「ご立派です。後でその本を見せて下さい」

「うむ。ところどころ掠れて読めなかったのだが、どうもその陣は、生け贄を召喚したものに餌として与える、と言う物だったようだ。・  
・だから、恐らく」

言葉を濁したヴァンフレッドの代わりに、ずばっと言ってみる。

「王子様が用意した、竜の牙だの鱗だのの力が、全部和馬先輩の中に入っちゃった、ということでしょうか」

「そ・・・そうではないか、と。まさか人の身に、四竜全ての力を受け入れる器があるとは思わなんだが」

「取り敢えず、火は吹きましたけど・・・」

他にも水やら風やらを出したりするのだろうか。

土は出されても困る。

生き埋めは遠慮したい。

「あ、和馬先輩。王子様を殴っちゃダメですよ。そんな馬鹿力で殴ったら、あっという間に顔面が潰れたトマトです」

「・・・っ」

今にも殴りかかりそうな気配を察して声を掛けると、ぎりりと奥歯を噛んできつく拳を握り締める。

「それで？王子様は、どうしてそんなレアな宝物を使ってまで、こんな真似をしたんですか」

基本に立ち返って訊ねてみると、ヴァンフレッドはいかにも無念そうに溜息を吐いた。

「ル力が喜ぶと思ったのだ」

「・・・は？」

「弟は体が弱いと言っただろう。だから、僕は外に出る度色々面白いものを見せてやっていたのだが、もうすぐあれの誕生日でな。ここはひとつ、これまでにない愉快なものを見せてやりたいと思ったのだ」

「・・・」

「・・・」

有紗はおもむろに、まだ殆ど中身の残っているティーカップを全て盆の上に回収し、何をするか眉を寄せたヴァンフレッドを無視して和馬を振り返った。

「和馬先輩。一徹返し、お願いします」

次の瞬間、和馬の右手ひとつにひっくり返されたテーブルに弾き飛ばされた王子様が、それに押し潰される格好でべしやりと床に張りついていた。

「・・・つまり、何だ。アリサは魔法が使えるのだな？」

鼻血を止める綿を詰めているせいで、くぐもった声のヴァンフレッドが、妙にきらきらした目で見つめてくるのを、有紗は思い切り顔を顰めて睨み付けた。

「ここでは、そんな風に呼ばれる技術かもしれませんがね。王子様、二度とこんなことするんじゃないよ。シロウトが手を出していいものじゃないんですからね」

あれから有紗は、自分がかつて同じように迷惑な事態に巻き込まれた経験があること、今は無理だが、元の世界に戻る術はあることを彼らに説明していた。

「有紗。本当に、んなこと出来んのか？」

困惑しているような顔でそんなことを言う和馬に、はい、と肯く。

「マジかい」

「すぐってわけには行きませんが・・・今はそのアホ王子様のお陰で、ろくな術式も使えない状態なので。回復するまでは、ちょっと無理です」

「・・・そんなにダメージ食らってんのか？」

「今使えるのは、普段の5%くらいですかね。まあ、暫く食べて寝てれば、その内元に戻りますから」

そうか、とほつとした顔をする和馬に、にこりと笑む。

「大丈夫ですよ。幸いでつかいお財布もあることですし、焦ることは無いです」

「おい。その財布というのは僕のことか？」

「当然です。慰謝料、迷惑料、合わせてどれだけ請求しても足りるもんじゃないですよ。こちらにいる間は、衣食住全て王子様に面倒見てもらいますからね。拒否権なんてあると思ってんですか？あんまりアホなこと言ってる、今度はそのお綺麗なツラを二目と見られない造作に変えて差し上げますよ」

「……」

「……有紗。お前、ひよつとして怒ってる？」

「この王子様のお城に、流星群を降らせてやりたい位には怒ってますよ？」

「っもも申し訳なかった！許してくれ！もう二度とこんなことはしない！僕が悪かったー！」

途端にがばりと頭を下げたヴァンフレッドを、ふんと冷たく一瞥する。

「最初っからそう言っていればいいんですよ、アホ王子」

「城なんぞどうなっても構わんが、ルカだけは見逃してくれ！」



「……………」

「……底抜けのブラコンだな、こいつ」

全く、変態ほど厄介なものはない。  
気を取り直して、和馬に向き直る。

「帰る方法に関しては、まあそんな感じで後回しにしますけど、問題は和馬先輩ですよ。そんな馬鹿力じゃ、日常生活にも支障出るんじゃないですか？」

しかし、その問い掛けに、和馬はあっさりと首を振った。

「いや？普通に物も持てるし、目やら耳やらも普通レベルに調整出来るみてえだし。結構大丈夫そうだし」

「順応早いですね……」

「開き直った」

実に頼もしい、と感心していると、もう復活したらしいヴァンフレッドが口を挟んできた。

「ではお前達、まずは城に来るといい。いや、何しろ僕が自由に使える金は、今回のことで全て遣いきってしまったものでな。暫くは、僕の客人という形で招かせてもらいたい」

あっさりと言うヴァンフレッドに、和馬が首を傾げた。

「そついや、魔族ってここじゃどんなを言うんだ？」

地球で一般的に（？）言われている魔族は、なんとなく「ヘンな力を持つ良くないモノ」だ。

しかし、ヴァンフレッドは大して身構えもせず口を開いた。

「む？そつだな、魔族というのは、魔力を操る異形の者達の総称だ。多くの魔術師は、彼らと契約することでその力を己のものとしている。基本的な体色は黒で、稀にいる白い魔族は珍重されるな。王宮魔術師のカーンのところへ行くと、黒い兎が二本足で立って茶を出してくれるぞ」

なんだそのメルヘンは。

ちよつと見てみたいと思つてしまつたじゃないか。

「人型を取れるのは、高い魔力を持つ者だけと聞く。・・・改めて訊くが、カズマは本当に魔族ではないのか？」

「どんだけナチュラルに喧嘩売りやがんだコイツは」

「悪気が無さそうなのが、またム力つきますね」

じつとりとした視線を向けると、ヴァンフレッドは慌てたように手を振る。

「い、いや、魔族の特徴は黒毛だけではない。瞳が紅色というのもそれなのだ。白い魔族も瞳は紅い。髪の色は魔術で変えられても、瞳の色だけは変えられないと言つしな」

そうなのか、と目を睜つた和馬が、思い出したようにこちらを向

いた。

「それ、カラコンじゃねえんだろ？」

どうやら、有紗の緑色が混じった瞳の色が気になったらしい。  
まあ、良くあることだ。

「自前ですよ。けど、困りましたね。ひょっとして、髪が黒いだけで人間扱いされないってことですか」

「む？そんなことはないぞ。異国の人間には、黒髪の者もいるからな。南の方では、髪だけでなく肌も褐色で小柄な者が多い」

「そう言うことは先に言え、ボケ」

全くだ、と呆れて見遣った先で、ヴァンフレッドが先程淹れ直した紅茶を啜る。その仕草はこれ以上無い程洗練されたものだが、何しろまだ鼻に綿が詰まっているため、間が抜けていることこの上ない。

結局、ヴァンフレッドと共に王宮とやらに赴くことになったのだが、何しろここは辺鄙な場所だという理由で忘れられた教会である。

ヴァンフレッドは馬があるし、和馬も先程の様子から察するに体力は有り余っていそうだが、有紗は一度休ませて貰わなければ、長時間歩くことなど出来そうにない。

少し埃っぽい客間のベッドで一眠りさせてもらうことにして、スニーカーを脱いで簡素な寝台に倒れ込んだ途端、有紗の意識はあっさりと眠りの世界に吸い込まれて行った。

#### 第4話 美形はお得です。

目を醒ましたときの体の感覚で、大体眠っていたのは三時間位だろうかと思ひながら、有紗はまだ少し眠気の残っている頭をふるりと振った。

石造りの壁、小さな机と椅子だけがある小さな部屋。

かつて、この教会を守っていた誰かが暮らしていた場所なのだろうか。家具の大きさからして、この部屋の主はきっと女性だろうと、そんなことをぼんやり思う。

のそのそと起きだして、少し軋むドアを開いた有紗は、その途端に跳ね起きた和馬に、きょとんと瞬いた。

「・・・何やってんですか？」

番犬よろしく部屋の入り口に座り込んでいたらしい和馬は、しかし酷く焦った様子で詰め寄ってきた。

「言葉！」

「はえ？」

「だから！お前がいなくなって少ししてから、いきなりあのアホと言葉が通じなくなっちゃったんだよ！どうにか身振り手振りの手旗信号で、あいつがオレらの服買いに行ったらしいのは分かったけど！」

「・・・あー・・・すみません。言っの忘れてました」

「何を！」

ぎゃあ、と掴み掛からんばかりな勢いの和馬に、ですから、と落ち着いてくれるように両手を上げる。

「私が寝たので、言葉が通じるようにしてた術式が解除されちゃったんですね。今掛け直しますから。・・・意思疎通」

今まではいつもひとりだったから、自分が眠ることでの術式が解除されることなど、まるで意識したことがなかった。

これからは、和馬が起きている間は眠らないようにしなければならぬ、と思いつながら、心許なそうにこちらを見ている和馬を見上げる。

（・・・まずいです、可愛いですよ？その捨てられた仔犬のような瞳は反則だと思います！図体は大型犬ってとこですけど、それでもとっても可愛いです！）

じつと見つめてくる漆黒の瞳に、そんなことを思っていると知られたら大変なことになりそうだ。

年頃の男の子は繊細だ。

「・・・もう、いいのか？」

「え？あ、今のは私自身に掛けただけです。他人の意識に干渉するような術式は滅茶苦茶複雑なんです。今の私には使えません」

普段ならどうということもないのだが、制御力が著しく落ちまくっている今の状態で他人に干渉することなど、恐ろしくてとても出

来ない。

「あ？けどお前、さっきは」

「だから、術式が掛かっている状態の私の一部を和馬先輩に移すことで、術式の効果を共有できるようにしてたんです。ということ、いいですか？」

「・・・は？」

意味が分からない、と言うように目を瞠った和馬に、はつきり言わなければ通じないか、と言葉を続ける。

「血は痛いから、嫌なんです。人工呼吸だと思って下さい。これもお互いノーカンということで」

「・・・っ」

途端にぶわつと真っ赤になった和馬に、つくづく純情なのだなと何だか申し訳ない気分になる。

有紗とて、他人と唇を重ねるなど好きでいたいわけではないが、あの研究室時代に加え、これまであちこち「落ち」まくった世界で過ごした時間を考慮すれば、精神的には実際よりも十年ばかり年を重ねているだろう。

肉体年齢の方は、元の世界に戻ったときに、時間軸に合った姿に戻しているものの、中身の方は如何ともし難い。

つまりは、ファーストキスだなんだと騒ぐような精神年齢ではな

い。むしろ、和馬の反応が可愛いなどと呑気に思っている。

元々そういった方面に淡泊な性質であることも自覚しているし、何より和馬のような美青年相手なら生理的嫌悪感も無い。

つくづく、美形というのは得である。

これがもし生理的に受け付けないタイプだったなら、言葉位気合いでどうにかしろと放って置いたかもしれないな、と思ったところで、和馬にとってはどうなのだろうとふと思った。

「・・・ええと、嫌なのでしたら無理にとは」

もし和馬に恋人がいるのなら、その相手に義理立てもあるだろうし、考えてみたら最初にしたことも余計なお世話だったかもしれない。

まあ、済んだことをぐだ言っても仕方ないし、勘弁してもらおうと嘆息していると、不意に伸ばされた和馬の腕が有紗の肩に触れる寸前で止まり、逡巡するようにそこで彷徨う。

「お前こそ・・・嫌じゃ、ねえのかよ」

押し殺したような声に、首を傾げる。

「嫌だったら、最初から言ってますんよ。と言うか、物凄く今更です。私が和馬先輩を蘇生させるのに、何回人工呼吸したかなんて力ウントしてませんけど、余裕で二桁は行ってます」

「・・・そ、れとこれとは、別のような気が」

「正直に言えば、一々通訳するのはちょっと面倒なので、術式を受けてくれた方が助かるのですけど」

本音をぶつちやけると、額を抑えて低く唸る。

さてどうしたものかと思っていると、馬の蹄の音が近づいて来て、思った通り何やら荷物を抱えたヴァンフレッドが戻ってきた。

彼は有紗と目が合うと、おや、という顔をして荷物をテーブルに置いた。

「目が醒めたのだな・・・と、僕の言っていることが分かるか？」

「はい。私の説明が足りなくて、驚かせてしまったみたいですね。すみませんでした」

「はは、いや参ったぞ。それまで普通に会話出来ていたものが、突然互いに何を言っているのか分からなくなってしまったのだからな。中々面白い経験だった。言葉が通じていたのはアリサの魔法のお陰だったようだな」

楽しげにそんなことを言うヴァンフレッドも、これで中々肝が据わっているらしい。

和馬のあの非常識な力を目の当たりにして、そんな相手と言葉が通じなくなったら、多少は狼狽するものなのではなかるうか。

まあ、ただ単に鈍いだけという可能性の方が高いが。



しかし、おい、と和馬に声を掛けられて振り向けば、酷く複雑そうな顔を有紗とヴァンフレッドに交互に向ける。

「オレには、お前が日本語喋ってて、あいつが宇宙語喋ってるようにしか聞こえねえんだけど」

「む？カズマの言葉はもう通じんのか？」

「あ、ええと、ちょっと待って下さいね」

やっぱり、これは面倒だ。

よいせと背伸びして和馬の顔を両手で挟み、問答無用で唇を重ねる。ばきりと硬直したその口の中に舌を伸ばし、相手のそれを軽く舐めて離れると、耳まで真っ赤になっていた。

「王子様？何か喋ってもらえます？」

「う、うむ？いや、その・・・それでカズマとも会話ができるようになったのか？」

「どうですか？和馬先輩」

「・・・な、なった」

こくこくと子どものように肯く和馬に、ほっとしながら軽く首を傾げる。

「嫌かもしれませんが、慣れてくださいね。元の世界に戻るまでは、毎朝しなきゃなんですから」

「・・・っ」

ああ、いけない。

可愛い男の子が恥ずかしがっているのを見て、ちょっといいかもなんて思ってしまうなんて、変態のようではないか。自重しなければ。

「成る程、口づけで魔法の効果を共有するわけか」

「そんなようなものです」

「ふむ。異国の言葉も、全て理解出来るようになるのか？」

「そうですね。固有名詞以外は、大抵自分が普段遣っている言語のように認識されます」

「それは便利だな・・・僕にもその術は使えるようになるか？」

「一日睡眠四時間で、起きている時間の殆どを術式の勉強につき込めば、一年くらいで出来るようになると思いますよ」

「そ、そうか・・・」

軽く口元を引きつらせたヴァンフレッドは、そうだとわざとらしく言いながら、テーブルに置いた荷物をぽんと叩いた。

「お前達の着る物を用意したのだ。その格好では、髪の色がどうこう言つ以前に目立ちすぎてしまうからな」

「そうですね。ありがとうございます」

素直に礼を言って手渡された包みを受け取り、部屋の中に戻って手早く着換える。

常識の飛んでいるヴァンフレッドがチョイスした割りに、出てきた衣装は随分と可愛らしいデザインだった。

柔らかな白い生地の中着は、胸元にレースがあしらわれている。前を紐で編み上げて調整する、ふんわりと裾の広がるワンピースの緑色は、恐らく有紗の瞳に合わせたのだろう。

残念な頭の持ち主でも、服のセンスはいいらしい。

足元だけは元のスニーカーだが、真新しい白なので、それもさほど違和感が無い。

ヴァンフレッドから軍資金をふんだくったら、まずは下着を購入しなければならぬと考えながら部屋から出て、男二人がいる居間へ向かうと、和馬も与えられた衣服に着替えていた。

（おお！美青年は何を着てもサマになる！）

こちらを見て、驚いたように目を瞠った和馬は、ヴァンフレッドと似たような素材の黒のズボンにVネックの生成のシャツ、それに幾つもの小さなベルトで前を留めるごついイメージのジャケットを羽織っていて、それらは和馬の精悍な容貌にとても良く似合っていた。

黙ってさえいれば上品な美形であるヴァンフレッドと並ぶと、なんでもない目の保養である。

「ありがとうございます、王子様」

「うむ。我ながら、よく似合う物を選んだと思う。アリサ、実に可愛らしいぞ」

「流石王子様ですね、さらっとそんな誉め言葉が出てくるなんて凄いです」

「む？女性を褒めるのは当然だろう」

「いえ、私たちの世界では、そうでもないですよ。若い男の子が女の子を褒めると、まず口説いているものと判断されちゃうんですね。そう言った誤解はお互い不幸の元ですし、大抵皆、決まった相手のことしか褒めたりしません。社交辞令は枯れた大人の専売特許です」

「成る程、文化の差だな。我々はまず、女性に会った場合は、相手を褒めなければ無礼とされる。容姿自慢の女性を怒らせるのは、非常に恐ろしいぞ」

しみじみと実感の籠もった言葉に、それは分かる、と肯く。

「王宮に行ったら、やっぱりそうしないと問題ですか？」

「お前達は、僕の客人だ。好きに振る舞って構わないが、アリサはひとりでは行動しない方が良いな」

「？何故ですか？」

「お前のような愛らしい娘がひとりで出歩いていたら、男達に襲ってくれと言っているようなものだ。それは王宮でも街中でも同じことだぞ」

「何ですかそれは。仮にも一応王子様なら、もうちょっと治安を上させて下さい。若い女の子が安心して出歩けないなんて、景気が悪い証拠ですよ」

むっと眉を寄せて腕を組むと、ヴァンフレッドは仕方がないとでも言いたげに肩を竦めた。

仕事をしろ。

第5話 「下半身の衝動も制御出来ないようなヘタレはすっこんでなさい」

それから、ヴァンフレッドが服と一緒に買ってきたパンとチーズで食事にしたのだが、飲み物として当然のようにワインを出されたのには、少し参った。

胡椒で風味付けをされたそれは、少しだけ舐めてみたがとんでもなく辛い上にアルコール度数が半端なく、かっ咽喉が灼けて派手に咳き込む羽目になってしまった。

なのに、同じものを口にした和馬は、至極不思議そうな顔をして首を傾げる。

「そんなにキツいか？これ」

「キツイですよ！キツイっていうか、痛いです！」

涙目になりながら、少し炭酸の混じった井戸水を呷っても、まだ咽喉がひりひりしている。

「うむ、若い娘向きではなかったかもしれん。済まんな、次は甘めのものも用意する」

「いえ、水でいいです。水がいいです。爽やか炭酸水バンザイです。ていうか、和馬先輩。未成年のくせして、何当然みたいにワイン飲みまくってんですか」

「いやこれ、美味しい」

「なんだ、お前達は未成年なのか？幾つだ」

意外そうなヴァンフレッドの問い掛けに、それぞれ十五、十八、と答えると、ふむ、と言いながらワインを一口含んだ。

「我が国では、十六が成人だ。しかし、未成年だからと言って、酒も制限されてはいないぞ」

「だとさ」

「・・・いいんです、私は日本の法律を守ります。って、和馬先輩、もう十八なんですか？」

「ああ、一昨日なつたばかり。ヴァンは幾つなんだ？」

「僕は十九だ。・・・しかし、アリサは本当に可愛いな。どうだ、僕の側室にならないか？」

な、と絶句する和馬を尻目に、有紗は剣呑に眼を細めた。

「寝言は寝てから言っして下さい」

「いや、本気なのだが」

「どこが本気ですか。側室って言うてる時点でアウトです。

本命がちゃんといえるのに他の女を口説いてんじゃありません。

生物学上、男の人があちこち種付けしたくなる気持ちは分かります

が、女からしたら巫山戯んたって話ですよ。

浮気は男の甲斐性だなんて迷信を信じてるわけじゃないでしょうね？

奥さんひとり大事に出来なくて、何が甲斐性ですか。

下半身の衝動も制御出来ないようなヘタレはすっこんでなさい」

「……………」

「……………」

「和馬先輩も。お酒くらいはいいですけど、このアホ王子に感化されて、旅の恥はかき捨てなんて真似したら、私はひとりで元の世界に帰りますからね」

じろりと横目に睨み付けると、音がするんじゃないかと思うくらいの勢いで青ざめる。

「わわわ分かってる！つて、するわけねーし！オレをこのアホと一緒ににすんな！」

「そうですか。ならいいです」

「つかお前、そのツラでそのオカンの性格とか、ちよつとどうかと思うぞ」

「ああ、この容姿は結構便利ですよ？か弱い女の子のふりをすれば、大抵のひとは親切にしてくれますから」

「確信犯かよ！」

「利用出来るものは利用しますよ。それに、便利なだけでもないです。誘拐未遂、拉致未遂、暴行未遂、痴漢にストーカー、もう男の人に夢も希望も持つちゃいません」



ふつと遠い目をすれば、男ふたりが揃って押し黙る。

「あ、見てる分には美少年も美青年も大好きですよ？その点、ふたりともばっちりです。是非そのヴィジュアルを維持して下さい。とても目に楽しいです」

「・・・いや、お前・・・」

「・・・苦労したのだな・・・」

何だかどんよりとされてしまったが、女がひとりで生きていこうと思えば、強くなければやっていられないのだ。

「というか、王子様は結婚してたんですね」

流石、腐っても王族。

結婚するのも早いらしい。

しかし、ヴァンフレッドは疲れたように苦笑して溜息を吐いた。

「隣国クレタの三の姫が、一応僕の正室となっではいるが。結婚式でしか顔を合わせたことはないな」

「え？」

「は？」

「どうやら、他に好いた男がいるらしくてな。常に部屋の前に侍女を置いていて、何度訪ねても追い返されるものだから、もう顔もよく思い出せん」

「なんですかそりゃ。ダメダメじゃないですか」

「何でそんな女と結婚なんてしたんだ？」

「さあな。父上が決めたことだから、よく分からん」

あっさりとなんか言うヴァンフレッドに、今更ながら理解する。

「・・・そうか、王子様って王子様なんですもんね。そりゃ、政略結婚ですよ」

「庶民には理解出来ねえ世界だな・・・」

そんな相手が奥さんなら、愛人のひとりも欲しくはなるか。

自分が愛人になるのは真つ平ご免だが、その気持ちは理解出来ない。

それから、自分と和馬が脱いだものを影の中に作った異空間に保存 し（ちょっとふたりに驚かれた）、いざ王宮に向けて出発となったのだが、ヴァンフレッドの馬が和馬が近寄るだけで怯えてしまつて、仕方なく少し離れてその後を追うことになった。

「・・・結構、動物には好かれる方だったんだけどなあ」

和馬は冗談抜きに、少々落ち込んでいるらしい。  
だが、仕方がない。

動物は、自分より強い生き物の気配には敏感だ。

「後で、王子様に和馬先輩を召喚するのに使った本を見せてもらいますから。そのままじゃ、どんなびっくり人間よりハイスペックですもんね」

「・・・お前、これどうにか出来んの？」

ぼやきながら、ひょいと和馬が振った指先に、小さな炎が浮かんでいる。

有紗が眠っている間、あれこれ試していたらしい。

「やってみないと分かりません。ダメなら他の方法を探しましょう」

「・・・そうか。そうだな」

はあ、と苦く息を吐いた和馬が、ふと改まった口調で有紗、と名を呼んだ。

「何ですか？」

「いや・・・その・・・ありがとうな」

「・・・」

「なんつーかこう、最初から世話なりっぱなしで、借りばかり出来ちまって。つか、これからもお前頼みなことばっかで、すげえ情けなくて参るんだけど。・・・オレに出来ることがあれば、何でもすっから言ってくれな」

この年頃の青年にしては、随分と素直な言葉に、少し驚く。  
一応、見た目は年下の少女に借りを作るなど、さぞ嫌がりそうな

もののなに、卑屈になるでなく、真っ直ぐに感謝を向けてくるのがくすぐったくも清々しい。

「それじゃ、遠慮なく」

「ん」

「はい。ここまで運が悪いつて共通項も何かの縁ですし。一緒に頑張りましたよ」

「は？」

「いや、正直自分並に運の悪いひとが身近にいるなんて思いもしなくて。私も大概ですけど、和馬先輩の運の悪さには同情に値します。むしろ、よく正気を保てているなと感心します」

心底真面目に言ったのに、和馬は何とも言えない奇妙な顔をしたかと思うと、ぶはつと吹き出した。

「まあ・・・一応、褒められてるモンだと思っとくけどな。オレはむしろラッキーって思ってたぜ」

「・・・はい？」

何の冗談だ。

この状況のどこに幸運要素があるのだ、と首を傾げた有紗に、和馬はその大きな手でくしゃりと髪をかき混ぜてきた。

「ひとりだったら、そりゃもうどん底もいいところだったろうけどよ。」

お前がいるから、こんな状況でも、何か楽しめそうな気がするもんな」

「楽しみですか・・・？」

・・・何だろう。

心臓が、不思議な感じに、跳ねた。

「今んとこな。まあ、なるようにしかならねえだろうって、感覚がどうか麻痺してんのかもだけど」

「ああ、それは分かります。余りにも非常識なことが目の前で起ると、取り敢えず現実逃避のひとつやふたつは基本ですよね」

「妙に慣れた感のある感想が寒いぞ」

「好きで慣れたわけじゃないんですけど。で、和馬先輩は、火の他にも何か出せるんですか？」

ちよつとわくわくしながら訊いてみると、そうだな、と言いながら今度は指先にシャボン玉のような水の球を作り出した。

「おお、水筒要らずですね！」

術式の構成もへったくれもなく、大気中の水分を集めてみせる非常識な力に感動する。

「・・・お前さ。そのデスマス口調、しなくていいぞ」

「？そうですか？」

「ああ。普通に話せ、普通に。先輩つてのもいらねえから」

ぶっきらぼうな口調で言われて、分かった、と肯く。

「何か意外。体育会系っぽいから、そういうの気にするひとかと思  
った」

「そりゃ、部活の後輩がタメ口なんかきいたら、速攻シメるけどな」

「部活つて、何やってるの？」

「バスケット部」

「へえ、モテるでしょう」

「・・・あのな。オレには、年の離れた姉が、ふたりいる」

いきなり変わった話題にきょとんとすると、和馬が苦虫を噛み潰  
したような顔をして言葉を続けた。

「あいつらは、弟のものは自分のモノ、弟と書いてパシリと読む、  
狙った男の前では別人になりきる天才だ。バリバリの猛禽肉食系女  
子を見て育ったオレは、お前じゃねえが、その辺の女に夢も希望も  
持ってねえ」

「・・・ええと、女嫌い？」

「嫌いなわけじゃねえが、女が計算して作った女らしさってヤツは  
ぞっとするな。くねくねされるとバカっぽく見えるし鬱陶しい」

「いやいや、そんなこと言ってたら、いつまで経ってもカノジョなんて出来ないよ？女の人は普通、気になるひとの前では多かれ少なかれ計算するから」

「別に、今は部活で手一杯だし。周りの女もうるせえばつかでどれと同じに見えっからどうでもいい」

それはもう、十分女嫌いと言うのではなからうか。  
折角美青年なのに勿体ない話だ。

まだ和馬の指先でふよふよと浮いている水球をつつくと、壊れることなくうにやっとなんで、元に戻るうとするのが面白い。

「でも、あれだね。火と水が出せるってことは、いつでもお風呂に入れていいね」

「ひとを瞬間湯沸かし器みたいに言っんじゃないやねえよ」

「いや、大事なことだから。でも、どうやってんの？これ。何の言葉も無しにノーモーションって、どんな反則技なのよ」

「・・・何となく？」

なんだそりゃ。

## 第6話 ツッコミの基本は手刀です。

そんなことを話しながら歩いている内に、細い砂利道が人々の行き交う通りに合流した。

やはりというか、黒髪はおらず、栗毛や褐色の髪色をした人々が多い。所々に派手な赤毛や金髪も見えるが、和馬を見た人々が判で押したように驚いた顔をするのが少し鬱陶しい。

「パンダってこんな気分なのかなあ」

「そういや昔、パンダに抱きつきたくて檻に入り込んで、がつつり引っ掻かれた男のニュースを聞いたことあんな」

「え、どこの動物園？」

「中国のどっか」

と、何やら馬を止めたヴァンフレッドが、この辺りに住んでいるらしい子どもに声を掛けて、コインを手渡しているのが見えた。

子どもはぱつと駆け出して、その後ろ姿を見ながらヴァンフレッドが馬から降りてくる。

和馬が近寄ると馬が怯えてしまうので、そこに残したまま有紗だけが近づいて行くと、振り返って無駄にきらきらしい笑顔を浮かべる。

「今、辻馬車を呼んでくれるよう子どもに頼んだ。城下まではまだ



暫くあるからな」

「大丈夫ですかね？」

「幌馬車だからな。カズマは幌の端にでも乗っていれば何とかなのではないか」

まあ、それならば和馬は馬からは結構離れているだろうし、ダメならダメで歩くだけだ。

しかし、そんな心配は杞憂だったようで、びっくりするほど大きな馬は、暴れる気配もなく大人しくしてくれた。むしろ御者の方が和馬の黒髪を見て、ちらちらと不安げな視線を何度も寄越した。

ヴァンフレッドが王宮まで、と銀貨を一枚弾いていなければ、もしかしたら断られていたかもしれない。

何だかな、と思いながら、そこはかとなく哀愁を漂わせている和馬と並んで、幌馬車の最後尾に後ろ向きに腰掛ける。

そして、のんびりと動き出した馬車を、遠巻きに見ていた子ども達が興味深そうな顔をして追いかけて来た。

大体、五歳から七歳くらいだろうか。

どうやらこの辺りの子ども達らしいが、着ているものは皆芸術的な刺繍や装飾が施されていて、この世界の服飾技術の高さを伺わせる。

子ども達がこうして労働力となっていていなくても、のびのびと遊

んでいられるというのは、この土地の安全性と生産力が高い証拠だ。  
どの子どもも皆清潔な格好をしているし、何より好奇心一杯に輝く瞳に陰りがまるでない。

最近は日本でも「知らないひとにも知ってるひとにも絶対についていっちゃいけません」と教育されていることを思うと、随分この国は豊からしいな、と少し羨ましく感じる。

暫く、つかず離れずと言った感じでついてきていたが、その中のリーダー格らしい子どもが、なあなあ、と声を掛けてきた。

「そっちのにーちゃん、魔族か？」

「んー？どう思う？」

子どもの扱いは慣れている。

につこりと笑って見返せば、そばかすの散った幼い顔に、ぱあつと朱が昇る。

「ええつと、えと、目が赤くないから、違うと思う！」

「そうだよー、正解！このお兄ちゃんは君たちと同じ、人間です」

「でも、にーちゃん、髪が黒いぞ？」

「遠いところから来たからねえ。お姉ちゃん達の故郷では、みんな黒髪だよ？」

そうなの！？と子ども達が揃って声を上げる。

こうして子ども達を眺めてみると、髪の色と同じ位、顔立ちも様々だ。西洋的な彫りの深い子どももいれば、東洋的な瓜実顔の子どももいる。

黒髪が見当たらないのが、いつそ不思議な位だ。

「黒髪だと、やっぱり怖く見えるかなあ」

「・・・んー、んん、ちょびつと？最初だけ！ねーちゃんすっげー美人だし、にーちゃんかけーし！」

「ありがとー。ボクのお父さんは、どんなお仕事してるの？」

「とーちゃんはランプ職人だ！街で一番腕がいいんだぞ！」

「凄いな、かつこいいね！」

「おう！おれもでかくなったら、にーちゃん達みたいにとーちゃんの仕事を手伝うんだ！」

その他の子ども達にも声を掛けてみると、皆某かの職人の子か小さな商売を営んでいる店の子ども達で、中には王宮に奉公に出ている姉がいる、という子もいた。

「前の馬に乗ってるにーちゃん、貴族だろ？剣持ってるし、すっげー立派な馬だもんね！」

貴族ではなく王族だが、そこは言わなくてもいいだろう。

しかし、なんとなく予想はしていたが、やはり剣を持つ人間が普通にそこらをふらふらしている世界なわけか。  
ちよつと嫌だ。

「ねーちゃん達は、王宮に行くんだろ？何しに行くんだ？」

「あの馬に乗ってるお兄ちゃんが、招待してくれたの」

「美味しいもの食べに行くのか？」

「王宮のご飯って美味しいの？」

「そんなの決まってるじゃん！ミリイのねーちゃんが、お姫様のご飯を味見する係だったんだけど、毎日滅茶苦茶美味いモン食ってるって言うてたぞ！」

（そ、それって・・・）

対子ども用甘やかしスマイルが、思わず引きつる。

しかし、丁度馬車が街の外れに差し掛かって、子ども達はまたねーと無邪気に大きく手を振って引き返していった。

ここから城下町まで、馬車でしばらく揺られるらしい。

ほっとして彼らに手を振り返していた有紗に、呆れたような和馬の声が掛かる。

「・・・お前、二重人格か？」

「何をいきなり、失礼な」

むつと眉を寄せると、和馬の口元が軽く引きつる。

「いや、だってお前・・・何あの甘々」

「受けがいいのよ、あれ。子どもは素直だし、ちょっと誘導すれば聞きたいことは話してくれるし、楽でいいわ」

「・・・子ども相手に情報収集してたのかよ」

「大人と違って、聞いたことをそのまま話してくれるからね」

「・・・ああ、うん。取り敢えずもう、何も言わねえわ」

「いや、ここはひとつ突っ込もうよ。私たち、これから王宮に居候すんのよ?」

「あ?メシが美味いんだろ?」

思わず、素で和馬の額に手刀でツツコミを入れてしまった。  
「ごす、と結構いい音がした。」

「っにすんだよ!?」

「お姫様のご飯の味見係つつつたら、毒味係つてのが常識でしょうがっ」

「オレの中に、そんな常識はねえっ」

「ロマンがないっ」

「毒味係の、どこがロマンだ！」

「そーうじゃないわよ！十八年も生きてたら、少しは歴史を題材にした小説やら映画やらから雑学を得るもんじゃないの！？そういう成分の全く無い脳みそが、ロマンがないって言ってるの！」

「オレの愛読書は少年ジャ ブだっ」

そんなことを言い合っている間に、目的地である城を中心に高く築き上げられた城壁の門が、緩やかに近づいて来ていた。

王宮、という言葉から有紗が想像していたのは、某ネズミ園のシンボルでもある白亜の建造物である。

広い庭園に囲まれた、美しくも壮麗な城。

しかし、目の前に聳え立つその想像より遙かに巨大な建造物は、城というより要塞と言った方が正しいのじゃないかと思うような威容を誇っていた。

非常時には兵士が詰めるのだろう小窓が幾つもある石組みの城壁にぐるりと取り囲まれ、そこに穿たれた威圧感たつぷりの門をくぐった先には、美しい庭園の代わりに、練兵場と思われる剥き出しの地面が広がっている。

学校のグラウンドもかくやという広さのスペース毎に、二階建ての宿舎のような家屋がそれぞれ凝った意匠の旗を掲げている。

それぞれのスペースでは、沢山の人々が剣や槍、或いは体術の訓練をしていて、かなりの迫力だ。

城門で馬車を降りた有紗と和馬は、そこに控えていた初老の男性に馬を預けたヴァンフレッドについて、石畳を敷き詰めた道を歩いた。

ここに来るまでに、ヴァンフレッドと王宮に来る理由を適当に申し合わせている。

曰く、

『街でチンピラに絡まれていた王子を、奴隷商人に攫われた妹（有紗）を追ってこの国にやって来た和馬が助けた。

故郷は遙か東方のニッポンという島国であり、その住人は皆黒髪である。』

和馬と有紗は魔術師（死去）の子どもで、この国の魔術に興味があり、しばらくの間王子の宮で過ごしながら、色々と学ぶことになった』

という、ツツコミ所満載の設定だが、この国の常識が無いことや、黒髪であることを正当化し、かつこの世界の術式を調べる理由さえあればいいか、と妙に楽しげなヴァンフレッドの主張を受け入れたのだが、何故に兄妹設定や奴隷商人などという愉快なオプシヨンが盛り込まれているのだろうか。趣味か。

まあ、この国の事情を知るヴァンフレッドがいいと言っているのだから、多分これでいいのだろう。

街中と同じか、或いはそれ以上にびしりと向けられる視線を感じながら、ようやく城本体に辿り着く。

（建設当時のモン・サン・ミシエルってこんな感じかもなあ）

石造りのどこまでも堅牢な城を見上げて、そんなことを思う。  
映像でしか見たことのない彼の城は、雄壮でありながらもどこまでも優美だった。

しかし、ヴァンフレッドの顔パスで城内に入り、暫くの間ぐるぐると階段を昇って見ると、そこに広がっていたのはベルサイユ宮殿もかくやという豪華な内装だった。

すっげ、と和馬が隣で呟くのに、無意識にこくこくと肯く。  
これは凄い。  
凄すぎる。

一体どれだけ高いんだと見上げてしまう吹き抜けの天井、どこもかしこもきらきらと輝いているようなその空間は、美術性の高い絵画や彫刻で彩られ、まさにこれぞお城！と言った感じである。

その華やかな空間に、当然のようにしっくりと溶け込んでいる辺り、やはり彼は王子様なのだと妙に感心する。

それからまた廊下や階段を幾つも通り過ぎて、中庭を抜けた先にヴァンフレッドの宮があった。

途中、和馬がどうしてこんなに入り組んでいるんだと文句を言うと、敵に攻め込まれたときに簡単な造りだと困るじゃないか、と当然のように返された。

基本、平和ボケした日本人で申し訳ない。



## 第7話 この魔族はペットです。

「お戻りなさいませ、殿下」

そうして宮の入り口でヴァンフレッドを出迎えたのは、淡い金髪をすっきりと後ろに撫でつけ、片眼鏡に口ひげのチャームポイントも素晴らしい、これぞ執事！という雰囲気、初老の男性だった。

名前はやはりセバスチャンか、とどきどきしていたのだが、ヴァンフレッドは気安い笑みを彼に向けると、家令のヴィクトールだ、と紹介してくれた。

ヴァンフレッドはヴィック、と彼を呼ぶと、例の胡散臭い設定を堂々と説明し、部屋を用意するよう命じた。

「承知致しました。それでは殿下、お茶を用意致します。今日は如何なさいますか？」

「ファル産のファーストフラッシュにするかな」

「では、そのように」

見事に優雅な一礼を残してヴィクトール氏が去っていくと、ヴァンフレッドは客間と思いきこれまた豪華な一室にふたりを案内した。

「ねね、王子様。さつき王宮の前で訓練してたひと達の中に、動物の耳や尻尾のお兄さん達がいたでしょう？彼らも魔族なんですか？」

勧められたソファに落ち着くなり、気になって仕方なかったこと

を訪ねると、いいや、とあっさり否定された。

「彼らは獣人族だ。常人より遙かに強靱な肉体と感覚を有しているが、魔法を使えるわけではない。髪も黒くはなかっただろう？」

「あ」

彼らの愛らしいチャームポイントに気を取られていたが、確かにその髪はこの国で良く見る栗毛や赤毛、金髪だった。

獣人族は、その身体能力の高さから、騎士団や自警団で働く者が多いらしい。

魔族はそれを召喚して契約を交わした者に従属するものであり、昔は魔術を行役出来る騎士が使い魔とすることもあったが、最近は魔術師と騎士の役割分担がはっきりしているのだと言う。

魔術師を戦場に出して死なれるより、役に立つ魔法具の開発に携わらせ、それを騎士に使わせた方が効率がいい、という方針なのだろうか。

実際、魔族は魔術師が造った武器でしか仕留められないことから、彼らは非常に尊敬を受けている。

また、契約を交わしていない魔族というのは、殆ど野生の獣、それも問答無用で人を襲って食らう狂獣であるため、街中で黒い獣を見掛けたならそれは間違いなく魔術師の使い魔、ということになるらしい。

「契約って、どんなことするんですか？」

「ああ、魔法陣を使って召喚した時点で、召喚者である魔術師の力量が、その魔族より勝っているということになるからな。召喚に応じた時点で、大抵の魔族は召喚者の僕となることを選ぶ。その証として魔族が召喚者に名を与えれば、契約の完了だ」

「・・・勝手に呼びつけといて、従えって？随分横暴ですね」

思わずそう言うと、ヴァンフレッドの眉間に軽く皺が寄った。

「そうではない。魔族というのは、魔の気配に冒されたもの。かつてはごく普通の獣や精霊だったものだ。魔に冒されたものは皆黒く染まることから、「染まる」とも言うが。一度染まったものは、二度と元に戻れぬ。自我を無くし、ただ暴れ狂う衝動のままに、目に付く全てを食らうものだ。それを光の中に戻し、従えるのが契約だ。魔族は皆、己を狂気から引き戻し、救った召喚者に喜んで忠誠を誓う」

思いも寄らない「契約」の実体に、思わず目を瞠る。

（つーか、精霊て・・・）

そんななんまでいるんかい、と内心関西人のように裏手でツツコミを入れてしまった。

「魔術師と契約していない魔族は、目につく人間を全て食い殺す。問答無用で討伐対象となるから、ただ殺し続けるだけの存在でいるよりもいいと僕は思う」

それに、とヴァンフレッドが何かを思い出したように小さく笑っ

た。

「魔族にとって魔術師の生気と言うのは、酷く心地良いものらしい。僕の知り合いが使役している魔族など、マスターと常に共にあるために、巨大な山猫だったものがある日小さな仔猫に変じてな。常に肩に乗っているのが、一部のご婦人方の中で偉く好評のようだ」

「・・・ペット扱いなんですか？」

何というかこう、魔族という言葉の響きからして、それこそ戦闘用に呼び出して支配し、無理矢理戦わせる、みたいなイメージがあったのだが。

兎だの仔猫だの、聞いた限りでは何ともファンシーで愛らしい姿しか想像出来ない。

そう言うと、ヴァンフレッドはそんなようなものだ、とあっさり肯いた。

「魔族を召喚出来る魔術師、というのがそもそも貴重な存在なのだ。魔術師にとっても、自分の力を誇示するのに丁度いい上に、見た目に愛らしい姿には心が和むだろう。戦いなど使って、折角手に入れた使役を失うようなことはまずしない」

隣で、マジでペット扱いするつもりだったのかよ、と和馬が疲れ切った声で呟く。

そこに、失礼します、と軽やかな女性の声が響いて、開け放した扉の向こうから、お茶のポットと茶菓子を載せたワゴンを押した、所謂メイド服を着た女性が入ってきた。

メイド服って全世界共通なんだろうかと馬鹿なことを考えながら、初めて見るリアルメイドを何と無しに見ていると、ヴァンフレッドには実際にこやかに蕩けそうな笑顔を向けていた彼女が、一瞬だけちらりとこちらに視線を向け、すぐさま手元の茶器にそれを落とした。

（うーん・・・）

非常に訓練された手つきでお茶の用意をする、その赤毛のメイドはそつなく全てを整えて去っていったが、あの視線はただけでない。

街の子ども達の、未知の者に向ける怖れ、或いは魔族ではないかという疑念の入り交じったそれとはまるで違う。

あれは、あからさまにこちらを見下す視線だ。

女同士だからこそ分かる、「アンタ、気に入くないのよ」という意思をばっちり乗せたアレである。

王宮でメイドをしている位だから、彼女はどこぞの貴族令嬢で、庶民のこちらを格下の者だと思っているのかもしれない。

ヴィクトール氏はそんな感じはまるでなく、どこまでも丁寧に主の客人を迎える姿勢を取っていたが、どれだけ指導者が立派でもあの手の女はどこにでもいるということか。

まあ、和馬とヴァンフレッドは気付いていないようだし、お茶はきちんと美味しく出来ているから、些細なことは放って置くことにする。

「・・・それで、王子様。例の魔法書とやらを、早速見せてもらいたいのですけど」

何しろ、和馬が我を忘れて叫ぶと、炎が飛び出すのだ。

そんな生きた火炎放射器をそのままにはしておけない。

「後、竜の生態がどんなものかも知りたいです。元に戻るならそれが一番ですけど、もし戻れないとしたら、どうにかして力を封じるなりしないと、危なっかしくて放っておけません」

「保護者か、お前は」

「えー、保護者はそっちでしょ？お・に・い・さ・まっ」

語尾にハートマークを付けて言っていると、やめんかいつと喚く。

気色悪いとは失礼な。

「つつか、ここの文字って読めるようになってんのか？」

「あ、それは大丈夫。見ればなんとなく意味は分かるようになってると思う」

「・・・つくづく便利だな。外語のテストとか楽勝なんじゃねえの」

「うん。英語で九割以下の点数、取ったことないよ？」

「ずりいつ」

「ずるくないもん、他の努力が結果オーライなだけだもん」

ぷいっと顔を背けると、ヴァンフレッドがくっくつと肩を揺らして笑う。

「では、文字に不自由しないと言うなら、手分けしてやったらどうだ？魔法陣の解析はアリサしか出来んのだろうし、竜のことについてはカズマが一番知っておくべきだろう？」

「・・・うわ、王子様がマトモなことってるし」

「どっかで別人で入れ替わったんじゃないやねえだろうな」

「失礼な。僕が後先考えずに行動するのは、ルカに関することだけだ」

やっぱり、ヴァンフレッドはただのブラコンだった。

## 第8話 売られた喧嘩は買いましょう

（・・・つかーれーたー）

あれからずっと、王宮図書館に詰めっぱなしで、件の魔法書を始め、呪いの解き方だの魔に取り憑かれた場合の対処法だのと銘打たれた本を片っ端から調べた。

しかし、そのどれも覚え書きのような内容で、よくまあんなものを参考に召喚術など行使したものだと、逆に王子に感心してしまうようなシロモノだった。

分析 で王子の術力（彼らが言うところの魔力）を調べたら、結構なレベルかもしれない。

無詠唱の 絶対防御 と無茶な界渡りのせいで、色々したいことがあるのに、何も出来ないのがもどかしい。

どれだけ回復に時間が掛かるか分からないのが、どうにもこうにもストレスが溜まって仕方がない。

ここまで術力が低下することなど今まで無かったから、自分が酷く無力な存在になったようで、不安でもある。

調べ物に集中してそんなことを忘れたいのに、図書室の蔵書の、まるで系統付けられていない記載はあちこちに内容が飛んで、それを追いかけるだけでもとんでもない手間が掛かる。

おまけに、最初に感じた通り、それらの本に記されたどの術にし



ても、非効率この上ないものばかりで、疲れた脳みそにはイラっと来ることこの上ない。

和馬は和馬で、動物図鑑のようなバカでかい本をあれこれ読んでいたが、その余りに非常識な内容に頭痛を覚えていたようだ。

詳しい話はまだ聞いていないが、もう酷く疲れていたから、王子と揃って夕飯を摂った後は、隣同士に宛がわれた客間に揃ってさっさと撤収した。

（あー・・・ふかふかー・・・）

ランプの灯りに照らされた室内は、中々幻想的な雰囲気だ。

部屋の隅には大きなバスタブが置いてあって、蛇口を捻ればお湯が出てくるようになってるのは、流石王宮といったところか。

疲れた体で、取り敢えず天蓋付きのベッドにダイブしてしまったが、ちらりと視線を向けて見ると、シャンプーやトリートメントのようなきれいな瓶や、良い香りの石鹸、化粧水や乳液と思われるものまでが、至れり尽くせりと言った感じでずらりと棚の上に並んでいる。

王宮って素敵だー、と思いながら、お風呂の誘惑に誘われ、よいせとベッドから起き上がる。

これまであちこち「落ちた」先では、まず最初の一晩は野宿と相場が決まっていた。

宿が定まっただけから、お風呂の文化がある世界というのは、思い

の外少なかつたものだ。

取り敢えず、まずはバスタブにお湯を溜めないとならない。

つきつきとそちらに向かおうとしたとき、軽いノックの音が聞こえた。

何だろうと首を傾げながらもどうぞと答えると、お夜食をお持ちしました、と言う声と共に、あの第一印象の余りよろしくなかった赤毛のメイドが入ってきた。

しずしずとワゴンを室内に入れ、丁寧な手つきで扉を閉める様を見つめていると、唐突に彼女の雰囲気が変わった。

「ちょっとあなた。さっさとここから出て行って下さらないかしら」

(・・・あー、やっぱりこう来たかあ)

予想通りと言えばその通りの展開に、うんざりする。

「あなたの兄ときたら、魔族のような髪をして気味が悪いったらないわ。殿下はお優しい方だから、あなた方のような賤しい者にも慈悲を掛けて下さるけれど、こんなことが知れたら、殿下の不名誉になるということも理解出来ないの？王宮に魔族紛いの平民を招いて、客人として扱うだなんて冗談ではないわ。王宮で働く私達は、皆貴族の出ですよ。その私達が、どうして平民の、それも奴隷として売られかけたような貴女に仕えなければならないの。私の言っていることが理解出来る頭があるなら、明日の朝にでもここを出て行くのよ。よろしくて？」

傲然と顎を上げて言い連ねる彼女は、有紗が当然自分の言うことを聞くものと信じ切っているようだ。

しかし、有紗が彼女の言葉に従う必要など、まるで無いわけで。

（ていうか、よくこれだけ差別発言が出てくるなあ。何であの王子様の宮で、こんなバカ女が働いてんだか）

あの王子様はとんでもなく愉快的ブラコンのアホだが、少なくとも平民を見下すような人物で無いことだけは知っている。

「人の話を聞いているの！？黙っていないで、返事をなさい！」

うるさい。

無視し続けるのも手かもしれないが、ここにいる間、ずっとこの電波を受け続けるのは我慢出来そうにない。

ただでさえ疲れて苛々していたところに、こんなヒステリックな言葉を聞かされて、不快指数がマックスを越えた有紗は、深々と息を吐いて歩き出した。

「何ですか？今すぐ出て行っていただけるのかしら？」

勝ち誇ったように赤く染めた唇を歪めた彼女の傍をすり抜け、扉を開く。

そうして廊下へ出た有紗は、出口はあちらでしてよ、と言う声を背中に聞きながら、それをきっちり無視して隣の扉へ向かい、すう、と息を吸った。

「・・・お兄様！お兄様あーっ！」

夜の廊下に、有紗の悲鳴じみた泣き声が盛大に響き渡る。

どんと扉を叩く騒音の伴奏付きで。

「ちょ・・・え、有紗？」

疲れ切っている和馬には悪いと思ったが、驚いた顔をしてすぐに扉を開いた彼に、素早く唇だけで合わせろ、と告げると、その体にかっしと抱きついた。

「お兄様！」

一瞬、和馬の体が強張ったが、ぎこちなく有紗の背中に腕を回してくる。

何事か、とあちこちから人が飛び出してくる気配を確認しつつ、悲しげに声を張り上げる。

「こんなところにいるのはもう嫌です！親切にして頂けたと思っていましたのに、皆さん本当は、私たちを気味が悪いと思っているのですもの！」

「・・・有紗。落ち着け。誰がそんなことを言った？」

すかさず宿めるような声を作った和馬に、心の中でぐつと親指を立てる。

「お・・・お夜食を運んで下さったメイドさんです。黒髪は魔族のようで気味が悪いと、平民風情が王子様の慈悲を受けるなど厚かましい、さっさと出て行くようにと・・・っ」

ざわりと周囲の空気が変わる。

ああ、あのメイドの顔を見られないのが残念だ。

「あの方は貴族だから、奴隷として売られかけたような私の世話をするなど、耐えられないそうです。私だって、そんな風に蔑まれてまで、こちらでお世話になりたくありません・・・！」

そうか、と和馬の低い声が響いて、大きな手がそつと髪に触れた。

「使用人の躰けもろくに出来ねえとは、この国の王子つてのもたかが知れているな・・・なあ、王子？」

「・・・全く、申し訳のしようもない」

どうやら、いつの間にかヴァンフレッドも現れていたらしい。

ひっと引きつった女の悲鳴が微かに聞こえる。

「この国の貴族つてのは、あれか？庶民の税金でメシ食ってるくせに、庶民を蔑んで威張り散らすしか能がねえのか？」

低く揶揄するような和馬の声に、一瞬、沈黙が返った。

「・・・ヴィクトール」

「は・・・」

「その者を、今すぐ王宮から追い出せ。二度と王宮へ伺候することは許さん」

「承知いたしました」

「そ・・・っそんな！お許し下さい殿下！我が父はグルディア侯爵でございます！」

「それがどうした」

「・・・っ」

「王も貴族も、民あつてのもの。そんなことも理解しておらぬ愚か者に、民を治める資格はない。いや、それ以前に、身分や髪の色で他者を蔑むとはな。ひととして軽蔑するのも情けない所業だ。お前のようなものは、我が国の恥だ。僕の賓客を侮辱して、生きていられるだけ有り難いと思うがいい」

（・・・おお）

あのブランコン王子とも思えぬ凜とした声に、周囲が素早く従うのが気配で分かった。

ここは一発、あのメイドにスケープゴートになっていただいて、今後の生活改善を図ろうとした思惑は、予想以上に成功したようだ。

この騒ぎを見て、再び自分たちに余計なことを言うような勇気のある輩はそうそういるまい。

そろそろいいだろうと和馬から腕を離し、その場に残っているのがヴァンフレッドだけだと言うことを確認すると、有紗は力一杯溜息を吐いた。

「ちよつと、王子様。ほんつと勘弁して下さい。なんであんなのがここで働いてるんです？」

しかし、ぞんざいな口調でそう言った途端、厳しく表情を張り詰めていたヴァンフレッドがぽかんと瞬いた。

「あ・・・アリサ？お前、泣いてたんじゃ・・・」

「は？何で私があんなレベル低い厭味言われた位で泣かなきゃならないんですか。アツタマ悪すぎですよ、あの女」

「・・・」

ランプの薄明かりにも、ヴァンフレッドの啞然とした顔ははっきりと見えた。

そのヴァンフレッドに、和馬が気の毒そうな声で呼びかける。

「ヴァン。こいつを泣かすのは、滅多なことじゃ出来ねえと思うぞ？」

「う・・・うむ・・・いや、それはそれとして、本当に悪かった。あの者が不快な思いをさせたのは事実なのだろう？」

「そうですよ、全く。ひとが疲れてるつてのに、開口一番出て行け

とか、意味分かんないです」

「・・・済まない」

「いいですけどね、もう。あ、ごめんね和馬。疲れてるとこ邪魔して」

そう言っで見上げると、軽く目を瞠った和馬は、にやっと唇の端を持ち上げた。

「いや？別に、役得だったし」

「え？」

何のことだと首を傾げた有紗に、和馬は楽しげに笑みを深めて見せた。

「結構胸でけえのな、お前」

「・・・っこの、セクハラ兄貴ーっっ」



## 第9話 「責任は取ります」

あれから二週間ばかり、時々ヴァンフレッドと息抜きに街で遊んだりしながら、色々調べて分かったことと言ったら。

「無理」

どうしたって、和馬の中から竜の力とやらを分離させるのは不可能、という事実だった。

既に和馬の体は炎を吐いてもなんら損傷を受けないものに変質しており、呆れたことに水中での呼吸も可能らしい。エラも無いのに。

「どうする？元の世界に帰って、うっかりその体質がバレたら、なんだか怪しげな研究室とかに攫われそうだけど」

「・・・少しは言葉を選ぶとかしてくれてもいいんじゃないの？」

溜息混じりに和馬が言うが、選ぶのが選ぶまいが結果が変わるわけでもあるまいに。

「喜んで研究してくれそうな、マッドサイエンティストの知り合いなら紹介してもいいけど」

「そこで追い打ちかけるか、普通！」

うむ。

ツッコミが出来る位の精神的余裕があるなら大丈夫だ。

「ていうか、この世界の技術、っていうか古代遺跡の技術？ ってばハンプないし、正直かなり快適なのよねえ」

「なんだよな・・・」

そう。

図書館に籠もって様々な文献を調べているうちに知ったのだが、およそ四百年ほど前、この大陸は一度、一夜にして滅んだのだそうだ。

有紗から見てもオーバーテクノロジーの宝庫のような記述がいくつもあり、実際、この城の照明や上下水道施設は全て、古代遺跡から発掘した魔法具によって制御されているらしい。

一度興味本位でその水を操る魔法具の解析を試みたのだが、「正に職人芸！」と諸手を挙げて賞賛したくなるような、高度な術式回路のカタマリだった。

王宮だけでなく、国中の建物は全ていつでも水とお湯の出る水道、水洗トイレ完備は勿論のこと、それを活用した見事な噴水が街中で芸術的な美しさで人々の目を楽しませている。

その水とお湯を利用した冷暖房も、気候の変化に応じて完璧に制御されているため、どこへ行っても過ごしやすい。

もうひとつ、この王宮には光を操る魔法具も設置されていて、やはりどこの部屋へ行っても壁の魔方陣に触れるだけで灯りが点いたり消えたりする。

大広間のシャンデリアなど、魔力の籠め方によって色や形を変え  
るといふファンタジックな優れもので、パーティーのときなどは担  
当魔術師が技の限りを尽くすため、一見の価値があるそうだ。

おまけに、各部屋が無人になると、その魔法具は室内の汚れを電  
気分解してしまうため、まさに掃除洗濯をする必要が一切ないとい  
う主婦垂涎のシステム。

一見、中世ヨーロッパのような町並みと城なのに、中身は近未来  
ハイテクのカタマリという、何と言つかこう、「来て良かった！」  
な世界。

人々の生活が豊かだということは、この国では美食や芸術に振り  
向ける時間が豊富にあるということで、出される食事も、醤油や味  
噌が恋しくなる暇もない程素晴らしい。

それにしても、実に物凄いエコである。

感動の余り、王子に「このステキ魔法具、分解して調べさせて下  
さい！」と言ったら、流石にだらだらと冷や汗をたらして丁重に断  
られた。

何でも、見学することさえ「王子の客人」だからこそ許されたこ  
とであって、各国の間で生じている争いの殆どは、それぞれが保有  
する古代の魔法具を巡ってのことなのだそうだ。

幸い、この国が保有する二つの魔法具は、生活基盤そのものを支  
えて国民の生活を豊かにするものであり、多くの軍人や傭兵を抱え  
ても問題なくやっていけるため、四百年前から一度も他国の侵攻を  
許したことが無いのだそうだ。

その分、狙われることもまた多く、気苦労は絶えないらしいが、それでもそのアドバンテージは確かに羨まれても仕方がないものだとしみじみ思う。

暖を取ったり灯りを取るのに、木を燃やす必要もなければ電気も必要としない。

そんな、有害物質を一切排出しない、夢のような魔法具を目の前にして泣く泣く引き下がったものの、意思疎通のお陰で、この国の魔術師も解析に手間取っているという古代の魔法書をしっかり読み漁った有紗は、いつかアホオヤジに基本理論を売って再現させようと考えていたりする。

そうは言っても、やはり元の世界が恋しい。

勿論有紗は帰るつもりだし、和馬だって家族に会いたいだろう。

しかし、有紗はともかく、和馬は既に人外だし（お前も十分ヘンだろ、という和馬の寝言は無視だ）、何よりも。

「まだはつきりとはしないけど・・・和馬ってば下手したら、不老不死並のご長寿になっちゃってるかもなんだよね」

最初は四百年前の「滅びの日」以後の本ばかりを読んで、よくまあこの世界で最強の聖獣と言われる竜を倒すことなんて出来たものだと感じたものだが、何のことはない。

ヴァンフレッドが使った竜の一部を封じた魔石とやらも、古代遺跡の発掘品だったというだけのことだ。・・・思い返せば、本人も

そんなことを言っていたような。

古代文明、どれだけ凄いんだ。というか、ヴァンフレッドはどれだけ博打で勝ったんだ。

「それなんだけどな・・・」

ふと、図書室の一角、既に指定位置と化したテーブルの向かいから、和馬が物凄く微妙な顔をして、一冊の本をこちらに向けて滑らせて来た。

「何？」

有紗がこの世界の技術を片っ端から調べていたのと同時に、和馬はかなり詳しく竜を含めたこの世界の生き物たちの生態について調べていた。

そして、目の前にある本は、古代語、つまり古代文明における竜に対する考察を記したもののようだ。

ならば、その信頼性はかなりのものだろう。

「その中に、竜と人間との契約って項目があった」

「ふうん？」

「・・・竜ってのは、ひとに化けて、人間とその、恋愛関係？になることもあったらしくてな。契約つつつても結婚と同意義で、相手の人間に竜と同じだけの寿命と生命力を与えろとか、そういう類いのモンらしい。寿命を同化させる、みてえな感じで」

それはまた、乙女心を刺激するお話だ。

どこぞの王道恋愛ファンタジーのようではないか。

死ぬときはいちにのさんで一緒に死のうねと、そういうことだろうか？

呑気にそんなことを考えていた有紗は、それでな、と和馬が開いたページの一節を示す指の先を見た。

バスケ部らしく、大きくて指の長い手は、結構好みだ。

しかし、そこに記されていた「竜との契約方法」を目にした有紗は、思わずぱつくりと口を開いた。

それは、

- 一、 お互いの体液を交換しましょう。
- 二、 お互いの名前を交換しましょう。

以上。

という、「それでいいの!？」と思うような、シンプルイズベストなものだった。

いや、それはそれとして。

補足事項として、竜は親から貰った名前を、伴侶以外には明かさないイキモノである、だのなんだのと書かれていたが、ということは、つまり。

「・・・私達、べろちゅーしたよね」

唾液も立派な体液です。

「・・・普通に、自己紹介もしたよね」

ええ、初対面の相手に名乗るのは、コミュニケーションの基本です。

人して、当然です、はい。

因みに契約、つまり結婚は解消不能、一生一度の真剣勝負だそうです。

竜というのは情が深く、一度愛した相手を生涯愛し続けるという性質を持っているのだとか。

それは、どこぞの浮気王子に見習わせたいところです、が。

「・・・和馬さん」

「な・・・何だ？」

有紗の据わった声に、若干引き気味になった和馬の手を、がっしと掴んで握りしめる。

「責任は取ります。結婚しましょう」

「・・・・・・・・・・はあああああ!？」

和馬が突拍子も無い声を上げた瞬間、ぐつととんでもない熱量を孕んだ炎が目の前に溢れ出た。

これは死んだかな、と思ったのだが。

「・・・あれ？」

無傷。

どこにも火傷のひとつもないどころか、髪先さえ焦げていない。

和馬が咄嗟に吐き出した炎を打ち消したのかと思ったが、目の前にあったはずのテーブルが跡形も無く、和馬の手を握ったまま恐る恐る背後を振り返ってみると、図書館の壁の一部がきれいになくなっていた。

・・・どうやら、蒸発したらしい。

「寿命と・・・生命力？」

ぽつりと呟くと、少しの沈黙の後、低く答えが返った。

「それもあるかもただけだな。・・・竜は契約者を絶対傷つけられねえって書いてあったから、オレの攻撃はお前に一切効かないとか、そういうことだと思う」

どちらにしても、期せずして、間違いなく契約が成立しているという事だけは確認出来た。

それから、騒ぎを聞きつけて飛んできたヴァンフレッドに平謝り



してフォローを押しつけ、幸い保護の魔法が掛かっていたために焼失を免れた本を部屋に戻って再検討してみると、もうひとつ重要な事項が記されていた。

竜と契約者は、契約後はお互いにしか発情しないそうです。

種族が違うから子どもは作れないけれど、性交渉によって互いの魔力を交換しないと、魔力の流れが澱んで体調が崩れ、いずれ死んでしまうため、必要な本能なのだそうです。

・・・やっぱり、責任は取るべきだと思います。

だってまだ死にたくないし。

それにしても、番の相手とえっち出来ないと死ぬとか、それってイキモノとしてどうなんだろうか。

まさに命がけの愛ってやつですか？

・・・異種間結婚は、やっぱり大変な覚悟が必要みたいです。

## 第10話 プロポーズの答えは？（前書き）

若干、R15表現？が・・・。

苦手な方はお気を付け下さいませ。

## 第10話 プロポーズの答えは？

・・・なんだかまだ、あちこち体が軋んでいる気がする。

あれから再び和馬と話してみても分かったのだが、和馬が炎を制御し損ねたのは、有紗の発言に驚いたからというのも勿論あるが、それ以上に朝からずっと体の不調を覚えていたかららしい。

眩暈と頭痛、倦怠感。

「一晩寝れば治る、と言いつける和馬に「プロポーズの返事は？」と訊ける雰囲気でもなかったので、取り敢えず様子を見るかと思ったのだが、翌朝目を覚ました有紗は、和馬が言っていた通りの症状にこれが、と呻いた。

多少の時間差はあったようだが、これはキツイ。

頭は脳みそを茶巾絞りにされているように上手く働かないし、立ち上がろうにもぐらぐらと眩暈はするし、何より鉛でも詰まっているかのように体が重い。

よくこんな状態で和馬は平気な顔をしていたものと感心したが、朝食の場に現れないのを心配したのか、様子を見に来たメイドさんの言うことによれば、和馬は幾ら扉をノックをしても返事すらないらしい。

言葉が通じないのだから、それは仕方ないだろうが、本気で死にかけていたらどうしようと不安になった。

ちょっと疲れが溜まったただけだから、と看病してくれようとする彼女達にお引き取り願ひ、ヴァンフレッドにも心配しないよう伝言を頼むと、有紗は痛む頭を抑えつつ、和馬の部屋の前でおろしているメイドさんにも同じことを言っ下がつてもらった。

それでまあ、そこからイロイロとあつたわけなのですが。

・・・取り敢えず今、和馬はベッドの下でジャパニーズ土下座を披露中です。

体にタオルケットを巻き付けただけの格好で、広い背中に何本も走っているみみず腫れが痛々しい・・・って、それをつけたのは私ですね、はい。

「・・・あの、和馬？」

うお、喋ると喉が痛い。

声を上げ過ぎで喉が哽れるとか、本当にあるのだなと妙に感心してしまふ。

「すまん」

って、さっきからこの人、これしか言ってないし。

そりゃ、殆ど何も話さず、訳も分からん状態でベッドに引きずり込まれたのは確かですけども。

お腹をすかせた獣の前に、のこのこと出て行ったおバカな羊が食われたというか、そもそも自分から食われに行ったというか。

「・・・和馬ってさ、女の人苦手とか言ってたっけ？」

ぼそりと呟くと、初めて和馬の気配が訝しげに揺れた。

「なんか、こっちは初めてなのに、物凄く気持ちよかったんですけど？」

純情な女嫌いのふりをして、実はどれだけ遊んでいたのかと、何となく面白くない気分していると、ぎこちなく顔を上げた和馬がようやくこちらを見た。

「そう・・・なのか？」

物凄く覚束ない口調に首を傾げると、いや、と目を逸らした和馬の顔が紅くなる。

「その・・・覚えてねえつつうか、さっき気が付いたらこうなってたつつうか・・・オレだってこんなんしたことねえし、わけ分かんねえけど。やっぱやった・・・んだよね？」

ちよっと待てい！

何だそれは！？

「うえ、ちょ、あんだけエロエロに人のこと責めまくっというて、無意識ですか！？あの百戦錬磨のエロ魔神が幻だったと！？」

「なななんだよそれ！？」

途端に首まで真っ赤になった和馬は、間違いなく有紗の良く知る和馬だ。

(うーあー・・・)

アレが和馬、というか竜の本能なのだとしたら、竜ってのはどんなにエロエロしいイキモノなんだ。

すっかり竜に対する印象が変わってしまったぞ。

「・・・まあ、取り敢えず、お互い、調子悪いのは治ったみたいだし・・・結果おーらい？」

「つて、え？お前も・・・？」

「うん。頭痛いわ、眩暈は酷くて歩くのやっとだわ、体は重いわけで、もしかして和馬もそうなのかなーって様子見に来たら、まあこんなことに」

「・・・」

物凄く複雑そうな顔をした和馬を、ひょいひょいと手招く。

「和馬さん、和馬さん」

「・・・何だ？」

「えつとね？和馬は何にも、謝らなきゃなんないこと、してないでしょ？」

何か言いかけるのを片手で制して、笑って見せる。

「むしろ、謝らなきゃならないのは、私の方。勝手にくつついてきて、キスだってしたのは私の方だし」

「ちが・・・っ」

「違うないって。でも、何回同じことがあっても、きっと私は同じことをする。・・・多分ねえ、和馬が今、自己嫌悪？でぐるぐるしてるのって、覚えてないからだと思うんだよね」

喉が痛むから、出来るだけゆっくり、静かに話す。

「自分で決めて、したことだったら、後悔はしても自分の責任だ！って思えるけどさ、目が覚めたらコレでしたとか、そりゃびっくりだわ。私でもスライディング土下座するしかないわ」

お前、と和馬が気の抜けたような声で呼ぶ。

「怒って、ねえの・・・？」

「ないない。過去は振り返らない主義なのです」

なんだそりゃ、と和馬が肩を落とす。

「まあ、そんなこと言っても、和馬が禿げたメタボのおっさんだったら世を夢んで自殺してたかもだけど」

「・・・そーかい」

む？

フローの仕方を何か間違ったか。

何だか和馬がどんよりと。

「ええと、ほら。世の中には体から始まる愛もあるとゆーし」

「・・・」

和馬が何か言ったようだけど、良く聞こえなかった。

「？何？」

「・・・悩んでるのがバカらしくなっただけだ」

それは良かった。

ほっとしたら何だか眠くなつて、和馬がまた黙り込んでしまったものだから、とろとろとまどろんでいるうちに、いつの間にか眠ってしまったみたいだ。

もう一度目を開いたときには夕方で、あれこれべたついていたり、体の体はきれいに清められ、ネグリジェのような寝間着も着ていた。

「和馬・・・？」

ぼんやりと呼びかけると、ソファで本を読んでいたらしい和馬が起きたか、と言いながら近づいてきた。



「腹は？減ってないか？」

「・・・お腹はそうでもないけど、喉は渴いた」

そうか、と枕元の水差しから、グラスに水を注いでくれる。

少し柑橘系の香りのする、美味しい水。

「有紗」

「んー？」

「・・・なんつうかこう、色々すっ飛ばした感がありまくりでアレなんだが」

すい、と和馬の手が、有紗の頬に触れる。

「生涯、あなたを愛します。結婚して下さい」

（・・・っそうきたかーっっ！）

真面目に。

誠実に。

正面から。

ああ、和馬はそういう青年だった。

年上ぶって、加害者ぶって、プロポーズを「責任を取る」なんて

言葉で飾るのは、相手にとって失礼な話だった。

どんな理由でも、切欠でも、一生を共に生きましようと言つ約束に、言い訳なんてしてはいけなかったのだ。

（敵わないなあ・・・）

本当に、驚かされる。

「責任」ならば、楽だった。

義務を果たすことなら、余計なことを考えずとも出来るから。

色んなものを見ないふりをして、蓋をして。

・・・本当に、いつの間にこんな狡い考え方をするようになってしまったのだから。

（うん・・・そうだね）

全然、普通じゃない最初だけど。

恋人にすらなっていなかったけれど。

まだ会って二週間だけど。

こんなプロポーズが始まりなら、何だか上手くいきそうな気がする。

「はい」

自分でも意識しないままに、笑っていた。

誰かを安心させるためでもなく、警戒を解くためでもなく、何も考えないままに、ごく自然に。

「一緒にいきましょう」

人生という長い道を、一緒に生きて、行きましょう。

## 第11話 王宮内恋愛事情？

結婚しましょう、そうしましょう。

そう言ったところで、元の世界に戻ればまだまだ未成年なわけで、取り敢えず「恋人から始めましょう」と言うことになった。

普通、こういうフレーズは「お友達から始めましょう」というのが常套句だと思うが、もうやることやってる上に、将来どこか生涯も約束してしまっているのだから、今更まだるっこしい話はパスだ。

・・・まあ、有紗は今までオツキアイとか、そーゆー甘ったるいことをしたことがないので、何をどうすれば「恋人」なのか少し悩んだりもしているのだが。

えっちな。いや、そんな単純なものでもなさそう。

「別に、フツーにしてりゃいいだろ？どうせ先は長いんだ、無理しただっていいことねえし」

そりゃそうだ。

不幸中の幸い、とでも言うのか、もう一晩眠って起きてみると、有紗の体調は完全に復調していた。

試しにそれまで出来なかった術式をあれこれ使ってみたのだが、今までに無いほど調子が良い。

竜の生命力ハンパねえとかそういうことですか。

えっちするなりこれとか、何だか妙にやるせないものがあるので  
すが。

何と言つかこう・・・いや、いいです。

何も、どこのエロゲだよ、とかそんなこと思ったりしてませんよ？

精神衛生上、そのような思考は全力で排除させて頂きます。

・・・まあ、これなら今すぐにでも元の世界に帰ることが出来る  
ということだ。

その日の晩、夕食の席でそう言つと、ヴァンフレッドは少し寂し  
そうな顔をしてそうか、と肯いた。

「また遊びに来られるか？」

「ええ、勿論。今度は私達の世界のお菓子でも持って来ますよ」

この王宮で出てくるお菓子は基本、洋菓子だ。

今まで食べたことが無いほど美味！なものはかりだったが、流石  
に和菓子はなさそうだし、煎餅やポテトチップスなんかの塩味系のお菓子という概念もなさそうだった。

それとも王宮では、ばりばり音が出るようなものは御法度なのだろう  
か。まあ、こっそり食べる分には問題ないだろう。美味しいんだし。

そう言えば、和馬が蒸発させた図書館の壁は、ヴァンフレッドが王宮魔術師に頼んで修復させてくれたそうだ。

一体何をどうしたらこんな高出力の攻撃魔法で、被害がこんな小規模で済むのかと散々問い詰められたらしいが、「異国の術だからよく分らん」で誤魔化しきったらしい。

「いや、お前達のことを異国のスパイか何かじゃないかと疑ってくる者までいてなあ。あれはちょっと参ったぞ」

はっはっは、と呑気に笑ってる場合ですか、王子様。

「そういうことなら、さっさと出てった良さそうだな。次は普通に遊びに来るし、オレは古代遺跡巡りとかしてみてえぞ」

「おお！それはいいな！僕も一度ネルフィアやイグルの遺跡をじっくり見て歩きたいと思っていたのだ！」

男の子って、どうして遺跡だの探検だのという話になると、子どもみたいにわくわくした顔をするんだろうか。

うっかり可愛いと思ってしまっじゃないか。

むしろ有紗は、あれだけヴァンフレッドがブラコンっぷりを披露している弟君に会ってみたかった。

偶に王宮を散歩していると、他の王子様達は時々見かけたのだが、やはり体が弱いからか、王太子の姿だけは結局一度も見ることが出来なかったのだ。

「あ、そう言えば。一番上のお兄さんと二番目のお兄さんが取り合ってた、何とかって言う儂げな美人さん。あの性格悪そうな五番目の王子様が横から掻っ攫って行ったみたいですよ」

途端、がばりとヴァンフレッドが全身でこちらを振り返る。

「何！本当か！？」

それは、気晴らしにヴァンフレッドに王宮内を案内してもらって  
いたときのこと。

余り知るものはいないという抜け道を通って、庭師がその素晴らしい芸術的な技術の全てを投入しているという中庭へ向かおうとしていたとき、和馬が誰かが喧嘩してるみたいだぞ、と言い出した。

王族以外は滅多に使うことのない抜け道で、争いごとというのは  
穏やかじゃない。

すぐさま気配を殺してそちらに向かったのだが、そこで三人が目にしたのは、煌びやかな衣装を纏った男二人が、どことなく幸の薄  
そうな女性を挟んで陰険なムードという、ある意味とてもありふれた光景だった。

しかし、それを目にしたヴァンフレッドは、すかさず物陰に身を  
潜め、わくわくした顔でその実況中継を始めたのだ。

それはもう、競馬中継もびっくりの滑舌で。

（あれに見えるは、オーガスタ兄上が以前から執心していらっしや

るというユリアナ嬢！)

(しかし、大人しく家の中での読書を好むというユリアナ嬢にとつて、脳みそ筋肉のオーガスタ兄上は全く好みではないと専らの噂！)

(おおっ！ギルバート兄上はドヤ顔だ！)

(たった一日遅れで第一王子の座をオーガスタ兄上に持つて行かれた恨み辛みを母君に愚痴られ続けて幾星霜、歪んだ性格は螺旋階段並とはいえ、女性受けするのは自分の方だと知っている自信からか！？)

(ユリアナ嬢の立ち位置も若干ギルバート兄上寄りだが、こーれーはーどうだろうか、単にオーガスタ兄上の暑苦しさから逃げたがっているようにも見える！)

ヴァンフレッドは、いつでも中継レポーターになれると思います。

それから少しして、有紗と同じ年頃に見える少年がユリアナ嬢の付き添いらしい女性を連れてきて、あからさまにほっとしたユリアナ嬢はそそくさとその場を去って行った。

その少年が第五王子のエイオースで、去り際にふっと兄達に勝ち誇った微笑を残していた彼が、ユリアナ嬢と中庭で楽しげに語らっていたとメイドさんズが噂していたのだ。

流石王宮、見事な愛憎劇の宝庫である。

「そうか・・・それは兄上達がさそのたうち回っていることだろうな」



「・・・お前ら兄弟って仲悪いのか？」

ふふふ、と邪悪な笑みを浮かべたヴァンフレッドに、若干引き気味の和馬の問い掛けに、ヴァンフレッドはいや別に、と首を振った。

「母親同士は何やらおどろおどろしくやり合っているようだがな。兄上達が角突き合わせているのはいつものことだし、エイオースがそれをからかって遊んでいるのもいつものことだ。見ていると結構愉快だぞ？」

それは確かに楽しそうだ。

しかし、明日の朝に元の世界に戻ることにして、再会を約束して食事を終えたときだった。

滅多にこの離宮では聞こえない足音、すなわちばたと騒々しい、優雅さの欠片も無いそれが近づいてきた。

開け放たれたままの扉の前に控えていた家令のヴィクトール氏が、すいと廊下に出て行く。

何事だろうかとそちらを注視していると、少ししてヴィクトール氏が初めて見る「動揺してます！」という青ざめた顔で駆け込んできた。

「で、殿下・・・！」

「何事だ、ヴィック」

「・・・申し訳ありません、取り乱しました。落ち着いてお聞き下さいませ」

おお、流石ナイス執事のヴィクトール氏。

今の一瞬で冷静になりますか。

未だに顔色はアレですが、声はしっかりしてます、ステキです。

しかし、すう、と息を吸ってヴィクトール氏が告げた言葉に、その場に居た人間全てがあんぐりと口を開いた。

「奥方様・・・トリスティア様が、駆け落ちなさいました」

## 第12話　じゃあ、またね！

駆け落ち。

・・・駆け落ち！？

「置き手紙には、『わたくしは、愛に生きます』としたためられていたとか」

わあ、びくとーるさん、ぼうよみですね。

「すげえな・・・どこの昭和文学だ？」

「お兄様、ツツコミするんなら、内輪ネタは今ちょっと」

「ツツコミじゃねえ、感想だ」

似たようなものじゃないですか。

いや、そんなことを言ったら関西人にどつかれるか。

「そうか・・・」

「殿下。如何なさいますか」

抑えながらも、抑えきれない焦慮と憤りを滲ませたヴィクトール氏の言葉に、ヴァンフレッドは少し困ったように苦笑を浮かべた。

「誘拐や、その他の犯罪に巻き込まれた可能性は？」

「御座いません。侍女達を始め、殿下が贈った宝石も全て無くなっておりますが、鏡台の前に結婚指輪だけ置き手紙と共に残されていたとか」

それはがめついというか、しっかりしているというか。

「そうか。あれだけ持って行っただのなら、暫く生活に困ることもないだろう。ろくでもない男に引っかけたのでないのならいいんだが」

「他人事だな、ヴァン？」

「前に言った通り、結婚式のときにしか会っていないしな。母親が平民出の僕に嫁ぐなんて冗談じゃない、と侍女に喚き散らしているのも聞いたし、今更驚く程のこともない」

わあ酷い。

そう言えば前にヴァンフレッドが、奥さんには他に好きなひとがいるようなことも言っていたような。

それにしても、黙って敵前逃亡とは卑怯なヒトだ。

「うーん、それにしても妻に逃げられた王族というのは、この国ではひょっとして僕が初めてなんじゃないだろうか。前例が無いから対処の仕方がよく分からんが、クレタと戦にはしたくない。父上が動くと大事になってしまうからな、僕がクレタの大使に話すると伝えてくれ。それから、クレタの大使に、すぐにこちらへ来るように使いを頼む」

畏まりました、とヴィクトール氏が慇懃に一礼して三十分後。

王宮の一画に居を与えられているというクレタ王国の正大使が、真つ青に今にも気絶しそうな顔で離宮にやって来たとき、有紗と和馬は野次馬根性丸出しで、隣室からその様子を伺っていた。

マジックミラーと盗聴用の空気穴が完備された応接室って素晴らしい。

ヴァンフレッドと大使が相対するテーブルに載っているのは、間違はなくトリスティアという元嫁直筆の置き手紙と結婚指輪、そしてヴァンフレッドが神殿から取り寄せた結婚宣誓書。

何でも結婚宣誓書というのは、何重もの鍵を掛けられた神殿宝物庫の奥深くに保管されているもので、その紙切れひとつがふたりの結婚の事実を証明するものらしい。

「・・・まあ、僕の不徳の致すところとはいえ、こう言った次第です、これはこちらで処分させて頂きます」

少し黄ばんだ、びっしりと横文字の並んだ羊皮紙を手にとったヴァンフレッドに、大使がお待ち下さい！と悲鳴を上げる。

「暫し・・・暫しのお待ちを！姫様は我らが必ず探し出してごらんにいます故！」

「探し出してどうします？また、『愛のない』結婚生活に連れ戻したところで、姫が私を受け容れるはずもない。・・・ああ、ご存じでしょうが私は姫に指一本触れてはおりません。この宣誓書さえ無

くなれば、姫は晴れて思い人と結ばれることが出来る。めでたしめでたしというものじゃありませんか」

にこりと笑んだヴァンフレッドは、そのまま何の躊躇いもなく羊皮紙を真つ二つに引き裂いた。

途端にその表面に記されていた文字が幻のように消える。

どうやら、魔法具だったようだ。

その途端、あわあわとそれに手を伸ばしていた大使が、ぎゃー！と大の男とも思えぬ悲鳴を上げる。

「なな・・・な、なんてことを・・・！『貞節』の守護が失われれば、姫様の御身は・・・！」

「ええ、姫の望み通り、愛するひとと結ばれることに、何の障害も無くなることでしょうね。おめでとうございます」

にこにこにこ。

・・・初の女房に逃げられた王族の烙印を押されることに、実は密かに怒っていたんだろうか。

まあ、確にかっちょ悪いといえばかっちょ悪いか。

それにしても、彼らの話から察するに、あの結婚誓約書というのは人妻に対する横恋慕防止措置なわけですか。

逆から言えば、奥さんの浮気防止。

男は側室がつつり抱えても問題ないのに、奥さんは魔法具で浮気は許さないとか、不平等も甚だしいぞ。

爆発しろ。

翌朝は蜂の巣をつついたような、という表現がぴったりの王宮の騒がしさで、有紗と和馬は離宮の窓からその様子を眺めていた。

ひっきりなしに城門を行き来する馬車、各国の紋章を刺繍した衣服を纏って駆け回る人々。

話を聞いたときは「駆け落ちするヒトって本当にいるんだな」位にしかなわなかったふたりだが、こうも王宮中が半ばパニック状態になっているのを見ると、その認識が如何に甘いものだったのかとしみじみ思い知った。

国のメンツ。プライド。外交問題。

政略結婚、というのが、そんな面倒くさいものを全て内包したものののだと、この騒ぎを見ていればよく分かる。

昨夜、別れ際にヴァンフレッドが「暫く忙しくなる。もしかしたら見送りは出来んかもしれないが、また会える日を楽しみにしている。今度は湖で釣りでもしよう」と言った通り、彼は朝食の席には

現れず、ヴィクトール氏が既に本宮へ行ったことと別れの言葉を伝えてくれた。

驚いたことに、次々にやってくる各国の馬車が持ち込んで来ているのは、晴れて独り身となったヴァンフレッドへの縁談らしい。

昨日の今日で、もう縁談。

王宮つて、凄い。

インターネット並の情報伝達速度だ。

「・・・でも、なんだかんだ言つて、ご飯は美味しいし、いいところだったよね」

出来ることなら、老後はここで暮らしたいと思う位、居心地のいい場所だった。

「そうだな」

「夏休みにでも、また遊びに来る？」

「その頃には、もう新しい嫁さん貰つてたりしてな」

今度のお嫁さんは、ヴァンフレッドを閉め出したりしないお姫様だといい。

そうしたらきつと、一緒に遊べる。

うん。



異世界の王子様やお姫様が友達、というのも楽しくていいじゃないか。

その証は今頃、ヴァンフレッドの指で青く輝いている筈だ。

有紗特製、意思疎通 の術式を組み込んだステキ指輪。

持ち主認識機能付きで、本人にしか使えず、すっかりどこかへ無くしても勝手に戻ってくる優れモノ。

次に遊びに来たときにはその指輪を通じて呼びかけるから、ちゃんと返事をするように、と言うと、やっぱり最後は、次こそルカを紹介するぞ、とブラコンで締められた。

「じゃあ、帰ろうか」

「ああ」

手を差し出すと、壊れやすい宝物のように握り返されるのが、少しくずぐつたい。

（ああ・・・そうか）

帰る場所が同じ、というのは、それだけで嬉しいことなんだ。

今まで、色んな場所に行ったけれど、そこで会う人たちはどうしたって「いつか別れるひと」だった。

さよならは、いつだって寂しい。

それでもやつぱり、ずっと育ててくれた肝っ玉母さんのシスターや、学校の友達より大切に思えるひとはいなかった。

和馬は、「お別れする心構え」をしなくていい。

ずっと、傍にいてくれる。

（いやむしろ、ホントに冗談抜きで不老長寿とかだったら、ふたりきりで生きて行くとかそついう話？）

・・・まあ、なんだ。

人生、なるようになる。

前向きに、前向きに。

自分達が生きて、暮らしていくべき場所は、生まれて育ったあの世界なのだから。

（じゃあ、またね）

今回はさよならじゃない。

笑ってまた会おうと言ってくれたひとに、また会いたいと思えるのだから。

「・・・次元転移！」

だから、ヴァン。

ブラコンと賭け事はほどにして、あんまりアホなことしないで、兄弟ネタで愉快なことがあったら全部記録して、今度こそ可愛いお嫁さん貰って、次会ったときは猫耳のおにーさんたちも紹介してね！

第12話 じゃあ、またね！（後書き）

一度元の世界に戻ります。

次からは楽しく平凡（？）な高校生ライフ、始まります！

### 第13話 七瀬有紗は残念な美少女です。

学生は、忙しい。

何しろ、やらなければならないことが、山のようにある。

そこで、学生なのだから勉強するのは当たり前だ、などというのは寂しい青春を過ごした大人くらいのものだろう。

かくいう有紗も、一度目は決して楽しい青春を過ごした口ではないのだが、二度目の現在、一応青春真っ盛りの入り口に立ったばかり、と表現される身分としては、それなりに周りと同様の忙しさを抱えていたりする。

（ああもう、先週の土曜日に聞いた注意事項なんて、きれいサッパリ忘れてるってのー！）

内心、そんなことをぶつぶつ言いながら有紗が眺めるのは、新入生が行わなければならない、授業の選択や提出書類の一覧を記載したプリントだ。

ここ藤沢学園高校は、学区内で有数の進学校であると同時に、所謂お坊ちゃまお嬢ちゃまが通う学校としても有名である。

その分、学費や必要経費もバカにならない高さなのだが、その全てを免除される奨学生である有紗は、黙ってさえいればそこらのお嬢様よりよっぽどお嬢様に見える、という中学時代からの友人らの太鼓判を貰っている。

黙ってさえいれば、なんだからね！と何度も念を押す彼女らは、一体自分に何を期待しているのだから。

「そんなの決まってるじゃない！あーちゃんをエサに、有望株のイケメンをゲット！それ以外に何も期待したりしないから、安心していいからね！」

堂々とそんなことを言うのは、中学二年から同じクラスだった春日ささめ。

ふわふわの猫っ毛を短くカットして、前髪を可愛らしいピンで留めている。

有紗と並ぶと肩の辺りまでしか届かない小柄な身体に、ふつくと丸い頬の童顔ながら巨乳であるため、男子生徒から常に高い人気を誇っている。

「ささなら変なことしなくても、いくらでもイケメンのひとりやふたり、余裕で引っかけられるでしょうが」

ここは一年F組の教室。

各学年、AからFまでクラスがあり、その中でF組は特別進学クラスとして、他のクラスとは別のカリキュラムで授業を組まれている。

つまり、忘れ物をするのが許されないということなわけで、有紗は今朝、随分久し振りに感じる通学鞆のチェックを何度も行ったものだ。

全く、気分的には長期の休み明けだが、さつさと頭を切り換えなければ、同級生の醸し出す新生活ウェーブに乗り損ねてしまいだ。

「それ、同感ー。オレ、七瀬に一票」

そう言つて、隣の席の机で組んだ足をぶらつかせているのは、同じ中学出身のもうひとり、城島大輝という少年だ。

ちよつとツリ目の可愛らしい顔立ちをして、他校の制服より高級感のあるニットベストとパンツ、それにネクタイというここの制服を、一年生ながら既にばっちり着こなしている。

彼とは中学時代は一度も同じクラスになつたことがなかつたため、今まで殆ど話したことが無かつたが、同じ学校出身という親近感から、入学式以来、有紗とささめと大輝の三人は仲良くつるむようになつている。

「つつか、七瀬をエサつつつ発想が分からん。ここまでぶつ飛んだ美少女相手だと、普通男つて引くから。寄つてこねーから」

「だからいいんじゃないー！うわー、すげー美少女、でも近寄りがたいよなー、お、なんかちつこくて程よく可愛いのがいる！みたいな感じでー！」

力説するささめに、成る程！と拳で手の平を叩く大輝に、有紗は軽く眉を寄せた。

「そこで納得しないでくれる？大体はつきり言つて、その巨乳がある限り、私よりささの方がよっぽど男子の注目を浴びてんだから、

そこら辺しつかり自覚しときなさいよ?」

「うわーん、セクハラっセクハラようーっ!」

「はん、巨乳を巨乳と言って何が悪い。世の中に数多いる、控えめな乳の女性陣の嫉妬を精々浴びるといいわ」

「あーちゃんだって立派に巨乳じゃん! 貧しくないじゃん!」

「私が巨乳なら、ささは爆乳」

「うわああああん!」

「・・・お前らさー、一応オレ、男なんだけど?」

呆れ返ったように、どこか気まずそうに言う大輝に、泣き真似をしていたささと視線を交わした有紗は、同時に両の手の平を上にして、軽く肩を竦めて見せた。

HA! という効果音が相応しい、あのポーズである。

「素敵な年上の婚約者がいる、城島グループの御曹司サマが、何を仰るうさぎさん」

「ねー、最初っから対象外なのに、男も何もあつたもんじゃないよねー」

途端、こちらの会話を聞いていたらしいクラスメイトの女生徒達が、えええ!?!と悲鳴を上げた。



「城島君、もう売約済みなのー!?」

「何だー、流石城島の御曹司、入学早々美少女ふたり侍らせて優雅なことねーとか思ってたのにい」

「えー、じゃあ七瀬サンと春日サンは、城島君狙いじゃないんだあ?」

口々にそんなことを言うクラスメイト達に少々引きながら、最後の質問にだけはきっぱりと手を振って否定する。

「ないない。ね? ささ」

「ねえ? 中学の校門に、赤い外車で乗り付けるような婚約者サマに、喧嘩売るようなマネなんて怖くてとてとてもー」

さらりとささめが落とした爆弾発言に、また周囲で盛大な悲鳴が上がる。

「あ・・・アホ春日! あれは・・・っつーか、婚約なんて祖父さんが勝手に言ってるだけで、親もオレも認めてねーんだよ!」

「えーそうなのお?」

「あんな美人の、どこが不満なのよ?」

「オレのやることなすことに口出しする権利があると思ひ込んで、一般常識がなくて、親の言うことに従うのが当然だと思って、特技がお茶とお花で、八歳も年上で、顔を合わせる度に子どもは何人にしましうかとか中学生だったオレに真顔で家族計画持ち出して

くると」

「……………」

「……………」

思わずささめと揃って憐憫の眼差しを向けた先、大輝はふっと自嘲気味に吐息を零した。

「とゆーわけで、オレはあのひとと結婚する位なら、海外逃亡を断行する。そのときは協力頼む」

「城島君……いや、大輝君！この春日ささめ、協力は惜しみませんのことよ！」

「私も出来る範囲で協力する。頑張れ、城島」

「……お前らの温度差って結構すげえよな」

有紗とささめを見比べてばやく大輝に、ささめがそお？と首を傾げる。

「あーちゃんは冷静なふりして、結構熱血さんよう？あたしが電車で痴漢に遭ったときなんかー、痴漢をばっこぼこにして駅員さんに突きだしたんだからー！カッコいいのよー！」

「ふん。ささのキュートな尻を無断で触るような変態に、遺伝子を後世に残す権利は無い」

「……七瀬が痴漢に何をしたか、詳しく話さなくていいからな」

「えええ、そこが聞いて欲しいところなのにい」

「ささ。男っていうのは、多かれ少なかれ痴漢願望を持っている生き物なのだよ。その自分の中の同類項が、それを実行する卑劣極まりない変態にさえ同情を覚えさせるのだからして、いくら城島が女に不自由しないだろう可愛い顔をしていても、余り油断してはいけないよ?」

につこり笑って友人に言い聞かせれば、目の端で大輝が盛大に顔を引きつらせるのが見えた。

「あーちゃん・・・そんな、世間一般の善良な男性陣に喧嘩売るようなことを断言しなくても」

「うんうん。ささはいいい子ね」

「七瀬って・・・ホント、残念な美少女なんだな・・・」

「失礼な。城島も、一度見ず知らずの男に胸や尻を触られてみればいいわ。痴漢を全てこの世から抹殺したくなる気持ち分かるでしょうよ」

「いや、オレ男だから。オレの胸やら尻やら触るったら、それ真性の変態だから」

「同性愛者を変態呼ばわりとは・・・意外と差別主義なのね」

「そう言う深淵なテーマとは違っただろ!」

**第13話 七瀬有紗は残念な美少女です。（後書き）**

ムーン様の方で、R18 第9・5話 竜王降臨？を掲載しております。

和馬（？）の「エロ魔神」っぷりをご覧になりたい方はどうぞお出で下さいませ。

・・・ホントにエロのみですので、お気を付け下さい（汗）

## 第14話 兄妹モードはデフォルトです。

「ぎゃあ、と喚いた大輝には構わず、おっとりとプリントに再び目を落としていたささめが、幼い仕草で首を傾げる。

「そんなことより、部活ってやっぱり何か入った方がいいのかなあ？ 帰宅部でバイトつても捨てがたいけど、やっぱり高校生って言ったら部活で青春かなあ」

この学校は、進学校であると同時に、きっちりスポーツ関係にも力を入れている。

F組が特別進学クラスであるように、E組はスポーツ推薦で進学してきた生徒達で編成されていて、彼らが牽引力となっている運動系の部活動は、強豪チームとして名を馳せているものが多い。

そんなクラス分けをしていると、当然のようにAからD組のお気楽青春の普通科、さわやかスポーツのE、ガリ勉のFとそこはかない対抗意識が生まれるらしいが、流石に入学して二週間やそこらでは、今ひとつ実感も無い。

まあ、F組のメンバーは国公立進学コースが最初から決まっているようなものだから、運動部に入部する者が毎年それ程多くないというのも頷ける。

ささめの視線が追っているのも、美術系や文化系の部活案内ばかりだが、有紗は部活で青春するつもりなどない。

「あ、私部活はパス。何かバイト探して、勉強も真面目にしないと

奨学金取り消されたら困るし」

「夢が無い！夢が無いよう！あーちゃんはその外見なら、じゅーぶん芸能界狙えるんだから、夢を大きく持ってー！」

「失礼な。私は適当な大学に入って、国家公務員？種取って、安定した老後の年金暮らしをするのが夢よ？」

そんな世知辛い夢は嫌ー！と叫ぶささめの頭をよしよしと撫でていると、溜息混じりに大輝が口を開いた。

「・・・春日。お前の狙いは正しいかもしれないわ。七瀬を見てると、美少女ってモンに対する幻想がすげー勢いで崩壊する。なんつかこう、お前が物凄く善良な生き物に見える」

「それ、あんまり褒めてるように聞こえないー・・・」

「ちょっと、ささを口説くんなら、あんたの痛い婚約者をきっちり切ってからにしてよね」

「誰も口説いてねえし。・・・つか、やっぱり痛いよな・・・痛いんだよな・・・ふ、ふふふふ」

「ご免城島、私が悪かったから戻って来て」

「いや・・・いいんだ・・・マジで痛いひとだからさ・・・」

「大輝君大輝君ー！部活！部活で青春しよう！八つも年上のオバサンが、十五の青春パウワーについて来られるモンならついてきてみるな感じでー！」

「ああ、オレ部活はバスケ部だから」

途端にけろりとした顔で言う大輝に、半泣きだったささめが盛大にコケる。

「へ？バ、バスケ部？」

「このバスケ部って、結構レベル高くなかった？Fに入ってた方がいいの？」

「ふふん、オレって結構、文武両道を地で行っちゃう美少年なんだぜ？・・・いや、そんなブリザードな目で見なくなっただけじゃん。マジな話、一応ミニバスのチーム入ってたんだって。それに、今の藤沢のEースもF組なんだぞ。超かけーの。オレ、あのひとに憧れて藤沢入ったんだよなー」

思いの外真面目な顔つきになった大輝が、瞳をきらきらと輝かせる。

バスケット選手と言うには若干背丈が足りない気もするが、まだ高校一年、男の子はこれからが成長期だ。

「えー、そんなにかっこいいヒトがいるのー？」

「おうよ、この辺りでバスケやってて、あのひとを知らないヤツなんて・・・」

ささめの興味津々と言った問い掛けに身を乗り出していた大輝が、その中途半端な体勢のまま固まった。

「城島？」

「大輝君？」

「え・・・ちょ、うええっ？」

大輝の席は、一番窓際。

有紗とささめは、そのすぐ横。

つまり、有紗とささめは窓の方を向き、大輝は教室の入り口側を向いていたわけで、その視線の先を追って振り返った有紗は、見慣れた姿を見つけて、ぱっと顔を綻ばせた。

少し着崩した制服姿で、まるで見知らぬ相手のようだが、自分が彼を見間違えるはずもない。

「和馬。どしたの？」

立ち上がって迎えると、一年の教室に周囲の視線をまるで気にした風もなく入ってきた和馬は、妙に真剣な目つきで有紗の姿を上から下まで確認したようだった。

「和馬？」

「ん？ああ、お前の制服姿を見に來ただけだ」

「ふっふっふ、可愛いでしょう」



藤沢学園の女子の制服は、ちょっとお嬢様っぽいラインが可愛い、前をボタンで留めるタイプのジャンパースカート。

胸には学年毎に色の違うリボンタイ、それにアースカラーのショートジャケット。

どこのデザイナーズブランドだというこの制服は、この辺りではかなり人気が高い。

くるっとその場で回って見せると、可愛い可愛い、と大きな手が頭の上で軽く弾む。

「有紗」

柔らかな声で名を呼ばれ、瞬く。

視界が翳って、馴染んだ感触が唇を覆う。

ちゅく、と濡れた音と共に軽く舌先を舐められて、温もりが離れる。

「じゃあ、何か困ったことがあったらいつでも言えよ？」

「過保護だつてば」

かもな、と笑った和馬が軽く頬を撫でて教室を出て行って、ひよっとして暫くは兄妹モードが消えないのかも知れないな、と思いつつから席に戻る。

先頃までいた世界では、和馬は「可愛い妹に余計な虫がつかない

ようにきつちりガードする兄」役を完璧にこなしていたのだから。

「……ささ？城島？」

つい先程までバカ話をしていたふたりも、完全に目を剥いて固まっている。

はて、一体何事、と首を傾げたところで、余りに日常となりすぎて当たり前のように受けてしまった、先程の和馬の行為を思い出した。

(……ええええと)

つい二時間前まで、毎朝の習慣だったことなのですが。

おはようの後は、必ずアレだったのですが。

周囲の人々も、挨拶代わりにハグや頬ちゅーは当たり前の世界だったのですが。

すみません。

ここは日本で、学校の教室なわけ。

……はい。

朝っぱらからディープなキスをするような場所ではないですね。

「じゅん」

すちゃ、と片手を上げてみる。

「あれ、あのひとのデフォなだけで、びっくりするようなことじゃないのよ。もうさせないようにするから、勘弁してくれる？」

いち、にい、さん。

「あああああーちゃんーっ!？」

「びびびびっくりするなって、びっくりするわー!」

「だから、ごめんて」

「ごめんってごめんってごめんってー!何あの超イケメンのおにーさん!?あーちゃん、男嫌いのくせに、どこであんなおにーさん引つけたわけ!？」

「あのひとは三年F組志波和馬!藤沢バスケット部エースにして、全国模試二桁常連の秀才だっ!」

「え、そうなの？」

知られざる和馬の一面に驚いていると、そうなの、じゃねー!と力一杯怒鳴られた。耳が痛い。

「志波先輩つつたら、クールでストイックで、どれだけ女に騒がれても動じない、オレらの憧れだったのに・・・っ!何もお前みたいな残念な美少女に引っ掛からなくなたっていいじゃねーかー!」

「大輝君ー、本音ただ洩れ過ぎー」

「憧れって・・・男が男に幻想持つって、こんなに暑苦しいものだったのね」

「やかましいっ！」

「・・・いやいやいやでもでも、あーちゃん、ふっーにあのおにーさんとべろちゅーしてたよね！？名前呼びしてたよね！？何で、どーして、いつからそんな関係にー！？」

「企業秘密」

そんなー！とささめが絶叫したところで、がらりと音を立てて担任教師が教室の扉を開け、歴代のF組にあるまじき教室の騒々しさに、やかましい！と一喝したのだった。

## 第15話 その病の名は。

「あーちゃああんっつ」

「んー？どうした、ささ」

「今忙しいんだけどなっ」

昼休み、手洗いから帰ってきたささめが、愛くるしい瞳を煌めかせながら教室に飛び込んできた。

だがしかし、季節限定のチョコレート菓子の最後のひとつ、その所有者を決定するじゃんけんの真剣勝負をしていた有紗と大輝は、昂奮状態のささめに些か冷たい反応を返す。

当然の如く、ぷうつと丸い頬を膨らませたささめに、近くのにの席に屯していた男子生徒が、堕ちた。

「何よう、折角大ニュースを拾って来たのにいつ」

「うん、最初はー・・・」

「ぐっ！じゃんけんっ」

有紗がチヨキ。大輝はグー。

「く・・・っ」

「っしゃあー！」

掛け声と共に机を叩き、季節限定、塩キャラメル風味アーモンドチョコの最後の一粒をゲットした大輝が、素早くそれを口に放り込む。

「・・・ふふ・・・そっか・・・あたしの存在ってチョコ以下なんだ・・・」

「それで、大ニユースって何？ささ」

「気になるじゃねーか、早く言えよ」

「うわあああん！愛が無いようっ！」

「愛が欲しいなら彼氏を作れ」

「そうそう、オレらが提供出来るのは友情だけだ」

「最近、大輝君まであーちゃんのどどめ色に染まっちゃって・・・あたしは悲しい・・・」

「・・・城島。例えチョコを挟んだライバルでも、ささが私たちを捨てて男に走っても、私たちの友情は永遠よねっ」

「ふっ、当たり前じゃねえかつ」

がっしと組み合う二人の手。

「仲間外れはいやーっ！だから、大ニユースなんだってばっ！留学生なの！ウチのクラスに、美少年留学生っ！」

途端に女子一同が色めき立ち、男子は皆面白く無さそうな顔になる。

「美少年で・・・噂じゃなくて？ちゃんと顔見たの？」

「モチのロンよう！ミルクティー色の髪の毛、白くてすらーっとした、モデルさんみたいな美少年っ！でも肩幅広いの！手足長くてウエスト締まって、脱いだら多分ソフトマツチョ！」

「そ・・・そう・・・」

「服の上から、そこまで分かるのか・・・」

少し、有紗と大輝の中で、ささめを見る目が変わった瞬間だった。

留学生の名は、ランスレイル・フォゼット。

イギリス系アメリカ人だが、祖母はドイツ人らしい。

まあ、そんなことを日本人の高校生が言われても、「白人だあ」で全て片付いてしまうのだが。

落ち着いた、少しクセのある日本語でランスと呼んで下さい、と挨拶した彼は、確かにきれいな顔立ちをしていた。

中性的と言えいいのか、普通に女装が似合ってしまったいそんな繊細な面立ち、淡い髪色、そして淡いモスグリーンの瞳。

それだけなら儚げな印象になりそうなものなのに、かっちり張り詰めた肩と、細身ながらしっかりと引き締まっている体躯が弱々しさとは無縁であることを示している。

何かスポーツをやっていたのかという質問に、バスケットボールと答えた時点で、大輝が彼と親しくなるのは決まっていたようなものだったかもしれない。

ポジションはどこだ、NBAのどの選手のファンだ、シューズはどこのを使ってる、と楽しげに語らうふたりに、クラスの女子一同が、揃ってうつとりと見惚れている。

「ランス君、日本語上手だねえ」

「ミズ・カスガ。ありがとう」

「ささめ、でいいよう?。」

「サーザーミエ?。」

「さ、さ、め」

「サ、サーメイ」

「ささめ」

「ササーミ?。」



「違うよう！それじゃあ鶏肉だろう！」

「オウ・・・」

ささめの人懐っこさは驚嘆に値するが、結局ランスレイルはささめのことを「ササーメイ」という微妙な呼び方をするようになった。

幸い、有紗の名は英語圏でも珍しいものではないため、彼が苦勞することはなかった。

大輝の名も中々難しかったようで、どうしても「ディッキー」となってしまうらしい。

大輝はちゃんと発音を教えようとしたのだが、D I E 〓 K E Y（死と鍵）？と物凄く微妙な顔をされた為に、最終的には「ディー」に落ち着いた。

「あーちゃんばかり、ランスにちゃんと呼んでもらえて狡い・・・」

「いや、そんなこと言われましても」

力一杯、不可抗力です。

「ごめんなさい・・・ササーメイ」

「ランスは悪くないよう！こっちこそ、ごめんね？」

「ササーメイ、とってもキュートね。アリサのグリーンアイズも、

ステキナリ」

（（ナリ！？））

「ナリは違うよう！ステキ、です。ね？」

「ステキ、デス、ネ？」

どこのコ 助だ、と動揺した有紗と大輝を尻目に、ささめはにこにこ異文化コミュニケーションを堪能している。流石だ。

そうして、元々ささめがクラスのマスコットの存在だったこともあって、ランスレイルは一週間も経たない内に、すっかり馴染んでしまった。

部活もバスケット部に入学して、本場仕込みの技とそのルックスで、あっという間にファンクラブが出来るんじゃないかという勢いらしい。

しかし、雛鳥の刷り込みというわけでもないだろうが、ランスレイルはささめに酷くご執心だ。

勿論、同じ部活の大輝とも仲良くしているが、ささめの姿が視界に入ると、ぶんぶんと振り回される犬の尻尾の幻影が見える時がある、と言うのが大輝と有紗の共通した意見なのだが。

おい、と肘で腕を突いてくる大輝が、何を言いたいのかは分かる。

しかし、自分にどうしろと言うのかと逆に訊きたい。

時は昼休み。

場所は屋上。

世は群雄割拠の戦国時代などでは勿論なく、ただ穏やかに平凡なかけがえのない日常が続く幸せがここにある。

だがしかし。

「やはり、チヨップスティック・・・ハシは、難しいデス」

本日ランスレイルがお買い上げになったのは、購買部のお弁当。

購買部、と言っても金持ち藤沢学園だけあって、それを作り上げるシェフの腕も一流だ。

下手なデパ地下のものより、余程味も見た目も上だろう。

しかし、サンドイッチと一口サイズに切られた鶏肉のロースト、それにサラダという内容の洋風弁当に、先割れスプーンではなく日本人の心の故郷、割り箸様が入っていたのが目の前で繰り広げられる光景の原因だ。

どうしても箸を使いこなせないランスレイルに母性本能を刺激されたらしいさめが、仕方ないなあと言いながら、代わりに箸を操り、所謂ところの「はい、あーん」状態が先程から続いているのである。

これが、バカップルの周りの目を気にしない行為であるなら、完全に目を背けるなり逃げ出すなりして精神的な自衛をするのも許さ

れる。

だが、ささめはあくまで親切心で行動しているし、ランスレイルもささめの手を見て箸の扱い方を学ぼうと真剣そのものだ。

・・・例え、その行為の帰結がバカップルそのものであると、逃げ出すというのは異国からの客人に対して、余りに失礼な態度だろう。

(く・・・っ私は南瓜私は南瓜私は南瓜っ！)

隣では、大輝がじゃがいもに変身中らしい。

ぶつぶつとうつむき加減に呪文を繰り返す有紗たちは、とても不気味だったようだ。それに気付いたランスレイルが、気遣うように声を掛けてくる。

「デイー。アリサ。具合、悪いデス？」

「え？いやいや、何でも何でも。なあ、七瀬？」

「うんうん、今日も良い天気ねー、城島！」

あからさまに挙動不審な有紗と大輝に、きょとしたささめの傍らで、ランスレイルが不思議そうに首を傾げる。

「以前から、少し気になっていたデスが。ササーメイはファーストネームで呼ぶ、何故デイーとアリサ、ファミリーネーム、デス？」

改まってそう訊かれると、特に意味はない、となるのだが。

欧米文化圏で、ファーストネームが正に先に名乗る名前であるというのは、家名よりも本人の資質そのものを優先するという背景があるらしい。

それは実に素晴らしいことだと思うし、その文化に馴染んだ人間が、互いを名字で呼び合うことをよそよそしいと感ずることも想像に難くない。

・・・と言ったことを思考した結果は、やっぱり、友達なのに名字で呼ぶのはどうなの？ということになるわけで。

（説得も納得のいく説明も出来ません、曹長！）

白旗である。

よって、有紗は無条件降伏を選択した。

「・・・うん。言われてみればそうだね！城島、今度から大輝って呼んでもいいかなっ」

「おう！オレも有紗って呼ぶぜ！春日もささめって呼ぶな！」

「うん、いいよう！」

スポーツマンシップに乗っ取って、がしつと手を握り合った有紗と大輝は、正に同志だった。

『・・・ささが空気読めないのって、別に私のせいじゃないよねっ！ね！？』

『・・・有紗。オレはあいつの、世にも恐ろしい病名を知ってるぜ？』

『それは、まさか・・・っ』

そう。

有紗と大輝の葛藤も知らず、嬉しいなー、と笑いながら、尚も「はい、あーん」を躊躇いなく続けるささめは。

『・・・天然』

それはもう、救いがたい程に進行した、不治の病であつた。

『ふ・・・自分が汚れていることを清々しく感じたのは初めてだわ』

『大丈夫だ。オレだって、あいつと四六時中一緒にいる関係を結ぶ勇氣はねえ』

「あー！もう、あーちゃんと大輝君てば、何内緒話？ダメだよ、あーちゃん、彼氏でもない男の子といちゃいちゃしたらー！」

志波先輩が泣いちゃうよー？にこにこと笑うささめに対する有紗と大輝の心は今、ひとつになった。

（・・・お前にだけは、言われたくねえわー！！）

## 第16話 日本の冬

お前さあ、とある週末の朝、大輝が物凄く微妙な顔をして有紗に話し掛けてきた。

「何？」

「どおしたのー？大輝君てば、折角の可愛いお顔が台無しよー？」

「顔色、良くないデス・・・やはり、アレのせいデス？」

アレって？と有紗とささめが首を傾げると、大輝はいやその、と珍しく歯切れを悪くした。

「あー・・・。お前って、香水とか、特別っぽいシャンプーとか使ってたりする？」

は、と思わず間の抜けた声を上げてしまった。

「香水なんぞ買ったことはないし、シャンプーリンスはドラッグストアの特売品。なんのセクハラ？」

「・・・いや、やっぱそうだな・・・」

「ちょ、大輝君ー！？そこで引いたらダメじゃん！せめてセクハラ疑惑は否定しようよう！ねえ、ランス！」

「？セクハラ、とは、なんデスカ？」

「はうう！？」

英語圏の人間に、和製英語は通用しません。

ささめがランスレイルにセクハラの概念を教えるべきか窮しているのを横目に見つつ、有紗は何やらどんよりしている大輝の顔を覗き込んだ。

「おい？」

「う・・・いや、忘れてくれ・・・」

「恥ずかしい過去をバラされなくなければ、今すぐキリキリ吐きなさい」

はあ！？と大輝が素っ頓狂な声を上げる。

「何だよ、恥ずかしい過去って！」

「いや、中学んときに大輝と同じクラスだった子に訊けば、ひとつやふたつは出てくるかなあと」

「おおおお前なあ！」

「ふっふっふ、若者よ。女の情報網を舐めたらあかんぜよ？」

「何で龍馬！？」

単なる気分です。



しかしやはり、大輝のツツコミはこうでなければ。

ほれ、さっさと吐きなさいと目の前で携帯電話をちらつかせてやると、大輝はうめぬめ、と苦悩に満ちた顔をしていたが、最終的には陥落した。

大輝の恥ずかしい過去ってなんだろう。

後で誰かに聞いておこう。

「いや・・・昨日な？」

部活の後、みんなでメシ食いに行っただけだし、そこでやっぱリカノジョいんのかとかそういうハナシになっ。

んで、オレとランスがお前・・・志波先輩のカノジョと同じクラスだって誰かが言っ。

美人かーとか、仲良いのかーとか、色々訊かれたんだ、けど」

「ごによごによと言葉を濁した大輝に、ランスレイルが助け船を出した。

「そこに丁度、三年のヒト達も来たデス。シバ・センパイ、もいたデス。

・・・ステイツにも、シバ・センパイ程のプレイヤーは、なかなかいないデス、のに」

はあ、と何故そこで溜息ですか。

「・・・で、志波先輩に一年のヤツらが話振っ。

志波先輩が『城島とフォゼットは、有紗と随分仲がよさそうだな』って、だからお前から何か聞いたんですかって聞いたら・・・『お

前達からはいつも有紗の匂いがするからな』、って……」

「……皆サン、まるでディーとワタシが、アリサと不適切な関係を持っているかのような目を……っ」

不適切な関係、って。

懐かしいフレーズですねーって、そういうことを言っている場合じゃないですね。

和馬の嗅覚は、人間の個体識別も可能なのかーって感心している場合でもないですね？

「……あははははははは！」

「笑いごつちゃねえわー！」

「そ、そうデス！とても、不名誉、デス！」

「大輝君とランスに、あーちゃんを押し倒すなんて、出来るわけないのねー？」

ささめの尤もなコメントは置いておくとして、取り敢えずその場を笑って誤魔化した有紗は、二度とそんな間抜けなボロの出し方をしないよう、徹底的に和馬に言い聞かせなければと思いながら、強引に話題を変えた。

「それにしても、大輝って純正お坊ちゃまのくせに、中学までは公立だったのって、なんで？普通幼稚園からここに通ってそんな感じだけど」

素直なささめが、「そう言えばそうだよねえ？なんでー？」と乗っけて助かった。

バ和馬め。

自分がどれだけマッドサイエンティスト垂涎の希少生物か、少しは自覚しろと言うのに。

「や、オレのお袋って元々庶民だし」

そうなの？とささめが目を丸くする。

「えつとー、玉の輿ーとかそう言う？」

「まあな。

んで、オレには兄貴と姉貴がいて、ふたりはきっちりお受験クリアしてセレブコースのお育ちなんだが、お袋がなんちゅーか、ママ友とのオツキアイとか、PTAのお茶会とかで胃に穴が開きそうにストレス掛かったらしくて」

それは確かに、想像するだけで大変そうだ。

「んで、久しぶりにオレを産んだら、もう無理絶対無理あんなやつてられるかーってなっちゃったらしくて。

元々親父もお袋には頼み込んで嫁に来てもらったクチだし。

まあ、兄貴と姉貴のどつちかが跡継ぎになるだろってことで、オレは無事ゆとり教育の公立校に入ったわけ」

「・・・うー、玉の輿って意外と大変だったりするんだー？」

「ウチは成金だからそうでもねーけど、すげーとこの嫁イビリとか、まじハンパねーらしいぞ」

入学早々、有望なイケメンをゲットする、を目標に掲げていたさめが、へによりとしよげる。

まだ狙っていたのか。しよげてる姿も可愛いが。

「日本の教育も、やはり色々あるのデスね？」

軽く首を傾げながら言うランスレイルに、三人の視線が集中する。

「アメリカはどんな感じなの？」

「ハイ。裕福な家の子どもは、キンダガーデンからボディガードがつくデス。貧しい子どもは、学校、行けません」

う、と三人だけでなく、傍に居たクラスメイト達も顔を引きつらせた。

流石、格差社会先進国。

どっちの子どもも可哀想。

「えっとー、ランスは、どうして留学先を日本にしたのー？」

些かわざとらしく声を上げたさめに、ランスレイルはにこりと笑んだ。

「ワタシ、子どもの頃、日本人のトモダチいたデス。

カレが日本の桜吹雪、夏の花火、秋の紅葉、冬のコタツで食べるアイスクリームはスバラシイと」

「コ・・・ッ」

大輝が何か言いかけ、慌てて口を塞ぐ。

『・・・っなんで！？なんで冬だけその扱いなの！？途中まではいいハナシだったのに！』

『た、確かにコタツでアイスはスバラシイかもだけだよ！』

『大体、最近のおうちにおコタはないよう！』

「？どうかしたデスカ？」

不思議そうな顔をするランスレイルに、三人はぶつぶぶ、と壊れた扇風機のように首を振った。

取り敢えず、桜の季節は過ぎてしまったが、夏はみんなで一緒に花火を見に行く約束をした。

しかし、秋の紅葉もどうにかなるだろうが、冬のコタツでアイスというのは、ランスレイルに体験させてあげられるものなのか。

「いざとなったら、お坊ちゃんの大輝君に買ってもらえばいいよう」

「オイ」

**第17話 正しい恋のカタチ。 (前書き)**

R15成分まるっと(?)です。

お気を付け下さい(汗)

## 第17話 正しい恋のカタチ。

目を覚まし、シャワーを浴びて気分をすっきりさせた有紗は、タオルで髪の水気を拭いながらベッドに戻ると、まだ夢の中の住人をやっている和馬の髪をわしゃわしゃとかき混ぜた。

さらさらとした指通りの良い黒髪は撫で心地が良い。

「あーさーでーすーよー」

今日も良い天気だ。

レースカーテンの向こうに広がる青空は、すっかり初夏の色をしている。

むーともうーともつかない声を上げて目を開けた和馬は、何度か眠そうに瞬くと、寝起きとも思えない素早さで有紗の腕を掴み、あつという間にベッドの中に引き込んだ。

「のわっ」

「・・・有紗」

耳元で甘ったるく名を呼ばれて、だからその悩殺エロボイスはどこから出しているんだ、と思う間もなく昨夜の続きとばかりに組み敷かれる。

もうすっかり互いに馴染んだ肌が、首筋に吐息が触れるだけで期待にふわりと上気する。

（あああああっ自分の意思がこんなに弱いとか、弱いとか・・・っ）

けど、やりたい盛りの高校生が、恋人と時間とふたりきりになれる場所の三点セットを手に入れて、覚えたばかりの体の快樂に溺れないわけがなく。

防音 の術式を張り巡らせた有紗の部屋は、今日も主の、ちょっと外には聞かせられない声に染め上げられるのだった。

疲れ切っているのに、心地良い倦怠感と裏腹の活力に満たされ、有紗は快樂の名残をそっと吐息に混ぜて吐き出した。

「有紗」

「んー・・・？」

背後から抱き締めて、情欲をそそるでなく、ただ愛おしむように耳の後ろに唇を押し当てられる。

和馬は、どうやら有紗の名前を呼ぶのが好きらしい。

大切そうに、丁寧に作った声で名を呼ばれると、じんわりと胸の奥が温かくなっていく。

（それにしても・・・）



和馬が大輝達に言った「有紗の匂い」とやらを、和馬自身も物凄く良い匂いの香水の類いだと思っていたのには驚いた。

その後、「そっぴや動物って、メスの匂いで発情するよな」と真顔で言われて、フェロモンですか！？と愕然としたが。

おまけに、大輝とランスにあんなことを言ったのも、「ひとのモンにべたべたするあいつらが悪い」とか、がつつり確信犯だった上に意外とココロが狭いことも判明した。

それでいいのか、バスケット部のエース。

・・・今の和馬は、素手で岩を粉碎出来る。

だから正直、バスケットを続けるとは思っていなかった。

身体能力も反射神経も、最早今までは比べものにならないのだから。

しかし和馬は、激しいスポーツの中で自分の体を動かすことによって、「いかに自分を“人間”の範囲内に収められるか」を追求しているのだそうだ。

ぎりぎりのラインを見計らって、ここでちゃんと生きていけるように。

これまで培ってきた関係を崩さないよう、壊さないよう、きちんと全力で取り組んで、努力している。

まあ、スタミナだけはどうしたって人外レベルだから、疲れたふりをするのが大変らしいけれど。

「ん・・・」

頬を撫でる指に誘われて、触れるだけのキスをする。

こうして、和馬と肌を重ねるのは好きだ。

安心する。

いや、快楽に酔わされている間は安心もへったくれもあつたものじゃないのだが、その後こうして長い腕に包み込まれていると、本当に世界でふたりきりになったみたいで、それを悪くないと思っている自分がいる。

幸せだと、思う。

有紗のふわふわと波打つ髪に、和馬の長い指が絡んで、解くとずるするとこぼれ落ちていくのを楽しむように繰り返す。

（うーん、なんという甘々しい空気でしょうか）

かつて繰り返してきた出会いと別れの中で、気持ちくれたひとがいなかったわけじゃない。

共に沢山の時間を過ごして、絆、といえるものを一緒に作り上げた人達だった。

そんな大切に思えるひとたちを、全部切り捨てて、有紗は生まれ

育った世界に戻ってきた。

後悔はしていない。

ただ、生きる世界が違っただけのことだと簡単に忘れられる程、彼らとの時間は薄っぺらいものではなかったし、有紗は大人でもなかった。

だからといって、そのせいで自分が臆病になるのもおかしい話だろう。

彼らとの出会いは、決して有紗の人生を貧しくするようなものはなかったのだから。

今まで、無意識に「恋愛」というものを遠ざけてきたのは、単にこちらに戻って来たときには既に精神が成熟していた有紗にとって、中学生というのがどうしたって子どもにしか見えなかったからだ。

二十歳過ぎの女が、中学一年生にきゅんきゅんするというのは・・・いや、アリというひともいるだろうが、有紗にとってはナシだった。

十二歳から再び人生やり直して、二十歳を過ぎれば気持ちと体の齟齬も気にならなくなるかな、とのんびり構えていたのだが、まさかこんな風に捕まってしまうとは思わなかった。

・・・思えば、初めて会ったあの日から、和馬ならば同じ気持ちを分かち合えると感じたときから、欲しかったのかも知れない。

和馬が。

何も偽らずに、ずっと傍にいられる存在が。

それだけなら、友人という立場でも良かったかもしれない。

けれど、自分は女で。和馬は男で。

ずっと傍にいられる関係を望むなら、きっと遅かれ早かれ、恋をしていた。

順番なんて、どうだっていい。

どんな順番の、どんな始まりの、どんな形の恋が正しいなんて、きつと誰も知らない。

ただ、自分達の場合は「アナタがいないと生きていけない」がシヤレにならないリアルであるだけ。

そんなことさえ嬉しいと思ってしまうているのだから、もう本当にどうしようもない。

（は・・・っコレが噂に聞く、カラダに落とされたとかそーゆーことだろうか！）

いやだって、最初のアレも凄かったけど、体の相性が良いとでも言うのか、滅茶苦茶気持ちが良いんですよ。

大事に大事に快樂を教え込まれて、蕩けそうな笑顔付きで可愛いだの好きだのと毎回のように囁かれれば、それは堕ちると言うモノでしょう、そうでしょう？

ひょっとして、竜の力とやらの中にはエロスキルも入っているんじゃないかなと訝りたくなる位、他の誰も知らない有紗でさえ、絶対和馬のエロテクはかなりのハイレベルだと断言出来る……つて、そんなことを断言してどうしますか自分。

と言うか、和馬とえっちした後はお肌つやつや、髪もさらさらキユーティクルが二割増しになっているのは、多分気のせいじゃない。

元々若いし、肌の美しさには自信があったけれど、疲れにくい体質にもなったようだし、やはりなにがしかの変化は起きているみたいだ。

……万が一、この世界にいらなくなったら、和馬と一緒にヴァンフレッドの世界にでも亡命して、街の片隅でコッソリ魔法具でも作って生活しよう。そうしよう。

目印の指輪もあることだし、あそこならいつでも行ける。

これから、自分達の未来にどんなことが待ち受けているかなんて知らないけれど。

あの日、和馬の手を取ったことだけは、何があっても後悔しない。

「和馬」

恋を、している。

その人の名を呼ぶ。

何だと応える唇に、ちゅ、と口づける。

「大好き」

そう囁いた途端、理性の吹っ飛んだ和馬が「エロ竜モード」にスイッチして、再びぐちゃぐちゃの快楽に叩き込まれた有紗は、雰囲気流されてすっかり気持ちを告げるのはもうやめようと決意した。

腰が痛い。

## 第17話 正しい恋のカタチ。(後書き)

今回はムーン様の方に第16・5話 (タイトルどうしようかな・・  
・)を投稿予定です。

またしてもがつつりエロなので、18才以上の方、よろしければお  
気を付けてお越し下さいませ(汗)

## 第18話 お控えなすって!?

有紗は、美少女である。

黙っていれば!という友人らからの厳しく断固とした条件付きだが、少なくともまず有紗をして「不美人」と評する者はこの辺りには存在しない。

よって、新入生の分際で、それまで爽やかスポーツ系近寄りがたいけどストイックな色気がタマラナイ、と上級生のおねーさま方に密かな人気だった(らしい)和馬とらぶらぶしい関係になったところで、「何でアンタが!」と吊し上げられるような事態は今のところ起きていない。

まあ、和馬は「ケツ、所詮は面食いかよ」と些か評価を落としたようだが、本人がそんなことにはゾウリムシの纖毛程の関心も払わないため、至って平穩無事な日々を過ごしている。

しかし、世の中そんな平凡(?)なカップルばかりではないわけ。  
で。

「あーちゃあああああん!」

今日も今日とて、相も変わらずそのロリ巨乳で道行く青少年の視線を釘付けにしていたささめが、本日は半泣きおめめうるうるというオプシヨン付きで抱きついてくるのを、有紗は少々ヨコシマな優越感を持って受け止めていた。

(はっはっは、羨ましいか愚民共!ああ、相変わらずの腕の中にす



っぽりサイズ！腹に当たるうもんうもんの巨乳！ナイス抱き心地ですわあ、ささめさん！）

・・・少々ではないかもしれない。

「んー、どうした、ささ？」

大輝とランスレイルが目を丸くしている中、ぽふぽふと小さな背中を叩いてやると、ささめはがばりと顔を上げた。

そのつぶらな瞳が、ぶわっと涙で潤む。

「あーちゃん！どうしよううう、怖いおにーさんにコクハクされそうになって、逃げて来ちゃったよううううう！！」

「そうかそうか、どこの馬の骨かな？ささを泣かせるような救いようのないアホは、この私がきっちりナシつけてぼっこぼこの再起不能にしてあげるから、落ち着いてゆっくり話してごらん？」

「ままま待てー！有紗！お前こそ落ち着け！」

「そそそそうデス！ササーメイも、ネ！落ち着くデス！」

男ふたりが慌てて取りなし、どうにかうぐうぐと涙を堪えるささめから聞き出したところによると。

きょーうつのおつべんつとなんだろなー、といつものように足取りも軽く通学路を歩いていたささめは、突然見知らぬ青年に声を掛けられたのだそうだ。

「それでね、それでねっ、『オレのこと、覚えてるか？』って訊くからー、知り合いだったかなーって一生懸命思いだそうとしたんだけどね？」

十八歳から二十歳くらい、格闘技って言うより日々喧嘩で鍛えてますなカンジの拳ダコあり、大型わんこ系で、ちょっと無口なカンジの強面で女の子より男の子に人気のありそうなおにーさんなんて知り合いにいないしー」

「そ、そう・・・」

「そ、それで？」

「わん？」

ランスレイルのソフトマッチョを見抜いたときにも思ったが、素晴らしい観察眼である。

彼へのわんこの説明は、後でささめにしておいてもらおう。

（でも、ランスレイルの『わん？』はちょっと可愛かった。流石、ささめのわんこだ）

「だからね、覚えてませんー、って言ったらね、なんか物凄い『がーん！』てなってるね？」

悪いことしたかなーって思ってたなら、いきなり真っ黒いおベンツがすーって傍に止まって」

うりゅ、とささめの瞳が再び潤む。

「そのおにーさんのこと『若！』って呼びながら、サングラス掛け

たヒト達が『このお嬢ですかい!』とか言つて―」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「ボディガードを雇っているとは・・・ハッ、ササーメイ、ソレはササーメイがいつも言っている『タマノコシ』というもののデスカ!」  
「？」

ぱあつと顔を輝かせ、おめでとうございますデス!とでも言い出しかねないランスレイルの頭に、有紗は右から、大輝は左から手刀をぶちこんだ。

空気を読めないのは、ささめひとりで十分だ。

いや、そういう問題じゃないかもしれないが、取り敢えず黙れ。

「そ・・・それでね?」若のこと、末永くよろしくお願いいたしやす!』とかー、『見た目はちよいとおつかねえですがいいお人ですんで!』とかー、『いやいやまずはお嬢の親御さんにご挨拶を!』とか色々言われてね?そしたらおにーさんが、『うるせえワラワラ出て来んな、てめエらはすつこんでろ!』つて言つもんだから、怖くなって逃げてきちゃったのうつうつー!」

うん。

「ごめん、ささめ。

怖いおにーさんつて、精々頭の悪い巨乳好きの不良高校生くらい

かと思つてたよ。

ランスレイルが頭を抱えてうんうん唸っているが、そうしたいのはこちらの方だ。

「まあ・・・うん。今日は一緒に帰ろうか」

こんなちまくて可愛い生き物、車に詰め込まれてお持ち帰りされたら大変だ。

そこで、けどよ、とどうにか状況を飲み込んだらしい大輝が片手を挙げる。

「そのにーさん、ささめを知ってるっぽかったんだよね？」

覚えてるか、って聞いてくる程度には、お前と面識がある筈だぞ。第一、向こうはお前を顔見ただけで確認してんだから」

「う・・・うん？」

「んで、お前はぱつと見じゃ思い出せないってことは、そう深い知り合いでもない。

人間の顔ってそう長いこと覚えてられるモンじゃねーし、ここ最近で、今まで会ったことのないヤツと話したりしてねえか？」

服装とかでも大分印象って変わるし、と言う大輝に、賞賛の目を向ける。

「おお・・・初めて大輝が賢そうに見える」

「初めてかよ！」

しかし、うーん、と暫くささめは首を捻っていたが。

「やっぱり、あんなおにーさん、知らないよう」

大輝の初の賢さは、無駄になった。

それから復活したランスレイルに「そのスジの方々」の恐ろしさを懇々と言っただけだが、何故かランスレイルだけでなく、ささめと大輝まで真っ青になった。

「ゴ・・・ゴクドーとは、そんなにも恐ろしいものなのデスカ」

「うわあああん！怖いよううううう！」

「有紗・・・頼むから朝っぱらから十八禁は勘弁してくれ」

「いや、欧米人って任侠映画とかで妙な先入観持ってるから、ここは一発上げつない話でその幻想を打ち壊しておこうかなあと」

「「「えげつなさすぎる（んだよ）（よう）（デス）！！」「」」

あ、なんか初めて総ツツコミ貰ったぞ。ちょっと嬉しい。

しかし、「そのスジ」の方々は、無関係な一般市民には極力関わらないというのが基本方針だと思っていたのだが。

と言うか、その『若』とやらが、どこかで本気でささめを見初めたとして、上手くいったとしても。

「ささめが『姐さん』とか・・・」

ぼそつと呟くと、暫しの沈黙の後。

「・・・ゴフッ」

「・・・ブフッ」

大輝とランスレイルが、美少年らしからぬ声を漏らして、腹を抑えてふるふると震えております。

うん、確かにね。

このちんまり可愛いロリ顔のささめが、深紅やら艶紫やらのウツクシイ着物に陣傘差して「お控えなすつて！」なんてキリツと言っているところとかうつかり想像したら、そうなるよね。

でもほら、ふたりとも？

ささめは怒らせると、実はとっても怖いんだよ？

何のために私が表情筋と腹筋の限界に挑戦して、真面目な顔を保持していると思ってるの？

ああほら、隣から黒い触手の幻影が。

私は知らん。

「・・・城島クン。ミスタ・フォゼット」

おどろおどろしい響きのその声に、ようやく二人が凍り付く。

遅いわ。

「ワタクシ、他人の不幸を喜ぶような方と友情を結ぶのは吝かではありませんが、自分の不幸を笑われるのは流石に我慢出来ないものですから、お二人とのご縁はこれきりにして下さいませ」

にっこりとそれはそれは可愛らしく笑って言い切ったささめに、大輝とランスレイルはその場でコメツキバツタの如く土下座した。

・・・後でこっそりふたりが、ささめなら『姐さん』も十分出来るんじゃないかと愚痴っていたのは、ささめには内緒だ。

## 第19話 面影

放課後。

まあ、正面から堂々と突撃を掛けてくる辺り、それ程危険なこともないだろうということで、コメツキバツタから無事「友人」に復帰した大輝とランスレイルが、部活を休んで送ろうかと（少しびくびくしながら）申し出たのを遠慮して、有紗はささめと並んで校門に向かった。

しかし。

「ああああーちゃんっ」

「おおっ」

まさかとは思ったが、堂々と校門前にいらっしやるとは。

ささめ曰くの、

『十八歳から二十歳くらい、格闘技って言うより日々喧嘩で鍛えてますなカンジの拳ダコあり、大型わんこ系で、ちよっと無口なカンジの強面で女の子より男の子に人気のありそうなおにーさんがそこにいた。』

ランスレイルといい、この『若』といい、ささめは随分わんこ系男子に縁があるようだ。

（和馬も最初はわんこ系だったのになー・・・今じゃがつつり猛獣系、っていや別に今はそんなことを考えてる場合じゃないし）



うつかり脳内でひとりノロケを展開しそうになった自分を叱咤しつつ、有紗は今朝「ゴクドー様に近づいちゃイケマセンよ？」と言いつつ聞かせたせい、すっかりガクブル状態でひとばかりに腕にしがみついてくるさめに、「若」が何とも言えない顔をしているのを少しばかり申し訳なく思った。

職業に貴賤はありません。

（オコトワリするにしても、きちんとお話位はすべき・・・ってさめさん、私の腕を乳で包み込むのは如何なモノかと。周囲の男性諸氏の視線がとっても痛いです）

あのー、と自由な方の手を上げ、「若」に話し掛けてみる。

ずっとさめを注視していた「若」が、ようやく有紗の存在に気付いた風にこちらを見る。

その瞳が些かも揺るがないのを見て、有紗は内心おや、と首を傾げた。

大抵の男性陣は、有紗の顔を見ると目を逸らす。

そうじゃないのは余程度胸があるか、自分に自信があるか、目を逸らすことも出来ずに見惚れているか。

或いは、他の女性に、単なる顔の造作以上に心惹かれて、どうでもよくなっているか、だ。

・・・まあ、初対面るとき半死半生だった和馬や、苦勞性のくせ

に脳天気なお坊ちゃんの大輝や、アメリカ育ちわんこのランスレイは別として。

何にせよ、有紗の中で少し『若』に対する好感度は上がったわけだが、ささめの観察眼が正しければ、ちよつと問題があるのも確かなわけで、有紗は改めて『若』を見遣った。

「青少年保護育成条例ってご存じですか？」

「・・・は？」

「ですから、青少年保護育成条例というモノで、十八才未満の青少年に対する淫行は禁じられているんですよ？このコはまだ十六才なので、そう言ったお誘いは暫くご遠慮頂きたいのですが」

取り敢えず正攻法で軽いジャブを、と思ったのだが、思いの外クリンヒットしたらしい。

よろりと蹠跟めいた『若』が、「よよよ」ではなく「く・・・っ」という感じに校門に懐く。

ふむ。精神攻撃は意外と有効らしい。

「大体、女子高生を出待ちとか、どこのストーカーですか」

ぐさっ。

「朝から女の子を捕まえるのに保護者付きって・・・ハッ」  
げしっ。

「これだから繊細なオトメゴコロを理解しない童貞野郎は嫌なんですよ、ったく」

ちーん。

(・・・やりすぎたかな?)

まあ、これで引く程度の男ならささめはやらんが。

さあどうする、とちよっとわくわくしながら待っていると、『若は暫しの沈黙の後、不死鳥の如く復活した。

そうこなくては。

「・・・君は?」

おお、ずどんと響く重低音ボイスですか。

結構声は好みですけども。

「人に名前を訊ねるときは、まず自分から名乗るのが基本ですよね?」

につこりと極上スマイル付きで言っていると、むっとしたように眉を寄せる。

「・・・久川怜司」

「七瀬有紗です。別にこの子の保護者でもなんでもないので、口説

くでしたらお好きにどうぞ」

あーちゃん！？と悲鳴を上げるささめの頭を、よしよしと撫でる。

「大丈夫大丈夫。私がこれだけ言っても冷静ってことは、ちゃんとお話出来るひとみたいだから」

口説くだけなら淫行じゃないしねー、と言うと、『若』改め久川が微妙な顔をする。

「ただし、一時間後にささめから直接私に連絡が無ければ、その場で警察に通報しますので、あしからず」

「どうしても、俺を変質者扱いしたいわけか・・・」

久川が溜息混じりにぼやくが、甘いと言うのだ、若造が。

「この子を怯えさせた時点で、あなたは私の中で抹殺対象者なのですから、一時間くらいは武士の情けでくれてやってもいいかなと」

「・・・あーちゃんっ！だって、このヒト、ごくどーさんだよ！？迂闊に近づいたら、シャブ漬けにされておりとあらゆるエロエロしいことされて、アラブの産油国かどっかにヤマトナデシコブランドで売り飛ばされちゃうって言ったじゃんー！」

半泣きのささめの叫びに、しーん、とその場が静まりかえる。

うむ。ちょっと脅しすぎたか。

すまん、久川氏。

しかし、その久川は小さく溜息を吐くと、胸元のポケットからひらりと一枚の写真を取り出した。

そこに写っているのは、小学生くらいのふたりの子ども・・・つて。

（ささの乳がナイ！？）

・・・ではなく。

つぶらなお目々もまあいほっぺも、今と殆ど変わらない小さなささめと、どこことなく久川の面影がある子どもが、仲良く公園で遊んでいるの図を収めたその写真に、ささめの目と口がまん丸になる。

ああ、その口の中にぺろぺろキャンディーを突っ込みたい。

「・・・あれ」

「は、はいー？」

びくつとささめが震えて、えへえへと締まりの無い笑みを浮かべるが。

「こちらの、気の毒なおにーさんのことを『知らないよう』って言ったのは、どこの誰かなー？」

「藤沢学園高校一年F組の、春日ささめですー！」

その通り！とふわふわの頭にずびしつと手刀を当てる。

「謝んなさいっ！今すぐ！」

「ううううめんなさいごめんなさいごめんなさいー！」

いや、とだけ低く応えた久川は、実に心が広い。

「それで！このおにーさんは、ささのどういうお知り合い！？」

くわっと思い詰めた有紗に対し、ささめは久川の顔を見ながらわたたと両手を奇妙に動かしていたが、ようやく何かを思い出したらしく、ぱあっと顔を輝かせた。

（・・・うおう）

ロリータ趣味の男を瞬時に悩殺するに違いない笑顔を浮かべたささめは、もみじのよーなお手々をぱちんと打ち鳴らし、思い出したよう！と声を上げた。

「あのねっ、あのねっ、このひとはね！」

「う・・・うん？」

そうして、ささめはととつと久川に近づくと、にぱあ、とそれは可愛らしい笑顔を浮かべた。

「おにーちゃん、だよね？」

「・・・ああ」

あ。久川氏が鼻血を吹きそうです。

いや、そんな気配は周囲のあちこちでもしておりますが。

ロリ巨乳の「おにーちゃん」、恐るべし。

「ささの、お兄さん？」

全然似とらんど、と首を傾げると、違うよう！と振り返る。

「昔、同じマンションのお隣さんだったおにーちゃん！小さい頃、よく遊んでもらったんだよう！」

ああ、幼馴染みってヤツですか。

・・・ていうか、それなら少しは覚えててあげようよ、ささめさん。

アナタの「おにーちゃん」には、その写真の面影、ちゃんとあるよ？

## 第20話 可愛いは正義です。

翌日。

『幼馴染みのおにーちゃん』、久川との再会はどうだった、と訊ねた有紗に、ささめは珍しくうにゅう、と沈んだ顔を見せた。

事の次第を有紗から聞いて、何だかなという顔をしていた大輝とランスレイルも、どうした？と身を乗り出してくる。

「んん・・・おにーちゃんのおとーさんはね、昔ごくどーさんだったけど今は違ってね、ふつーの建築会社やってるんだけど。昔のノリってゆーの？そーゆーのがまだ残ってて、社員さん達が未だにあらんなカンジなんだってー」

「あー・・・。最近はやクザ渡世も厳しいとか言うからねえ」

「だからお前はどこでそんな情報を」

「ホラ！やっぱりタマノコシではないデスカ！」

どうしよつ。

やっぱりランスレイルに、ささめの「空気読めないスキル」が伝染している気がする・・・取り敢えず放っておこう。

それでねー、と飼<sup>やわ</sup>い主もシカトしてるし。

あ、尻尾が下がった。



「おにーちゃん、この間二十歳になったばかりなんだけどね？なんか、おとーさんがコネづくりの為におにーちゃんにお見合いしろーって言い出して、売り言葉に買い言葉で好きなヒトがいるから無理って逃げたら、どこのヒトだーってなって、咄嗟にあたしの名前出しちゃったんだってー」

それはまた、何と言うか。

「ベタだわね・・・」

「ベタだな」

「ベタ？」

・・・ランスレイルの日本語の語彙が、日々おかしな具合に広がっているのは、気にしないで行く方向でお願いします。

「で、どうすんの？幼馴染みのおにーちゃんと再会して燃え上がる恋！に挑戦してみたり？」

それはそれで面白そうだと思ったのだが、ささめはまさかあ、と笑った。

「おにーちゃんのお見合い話が流れるまで、オツキアイしてるフリを頼まれたただけだろう？おにーちゃん、昔からすっごくモテるんだから、あたしなんか本気で相手にするわけないよう」

ぼたっ、と有紗の手から、くるくる回していたシャープペンシルが落ちる。

(こ・・・っこれだから天然は・・・！)

何故にあれだけあからさまに好意を示されて気づきませんか！？

あれだけの精神攻撃をクリアして、ささめの前に「ふはは」と立ちはだかる狭く高き門である有紗を乗り越えていった勇者久川の、あの鼻血を吹きそつな顔を何だと心得る！

「あ・・・あーちゃん？」

「・・・ささ」

な、ナニ？と引き気味のささめに、にっこりと笑ってやる。

「ささならイケる。・・・堕とせ」

「ほえ？」

大輝とランスレイルが何か言いかけるのを、ぎらりと視線だけで黙らせる。

「それだけべったべたのシチュなんだから、ここで堕とさなくてどうするか！あの人は立派に『将来有望なイケメン』よ！その可愛い口リ顔と巨乳を最大限に有効活用して、上目遣いに『おにーちゃん』、勿論語尾にはハートマークを百個添付！それで堕ちない口リコンはこの世にいないっ！」

「おおお堕とすってー！ってゆーか、あーちゃん！？おにーちゃんは口リコンじゃないようっ！」

「間違った、巨乳好き」

「それも違うーう！」

「ナニを言う！世の中の男の九割は巨乳好き、そうでない男はゲイかロリコン！久川さんはゲイじゃないんだから大丈夫！行け！」

ぐっとサムズアップしてゴーサインを出す有紗に、ささめがそんなああ！と悲鳴を上げ、周囲の生温かい視線が集中する。

しかし。

「・・・へえ？」

「っ！？」

瞬時に、その場の空気が絶対零度にまで低下した。

大輝とランスレイルのぎょつとした顔が視界の端に映る。

「どこの誰が、『将来有望なイケメン』なんだ？」

なあ有紗、とあくまでも穏やかに仰るのは、何やら丸めたプリントでとんとんと肩を叩いている和馬だった。

ああ、背筋が寒い。

「いつ。どこで。そんな男と会ったんだ？ん？」

サムズアップした親指もそのままに、有紗はぎしぎしといったの間にかすぐ傍まで来ていた和馬の笑顔を振り仰いだ。

はい。目が全然笑ってませんね？

『あ・・・っあーちゃんが固まってるよう！？すっごーい！尊敬っ尊敬っ！』

『さ、ささめ・・・気持ちは分かるがちょっと黙っとけ！』

『オウ・・・これが、日本人の操る「気」というものデスカ・・・！スバラシイ！』

『てめえも黙ってる、ランスー！ソレが出来るのはアニメと漫画の世界の住人だけだから！』

ああ、大輝のツツコミが遠くに聞こえる。

「き・・・昨日の放課後、校門前で？」

「ふっん？」

（つて、なんでここまで追い詰められた気分にならねばならないんですか！？）

理不尽だ。

「・・・和馬さん」

「ん？」

ああ、余裕ぶっこいた微笑が可愛くない。

前はんなに可愛かったのに。

だがしかし！

「愛してるわっ！」

「知ってる」

「・・・！」

まさかのカウンターアタックなクールリアクションに途方も無い敗北感を覚え、有紗はごんごんと机を叩いた。

（・・・あああ、やっぱり可愛くないーっ）

前はんなにあんなに、純情で可愛かったのに！

『なんか・・・愛の告白タイムじゃなくて、ガチンコファイト見るみたいだよ・・・』

『しかも、有紗が完敗・・・！うわー、オレ、志波先輩への尊敬ゲージがマックス上昇中だぜ』

『しかし・・・シバ・センパイは、先程のアリサの言葉の中から、『将来有望なイケメン』というトコロだけをピックアップしたのデスね・・・』

やかましい。

特に大輝、爆発しろ。

結局、和馬が何をしに一年の教室まで来たかと言えば、バスケット部の練習試合で使うオーダー表を作成するためだったらしい。

男三人がそっちの話に入り込んでしまったため、有紗は些かぐつたりした気分で、きゅるんと首を傾げているささめを見遣った。

・・・癒される。

「いや、まあ・・・ね？あのヒトなら、ささにお似合いだなーとワタクシは思った次第なので御座いますよ」

「そ、そうかなー？」

てれてれてれ。

うん、やっぱり癒される。

可愛いは、正義だ。

## 第21話 女子はツカ系美少女が好物です。

美少年かと思ったら、ツカ系美少女でした。

それが、一年E組、女子バスケット部所属の冬島杏子を初めて見たときの感想である。

授業のカリキュラムが全く違うとはいえ、必要最低限のコマ数は各クラス共通なわけで、「さわやかスポーツのE組」と「ガリ勉のF組」は、体育のときは合同で授業を行うことになっている。

まあ実際は、毎日部活で鍛えているE組の生徒達に、その間殆どが予備校に通っているF組の生徒達がついていけるわけもなく（大輝とランスレイルは別だが）、合同と言ってもF組の生徒達がE組の生徒達に「全力で手加減お願いします！」状態なわけで。

（おお・・・今日も爽やか、サラサラ前髪が汗に眩しいっす！）

毎回テキストに授業をさぼりつつ、そんな風に杏子を眩しく見詰めているのは、何もち紗だけではない。

先週から始まったバスケットボールの授業で、今日は試合形式。

女子バスケット部でも期待の新人という杏子の涼やかな長身と凜とした佇まい、何よりそのプレイの美しさに、体育館は現在、端から見れば「ここは女子校か！」と誰かがツツコミを入れるような様相を呈している。

いいのだ。

女の子は、ツカ系美少女が大好きな生き物なのだから、別に間違っていないのだ、うん。

「きょーさま・・・今日もカッコいいよう」

ささめなど、とっくの昔に目をうつとりハートマークにしている。

しかも、「はう・・・」と言う悩ましい溜息付きだ。

未だ「オツキアイしてるフリをしてるだけだよ」状態から、中々脱出出来ずにいる久川辺りが見たら、悔しさに悶絶してしまうかもしれない。

今度、写メって見せてあげよう。

一応、E組の生徒とF組の生徒をランダムに組み合わせたチーム分けだが、殆どE組の生徒同士のガチンコ勝負状態だった試合は、あっさり杏子のいるチームの勝利となった。

「く・・・っパスカットするときの流し目にやられてしまったわっ」

「キラめく汗にうつかり見とれている隙にボールを奪われてしまうなんてっ！私の未熟者、未熟者ー！」

「あの、シュート体勢に入るときの、手首のくいっが！くいっが堪らないのようっ！」

・・・一部、随分コアなファンがいるようだが、体育の授業は概ねそんな感じだ。



しかし、そんな杏子はバスケット部に所属しているわけで、同じバスケット部繋がりで大輝やランスレイルと親しいかと言えば、別にそう言うわけでもないらしい。

「そりゃ男バスと女バスじゃ顧問も違うし、体育館の使用時間も違うし。別に接点とか殆どねーもんな」

役立たずめ。

「あ？何か言ったか？」

「何でもアリマセンヨ」

「うつわ、何か今すっげームカついたんだけど！」

「えー、だってー、大輝君とランスってば、折角きょーさまと同じ部活なのに、仲良しじゃないなんてー・・・チッ、使えねえ」

「・・・」

「・・・」

「ササーメイ？どうかしたデスか？」

「うつん？何でもないよう？」

ささめがいつも通りのきゆるんとした笑顔を浮かべて、有紗と大輝は一瞬自分達が見たものを幻だったと思うことにした。

ああ、ランスレイルが空気を読めない子に育ってくれて良かった。

兎に角、杏子の女生徒の中における人気というのはかなりのもので、上級生にまでファンがいるらしい。

細身ながらすっきりと引き締まった長身は、その辺の草食系男子より余程凛々しく頼りがいがあるし、バスケ部の規則で短く整えられた髪型も清潔な少年らしさを醸し出している。

おまけに本人の性格がクール系で、どれ程周囲に騒がれてもさりと流しているのがまたヨイ！と言う感じだ。

それだけ聞くと、どうも以前の和馬も同じような評価だったらしいのだが、以前有紗のソトツラだけを見て絡んできたこの学校にも数名はいる「勘違ったヤンキー少年ズ」を、どのような手段を使ったか「僕達真面目っ子」にジョブチェンジさせてしまっただけ以来、触らぬ神に祟りなしという評価に補正されている。

お陰で有紗は「絶対に近寄っちゃなんねエ美少女」としての地位を無事獲得し、有り難く平穩無事な日々を送っているが、ロリ巨乳のささめとツカ系美少女の杏子は毎日なんだか大変そうだ。

まあ、ささめは天然スキルでかなりの哀れな男子生徒の秋波をきれいにスルーしているのだが、杏子は常にファンクラブ会員（勿論女子）に取り囲まれていて、ウカツに男子生徒が声を掛けようものなら、その場で瞬殺されそうな視線であつという間に駆逐されてしまふ。

あんな調子では、もし杏子に好きな男の子でも出来たら大変だろうな、と他人事ながら思っていたのだが。

「あれー？大輝君、どしたの？顔色悪いよ、大丈夫ー？」

ある朝、ささめがそう言うように、大輝が酷い顔色、というか、「生きてますかー？」と目の前で手を振りたくなるような蹣跚たる足取りで教室に入ってきた。

「おーい、どした？大輝」

別に、以前調べた大輝の恥ずかしい過去なんて誰にもバラしていないですよ？

臨海学校に行ったときに、遊泳禁止区域の向こうできつちり溺れて、レスキューのおにーさんに人工呼吸されちゃった話とか、中学三年にもなつて、授業中に寝ぼけて先生を「母さん？」なんてぷりちーな顔で呼んじやった話なんて、勿体なくてまだ誰にも披露してないですよ？

しかし、そこで有紗ははっとあることに気付いた。

ランスレイルが、幾分引きつった顔をして黙っている。

空気を読んで。

(・・・っ一体何事！？)

その衝撃の事実に戦いた有紗だったが、元祖・「空気読まない菌保持者」のささめは、ねえねえー、と大輝の腕を突っついている。

「どうしたのー？保健室行く？」

・・・うん。ささめは優しくていい子だね。

その可愛らしい子犬が纏わり付くよーな攻撃にも、どんよりとしたままだった大輝が、突然がばりと立ち上がった。

周囲が目丸くする中、大輝の引きつった視線の先を追うと、今日もさらさらとした前髪も爽やかな杏子が、背後にファンクラブ会員をひつつけて教室の入り口に佇んでいた。

『まさか・・・ッ』

『ワ、ワタシは知りません、ナニも知りませんー!』

ランスレイルは、いつの間にか日本のコトナカレ主義を会得していた。ブラボー。

「・・・城島」

ああ、今日も少しハスキーな声がステキですね、杏子さん。

「は、はいッ!」

それに対する大輝の声は、思い切り裏返っている。

情けない、とはとても言えない。

何故なら、杏子の背後からは、生き霊の百や二百は平気で飛ばしそうな顔をした女生徒達数名が、それはそれはじっとした視線で大輝を射貫いているのだから。

流石のささめも大人しく口をつぐんでじっと成り行きを見守っているというのに、杏子ひとりが平然とした顔で近づいてきて、大輝と向き合っている。

・・・ひょっとして、ささめ以上に空気の読めない方なんだろうか。だとしたら恐ろしすぎる。それとも慣れなのか。是非ともそっちであって欲しい。いや、それもどうなんだ。

ぐるぐるとそんなことを考えながらふたりの様子を眺めていると、杏子は殆ど同じ高さにある大輝の顔をじっと見詰めて淡々と口を開いた。

「昨日の返事を、聞かせてもらえるか？私はお前が好きだ。良ければ付き合ってくれないだろうか」

その直球に男前な告白に、真っ青になったままの大輝が何か言うより先、ささめがあんぐりと目を剥く。

「う」

『ささー！お願いだから、今はび・くわいえっとー！』

『サササササーメイ、今は風林火山なのデスー！』

ランスレイルが何処かズレたような、この上なく正しいような日本語を使ったような気もするが、二人がかりでささめの口をどうにか塞ぐ。

・・・イエスと答えても、ノーと答えても、大輝に明日は無い気

がする。

重苦しい沈黙の中、大輝は勇敢だった。

ファンクラブ会員を背負った杏子を青ざめながらも真っ直ぐに見返し、しっかりとした声で言葉を作った。

「オトモダチカラオネガイシマス」

・・・勇者だ。

勇者がここにいる！

『・・・っエラいぞ、大輝！おねーさんは感動したっ！』

『ハイ！ディーもやるときはやるボーイなのデスね！』

そんな中、感動を分かち合う有紗とランスレイルに鼻と口を塞がれたままのささめが、ぐったりと酸欠になっていた。

## 第22話 諸刃の剣

オトモダチ。友人。

その概念をなんぞや？と問われて咄嗟に答えられるというのも中々無いのではなからうか。

何となく小っ恥ずかしいというのもあるが、顔見知り程度でも「トモダチー！」と言える心の広いひとみいれば、相手のことを良く知り、その人となりを含めて認めた上でなければ「友人」とは呼ばん！という友情道を究めようとする人物もいるだろう。

有紗は別に、そこら辺の拘りはない。

自分が相手を気に入って、相手も自分を気に入れば友人。

勿論、そこから一緒に過ごす時間が増えればその友人に対して情もわくし、何かあれば力になりたいと思う。

だがしかし。

（ごめんよ大輝・・・！私はあるたの友人失格さ！ああ、軽蔑してくれて結構さ！それでも・・・っそれでも私は、私は・・・っ自分の身が一番可愛いんだあああー！）

新たに大輝の「オトモダチ」となった杏子が、『そうか、じゃあこれからよろしく頼む』と言ったのは、つい昨日のこと。

「城島」

「ハイッ」

「・・・以前から気になっていたんだが、何故敬語なんだ？ 同年だろう、普通に喋れ、普通に」

そう言う杏子も立派に「女子高生」の喋り方とは少しずれているような気もするが、小学生からバスケ一筋、バリバリの体育会系の杏子にとってはこれが普通らしい。

ああ、今日も凛々しくてステキだ。

そのステキな杏子は現在、「座る場所が他に無い」と言う理由で大輝の机の上に腰掛け、そのすらりと長い足を無造作に組んでいる。

普段ならば適当に寄り集まっていた他三名は、心の中で大輝に滂沱と涙しながら詫びつつ、少し離れたささめの席の周りでこっそりその様子を眺めていた。

だって、杏子のファンクラブ会員様達に睨まれたくないもん。

ささめは杏子が再び教室に現れたとき、最初こそ浮かれてきらきらした目をしていたが、有紗とランスレイルが必死にファンクラブ会員の存在を示し、そのおどろおどろしい視線に気付いた途端、素早く保身に転じた。

生き物として、ヒジョーに正しい。

『うー・・・きょーさまはステキだけど、ステキだけど・・・っ』



『ステキな女の子に好かれたヤローを気の毒に思う日が来るなんて、思ってもみなかったわ・・・』

『ミ・・・身の危険を感じるデス。ディーと一緒にいてとぼっちを受けたらどうするデス、と考えてしまっなんて、ワタシはハクジヨリーな人間なのデス・・・！』

『そんなことナイようっ！』

『そうよ、ランス！それを言うなら私達は皆同罪なんだから！』

『ササーメイ・・・アリサ！』

がつしとばかりに手を握り合い、こちらの三人の友情はとてもとても深まっていた。

友情は、輝かしい努力や勝利ではなく、いじましい共犯意識なんてモノで深まったりも、する。

だけど、溺れかけた人間が、必死に手を伸ばす力はハンパではありません。

下手にその近くにいると、闇雲に掴みかかってきた手によって、無事な人間まで一緒に水に沈んでしまうから気を付けましょう、という有り難い教師の教えを、このとき三人は綺麗サッパリ忘れていた。

孤立無援だった大輝が、突然鷄がキュツと絞められたような切ない声を張り上げた。

「ふふふ冬島ー！」

「何だ？」

「トットモダチのお前に、オレのしんゆう達を紹介しようじゃないかー！」

その上擦った大輝の声に、手を取り合ったままだった三人がびしりと凍り付く。

止ーめてええええ！と叫ぶ間などある筈もなく。

「ランスレイルは知ってるよな！そっちの超絶美少女が有紗！ちまくてロリ可愛いのがささめだ！よろしくしてやってくれ！」

「・・・ほう」

杏子の涼やかな瞳がこちらを見て、三人はひいひい！と内心悲鳴を上げた。

（ただただ大輝君のばかああああ！そりゃ、きょーさまとお近づきになりたいとは思ったけど、思ったけど・・・！）

（状況が違っだろう、このアホンダラー！死ぬならひとりで死んでこい、しんゆうーと言うなら私達を巻き込むなあああ！）

（ああ、お花畑が見えるデス・・・）

しかし、三人とてそんな心情をそのまま顔に出す程オコサマではない。

杏子自身には何の非も無いのだ。

内心ガクブルになりながらも、それぞれにつこり笑顔を返す。

「よろしくー！大輝君のしんゆうその一、春日ささめですー！」

「しんゆうその二の、七瀬有紗です。よろしく」

「その三の、ランスレイル・フォゼットデス」

にこにこにこ。

コミュニケーションの基本は笑顔です。

しかし、杏子は何故か短く名乗ると、微妙に胡乱な目つきで大輝を見た。

「うちのクラスの子達が、城島は常に美少年美少女ハーレムを囲っているような節操なしだと言っていたのは、本当だったのか？」

束の間、杏子がいきなり地底人と入れ替わり、意味不明の言語をしゃべり出したぞさっぱり分からんどうしよう、と言ったような沈黙が落ちた。

それから、その言葉が四人にも理解可能な日本語だと言うことを、ようやく脳みそが認識し。

「……………何でそーなる！？」

大輝の悲鳴に、啞然とした三人も我に返った。

「おおお恐ろしいことを言わないでもらえますか冬島さん！？  
私は大輝の友人であって、それ以上でもそれ以下でもそれ以外でもございません！

大輝の命に関わりますので、二度とそんなバカな話を仰らないで  
下さいませー！」

有紗が大輝のハーレム要員呼ばわりされているなどと聞いたら、  
和馬がどんなアホなことをしでかすか！

蒼白になった有紗に続いて、ランスレイルが据わりきった目を杏  
子に当てた。

「レディ・・・ワタシをゲイ呼ばわりするとは、いい度胸じゃない  
デスか。

ワタシはゲイを差別する狭量な人間ではないデスが、区別はする  
デス。

彼らはワタシの知らない世界で幸福になってくれればいい存在であ  
って、そういった性的嗜好を一方的に押しつけられることには多  
大な嫌悪しか感じません。

理解出来ましたか？理解出来たなら今すぐ謝罪をして頂きたいも  
のデスよ？」

(・・・誰コレ)

そこにいるのは見慣れた可愛いわんこではなく、氷雪を支配する  
魔天狼でした。

穏やかな、しかし初めて聞くランスレイルのブリザード混じりの

声に、それをまともに受けた杏子が流石に顔を引きつらせた。

「・・・すまない。失礼なことを言ったようだ」

分かって頂ければ良いのデスよ、と笑むランスレイルの目は、しかし全く笑っていないかった。

何か、ゲイに対してイヤな思い出でもあるのだろうか。

・・・きつと知らない方がいい。うん。

ついでにクラスの女生徒達が、一部物凄く残念そうな顔をしていることになって、ワタシは何も気付いていませんヨー、と視線を在らぬ方に飛ばす。

しかし、立て続けの衝撃に些か動揺していた有紗は、気付かなかった。

「大輝のハーレム要員」などという非常な不名誉をアコガレの杏子に疑われたささめが、テンパった為か、或いは己を守ろうと瞬時に目覚めた本能故にか、全てをリセットする最強の呪文を唱えようとしていることに。

「きょーさまー！大輝君は、ハーレムなんか作ったりしないよう！」

ささめ、きょーさまは止めた方がいい。

本人が思いきり引いているから。

「だって、だって・・・！」

ささめがぎゅっと握りしめた拳を上下させる度に、その立派なお胸がもいんと上下するのを杏子の視線が捉え、その視線は杏子自身のスレンダーなボディに移った後、「ふふ・・・」と少々乾いた色を浮かべた。

・・・いやあの、スポーツ選手にコレは邪魔だと思いますよ？

しょっちゅう肩こりを訴えたりして巨乳も結構大変そうですね、と気持ち的に杏子の肩をぽんと叩いたとき、ささめがしゅびつとその両手で大輝を示す。

子ども向け特撮ヒーローものの変身シーンのようだ。

起死回生の一発逆転ホームランを繰り出す前フリ。

これさえあれば怖くない。

そうしてささめは大きく息を吸って、言った。

「大輝君には、おじーさまが決めた、とっても痛々しい婚約者がいるんだものー！」

(・・・っそーいえばそんなネタもあったーっ！！)

有紗だけでなく、大輝本人とランスレイルもすっかり忘れていたのか、三人は揃ってぽん、と掌を拳で叩いた。

あれから大輝は、こつてりと杏子に叱られました。

曰く、

「告白をした相手に『オトモダチから』なんて言ったら、そこから某かの発展があると期待するに決まっているだろう！決まった相手がいるならきつちりそう言っただ断らんかー！」

正論です。

これ以上無いほど正論です。

その清々しい凜々しさと、何の弁明もせず「スイマセン、スイマセン」と謝り倒す大輝の姿に、F組の教室に満ちていた杏子のファンクラブ会員様達のおどろおどろしい空気は綺麗サッパリなくなっていた。

それが、「婚約者がいるなら仕方がないわよね」なのか、「あんなヘタレ、これ以上杏子様が相手にするわけないじゃない」なのかは知らないが。

「・・・あのヒトの存在を有り難く思う日が来るとはな・・・ふふふ、ふふ」

この二日でめっきり人相が変わってしまった大輝の机には、彼の好むジューズやらお菓子やらがわさっと載っている。

有紗達からの貢ぎ物である。

保身に走って友人を見捨てたことは、やっぱりちょっと申し訳ないなと思ったわけで。

そんな中、でもお、と季節限定爽やかオレンジピール入りチョコレートクッキーを買いだささめが首を傾げる。

「きよーさまのコトは物凄く特殊なパターンだろう？大輝君、学校中に婚約者がいることバレちゃってー、このままじゃ卒業するまでカノジヨとか絶対出来ないよう？」

その婚約者の存在を盛大にカミングアウトしてくれたのは何処の誰ですか、とツッコむ者はここにはいない。

杏子には申し訳ないが、あの恐ろしいファンクラブ会員様方が彼女にひつついている限り、彼女こそ嬉し恥ずかし男女交際など夢のまた夢だろう。

「それ以前に、冬島さんの元思い人とオツキアイしてくれる勇者が、今後出てくるかどうか・・・」

「少なくとも・・・ほとぼりが冷めるまでは無理と思うデス」

「はっはっは、それがどーした！オレらは学生だぞ！？学んで生きるイキモノじゃねーか！色恋なんて、いずれあのババアとの婚約を



解消してからで十分だっ！」

うはははは！とふんぞり返って笑う大輝に、そのしんゆー三名は内心そつと涙を拭った。

・・・憐れな。

## 第22話 諸刃の剣（後書き）

次回、和馬視点が入ります。ちょっとシリ阿斯

今までのアホっぽいノリとはかなり毛色が違うお話となっておりますので、本編のこのノリを気に入って下さっている方には「う？」となるモノかと思えます。

しかし、作者は基本アホの子なので、すぐに元に戻りますので！

そろそろ異世界ノリ、というかヴァンフレッドが懐かしくなってきたところでもありますので、そちらがお好みの方は新章にご期待下さいませ！

## 第23話 竜を喰らった人間（前書き）

自分で書いてて、本編との余りの落差に「うおう」となりました・・。

次回からはまたアホなノリに戻りますから！はい！

## 第23話 竜を喰らった人間

あるとき目を開いてまず思ったのは、ああ自分は死んだんだなという、今から思えば随分と間の抜けたことだった。

死んだ人間が思考などするわけではない。

人間が死んだ後に残されるのは、ただのタンパク質とカルシウムの塊だ。

脳の活動が止まり、そこを走る電気信号が途絶えれば、人間が思考を続けることなど出来はしない。

なのに、あるときそんなことを思ったのは、目の前に天使のように愛らしい姿の少女がいたからだ。

自分はクリスチャンでもなんでもないが、現代日本に生きている若者で、「死後の世界のお迎え」という言葉から妄想するのが美しい天使の姿というのは、別に珍しくもないことだと思う。

・・・まあ、その天使のようだと束の間見とれた少女が、今まで自分が遭遇した中で最も逞しい人間だと気付くのに、そう時間は掛からなかったが。

くるくると年相応か、それ以上に幼い笑顔を浮かべて己の好奇心のままに行動するかと思えば、突然酷く大人びた目をして見せる。

自分も大概図太い、鈍いと言われる神経の持ち主だと自負していたが、有紗は「ふふん」と笑ってあっさりその上を行く。

面白かった。

何が起きても動じず、当たり前のように傍にいてくれたその存在の確かさに、どれだけ救われただろう。

・・・有紗が傍にいてくれたから、耐えられたのだと思う。

今の自分は、誰がどう見たって「化け物」だ。

思うだけで水を操り、風を起こし、触れた木々を生い茂らせ、ほんの少し感情が高ぶれば炎を吐き出す。

ありとあらゆるプライドをかき集めて平気なふりをしていたが、夜になってひとりになり、自分が自分の知る己と違うものになっているのだと、灯りも無いのに見える目や、聞こえるはずも無い扉の遙か向こうの物音や声に気付く度、そのおぞましさにぞっとした。

自分は何だ。

もう、人間ではないのか。

そんな疑問に、自分の全てがYesと答えた。

眠れぬ夜を過ごしてさえ疲れ一つ覚えなない体も、こんな体は自分じゃないと思えば闇雲に何処かへ逃げ出したい程の恐怖を感じた。

『おはよう、和馬』

それでも、朝になって日が昇れば、明るい光の中で有紗はいつも笑っていて、少しも恐れる様子もなく触れてきた。

触れる、その手と、唇。そして、笑顔。

その温もりに、何かが許されている気がした。

それらを温かいと感じる自分の心だけは自分のものだと思えたから、必死になって縋り付いた。

それは執着だったのか、それとも依存か。

何でも良かった。

有紗を、人を、どんな形であれ同胞だと、守るべきものだと感じるならば、自分の心だけは人間なのだと思えたから。

そうして知識を蓄えていく中で、既に自分と有紗が共に在り続けることが決まっているのかもしれない、という可能性に行き当たったとき、込み上げたのは浅ましい程の歓喜だった。

けれど、同時に恐ろしくなった。

有紗を求めるこの気持ちさえ、この心さえ、「自分ではなくなった自分」のものなのではないか。

生きるための本能が、ただ「必要だから」彼女を欲しいと啼いているのではないのか。

そもそも、自分がどう思っていたところで、自分の道を自分の足で歩くことを躊躇わないだろう彼女に、こんな「化け物」である自分の伴侶として生きることを強いていいのか。

・・・それまでの決して長くない人生の中でも、「女」が「男」に向ける目がどんなものかは知っていた。

彼女の瞳にそんな色はまるでなく、一杯の好奇心でいつだってきらきらと輝いていて、そこに時折気遣う色が滲んで見上げてくる度、胸が軋んだ。

日に日に強くなる飢餓感と渇き。

身体の不調と、どうしようもない苛立ち。

その全てを癒す存在が有紗なのだと、飢えた本能が叫んでいた。

彼女が別のやり方でこの呪縛を解く方法を見つけてくれたなら、と自分が望んでいたのかどうかは今でも分からない。

ただ、有紗は本当にびっくりするくらい前向きで。

男として最低なことをしたはずなのに、和馬を責める言葉など何一つ口にせず、共に生きる道を選んでくれた。

一緒に生きようと言ってくれた。

多分。

あのときの言葉と笑顔に、本当に魂ごと呪縛されたのだと思う。

愛おしいと、痛い位にそう思った。

人じゃなくていい。

「化け物」だっていい。

自分が何者かなんて、そんな哲学めいたことを考えなくても、答えは既に自分の中にあった。

自分は、有紗を愛するもので。

自分は、有紗を守るもので。

それが、全部だ。

何があっても彼女を守ろう。

有紗が自分を救ってくれたように、生涯掛けて彼女を傷つける全  
てから遠ざけよう。

例えばそれが獣の本能だろうと、人の心だろうと、そんなことはど  
うだっていい。

結果は同じだ。

何も変わらないなら、悩むことに意味なんてない。

・・・それでも、慣れない強烈なばかりの衝動はどうにも制御し  
難くて、有紗が拒絶しないのの良いことに、それこそ獣のように求  
め続けた。

その衝動をどうにか飼い慣らすまでの暫くの間は、有紗の傍に自  
分以外の「オス」がいることに苛立ちばかりが募って、有紗は素直  
に気持ちをくれているのに、わざわざそれを確かめるようなことも  
した。

多分、有紗は知らないから。

彼女が思うよりずっと深く、濃く、誰よりも何よりも自分自身よ



りも、和馬が有紗を大切に想っていることを。

こんな運命に巻き込んだことを、謝ったりはしない。  
そんなことをして、今の自分達を否定したりしない。

だって、有紗がいつだって笑っているから。

嬉しそうに、楽しそうに、幸せそうに。

だから、否定なんかしたりしない。

誰にも否定させない。

前とは少し違う命だけど、それでも前よりずっと生きていると感じる。

生まれて生きる、喜び。

それをきくと、有紗に出会うまでの自分は、本当の意味では知らなかった。

自分の命よりも大切に想える相手がいて。

その相手が、いつでも手の届くところにいる。

笑ってくれる。

愛して、くれている。

『和馬』

そう、自分の名を呼ぶ声に、自然と柔らかな甘さが混ざるようになったのはいつだったか。

（・・・有紗）

お前が、誰よりもしぶとくて逞しいことなんて知ってる。

だけど、それだけじゃないことだって知っている。

お前を抱き締めて過ごす夜に、自分が時々泣きながら眠っていることに、お前はきつと気付いていないのだろうけれど。

傍にいるよ。

お前が当然のように「オレ」を受け容れてくれたように、オレだけは何かあってもお前の傍にいる。

だから、有紗。

笑っていてくれ。

ずっと。

オレの傍で。

## 第24話 恋人は悪役？

「iiiiiiiiいよっしゃあああああ！！」

人が、歓喜の雄叫びを上げるとき、というのはどう言ったシチュエーションでしょうか。

まあそれは人それぞれ、スポーツ観戦と言うひともいれば、気になる相手からいいカンジのメールが来たとき、試験でも選挙でも貯蓄金額でも兎に角目標を達成したとき。

或いは宝くじに当選！なんてことにでもなれば、雄叫びの千回くらいは海に向かって叫んじゃうのも当然というもの。

しかし今、有紗が「うふふふふ」と少々不気味な笑いを垂れ流しているのは、そんなササヤカな幸福の故ではない。

（やっと・・・やっと・・・っ！ぶよぶよテトリス人生とおさらばですーっ！！）

そう。

例の諸悪の根源、マッドサイエンティストのアホオヤジのせいであっちへばちゃん、こっちへころりと「落ち」まくっていた有紗の体質（？）が、見事に解消されたのである。

季節は夏。

別に「落ちる」ことに周期があつたわけでもないが、和馬と共にヴァンフレッドの世界に召喚されたのをカウントに入れなければ、

もう半年近く「落ちて」ないなあ、とは思っていたのだ。

それである晩、『最近どうよ?』と暇でもなかるうに連絡を寄越したアホオヤジにそう言ったところ、『あーそりゃそうだろうねえ』とへらりとした返事が返って来たのだ。

一瞬硬直した後、どういことだと問い詰めたところ、あくまでのほほんとした空気を崩さない声のんびりと答えた。

『アリサがあちこちに「落ち」やすかったのは、ボクが君を召喚したときの歪みに、君が同調しまくっていたからだもん。この間その歪みを解消するのに成功したから、多分もう「落ちる」ことはないと思うよー?』

その言葉を十回ほど牛のように反芻してその意味をきつちりと脳が理解した途端、有紗は「そういうことは、さっさと言わんかこんのクソアホオヤジー!!!」と絶叫していた。

これだからマッドサイエンティストは嫌なのだ!

全く、ヒトとしてどうかと思う!

自分の興味のあることには一般人がどん引きする程喋りまくるくせに、一般的に必要なコミュニケーションは不全もいいところ。

有紗がどれだけこの体質を鬱陶しく思っているのか、誰よりも知っているはずなのに、この気遣いのなさと言ったらいつそ笑えるレベルだ。

目の前に相手がいたら、けたけた笑いながらハエ叩きでその顔に

ばつちり編み目が付くほど張り飛ばしていたに違いない。

しかし、アホオヤジとの通信をぶつちり切って、改めて現実を咀嚼したところ、冒頭の雄叫びに繋がった、とそう言う話である。

（あああ・・・っもう、いつ肉食獣のウロウロする森だのサバンナだの、巨大水棲獣の屯する湖だの、近くに無人島ひとつない海のど真ん中だの、噴火直前の火山の真上だのにいきなり放り出されるかもな恐怖に怯えなくていいんだーっ！）

本当に、我ながらよく生きていたものである。

因みに火山の真上に放り出された直後は、暫くトラウマで温泉という文字すら見たくなかった。

しかし、そんな恐ろしさともお別れだ。

世間一般の高校三年生は、夏休みと言えば受験シーズンまっしぐらと言うところだろうが、幸い和馬は推薦で都内の大学に進学することが確定しているから遊び放題。

このうきうきわくわくなテンションのまま、ヴァンフレッドの世界に遊びに行こう。

遺跡巡りだろうと遺跡発掘だろうと遺跡造りだろうと、今なら脳みそ残りほーの小学生並に楽しめそうだ。

（ふっふっふ、王宮裏の森のずっと先に、グランドキャニオンばりの岩場があったのよねー。あそこにこっそりアンコールワットなブツを作っておいたら、いつか見つけた誰かがびっくりするだろうな

あ！  
）

・・・そんな、異世界の歴史学者が発狂しそうなことを、うっかり考えてしまったりもしたけれど。

取り敢えずは、王子様のいる世界に再びれつつらゴーです！

・・・すいません、調子に乗りました。

友達の家遊びに行くときは、前もって連絡するのがスジってモノですよ。

いきなり押しかけたりしたら、そりゃあ迷惑というもんです、はい。すいません。ゴメンナサイ。勘弁して下さい。

「・・・有紗」

ああ、和馬の声も引きつってるし！

しかし、失敗を笑って許されるのは、か弱い女の子だけですよね、  
と言うことで。

構築式、展開。

「目標捕捉・敵認識・照準確保。・・・氷棺！」

次の瞬間四方八方に冷気が走り抜け、周囲の見渡す限りの草原に  
わっさりと群れていた真っ黒い獣達は、立方体の氷の中に閉じ込め  
られていた。

・・・おお、戦術用術式なんて、何年ぶりだろうか。

血みどろの真っ黒い獣の群れね。みんな大きいなあ、虎っぽい  
とオオカミっぽいのと鹿っぽいのと何だか種類もぐちゃぐちゃ混じ  
って統一感ってものがない。

ほほー、ナルホドナルホドあれが噂の魔族さんですか。

ああほんと上手くいって良かった良かった、なーんて言ってる場  
合じゃないんですよ。

(うつっひいいいいいいっ！！)

「のわあっ！？」

がつしと和馬にしがみつき、力任せにぎゅうぎゅうとその胴体を  
締め上げる。

怖かった怖かった怖かった怖かった怖かった怖かった。

もひとつおまけに怖かった。

ホラ少年漫画とかでよくあるじゃないですか。

戦闘シーンで敵さんとかが、いよいよつてときに「ふっふっふ、ワタシには奥の手があるのだヨ」なカンジで「ワタシにこの技を使わせるとは大したモノだ」みたいなTHE・奥義！を繰り出したりするじゃないですか。

アレ、無理ですから！

普段使っていない技とか武器とか、そんなもんひよいひよい使いこなせてたら、誰も苦労しませんから！

普段包丁持たない女子高生が、いきなり満漢全席作れって言われたって「無理ッス」ってなるでしょう！？

何事も反復練習と訓練と実践と慣れがないと、思い通りの結果なんか出せたりしないんです！

一度身につけたことだって、少しサボったらあつという間に「あれ自分、どうやって出来てたんだっけ」ってなるんです！

人間忘れる生き物なんですよ、特に基本がのほほんな戦争知らない日本人なんて、基本思考に戦闘モードなんて入っていないんですよ！

「あー・・・」

みーみーと和馬にしがみついてガクブル状態の有紗の耳に、どことなく気の抜けた、聞き覚えのある声が届いた。



よう、と片手を挙げる和馬の声がちよいと苦しげなのは、有紗が全身全霊掛けてその胴体を締め上げているからで。

「また、随分ととんでもないときに。何も、魔族討伐の最中ど真ん中に跳んでこなくても良かったのではないか？」

ああ・・・アホの子のヴァンフレッドに、反論しようのない正論を言われてしまいました。

そりゃあ、転移先の座標の安全確認を怠るとか、「落ちモノ」のプロ（？）失格ってもんですね。

・・・ショックだ。

ますますズーンと落ち込んだ有紗の背中を、和馬の手がぽふぽふと叩く。・・・うん、フォローのしようもないってことですね。

「まあ、お陰で僕達は助かったが」

と思ったらヴァンフレッドにフォローされた！

「殿下！」

ええヒトやー、と有紗が顔を上げかけたとき、今度は知らない声が危機感たっぷりにヴァンフレッドの注意を促した。

咄嗟に頭上を仰ぎ、遙か上空に幾つもの点・・・って、あれだけ上空なのにちゃんと鳥の形だって分かるってことはどれだけバカでかいんだろう。

色は多分黒なんだろうな。

遠すぎてよく分からないけど、物凄い殺気というか、食欲というかがびしばしに飛んでくるもんな。

飛んでるモノって言うより、急降下してくるモノって滅茶苦茶照準付けづらいんですよ、どうしようかと思ったとき。

「・・・うぜえな」

ぼそ、と和馬の呟きが聞こえて、ひつつき虫の有紗を片手で抱えたまま、もう一方の腕を無造作に振るのが見えた。

(え)

次の瞬間、上空に群れていた筈の黒い鳥たちの姿は綺麗サッパリ消えていた。

一瞬、白い炎のようなものが空気を歪ませたから、多分焼き払った・・・というより、アレだ。

以前、有紗が和馬にプロポーズしたときに、図書館の壁が同じ目に遭っていた。

つまり、蒸発。

どれだけ超高温。

・・・ごめんなさい、前言撤回します。

和馬は多分、少年漫画の悪役、出来ます。

## 第25話 死亡フラグはきらきらと。

それから再会の挨拶もそこそこに、ヴァンフレッドと愉快的仲間達・・・ではなく、魔族討伐隊を編成する近衛騎士団第四師団の方々から、近頃この森付近で魔族の出没が頻発していると聞かされた。

因みに第四師団というのは、第四王子であるヴァンフレッドを護衛するのがお仕事なのだそうだ。

その団長は、猫耳もナイスチャームな赤銅色の髪と水色の目をした、大人のお色気たっぷりの三十二歳、カイル＝ムート。

流石に初対面で「その三角お耳を触らせて下さい！」とは言えなかったが、かなり手がむずむずしてしまった。

そして副団長は栗色の長髪を後ろで括り、怜悧な印象のダークグリーンの瞳が素敵なアルフォンス＝トルザ。

いかにも仕事が出来そうな落ち着いた感じだが、こういうタイプって俺様タイプの上司の下で一生苦労するんだよなあ、なんて失礼なことを思ってしまった。

ほら真面目なひとつで、やんちゃなことを好きなように出来るひとに憧れるところがあるじゃないですか。

そのフォローをついついやってる内に、気が付いたら腐れ縁で逃げられなくなっているとか、そういう雰囲気かひしひしと。

実際、有紗を目にするなり口説いて来ようとしたカイルを、即座

に黙らせたのもアルフォンスだった。

和馬が何か反応するより前に、アルフォンスの剣の柄がカイルの脇腹にめり込んでいるのを見たときには、どんな反射神経ですかと呆れたが。慣れか。

「……っつてーな、何しやがんだ、アル！」

「それはこちらのセリフです。殿下のご友人にして我らの恩人の方々に、何をいきなり恥を晒そうとしてやがんです。少しは見境というものを持って下さいハレンチ上司が」

「アホか！美人を見かけたら口説くのが、正しい男のマナーってモンだろうが！」

「……」

「な、何だよ？」

アルフォンスにじっと見詰められ、何故かびくついた様子のカイルから、ダークグリーンの瞳がゆっくりと有紗に移った。

「アリサ殿」

「はい？」

「あなたはお幾つですか？」

「？十五ですけど……」

有紗の誕生日は十月だ。

しかしそう言った途端、カイルがぎょつとした顔をしてまじまじと有紗を見詰めてきた。

「ウツソだろ、十五！？その体でか！？」

直後に叫ばれたその言葉に、一瞬辺りが静まり返り。

「・・・ヴァン」

「な・・・なんだ？カズマ」

「こいつの尻尾、むしっていいか？」

カイルには、素敵な猫尻尾（長毛種タイプのふっさふさ。ああ触ってみたい）もついてます。

かなり本気に聞こえた和馬の言葉に、その尻尾がぶわっと広がった。

（おおっ！？）

凄い、そこまで大きくなるとは思わなかった。

「ああ、それはいい考えですね、カズマ殿。私にはサツパリですが、その尻尾は同族の女性には堪らなく魅力的に映るらしいのですよ。その鬱陶しい尻尾が身だけになれば、さぞ団長の周囲は静かになってくれることでしょう」

お手伝い致しますよ、とにこりと笑むアルフォンスは、思っていたよりずっと怖いひとだったみたいです。

それともあれか、ずっと溜まりに溜まっていたストレスがここで一気に解放されているとか、そういうことだろうか。

「まままま待てーっ！落ち着けアル！いえ、落ち着いて下さい！」

「いえいえ、その尻尾を丸刈りにすれば、成人前の女性を口説こうとしてしまった恥ずかしさなど、きつと塵の如しだと思いますよ？」

・・・敬語責めって、ちょっといいかもしれない。

その場はどうか、ヴァンフレッドの「まあまあ」という取りなして、カイルの尻尾は無事と相成った。

良かった。ハゲた尻尾はきつと可愛くない。

しかし、改めて「魔術師です」と紹介されたものの、やはり有紗の氷漬けにしろ、和馬の瞬殺にしろ、彼らにとってはかなり常識なものだったらしい。

騎士さんの中には「俺達の苦労って、苦労って・・・くっ！」とか泣いちゃってるひとましたし。

まあ、それはそれとして、基本的に単独行動が主の筈の魔族が、こんな風に群れるというのは非常に珍しいことなのだそうだ。

「前回の記録だと、もう二十年以上前になるかな。・・・魔族が元は普通の獣や精霊だったというのは話したと思うが、つまり基本的

に連中は『魔族』という形では繁殖しないのだ」

有紗の作った「魔族の氷漬け」を、軽く拳で叩きながらヴァンフレッドが言う。

「しかし稀に、魔族は群れ集い、その群れの中で序列を作り出すことがある。そして、その群れの全ての個体に最強と認められた個体がメスとなり、第二位のオスと番って卵を産む」

そうして生まれた「純血の魔族」は、一般的な魔族とは比べものにならないほど知能が高く、また能力もずば抜けているらしい。

要するに現在は魔族の繁殖期で、その為人的被害もとんでもない勢いで増加しているのだとか。

・・・楽しいサマーバケーションのつもりが、何だか随分血なまぐさい感じがしてきた。帰ろうかな。魔族怖い。

ああでもここで「所詮他人事だし」みたいな顔して帰ったら、物凄く後味悪いんだろうな。

悶々と考え込んでいると、それにしても、と和馬がヴァンフレッドに声を掛けた。

「お前、仮にも一応王子様だろう？なんでそれこそこんな前線真っ直中にいるんだ？」

あ、言われてみれば。

しかし、どことなく騎士団の面々に微妙な空気が流れる中、ヴァ



ンフレッドはけろりと答えた。

「そりゃあ、僕が前線に出れば民は『王族直々に魔族討伐に取り組んでいる』と安心する上に、母上が庶民の出だから、まかり間違つて死んでも貴族からの反発が無いからな」

そう言うことをさらつと言わないで貰えませんか。

こちららその一般庶民なんですよ。

その庶民がお母さんだから、アナタが死んでも困らない的な発想がまかり通っているとか、正直すっぱいム力つくんですよ。

「それに何より、魔族が増えて瘴気が濃くなるとル力の体に障る」

って、やっぱりそれかい。

何でもヴァンフレッドの可愛い弟ル力君は魔力適性が高すぎて、しょっちゅう「魔力酔い」を起こしてはぶっ倒れているのだそうだ。

能力が高すぎる子どもにはよくあることだが、受け止める情報量にまだ出来上がっていない小さな体が耐えられず、神経が参る前に自衛手段としてブレーカーが落ちるようなもの。

そう言うヴァンフレッドも、現王族の中では唯一ル力君と同じ位魔力適性が高く、幼い頃は同じように苦しんだ時期があったため、他の適性の低い兄弟達よりずっとその気持ち分かる、というのがブラコンの真相らしい。

・・・今まで「ちょっとキモい」とか思ってたごめんなさい。

そんなルカ君は、この魔族の繁殖期が始まってからと言うものの、浄化作用のある結界を張り巡らせた後宮から、本当に一步も出る事が出来なくなっているらしい。

実際に魔族の脅威に晒されている庶民の皆さんに比べたらナンボのもんじゃという向きもあるかもしれないが、小さな子どもがベッドですつと苦しんでいる図というのは、どうしたって胸が痛むものだ。

しかし、騎士団の方々はちょっと意見が違つたらしい。

ヴァンフレッド直々に前線に出ていなくても、近衛騎士団である彼らが動けば十分に民は安心するし、単独の魔族討伐ならまだしも、群れた魔族相手に主を守りきれ確実な自信はない。

「俺達も、殿下の力があれば助かるとは言つても、普段ならともかく、繁殖期の討伐なんて誰も経験してねえんだから、出来れば王宮で大人しくしていて欲しかったんだが・・・」

溜息混じりにカイルが語つたところによると。

繁殖期が始まって暫く経つた頃、熱を出して寝込んでいるルカ君のお見舞いに行った際、泣きそうな顔をしながらヴァンフレッドの手をぎゅっと握りしめたのだそうだ。

『ヴァン兄上、もう魔族討伐になんか行かないで下さい。ヴァン兄上が行けば、民が喜ぶんだろぅなつてことは分かつてます。でもヴァン兄上がいなくなつたら、ぼく、ぼく・・・っ』

『・・・ルカ？お前はいずれこの国の王になるんだ。そんなお前が民より僕のことを優先するなんて、いけないことだよ』

そのとき、確かにヴァンフレッドの顔は緩みまくっていたそうなの。

『僕は死なないよ。必ずお前のところに帰って来る』

『兄上え・・・』

因みに、ルカ君は銀髪碧眼の超絶美少年だそうです。

その様子を眺めていた侍女さんたちが、揃って鼻血を吹きそうな顔をしていたそうです。

確かに、どこの恋人同士の今生の別れですかっで感じですよ。

ていうか、ヴァンフレッド。

それ、死亡フラグじゃない？

## 第26話 ムンクの叫び

流石に、死亡フラグをばっちり立ててしまった友人を見捨てて帰ることが出来るほど、薄情にはなれません。

・・・ホントは嫌なんだけど。

だって怖いのだし。それに例え人間をもりもり食べちゃう魔族って言っただけで生き物は生き物。

切ったら血が出る生きているものを、現在進行形で襲われているわけでもないのに、「はい、アンタら怖いから殺しちゃうね！」なんてさらっと決められる程、有紗はまだ人間捨ててない。

「って、あれ？」

「どうした、アリサ？」

ええと、と以前聞いた情報を頭の中から引っ張り出して確認してみる。

「魔族って、力のある術者なら使い魔に出来るとか言ってますでした？」

そうすれば何も殺さなくてもいいのではないか、と思ったのはやっぱりシロウト考えだったわけで。

「繁殖期の魔族は、普段より数段凶暴化しているからな」

あつさり無理だと言われました。

そりゃそうだ、そんなことが出来るなら誰かが先にやっていますよね、と若干へこんだ有紗の頭に、ぽんと和馬の手が乗る。

見上げれば、もう随分見慣れた瞳が穏やかに笑んでいる。

「大丈夫だ」

「え？」

「いや・・・誰かに大丈夫だって言われたら、何となく大丈夫な気になるだろ？」

少し困ったような顔で、和馬はそんなことを言ってくれて。

どうしましょう。

現在、目の前にある選択肢、どちらを選ぼうか葛藤中です。

一、素直に惚れ直し、きゅんきゅん胸をときめかす。

二、これだから天然のタラシは・・・！と力一杯おののく。

・・・難し過ぎるから、後で考えよう。

何にしても、このまま不気味な魔族のオブジェを放置して、いずれ氷が溶けたときにでろでろに腐ってもアレだと言うことで、氷棺を解除して魔導具の素材になりそうな牙やら爪やらを回収することになりました。

流石にソーユーグロい作業は遠慮させてもらいましたけど。みんなもしくなくていいよーって言うてくれたし。

和馬もやめとけばいいものを、他の人達やヴァンフレッドまであれこれ捌いたりむしったりしている中、男の子のプライドが刺激されたのか手伝いに行つて、すっかり吐きそうな顔色になっていた。

しばらくお肉は食べたくないそうです。

それから、彼らが今回の魔族討伐で滞在しているという離宮に移動した。

前回お世話になったヴィクトール氏もそこにいて、相変わらずのナイス執事っぷりに感動しつつ、再会の挨拶と「殿下をお助け下さつてありがとうございます」なんてお礼もされてしまつて、少し照れた。

いや、勿論ヴァンフレッドや騎士団の人達からお礼は言われたんだけど、ヴィクトール氏のはこう・・・うん。

ヴァンフレッドのことを、ほんとに大事にしてるんだなあっていうのが伝わってくる感じで。

誰かが誰かを大事に思つてる空気つて、やっぱりいい。

それに引き替え、「お母さんが庶民だから危険な魔族討伐をさせて、うっかり死んでも気にしない」連中つたら何なんだ。

いや、あの王宮の誰も彼もがそうじゃないのだろうとは思つけれど、少なくとも責任者。

つまり王様。ヴァンフレッドの父親かも知れんが、その内見ているがいいわ。

いつか会うことがあったら、和馬にちよいと風を操ってもらって、カマイタチでハゲ散らかしてやる。安心しろ、てっぺんに一本だけはちよろりと残してやる。

「あ・・・アリサ？今、何か不穏なことを考えていなかったか？」

「いーええ？」

ヴィクトール氏に淹れて貰った美味しいお茶を頂きながら、にっこりと笑む。

流石に郊外の離宮だけあって、王宮内の豪奢極まりなかったヴァンフレッドの離宮とは比べものにはならないが、それでも十二分に立派な応接室には、有紗と和馬、ヴァンフレッドの他に、騎士団の団長と副団長も同席していた。

男のひとは制服を着ると二割増しになると言うが、カイルもアルフォンスも私服のセンスはいいらしく、むしろそれぞれの個性であるお色気と冷静さが強調されていて、実に眼福だ。

「ていうか、王子様。駆け落ちした元奥さんのこととか、新しいお嫁さんの話とか、色々聞きたいことがあるんですけど」

実はずっと気になっていたのだ。

わくわくしながら訊ねると、カイルがブフォツとお茶に噎せた。

アルフォンスはティーカップを静かに持ったままだが、微妙に固まっている。

この反応は、もしや何か面白い顛末があつたのだろうかと期待が膨らむ、わくわくわく。

いや、単に「そんなプライベートなことをいきなり訊くか!？」な動揺かもしれないけど。

いいじゃないか、当時現場にいたんだから。

しかしヴァンフレッドは、ああ、とティーカップをソーサーに戻すと、何でも無いことのように口を開いた。

「新しい妻については、保留中といったところだな。一応候補は決まっているらしいのだが、何しろ繁殖期が終わるまではそんなことも言ってもらえん。・・・元妻は」

そこで珍しく、ヴァンフレッドはちよつと言いよんだ。

「余り耳障りのいい話ではないのだが、それでも良いか？」

「むしろ是非」

がつつり食いついた有紗に、微妙な視線が集まったような気もするが、気にしない気にしない。

テレビのワイドショーが、どうしてあれだけ視聴率を取っていると思ってるんですか。



人間、ゴシップネタが大好きな生き物なんですよ。みんな正直になりましょうよ、他人の不幸は蜜の味って言うでしょう？

「そ、そうか・・・」と若干引いてくれたヴァンフレッド曰く。

彼の元妻、トリスティア姫は、祖国クレタにいた頃から彼女に想いを寄せてくれていた恋人がいたそーな。

それはクレタの有力貴族、その末っ子三男坊のお坊ちゃま。

まあ、彼らなりに「身分違いの恋！」だの、「愛こそ全て！」だの、「世界はふたりの為に！」的な諸々があつたようなのだが、何と言つてもお姫様が嫁いだのは国内貴族ではなく、外国の、しかも王族。

そんなお姫様を搔つ攫つたお坊ちゃまに、クレタの面々が「ひいひいひい！」とムンクの叫びになったことは想像に難くありません。

（あ、ムンクの叫びつてあのヒトが叫んでいるシーンを描いたわけじゃなくて、あのヒトが「うーるせー、なにこの音」って耳を塞いでるトコロを描いた絵らしいですよ）

国を挙げての搜索に、若いふたりはあっさり捕獲。

しかし既に時は遅し、ヴァンフレッドは結婚誓約書をポイしちやつてるし、元々白い結婚だったというのが暗黙の了解とはいえ公然の事実だったこともあって、クレタ側が平謝りすることきれいに離婚が成立したのだそうだ。

とは言え、それで全てがメダタシメダシと行くほど、世の中そう甘くない。

国の体面に盛大に傷を付けてくれたお坊ちゃまは当然実家から勘当されて、お姫様も王族から除籍。

元々身分を捨てて「アナタさえいれば他には何もいらないワ」と恋人の手を取った筈のお姫様も、そんな浅はかなことを断行するだけあって、その内ほとぼりが過ぎればなし崩しに許してもらえらるうと甘っちょろいことを考えていたようだ。

彼らは誰にも祝福されることなく結婚したものの、何の後ろ盾も甲斐性もない貴族のお坊ちゃまと、王族としてのプライドと教養だけは売る程あつても、食事と言えば侍女が持つてくるもの、というお姫様がタッグを組んでも何の生産性上がるわけもなく。

「あれから何度か、彼女から援助を求める手紙が来てな・・・」

「・・・はい？」

どうやら元嫁の元お姫様は、ヴァンフレッドが嫌がる彼女に一度も触れようとしなかったことや、公式行事の度に義務として贈っていた宝飾品の質の良さから、彼のことを「自分に恋い焦がれるカワイソウなお人好し」だと思っていたらしい。

あの手紙なあ、とカイルが溜息混じりにぼやく。

「面白えっちゃ面白かったけどな。『贈り物を持って来るなら会って差し上げてよくつてよ！』ってカンジのことをずらずら書いた後に、こそつと殿下が魔族討伐でガンガン名を上げてることも知っ

てるワって書いてあんの」

それを受けて、アルフォンスがおっとりと頷く。

「あんなぴよぴよした甘ったれのもやしっ子と殿下を引き比べるだけでも間違っているというのに、今更殿下の素晴らしさに気付いてコナを掛けてくるなんて、頭と尻の軽い女というのは、一体何を考えているのか、ええ。本当にさっぱり意味不明ですねえ」

勿論その手紙は私が纏めて送り返しましたよ、向こうの思い違いを懇切丁寧に教えて差し上げる一筆を添えてね、とにこやかに笑うアルフォンスに、有紗はこのひとの前でヴァンフレッドの悪口だけは絶対に言わないようにしよう、と心に誓った。

・・・ぴよぴよって。

## 第27話 武器の名前は

「少年漫画の悪役が出来ちゃう」和馬と違って、騎士団の方々は魔族討伐の為、日々真面目に鍛錬をしている。

若く鍛え上げられたぴっぴちの肉体美が躍動する様は、マジで眼福です。

一方、和馬は自分の力をほぼ本能的に理解して制御しているし、それにその、「お前が危険な目に遭わない限り、オレがキレて暴走するなんてことはないよ」で、「オレが絶対そんなことはさせないけどな」だそうなので。

・・・はい。

私はとっても幸せ者です。

（って言うか！どこであんな殺し文句覚えてくるかなあ！？素！？素なのアレ！？）

もういいです、こうなったら力一杯天然タラシにきゅんきゅんしますとも！

うっかりひとりで思い出して、にへらと笑ってしまいますとも！

・・・気を付けよう。

他人様に見られたらきつとかなり不気味だ。

有紗自身は、「魔族討伐手伝いますヨー」と言っただけで、またビビって次はテンパらないとも限らない、というか思い切りそうなりそうな予感がびしびしだったもので。

取り敢えず、氷棺 だけはいつでもどこでも起動出来るように勘を取り戻すべく、訓練場の隅で反復練習中である。

アレは見た目にグロくないし、前回ほぼ完璧な形で仕留めた魔族の死体をバラすことが出来た（結局グロかったんだっただけに、ヴァンフレッド達からかなり好評だったのだ）。

行くぞー、と言う和馬の声に応じて、彼の周囲にある沢山の石が風に乗ってふわりと風船のように舞い上がる。

それがランダムに、かつかなりの高速で飛び交うのを捕捉して、氷漬け。

ひたすらそれを繰り返すだけだが、あれこれ付け焼き刃でやろうとしたってどれも中途半端になるだけだ。

どっちにしろ、有紗と和馬は「客分」扱いなのだから、万が一助力を請われたときに、請われただけの働きが出来ればいい。

ぶっちゃけ、命を懸けるつもりなんてサラサラないし、いざとなったら敵前逃亡致します。

まあ、カイルとアルフォンスに、「万が一のときは、殿下だけ連れて逃げてくれ」とヴァンフレッドのいないところで頼まれてしまったから、それだけは果たすつもりだけだ。

逃げるのは得意技です、バッチ来いです。

そうは言っても、彼らは思っていたよりずっと強い。

魔族討伐隊に編成されたメンツなのだから、当然と言えば当然か。様々な攻撃用術式を組み込んだ彼らの武器は、利き腕全体を覆って更に足許まで届く程の、巨大な鋭い爪の形をした魔導具だ。

普段は腕輪の形をしていて、戦闘形態時には剣にも盾にもなるそれは、「魔族狩り」というそのまんまの名前がついている。

誰が決めたんだろう。・・・きつと、恥ずかしい名前を付けられなくなかったひとがいたんだろうな。

個人別にチューンナップされたそれは、それぞれの得意な術式が付加されていて、皆さん景気よく目標に爆炎だの水圧だの風圧だの雷撃だのを叩き込んでいて、ちよつと楽しそう。

魔力適性が高いと言っただけあってヴァンフレッドの攻撃はかなり派手だし、騎士団長のカイルや副団長のアルフォンスも同様だ。

「あーっはははは、うはははははは！」

「オーラオーラオーラ、みんな纏めて死にさせえエーっ！」

「三十二。三十三。三十四。三十五・・・」

・・・魔族討伐のとき、彼らの傍にはいかないうようにしよう。うん。

そして、その魔族の群れが現れたと一報が入ったのは、七日後のこと。

ヴァンフレッドの王族色だという青を基調とした騎士団の制服を、いつの間にかヴィクトール氏が有紗と和馬の分も用意してくれていて、採寸されたわけでもないのにぴったりのそれに、改めてこの服飾技術の高さに感動した。

いやだって、ホントにかっこいいんですよ！

コスプレ気分だと言われようと構いません！

すっかり和馬と「女将校と部下ごっこ」をしたくなったのは内緒です！

かっちりとした詰め襟にはシンプルながら凝った刺繍がされちゃったりして、少し長めの上着を締めるベルトは黒、ズボンと足許のブーツも黒で、全体的にとってもシャープな印象。

ああ、スタイルがいいと何を着ても良く似合う。

きつと和服も似合う筈。

今度浴衣とか着てくれないだろうか。男の人が浴衣の袖をまくって、剥き出しになった二の腕とか大好物なんだけど。

「有紗？」

「んー、何でもない、何でもない」

すいません、和馬で妄想している場合じゃないですね。

軽々と抱き上げてくる和馬の首に腕を回す。

ヴァンフレッドを始め、騎士団の面々は馬で移動だが、和馬は相変わらず馬に怯えられるし、有紗も馬術経験はない。

よって、彼らの後を空を飛んでついて行つて、必要そうであれば介入する、という話になっている。

ここは彼らの生きる世界で、経験というのは貴重な財産だ。

それを無闇矢鱈と無責任な部外者が奪つていいものじゃない。

ならば何故ついていくのかと言えば、有紗達の「非常識な力」が後ろについていると思うだけで、彼らの恐怖が減るからだ。

けれどもそもそも、彼らは有紗達がいるからといって油断するようなアマチュアではないし、部外者に頼ることを良しともしていない。

万が一の保険のようなもの。

だから、これは本当に有紗の自己満足だ。

命懸けで戦う彼らに、命を懸けるつもりのない有紗が「手を貸す」なんて、きつと傲慢もいいところ。

それでも、自分に出来ることがあるのに、友人が死ぬかもしれない場所に行くのを、黙って見ていることなんてやっぱり出来ない。



青の制服を纏った彼らが一糸乱れぬ隊列を組んで駆け出していくのを、離宮の屋根の上、和馬の腕の中というこれ以上無いほど安全な場所から見詰めていた有紗が、ふと名を呼ぶ声に顔を上げると、ちゅ、と柔らかなキスが唇に触れた。

「行くぞ」

・・・うん。

和馬の瞳が、大丈夫って言ってる。

ひとりじゃないから、大丈夫。

そうだった。自分はもう、ひとりじゃない。

どんなことも、どんな結果も分け合って受け止めてくれるひとがいるんだった。

だから、大丈夫。

「うん。行こう」

ふたりで、一緒に。

有紗が頷くのと同時に、捲いた風がふたりの体を重力から切り離した。

とまあ、一応そんな殊勝な気分でヴァンフレッド達の後を追って来たのですが。

（うーわー・・・）

何て言うか、皆さん流石プロ。

襲撃があつたという村は、既に半球状の結界に覆われて完全に保護されていて、その外縁部ではそりやもうあちこちで派手な戦闘が繰り広げられております。

今回の群れは熊タイプがメインみたいだ。

他にも小型の何かがいたみたいけど、それらはもう全部動かなくなっている。

熊、と言つても動物園で見るテディベアのでっかい版みたいな可愛らしいモノじゃなくて、その三倍はありそうな体躯と異様に長い爪と牙、額にはねじくれた角まで生えている。

幸い、数は全部で七頭と少なく、一頭を数人で取り囲み、完璧なまでに統制された連携で攻撃を加えていく様子は、正に見事の一言。

特に指揮権のある三人と来たら、「何のストレス解消？」って位

に景気よく、かつえげつなく攻撃を繰り出している。

訓練中に聞いた高笑いや雄叫びや不気味なカウントまで聞こえてきそう。

あ、ヴァンフレッドの攻撃で熊の片腕が吹っ飛んだ。

うーん、実に楽しそうだ。まあこんなこと、脳内麻薬大放出してラリってないとやってらんないんだろうけど。

「あいつら・・・完全にイってんな・・・」

ぼそ、と和馬がそう呟いたところから察するに、彼の聴覚はそれらをきっちり捉えているみたいです。

そんな上官にちゃんと従っているんだから、部下の騎士さん達ってばホント凄いです。

村の上空にふよふよ浮きながら、正に高みの見物と洒落込んでいたふたりだが、不意にぱっと和馬が振り返った。

その視線の先を追い、有紗は思わず悲鳴を呑み込んだ。

(ひ・・・っ)

最初は、それが何なのか分からなかった。

深い森の中に蠢く、黒い塊。小山のような。

そしてその正体を理解した瞬間、有紗は本気で泣きなくなった。

今ヴァンフレッド達が戦っている巨大熊すら一呑みに出来そうなそれは。

（魔族って、魔族って・・・っ獣が精霊って言ったじゃんーっ！！）

そう。

それは、獣でも精霊でもなく。

ぐばあ、と開いた顎から滴り落ちる体液も生々しい、巨大なゲジゲジだった。

## 第28話 一番上の王子様

結論。

「何もありませんでした」。

何しろ有紗が「巨大ゲジゲジ」に強烈な拒否反応を示した途端、和馬が一瞬で焼き払ってしまったのだ。

・・・だって、ムシキライ。女の子だもん。

正に跡形も無く、足の一本も残っちゃいねエという完璧さ。

しかも森の木々には一切炎による被害無し。どんな攻撃精度なんだろうか。アレをやってみると言われたら・・・試算しただけで吐きそうになった。深く考えるのはよそう。

よって、ヴァンフレッド達はその存在にすら気付かなかったのですが、まあ・・・うん。

知らぬが仏って、素敵な言葉ですよ！と言うわけで、正しい日本人のコトナカレ主義を発揮しつつ、見事に熊タイプの魔族襲撃を退けたヴァンフレッド達に、村人の皆さんが歓声と感謝を捧げる様子を「良かった良かった」と上空から眺めて、その日は無事撤収と相成ったのです。

が。

(うーん・・・?)

辺りに漂っているのは、「何故にこんなことに？」と言う微妙な空気。

あれから数日後、今日も一同が鍛錬に勤しんでいたこの離宮に、王都からお客様がおいであそばしたのだ。

しかもその人物は、ヴァンフレッド曰く「脳みそ筋肉で暑苦しい」第一王子、オーガスタ殿下。

前回、すぐ下の弟殿下と女性を取り合った挙げ句、五番目の王子様に鳶に油揚げされちゃった可哀想なお人。

・・・確かにムキムキのマツチヨ系で、褐色の髪と瞳を持つ顔の造作はそう悪くないのに、ヒゲまで生やして男らしさを強調しているものだから、「正当派王子様」なヴァンフレッドと向かい合って座っていると、残念ながらかなりムサく見える。

ヒゲ、剃ればいいのに。

男のひとつてカッコいいヒゲに憧れるってよく聞くけど、女の子から見たらうざくておっさん臭く見えるだけなのにな。

二人の王子様が体面中の応接室の中を、ほんの少し開いた扉の隙間から覗いているのは、有紗と和馬、そしてカイルとアルフォンスというこのところお馴染みのメンバー。

彼らと打ち解けた切欠は、元の世界から持ち込んだポテトチップスでした。

運動した後は、塩気のあるものが欲しくなるものです。

みんなはお酒付きだったけど。

（お？）

ちらりとヴァンフレッドがこちらを見たけれど、その視線に困惑が色濃く滲んでいるのも当然というもの。

何しろ彼の一番上の兄上は、この応接室に入ってから以来、足の上で組んだ指先を落着かなく動かしているだけで、一言も口を開いていないのだから。

見ているこっちが苛々してくる。

『ええーい、いい年をした男がぐずぐずと！用件があるならとつと言わんか、このヒゲが！そのマッチョな筋肉はお飾りか！？』

『ホントになあ。・・・あのおっさん、幾つなんだ？』

『あー・・・幾つだったか？アル』

『オーガスタ殿下は、御年三十になれますよ。ご正室との間に八歳になられるお子のシェイド様もあられます』

子持ちかよ！と有紗と和馬だけでなく、カイルまでがツッコんだ。

カイル団長は、王子様だろうがヤローには興味がないそうです。

しかし、そんなこちらの苛立ちが通じたわけでもなかつたが、オーガスタはようやく口を開いた。

「その・・・な。ヴァン」

「・・・はい。何でしょうか？兄上」

ヴァンフレッドがあからさまにほっとした顔をする。

「・・・」

「・・・」

再びの沈黙。

「・・・ねえ、あのおっさんの頭、一発しばいてきていい？」

『落ち着け有紗、それだったらオレがあのおっさんの座っている椅子を、ここからちよいとひっくり返してやるから。上から水をぶちまけてやってもいいぞ？その辺の花瓶やらツボやらのオプション付きで』

『あー・・・バレなきゃいいんじゃない？いや、むしろやれ！』

『バレるに決まっているでしょう！あなた方の不祥事は殿下の恥になるのですよ！？バカな真似をしたら私があなた方をしばき倒しますからね！』

すいませんごめんなさい、大人しく見物します。

それにしても、ヴァンフレッドは偉い。

よくあのうだうだ兄貴に嫌な顔ひとつしないで付き合って・・・



と思ったら。

ガゴン！と景気のいい音が響いたのは、ヴァンフレッドの靴底と、その目の前にあった檜材の応接テーブルの間から。

「・・・兄上？」

にここにここ。

「僕もそう暇な体ではないのですよ。ご用件があるのでしたら、十秒以内をお願いします。じゅ・・・」

「た・・・頼みがあるのだ！」

「八。七。六・・・」

・・・ハイ。二度とヴァンフレッドのことを「アホの子」なんて言いません。

いつちゃった高笑いを垂れ流しながら「魔族狩り」であれこれ吹き飛ばす姿を見たときにもそう思いましたけど、ここに改めて誓わせて頂きます。

あわあわと両手を奇妙に動かしたオーガスタが、本当にようやく声を振り絞ったのは残りカウント三秒前のこと。

「こつ、今回の魔族討伐が終わったら、一度我が離宮に来てもらえんか！そしてシェイドに魔族討伐の恐ろしさを、徹底的に教え込んで欲しいのだーっ！！」

何ですと？

どーゆーコトでしょうかと首を傾げていると、ヴァンフレッドが溜息混じりに口を開いた。

「・・・シェイドに、何かおねだりでもされましたか？」

「そそそそんなのだ！あやつときたら、私に似て脳天気なほやんのくせに、お前達の活躍を聞いて『ボクも魔族討伐に行きたいのですー。父上ー、ヴァンフレッド叔父上に一緒に連れて行ってくれるよう頼んで頂けませんか？』なぞとすつとばけたことを言い出しおつて！」

うーむ、意外と自己評価は出来るマツチヨだったみたいだ。

でも、その図体とだみ声で子どもの口まねはどうかと思う。キシヨい。鳥肌が立ったじゃないか、どうしてくれる。

しかし、とヴァンフレッドが呆れたように首を傾げる。

「そんな子どもの我が儘など、叱り飛ばして諦めさせればよろしいではありませんか」

そりゃそうだ。

それが父親の勤めとゆーモノでしょうに。

だが、オーガスタはその分厚い肩をがっくりと落とした。

これだけは言いたくなかった、という感じに声を絞り出す。

「・・・あやつは、私以上に脳天気なのだ」

「・・・それは・・・実に恐ろしい病ですね」

ヴァンフレッドの顔が恐怖におののく。

そうなのだ、とそこで力一杯頷くオーガスタの脳天気さに輪を掛けた脳天気さ。それは確かに恐ろしい。

「常に『どうにかなるよー』が合い言葉。落馬して足と腕の骨を折ったときも『あれえー？』で済まし、狩りの最中に崖から落ちて行方不明になったときも、『誰かが助けに来てくれるまで寝てようかなー』と思ったら、丸一日お昼寝しちゃったよー」と必死に搜索していた従僕達を笑顔で奈落に叩き落とす。そう言う息子なのだ」

しーん、と辺りが静まりかえる。

丸一日眠っていられるって、それってヒトとしてどうなんだろう  
か。

「・・・ちょ、大丈夫なの？その子、生存本能とかそーゆーモノが付いてないんじゃない」

「いや・・・それだけ図太いってことは、逆に生き残りには向いてるんじゃない？」

「オーガスタ殿下の離宮に行った連中が、時々妙に疲れた顔で帰って来ると思ったら、そういうことだったのか・・・」

「まあ・・・物凄く好意的かつ前向きに解釈すれば、大物と言えな

いこともないかもしれない可能性が、僅かなりとも残されている余地がほんの少しはこの世のどこかに存在しているかもしれないかもしれません？  
』

アルフォンスさん、そんな思ってもないことを無理に言わなくても。

思い切り目がキョドってますよ？

結局、『生きて帰れたらそのように致しますよ』とヴァンフレッドがオーガスタに約束して、その場はお開きとなった。

だから、そうぼこぼこと死亡フラグを立てるなと言っのに。

## 第29話 謎のヒト。

それは、四度目の魔族討伐のときのこと。

コウモリの翼のひつついた黒い蛇達がその時のお相手で、そのうねうね感がかなりキシヨかったのだが、カイルが「魔族狩り」でその殆どを三枚おろしたの筒切りだの開きだのにしてくれたから、あんまり他の面々に活躍の場はなかった。

むしろ皆遠巻きで、「近寄っちゃなんねエ」「迂闊に近づいたらオレらもやられる」的な空気があって、何故だろうと思っていたら、何のことは無い。

猫系獣人族である彼は、長くてによるしたモノが好物なのだそうだ。

主に玩具的な意味で。

他人様の楽しみを奪ってはいけません。

思う存分蛇タイプの魔族と遊びまくったカイルは、返り血でどろどろになりながらもヒジョーに満ち足りた顔をしておりました。

「ふはははは、これだから魔族討伐は止められねエぜ！」

・・・趣味だったのか。

けど、やっぱり副官のアルフォンスにはきつちり叱られていた。

「調子に乗って、収穫前の畑に魔族の頭をすっ飛ばすひとがありま  
すか！」

遊びじゃないんですから、少しは本能ではなく理性で行動するよ  
う心がけなさい！」

アルフォンスのことを、「お母さん」と呼びたくなっている今日  
この頃。

彼ら第四師団の他にも魔族討伐隊が編成され、国のあちこちで活  
動しているという話は聞いていたのだが、そのひとつからメスの産  
んだ卵を発見したという連絡が入った。

訓練中だった彼らがざわめき、その報せを持って来たヴィクトー  
ル氏に、ヴァンフレッドが「本当か」と確認を取る。

「は。フィス力砦を預かるルナメイア將軍が、十八個の卵を確保し  
たとか」

「そうか・・・どうだったか言っていたか？」

「はい。非常に美味であつたと、大変ご満足そうであられました」

(・・・へ?)

ヴィクトール氏の言ったことを一瞬認識出来ず、有紗は点になつ  
た目を和馬と見合わせた。

『・・・今、美味つて言つた?』

『・・・そう聞こえたな』

そんなアイコンタクトをしている間も、周囲では「いいなー」だの「魔族の卵ってすっぱー滋養が高いんだろ？」だの「知ってるか？アレ食ったら魔力適性が桁違いに跳ね上がるんだってよー」だのという言葉があちこちから聞こえてくる。

ということは、やっぱり。

（魔族の卵って、食用なんですかあああああ！？）

どうしよう、凄いいカルチャーショックだ。

食べるんだ、そうなんだ。

いや、日本人だってナマコだの水やだの、冷静に考えたら普通にお魚やタコやエビだって異国の方々から見たら「それ・・・ナマでいっちゃうの？マジで？」な目で見られたりしてますけども！

だってほら、魔族って言葉の響きがアレじゃないですか。

彼らが発する瘴気とやらのせいで、ヴァンフレッドの可愛いルカ君が寝込んでいたりしてるじゃないですか。

そんな魔族さんの卵を、食べて平気なんだろうかという素朴な疑問に答えてくれたのは、気遣いの出来るアルフォンスさんでした。

「魔族の卵は、瘴気を持たないらしいですよ」

あ、そうなんですか。

「まあ正直、私は機会があっても口にしたいとは思いませんが」

ですよね！

「ええ。大抵繁殖期にメスとなるのは、非常にグロテスクな外見をしたものばかりらしいですから。

そんなモノの腹から出て来たブツを口にするなんて、私の美意識が許しません」

・・・美意識でしたか。

なんだろう、アルフォンスさんってキャラが掴み難いな。

ナンバーツーキャラなのか、お母さんキャラなのか、ちょっとナル系なのか。うーん、謎のお人だ。

その謎のお人、アルフォンスのご趣味は、料理。

やっぱりお母さんか。

普段は勿論離宮の料理人さんたちが作ってくれる、毎度美味しい料理の数々を有り難く頂いているのだが、ローテーションを組んで順番に取っている休日には、他の面々が近くの街に遊びに繰り出す中、目新しい食材を買ってきては、これまたプロ顔負けの創作料理を作り上げて夕飯時に提供してくれるのだ。

ヴァンフレッド至上主義で、近衛騎士団の副団長で、やんちゃな団長のお母さん役で、細々した事務仕事もさらっとこなして、いきなり飛び込んできた有紗達にもちゃんと気遣いをしてくれて、おまけに料理の達人。



・・・改めて考えてみたら、何そのハイスペック。

「あー……。アルはなあ、何でも出来すぎるのが困りもんなんだよなー」

そんなことを仰るのは、キャベツ畑にめりこんだ特大の蛇の頭を回収しに行つて、その帰りがけに好みのお嬢さんに声を掛けて卒倒させてしまった上司のカイル（それでまたアルフォンスに叱られていた）。

現在彼の居室で、和馬とこの辺りの特産品である果実酒の飲み比べ中。

一見甘そうに見えたから有紗も少し舐めさせてもらったのだが、それだけでぐわつと喉が焼けて頭がくらくらするほど高濃度のお酒を、ふたりは「美味しいな、コレ」「だろー！オレの一番の気に入りだ！ようやく分かってくれるヤツが出て来て嬉しいぜ！」なんて言つて、とっても楽しそう。・・・チツ。

いいんだ、おつまみ美味しいから。

ふつさふさの素敵尻尾が彼の大好きな蛇のようにふらふらくねくねして、イイ感じに酔っている模様。

和馬はと言えば、全くの平常モード。

それでいいのか未成年。

前回来たときもワインをがぶ飲みして平気な顔をしていたし、ひよつとして竜つてのはお酒に酔わないイキモノなんじゃなからうか。

「みよっ」

と思っっていたら、隣に座っていた和馬の腕が伸びて、所謂お膝抱っこ状態に持ち込まれてしまいました。

酔っているなら酔っているらしい顔をしろ。つか、酒臭い。

「うははっ！あー、若いっていいねえ？愛しちゃってるわけだな！よし！もう一杯！」

どこの青汁ですか。

「有紗ー。愛してるぞー」

「はいはい、私も愛してますよー」

そういうことはシラフで言え。  
酔いに任せて懐くな、鬱陶しい。

逃げようもなくぎゅうぎゅうに抱き締められて溜息を吐いていると、けらけらとカイルが笑っていたのが、はあ、と椅子の背もたれに体を預ける。

「アルはなー。そーゆーのがねえんだわ」

クエスチョンマークを浮かべた有紗と和馬に、カイルはおっさん臭い微笑を浮かべた。・・・いや、大人っぽいつてやつですね、酒臭いというも。

「なーんでも自分ひとりで出来ちまうから、ひとりでいても困らねエんだよな。」

自分が相手に何かするのが当たり前で、何かしてもらうつつか、助けてもらうつつ思考回路がねーのよ」

「あー・・・だから、あんな出来たヒトがアンタの下にいるわけか。一番上なんてのは周りに助けてもらってナンボだもんなー」

「おい、ひとを甲斐性無しみたいに言ってるじゃねーぞ、カズマ。・・・けどまあ、そういうこった」

カイルの揺らしたグラスの中で、赤紫色の液体が煌めく。

「殿下に尽くして、オレの補佐して、部下やお前らの面倒きつちり見て。」

それはそれでアリな生き方だとは思っただけだな、やっぱ男ってのは女がいねーと生きていけねえイキモノだろ。

なのにあのツラだ、放っておいても女が寄ってくるモンだから、手に入れる為に必死こいたこともねーわけよ。きっと、本気で女に惚れたことなんてねエんだろうなあ」

まだ若いんだから、もっとアツく生きればいいのによー、と仰るカイル、御年三十二。

アナタは年の割にはっちゃけ過ぎだと思っつのは気のせいですか。

街に行く度に違う香水のにおいをさせて帰ってくるとか、ここには魔族討伐の間だけの短期逗留のはずなのに、毎日「うわお」ってなる位ラブレターが来てるのはアナタだけですょ？

素敵猫耳のイケメンで近衛騎士団の団長張るだけの实力があるとなれば、女の人達にモテモテなのは分かりますけど、少しは程々にしかないと。

時々部下の騎士さん達が「オレ、あのひとの部下でいるかぎりカノジョとか出来ない気がする・・・」とか、「ちよつといいカンジになったと思つても、最初から団長狙いだったり、そうじゃなくても団長を見た途端、女の子の目つてハートマークになるもん・・・」とか、こつそり陰で泣いてるの、ご存じですか？

彼らだつて近衛騎士団にいる位だから、見目も実力もきつちり平均以上なのに、アナタがそんなお色気ダダ洩れだから、何だか影が薄くなつちやつてるんですよ、気の毒に。

（・・・ハッ。ひよつとしてアルフォンスさんがあんまり街に行かないのつて、その辺までフォローしてるんじゃない・・・！）

だつて、カイルとは別のストイックな魅力もりもりの美形だし、あんなお人がカイルと並んで街を闊歩したら、老女から幼女まで纏めてホイホイ状態になりかねない。

普段あれだけ健気に魔族討伐に取り組んでいるヒラの騎士さん達に、益々出会いが無くなつてしまうことはこれ必至。

「つたく、若さが足りねエんだ、若さが！」

・・・団長。

大事な副官の若さを吸い取っているのは、きつとアナタです。

### 第30話 整備士

今回の魔族討伐では、久しぶりに有紗達の出番があった。

流石にちよつと数が多すぎて、騎士さん達が使っていた「魔族狩り」がついに何個か壊れてしまったのだ。

それに引き替え、ずっと無茶苦茶な使い方をしている筈の三人が使っているヤツはいつもつやつやぴかぴかしていて、何でも魔力適性の高い人間は自分の魔力で常に表面をコーティングしているから、本人が死なない限り、壊れる可能性はほぼゼロなんだとか。

てつきり王子様仕様、上官仕様の特別バージョンなのかと思っていたのだが、

「そんな風に一々仕様を変えていたら、整備するのにとんでもない手間暇が掛かるだろう」

と言う、これまたごもつともなお言葉。

付加している攻撃術式こそそれぞれ個別にチューンナップしているけれど、その基本構造は全て同じ。

そうでもなければ、大量の整備をこなすなんてやってられません。

・・・某宇宙的ロボットアニメで、どうやってメカニックさん達が主人公達の超！特別仕様の機体を整備していたんだろうとか、攻撃食らってぶっ壊れたときに、量産品じゃない特別受注のパーツやら武器やらをどこから調達してたんだろうとかは、深く考えたらダ

メなんだろうな。

きっと、大人の事情ってヤツがあるのだ、うん。

そんなわけで、今日は壊れてしまった「魔族狩り」の補修を行うべく、整備担当の魔術師さんがやって来ました。

それがまた、ちょっと意外な人物。

何せ、まだ有紗と同じ年頃に見える、ポニーテールに眼鏡を掛けたお嬢さん。

名前はシルヴィア・ルース。

おっとりほわわんとした雰囲気を持ち主で、明るい栗毛と灰色の丸い瞳が実に可愛らしいひとなのに、これでとうに二十歳を過ぎているのだから驚いた。

「ああ、よく見えないって言われるんですよ。それでも魔導具の製作・調整に関しては、どこの誰だろうと私の右に出すつもりなんてこれっぽかしも無いんですけどね、うふふふふ」

・・・そう言って作業場となった応接室、目の前にずらりと並んだ腕輪状態の「魔族狩り」にふらふらと歩み寄り、うっとりした顔で頬ずりする彼女から某マッドサイエンティストのアホオヤジと同じ匂いを嗅ぎ取った有紗は、余りお近づきにならない方向で対処しようとして心を決めた。

人間、見かけで判断しちゃあいけません。

危険なモノほど、可愛い姿で擬態しているもんなんです。

「・・・お前が言うか？」

「何か言った？」

いや何でも、とさりげなく視線を逸らした和馬に首を傾げつつ、  
そう言えばこの間の魔族はグロかったなあと思い出す。

順位争い課程での「共食い」によって、もはや元々何の動物なの  
かも分からない、ぐによぐによした胴体に無数の手足や翼がひつつ  
いたような化け物が何体もいて、「気色悪いわー！」となった有紗  
は思わずその口の中に 氷棺 を数百発叩き込み、設定温度を下げ  
たそれで内側から凍らせて粉碎してしまった。

和馬の得意攻撃は基本炎熱系だし、乱戦時はあんまりぼこぼこ使  
わない方が良いですよ、うん。

他の個体はヴァンフレッド達が苦戦しながらもどうにか倒したし、  
今のところ多少の怪我人はあっても死亡者はゼロ。

でも、武器が疲労破損するってことは、それを使う人間の方も疲  
れが溜まっているんだろうなと思っていると、突然目の前を人影の  
ようなものがとんでもないスピードで横切って行った。

「ヴィーッ！！」

「え？ちょ、フィオ！？」

人類には不可能な速さで「うふふふ」と自分の情熱対象を愛で  
ていたシルヴィアに駆け寄り、その勢いのままがばちよと抱きつい  
たのは、ほっそりとしなやかな体躯の黒髪の青年。

(・・・黒髪?)

ここでは和馬以外に見かけないその髪の色にもしやと思う間もなく、突然すっ飛んできたその青年は小柄なシルヴィアを抱き締めたまま、うちゅうーっと盛大に口づけた。

むう、瞳の色が確認出来ないじゃないか。

シルヴィアは何やらじたじたと暴れていたが、次第にくつたりと力尽きた。酸欠だろうな、大丈夫かな。

「ボクを置いていくなんて酷いじゃないか、ヴィー！何で！？どうして！？ボク、何かヴィーの気に障るようなことした！？」

ようやくシルヴィアの唇を解放した黒髪青年の、うるうると潤んだ瞳はやっぱり紅。

くせつ毛とツリ目が印象的な白皙の美青年と言ってもいい容姿なのに、その様子はまるで母親において行かれた幼稚園児。

成る程、これが噂のヘタレ系男子ってヤツか。初めて見た。

「しかも、こんなむさ苦しい野郎ばっかのトコロにひとりでのこのこ来るなんて！

ヴィーはこんなに可愛いんだから気を付けなきゃダメだっていつも言ってるだろ！？

人間のオスなんてみーんな、若くてキレイな女の子なら誰でもいいっていう、節操も良識も道德心も心がけもなっていない、サイツテーのイキモノなんだから！」



いやいや、シルヴィアの使い魔（多分）のオニーサン。

そんな、人類のオスの一面について、そこまで深く抉り込むような真実を口にしないで。

人間、ホントのことと言われると不愉快になるイキモノなんですつてば。

ああほら、特に心当たりありまくりのカイルなんて、ずんどこ不機嫌オーラを出しちゃってからに。

「・・・シルヴィア殿」

こほん、とわざとらしく咳払いをして、ヴァンフレッド。

「そちらが、貴殿に仕える使い魔、『フィオラスリート＝ルルウ』か？」

「は、はい・・・お騒がせして、申し訳ありません・・・」

まだよろよとしたシルヴィアは、「何お前、誰お前」と言わんばかりに警戒心バリバリの使い魔青年に、べつたりと背後から抱え込まれたままだ。

「・・・フィオ」

しかし、ご主人様に名前を呼ばれた途端、彼はほにゃあと相好を崩した。

外見年齢推定二十五、六の、この使い魔さんの実年齢が、とっても気になる。

あのね、とシルヴィアが物凄く疲れた様子で口を開く。

「今は、魔族の繁殖期でしょう?。」

「大丈夫だよ、ボクはヴィー一筋だからね!。」

「・・・そうじゃなくてね? 私はここに「魔族狩り」の整備の為に来ているの」

「そっか。うん、それで?。」

につこにつこ子どものように笑い続ける使い魔に、シルヴィアの肩がぴくりと震えた。

おや、どうなさいましたかお嬢さん。

「・・・私が・・・フィオと同じ魔族を殺す為の魔導具を整備したりしたら、フィオが傷つくんじゃないかしら、とか、フィオに嫌われたらどうしよう、とか、色々、色々考えて悩んでいたアレコレは、全部丸ごとムダだったのかしら・・・?。」

「ええ!?。」

ヴィーってば、そんなどうしようもないバカみたいに下らないことで悩んでくれてたの!?。」

ビシィッ!と周囲の空気が凍り付く。

その冷気の発生源は間違いなくシルヴィアなのに、その使い魔は嬉しげに頬を染めちゃったりなんかして、大丈夫かコイツ。

「もう、嬉しいけど、ホントにしようがないなあヴィーは。ヴィーはボクのことだけ考えていればいいんだから、そんなどうでもいいことで一々悩まなくていいんだよ？」

・・・うん。

世の中って、ホント上手く出来ている。

有紗の中でヴァンフレッドがアホの子から卒業したと思ったら、ちゃんと新しいアホの子が登場するなんて、神様の計らいつて素晴らしい。

和馬やヴァンフレッド達と、そそつと気配を殺して部屋の隅へ移動する。

「ナイわー・・・。あれはナイわー・・・。」

「使い魔ってのは、どれもみんなあんなガキ臭いモンなのか？空気が読めないにも程があるだろ」

「い、いや・・・『黒虎のフィオラスリートルルウ』と言えば、我が国でも十体としない人型を取れる使い魔で、かなり優秀な力を持っていると聞いていたのだが・・・。」

「ケツ、女の扱いもまるで知らねエ、タダのアホガキじゃねーか」

「使い魔というのはバカみたいに主に執着すると聞いていましたが、

本当にそうなのですねえ。

「いやあ、実際に見てみると本当にバカバカしい。驚きました」

「あれ？ヴィー？どうしたの、急に黙りこくっちゃって？」

「……」

シルヴィア嬢は、それはそれは素晴らしいプロフェッショナル魂の持ち主でした。

「ねえ？ねえ？ヴィーってば、何怒ってんのさ？」と小うるさいハエのよーに纏わり付くご自分の使い魔をきつちり無視し、ヴァンフレッド麾下の騎士さん達の「魔族狩り」整備に淡々と取り組み始めたのです。

三日後、完璧に整備し終えた「魔族狩り」に、騎士さん達が心からの感謝をシルヴィア嬢に捧げたとき、その部屋の片隅ではあれからずっとご主人様にシカトされ続けた使い魔が、後ろ向きに体育座りをしていじけておりました。

「……ちゃんと持って帰ってくれるのかな、アレ。」

### 第31話 魔王

「魔族狩り」の整備を終えたシルヴィア嬢が、護衛の騎士さん達と共に王都へ戻って一週間。

訓練場の隅には、全長五メートル（尻尾を入れれば七メートル）はあるかという巨大な黒虎がでろんと寝そべっています。

縞模様がなくても、何となく虎は虎だって分かるもんなんですね。

・・・はい。シルヴィア嬢は、ご自分の使い魔を最後まできっちりシカトして、ひとりでお帰りあそばしてしまいました。

時々丸い耳がぴろぴろと動いているが、相変わらずの轟音、爆音、高笑いに雄叫び、不気味カウントの響き渡る訓練場でわざわざ寝転がらなくても、もっと静かなところで寝れば良いのに。

午前中の訓練が終わり、さあ昼時だとなっても、どんよりとした空気を辺りに撒き散らしたまま、虎は起き上がる素振りもない。

うーん、何だかこのまま腐りそうだ。

その様子を見て、ケツと吐き捨てたのは、滴る額の汗を拭った力イル。

「まったく、鬱陶しいっただけならねエな。女がめえのこと考えて悩んでるのに気付かなかっただけでもガキだったのに、それを『どうしようもないバカみたいに下らない』って、サーイーアークー、もいいところだよなあ？」

カイルさん、その女子高生みたいな「サーイーアークー」ってどこで覚えて来たんですか？

あ、虎の耳がぴくつてなった。

「まあ、少なくとも女性に向ける言葉ではありませんでしたねえ」

お気の毒に、と淡々と応じたアルフォンスの言葉に、虎の耳がぴくぴくつと。

「しかも、自分の失言に相手が怒ってることにも気付かねえって・  
・見てるこつちがハラハラしたよな」

溜息混じりの和馬の言葉には、その首筋の毛が立ち上がりました。

「シルヴィア嬢が置いていったということは、結局自力ではどうにも出来なかったのだな。・・・もしかしたら一生無理かもしれんな」

さらつとヴァンフレッドがトドメを刺すと、虎の見事な体躯がベちゃつと潰れた。

気の毒に。

「・・・でもアレって、シルヴィアさんの使い魔だから、繁殖期なのに大人しくしてるんですよね？契約を解除されちゃったら、やっぱり暴れ出すんですかね」

しかし、有紗が素朴な疑問を口にした途端、虎はぶわつと全身の毛を逆立て、「そんなの、イヤだあああああ！」と人の言葉で泣

き叫んだ。

獣の形をしているのに、声帯とかどうなっているんだろう。

・・・え、男性陣。

何故にそんな恐ろしいモノを見るような目で私を見ますか？

「十五でも、女は女か・・・追い打ちのかけ方がハンパねエ」

「しかも、無意識ですよ、コレ・・・」

「オレ達って、無意識に最悪の可能性を考えないようにしてるんだな・・・」

「・・・流石に少しばかり、気の毒になってきたぞ」

何ですかもう。

「だって、ここに捨てて行っただってことは、もういらないうてことでしょう?」

「「「「「・・・っ!」「」「」

だから、契約の解除もあり得るんじゃないかと思っただけなのに、と首を傾げると、男性陣の顔が見事に引きつり、虎はふうつと傾くと、そのままずしんと地面に倒れ込んだ。

途端に四人がダッシュして、虎の巨大な頭の周りを取り囲む。

「いいいいいやいやいや！ほら、てめエはアレだ、超レアで力の強い使い魔なんだろ！？」

「そそそそそうですよ！それにホラ、何事も心を込めて謝罪すれば、許して頂ける可能性はありますとも！ね！」

「えええええと、アレだ！ホントにいらねえなら、お前のご主人だつて、ここを発つ前にそうしてるって！」

「そそそそそうだぞ！そ、それにだな、お前のような使い魔を手放すなど、高名な魔術師であるシルヴィア嬢はしたりしないと僕は思う！」

何この状況。

男同士の団結ってヤツだろうか、暑苦しいな。

・・・放つとこ。

しかし、さつさと踵を返して食堂に向かおうとした有紗の体が、風に攫われてふわりと浮く。

「ちょ、和馬？」

そのまま和馬の傍らに強制収容されて、びしりと虎の虚ろな紅い瞳を示される。

「いいか、有紗。コレは可哀想な位アホの子のどーぶつだが、一応同じ釜の飯を食った仲だ。それがここで腐れて死んだ場合、その死体の後始末をするのはオレ達だ」



「・・・それは、鬱陶しそうだね」

「だろう。つまり、コレは生きたまま飼い主にお引き取り頂いた方がいいモノなわけだ。しかし、残念ながらここに女心という深淵な謎を理解出来るのはお前しかない」

「だから、シルヴィアさんにどうしたら許して貰えるか助言しろと？」

そうそうそう、と男四人が揃って肯く。

そんなことを言われましても、マッドサイエンティスト臭のする大人の女性の気持ちなんて、あんまり理解出来るとも思えないのですが。

(・・・ふむ)

仕方がない、ここは一般論でお茶を濁そう。

どんよりとした虎の顔を見下ろす。

「女に置いて行かれたからって、いつまでもいじけて迎えに来てくれるの待ってる男って、最悪にポイント低いんだけど」

ビクツと虎の体が震え、周囲から「ひー!」と悲鳴のようなものが聞こえた気がした。

何ですか、ホントのことじゃないですか。

「悪いことしたらゴメンナサイは基本だけど、何でこっちが怒ってるのかも分かってないくせに口先だけで謝られると、却ってムカつくものなのよねえ」

「……………」

「それって結局、こっちのこと全然理解しようとしなくて、自分が楽になりたくて言うてるだけだし。大体、シルヴィアさんみたいに手に職持つてる大人の女の人に、ガキ臭い使い魔が必要かってそもそも疑問だし」

「……………」

「それでもシルヴィアさんの傍にいたいんだったら、それなりの誠意ってモンを見せなさい、誠意ってモンを」

「……………っど……………っどうすればいいのさー!？」

うむ、ゼロ距離で巨大虎にうるうるお目々で泣き付かれるというのも、中々経験出来ることではないだろうな。

「アンタはどうしたいわけ？」

「ど、どうって……………」

ヴィーと一緒にいたい……………とめそめそ俯く巨大な虎。

ああ、丸い耳がへたれて、まさにヘタレ系。  
ちよっと可愛い。

「なんで？」

「決まってるだろ！ボクはヴィーが大好きなんだよ！？」

「じゃあ、そう言いに行けば？」

「・・・へ？」

「大好きだから、一緒にいて下さい、って」

余計なことをうだうだ考えずに、とにかく行動しろというのだ。

このヘタレ系アホの子使い魔が、小難しいことを考えてもムダだろうし、シルヴィアさんだってそんなことを期待してはいないと思う。

いや、世の中のお嬢さんって、時々物凄いドリーム入っちゃうことあるからな、どうだろうな。

昔友達が、彼氏が初めてのデートのときにちよつとアレなファッションセンスなことが発覚して、一気に醒めてたもんな。

・・・でも、ルン三世は、リアルにはいけないと思います。

「そ・・・そしたら、ヴィーは許してくれるかな・・・？」

「さあ」

「そんない！？」

シルヴィアさんのお怒り深度なんて、初対面の部外者に分かるわけがないでしょうが。

「少なくとも、ここでうじうじしていればしてるだけ、シルヴィアさんの中でアンタの価値が暴落し続けるのは確かだと思うけど?」

分かったらとつと帰れ。

死ぬならここじゃないところでお願いします、面倒だから。

「そ・・・そつか・・・」

ずっと「伏せ」状態だった虎が、のそのそと「お座り」状態になる。

・・・でかい。ずっとでろんと伸びてた物体に見下ろされると、何だかムカつく。

「・・・うん。ボク、ヴィーのそこに行くよ」

よしよし、上手くいった。

これでこのでっかい虎の死体処理はしなくて済む。

「ありがとね」

しかし、そんな言葉と共にべろんと温かい舌が有紗の頬を舐めていつて。

「・・・」

「じゃあボク、行って・・・にぎゃあああああ!??」

その日の午後、シルヴィア嬢がご自分の使い魔を迎えに来られました。

ヴァンフレッドから、「貴殿の使い魔がボロゾーきんのようにな  
って死にかけている」と連絡があったからです。

・・・この日から、騎士団の面々の間で、和馬の評価は「魔王」  
になりました。

### 第31話 魔王（後書き）

ちよっとお出かけするので、暫く更新お休みします。

まだまだ暑い日々が続くと思いますが、皆様もお体にお気を付けて  
！

### 第32話 純血種？（前書き）

お久しぶりです。

台風が物凄かったですね・・・。

### 第32話 純血種？

その晩、休息日の日付が変わっても、アルフォンスが帰って来なかった。

「今日の夕飯には、先日街で頂いた料理を少し真似たものを作ってみますね」と、居残り組の期待と支持率をぎゅんぎゅんに上げまくって出て行ったのが、市の始まる早朝のこと。

いつもならお昼前には帰って来て、午後一杯の時間と手間暇、一口並みの技術を使って「お母さん！」と抱きつきたくなる程美味しい料理の数々を作り上げてくれるというのに、待てど暮らせと帰って来ない。

いや、いい年をした独身男性が一晚位帰ってこないからと言って普通なら皆「それがどーした」「けっ、どうせ上手いことやっただろ」と気にすることはないだろう。

しかし、それが「ああ・・・またか・・・」「・・・いいなあ」なカイルではなく、みんな大好きお母さんなアルフォンスであるとなると話は違う。

アルフォンスは名実共に騎士団のナンバーツーであり、その彼をどうこう出来るような者が街にいても思えないが、万が一何かの事故に巻き込まれているという可能性はある。

ヴァンフレッドとカイルも不測の事態に備え、アルフォンス不在への対処を話し合い始めたとき、ようやく彼が帰還したとの報せが入り、ほっとした空気が流れた。



「ンだよ、氣い揉ませやがって」

「しかし、アルフォンスが連絡も無しにこんな時間まで戻らんとは・  
・何かあったのか？」

そのヴァンフレッドの問い掛けに、走って報せに来た騎士さんが、  
物凄く微妙な顔をして「はあ・・・」と言葉を濁した。

「その・・・ご覧頂ければお分かりになるかと・・・」

なんじゃらほい。

そんなに言いにくいことがあるのかと思ったが、確かに見れば分  
かった。

分かった、のだが。

(・・・女の子?)

十歳くらいだろうか。

長い長い灰色の髪はぼさぼさに顔に掛かり、細い体に纏っている  
のはぼろぼろのワンピースのような布地一枚。

足許は裸足で、しかし少女の足が地面についていないのは別にアル  
フォンスが抱き上げているわけではなく、その胴体に少女の腕が、  
片足に少女の足がぎっちり巻き付いて「何があっても離すもんか  
い」とばかりにひっついていてからであった。

「……連絡もいれず、このような時間まで遅くなりましたこと、申し訳ありません、殿下」

それでもきつちり一礼して謝罪する辺りが立派です、アルフォンスさん。

思い切り「何ソレ」な空気が流れる中、ヴァンフレッドがこぼんと咳払いをひとつ。

「いや、いい。説明は後にして、取り敢えずその娘を風呂に入れて、眠らせてやってはどうだ？お前のことだから、既に食事は与えているのだろう？」

おお、紳士ですね、ヴァンフレッド。

しかし、アルフォンスは珍しく困り果てたような顔を見ると、おもむろに少女の襟首に手を伸ばし、みよーんとワンピースの布地が伸びきる位に引っ張ったのだが、彼にしがみついた少女はびくともしない。

え、何その根性。ちょっと気に入りましたよ？

「……ご覧のように、この有様でして。私もどうしたものかと」

それはそうでしょうとも。

けど、子どもがそうやってひつつき虫になるのは、不安だからなんですよ、お母さん。

しかし、子どもをあんまり甘やかしてはイカンというのも、これ

また事実。

「和馬？」

「へいへい」

次の瞬間、アルフォンスと少女の真上から、だばーっと滝のような水流が流れ落ちる。

大丈夫、器用な和馬は程よいぬるま湯にしてくれているから。

床に落ちた水分はすかさず分解されて消えてしまうから、部屋が水浸しになる心配もございません。

・・・それにしても、結構な水圧のはずなのに、子どもは相変わらずのど根性でアルフォンスにひつついている。

うーん、ますます気に入った。

その後、汚れの落ちた彼らから、和馬が水分を除去して洗濯終了。

「・・・おふたりとも」

あ、何ですか？アルフォンスさん。

お礼なら和馬に言って下さいね、私は何もしていませんから。

「・・・アリガトウゴザイマシタ」

うん、礼儀正しい大人のひとって好きだなあ。

そうして、改めてアルフォンスが連れてきた少女を見遣った一同は、汚れの落ちたその姿に思わず揃って目を瞠った。

汚れてくすんだ灰色になっていた髪は、きらきら輝く雪のような純白で、日に焼けた褐色の肌との対比が眩しい。

一切の癖の無い長い髪がさらりと流れ、流石にいきなりの丸洗い洗濯コースに驚いたのか、将来の美貌が大いに期待できる幼い顔立ちの中、まん丸に見開かれたその瞳は、鮮やかな深紅を宿していた。

（ええと・・・？）

周囲も驚いているが、アルフォンス当人も力一杯硬直しているところを見ると、もしかしたら少女が魔族であることに、今まで気が付いていなかったんだろうか。

体毛の白い魔族はとってもレアだとか言う話だったから、髪の色が黒じゃなくて瞳の色が見えなければ、想像の埒外だったとしても当然か。

それから、珍しく三十八秒ほど固まっていたアルフォンスは、深呼吸ひとつと共にいつも通りの落ち着きを取り戻した。流石だ。

「捨てて来ます」

「・・・っ！」

がーん！という感じに、少女の紅い瞳が見開かれる。

「市からの帰りに路地裏で行き倒れているのを拾ったのですが・・・。

ええ、私が選びに選び抜いた、お値段以上に価値ある肉や燻製に野菜、香草の類いをむさぼり食ったと思ったら、仕方なく改めて市に行った私の後について回り、散々邪魔をした上に購入したものをいつの間にか全て腹に収めている。

そんなことを今日一日で何度繰り返したことが・・・！」

く・・・つとシリアスな感じにキメてますが、アルフォンスさん。

それだけフツーじゃない子どもが人間じゃないこと位、帰って来る前に気付きましょうよ。

へんなところで抜けたひとだなあ。

「おまけに先程など、教会へ預けて戻ろうとした私に飛びついたと思ったら、いきなり噛み付いて来たのですよ！このどーぶつは！」

見て下さい、と示されたアルフォンスの手には、ぽつぽつと小さな歯形・・・って、どう見ても牙の痕みたいな点々が四つ並んでいるのですが。

あの、アルフォンスさん。ただでさえハイスペックなあなたに、天然属性は不要だと思いますよ？

「大体、人型をされていて暴走していないのなら、どこぞに主がいるのでしょうか！」

使い魔の分際で迷子になるなんて、魔族の風上にも置けない下等どーぶつじゃありませんか！

でええい、とつとと離れなさい！このどーぶつが！」

人間の子ともじゃないと分かった途端、容赦なく引き剥がそうとし始めたアルフォンスだが、白い髪のと根性魔族少女はしぶとかった。

どれだけぶん回されても、服を引っ張られても、アルフォンスがせいぜいと力尽きてもひしとばかりにひつついている。

「・・・アルフォンス」

「は・・・申し訳、ありません・・・」

いや、とヴァンフレッドがぼりぼりと頬を搔く。

「その娘・・・ひょっとして、魔族の純血種なのではないか？」

へ？と部屋中の視線がヴァンフレッドに集中する。

「いや、僕も以前ちらりと文献で見ただけだから、余り記憶は定かではないのだが。純血種は他の魔族と異なり、自ら主を選んでその血を受け、契約と為すとか」

ひく、とアルフォンスの口元が引きつる。

「・・・こんな頭の悪そうな、大メシ食らいのどうっしょうもないどーぶつが、純血種、ですか？」

魔族の純血種と言えば、人型を取れば容姿端麗、頭脳明晰、魔力天元突破が常識なのだから。

いえいえ、その子もあと十年も経てば、立派にアルフォンスさんに見劣りしないど美女になる可能性はばっちりですよ？

将来性を考慮するって大事ですよ、それに今でも十分愛くるしい姿は癒し効果ばっちりですよ？

「さてな。本人に訊いてみたらどうだ？」

これまたご尤もなヴァンフレッドの言葉に、アルフォンスがしぶしぶ少女を見下ろす。

「……お前は何だ？」

しかし、少女は紅い瞳をぱちくりとさせるだけだ。

「……やっぱり捨てて来ます」

意外と短気ですね！

### 第33話 ノーラ

いや、疲れているのかな。そりゃ丸一日こんなことをしていれば疲れもするというもんです。

ちよっとお茶でも如何ですか？

「マスター」

しかしそこで、ようやく少女が口を開いた。

あ、やっぱりアルフォンスさんがアナタのご主人なのですね。

そのアルフォンスさんは心底嫌そうにしていますけど。

「名前、付ける。私、マスターのものになる」

「遠慮します。私に幼女趣味はありません」

いや、そういうことじゃないでしょう、とその場にいた全員が心の中でツツコんだが、契約を中途半端なままにしているからそんな奇妙な行動に出ているのではないかとヴァンフレッドに諭され、アルフォンスは、はああああ、とそれはそれは深々と溜息を吐いた。

それにしても、普通の魔族との契約だと、魔族側から名前を教えたら契約完了と聞いていたのに、純血種というのはとことん特殊な生態をしているみたいだ。

そんなことを考えていると、アルフォンスがおもむろに口を開い



た。

あ、名前が決まりましたか？

「・・・『大メシ食らい』」

「『大メシ食らい』。それ、私の名前？」

「そ・・・」

「「「「ちょっと待ったあああああっ！！」「」「」」

いくら何でもソレは無い！とその場にいた全員で総ツツコミして、ギリギリ少女の名前がそんな切ない響きのものになる危機は回避された。

いやほら、今はいいですよ？

ちっこくてぷりちーな内は、そんなあだ名でも可愛らしいというもんです。

けど、将来的にど美女になる予定のお嬢さんに、『大メシ食らい』はないと思うのですよ、幾らそれが事実でも。

はあ、そんなものですか、と頷くアルフォンスのセンスに任せていたら、髪が白いから「ミルク」とか、肌が褐色だから「蜂蜜」とか付けそつで何だか怖い。

「では、そうですね・・・その髪ですから、ミルク・・・」

ひー！

「・・・というのは、いくら何でも安直過ぎですね」

そうですよ！名前っていうのは大切なんですよ！

アルフォンスさんの美意識に叶う、びゅりほーなお名前を付けてあげましょう！ね！

殆ど祈るような気持ちで一同が見守る中、少しの間考えた後、アルフォンスは少女に「ノーラ」と名付けた。

おお、無難な名前だと一同ほっと胸を撫で下ろしたのだが。

「昔私が飼っていた大メシ食らいの犬が、ノーラと言ったのですよ」

・・・どこまでも大メシ食らいから離れられないんですね。

食い物の恨みって恐ろしい。

「ノーラ。私、ノーラ？」

「ええ、そうです」

しかし、ど根性大メシ食らい魔族少女改めノーラは、それはそれは嬉しそうにぱあっと顔を輝かせると、ようやくひよいと床に降り立った。

「マスター、ノーラにご飯と名前くれた。ノーラ、マスター守る」

「結構です」

即答でした。

「えええっ!？」

再び、がーん!と今度は蹠踉めく全身で表現したノーラは、その場でよよと頽れた。

「私は自分の身位、自分で守れます。守ると言うなら、あなたは力一杯殿下をお守りしていなさい」

は?と目を丸くしたヴァンフレッドを示され、ノーラは一度彼を見た後、彼女のご主人に目を向けた。

「でも、ノーラのマスター、あのひとじゃない……」

「何か、文句でも、あるんですか？」

ぎらりと光るダークグリーンの瞳が、紛れもなく『この大メシ食らいのどーぶつが!』と言っていました。

ああ本当に、食い物の恨みって恐ろしい。

と言うか、この子が純血種というなら、例の「食用魔族の卵」ご出身と言うわけで……いや、深く考えるのはよそう。

しかし、怒れるお母さんというのは、世界一恐ろしい存在です。

「あなた、本性は何なのですか。紛らわしい人型なんかいつまでも

してんじやありませんよ、さつさと戻りなさい」

ほれほれとアルフォンスに促され、びくつと震えたノーラの輪郭が歪んだと思ったら、次の瞬間そこにいたのは純白の翼を背中に生やした、白地に銀色のまだら模様も美しい豹でした。

まあ、びゆりほー。

「・・・余り、食材には向いていなさそうですね」

食べる気ですか！？

既に額にタテ線が入りまくりの一同の間に、戦慄が走る。

いえ、中華人民共和国の方々なんかは、四つ足のモノはテーブル以外全て召し上がるというお話ですけども！

市場で犬や猫の毛皮が普通に売られていると聞いたときには、うっかり泣きそうになってしまいましたけども！

やっぱり人語を解するイキモノを食すのはどうかと思うのですよ、ヒトとして！

「あ・・・アルフォンス？」

どこか引きつったヴァンフレッドの呼びかけに、いつも通りのにこりと穏やかな笑顔が返る。

「はい。何でしょう、殿下」

「その・・・だな。ノーラの主はお前なのだし、やはりノーラはお前の傍に置いておくべきだと思うぞ」

「・・・はあ。やはりこんなどーぶつがお傍にいと、鬱陶しいでしょうが」

（あああああ！）

ちょ、もう勘弁してあげて下さい。

ノーラがもうふるふる震えて、「どこまでちっちゃくなれるかに挑戦！」な勢いで蹲っているんですよ。

お腹空かせたどーぶつが、ご飯くれた人に懷いて尻尾振るのって可愛くないですか？

拾ったどーぶつは最後まで面倒見てあげましょうよ、それが正しい保護者の姿ってモンですよ、お母さん。

「・・・カイル。魔族の純血種とか、結構なレアもんだりするんじゃないの？」

「そりゃあ、純血種なんて滅多にお目にかかれるモンじゃねえし、魔術師連中にしたら喉から手が出る程垂涎のイキモノだと思うぜ？けどアルの価値基準は、「殿下のお役に立つか否か」だからなあ・・・」

つまり、押しかけ使い魔なんぞお呼びじゃないと。

いくら見た目が可愛かろうがびゅりほーだろうが、アルフォンス

にとつては仲間の為に買ってきた食材を全て食い尽くされた上に噛み付かれ、小汚い格好のまましがみつかれて仕方なく連れて帰ってきたら、その巻き添えを食らって問答無用の洗濯丸洗いコース……って、そう考えたら確かにちよつとイヤだな。

結局、「その図体は鬱陶しいですよ、少し縮みなさい」と仰ったご主人様の命令に従ったノーラは翼付きの子猫という何とも萌え萌えしい姿になり、今後はアルフォンスの使い魔としてひつつき虫になることになりました。

「どーぶつの分際で厨房に入ってきたらシメますからね」

「目の前をうるちよろしていたら踏みますよ」

「私は他人様に幼女趣味と思われるのは断じてご免です。不用意に人型になったら蹴りはがしますからね」

とアルフォンスに言われる度、ぶつぶぶ、と音がするような勢いで頷く子猫の姿に、騎士団一同は心から思ったと言つ。

このひと、鬼畜属性があつたんだ、と。

### 第34話 らぶれたー

今日までに有紗が遭遇した人型の魔族は、マッドサイエンティスト臭のするシルヴィア嬢のヘタレ使い魔と、アルフォンスの押しかけ使い魔の二体だけだ。

つまり、その彼らの行動原理だけを見て、一概に「魔族とはなんぞや？」という疑問を解き明かすのは余りに浅はかなことだとは思うが、少なくとも彼らには同族意識、と言うものは皆無であるらしい。

「マスター、マスター。ノーラ、偉い？偉い？」

「ええ、ノーラはいい子ですねえ。本当によく出来た使い魔ですよ」  
肩に乗った翼付きの子猫の喉を優しくにくすぐっているのは、紛れもなく先日鬼畜属性が発覚したばかりのアルフォンス。

・・・皆、さりげなくそちらを見ないように視線を逸らしております。

気持ちには分かる。

いえ、彼ら主従の仲が非常に睦まじいものになったというのは、とても喜ばしいことですとも。

例えその理由が、魔族討伐の際にノーラが実寸大（尻尾まで入れると全長五メートルの巨大豹）に変貌し、その口から放った衝撃波でかなりグロテスクな姿をした繁殖期後期の魔族を一瞬で消滅させ

たお役立ち感からだって、それはそれでアリというもんです。

何せ、アルフォンスの価値基準は「ヴァンフレッドの役に立つかどうか」という素晴らしい基準なのだからして、それを外野がどうこう言うことでもございません。

・・・ただ、昨日までとのギャップがちょっと気持ち悪いなーと思っただけでございます、はい。

それにしても、このところ魔族の襲撃が大分間遠になってきた。

討伐、と言っても基本「襲ってきたら返り討ち」戦法であって、幾ら精鋭揃いの討伐隊の面々が強いと言っても、森の奥に棲んでいる魔族にわざわざ喧嘩を売りに行くようなアホな真似はしない。

そんなことをしていたら、命が幾つあっても足りやしないのだ。

よって、魔族の襲撃が群れ規模で発生しなくなれば繁殖期は終わりと判断されるらしいのだが、その確信を得られるのがいつなのか、一時的に収まっても再開したりしないのか、と何せ余り例があるわけでもないことなので、上層部はその辺の判断をぐるぐる悩んでいるらしい。

しかし、危機感が下がれば、気が抜けちゃうのが人間というもの。

騎士団の面々は、襲撃の数こそ減っても繁殖期後期型の強大かつグロイ魔族の脅威を何度も目の当たりにしているため、気を抜いている場合も何もあったもんじゃないのだが、平和な街のお嬢さん達にとっては「魔族？だって、すぐ近くに騎士様達がいらっしやるから、ここは安全だし・・・」という感じでもあったらしい。



そんなわけで、最近離宮の訪問口には、お嬢さん達からの差し入れたのラブレターだのが急増中である。

宛先は九割がカイル。

その他の一割に引っかけたヒラ騎士さん達は、本気で号泣しております。

「い・・・っ生きてて良かった・・・！」

「人生、そう捨てたもんじゃないんだな！」

「い、いや！おおお落ち着け！？コレがまた団長への足がかり作戦の一環とも限らん！何事も冷静に対処すべきだ！」

「くくくくはうつつ！？」「くくくく」

・・・何だか彼らが女性不信になってそうで、気の毒です。

因みにアルフォンスにも何通かお手紙が来ていたのだが、「マスター、らぶれたーってなに？」との使い魔の問い掛けに、「一時の熱病にうかされた気の毒な女性が、気に入った男に番になって下さい」という意思を伝えるものですよ」と身も蓋もナイお言葉をのたまった途端、アルフォンスの手の中にあつた紙の束はノーラが吐き出した炎によって、一瞬にして灰になっていた。

それを目撃した面々は、すわまた鬼畜モードの説教が！？とおのいたのだが、アルフォンスはおや、と目を瞠ると既に定位置となつている肩に乗ったノーラの喉をちょこちょこつくすぐつた。

「手間が省けましたよ。ありがとうございます」

「ノーラ、偉い？偉い？」

「ええ、偉いですよ」

飼い主に喉をくすぐられ、うつとりと目を細める子猫（翼付きだけど）の姿というのは、とっても可愛らしかったです。

それはさておき、ちょっとお困りなのは大量の贈り物を頂いている、お色気猫耳イケメンのカイル団長。

彼がおモテになるのは、てっきりその容姿と問答無用のお色気のせいだと思っていたのだが、世の中の女性達だって高嶺の花より近所の雑草、幾ら彼の色気にアテられたからって、それだけできゅんきゅん恋い焦がれちゃったり致しません。

ならば何故に？と言うなら、カイルは非常にマメなのだ。

一度でも言葉を交わしたお嬢さんは、その名前や容姿は勿論、その時話した会話の内容全て記憶し、頂いたラブレターに返事をするときにはそのことを織り交せて丁寧に応じる。

・・・ある意味、アルフォンスさんより記憶力や処理能力に優れているのかもしれない。

しかし、カイル自らちまちま手紙をしたためている時間などこれっぱかしもないわけで、その代筆を任されている離宮の書記官がこのところ泣きそうになっているということだ。

謹厳実直を絵に描いたような、非常に生真面目で仕事の細やかさと正確さを買われて書記官という仕事に就いた筈の方々なのだが、最近彼らが、

「何かさ・・・最近、オレみたいのが女の子に優しくしてもらいたいつて思うのが、そもそも間違ってる気がしてきてさ・・・」

「ああ・・・オレらには、あのヒトみたいな恋愛経験値とか、甘々しい気遣いとか、小つ恥ずかしいボキャブラリーとか、そう言うモテ要素、皆無だもん・・・」

「いいんだ・・・オレ、今度見合いするんだ・・・繁殖期が終わったら、あのヒトも王都に帰ってくれるからさ、その後なら安心かなあつて」

などと互いを慰め合っている姿が、執務室では日常茶飯事になっているのだとか。

今更ながらに気付いた、以前世話になった離宮には侍従さんの他にメイドさんも沢山いたのに、この離宮にいる女性が厨房で働く肝っ玉母さんの元気の良いおばちゃん達だけ、と言うのも、もしかしたらナイス執事のヴィクトール氏辺りの配慮なのかもしれない。

確証は無いが、そんな気がする。

だって、絶対仕事にならなさそうだもん。

しかし、そんなカイルのお色気にも全く反応しないお嬢さん方がいるのだそうだ。

それはずばり、犬系獣人族のお嬢さん方。

何でも獣人族というのは、普通の人間はちゃんと恋愛対象になるのだが、種族が違うとお互い全く無反応なのだから。

・・・でも正直、ぱつと見だと獣人族の皆さんが犬系なのか猫系なのか判断し辛かったりする。

いや、短毛種の猫系のヒトは、流石にすぐ分かるのだが、カイルみたいな長毛種だと時々「ん？」てなるし、三角お耳もよく見れば猫系のヒトの方が大きかったりするけれど、どっちもらぶリーなナイスチャームであることには変わらないし。

彼らはどうやってお互いを一目で識別しているんだろう、という素朴な疑問には、和馬の「匂いだろ」の一言で納得しました。

そんな中、王都からやって来たのは、魔族討伐隊の現状把握を任務とする監察官。

（おおっ！知的クール系美女なのに、ふっさり尻尾がらぶリーです、お姉様！）

彼女の名は、リュシーナⅡメイ。

緩く巻いたシルバーブロンドを頭の後ろで一つに括り、明るい茶色の瞳には知的な光がびしっと浮かんでいる。

スレンダーな長身を男物の文官服に隙無く包み、まさにデキる大人の女。ああ、憧れる。尻尾可愛い。

彼女はエライ人なので、その対応にはヴァンフレッドとカイル、アルフォンスがそろい踏み。

それをこつそり・・・と言うわけでもなく、お客様が女性の場合、応接室の扉は開け放たれたままなので、割と堂々と中の様子を見ることが出来る。

（おお・・・しゅげえ）

リュシーナさん、マジでカイルに無反応。

カイルも美人と見ればあからさまに浮かべる「爽やか親しみ度数マックス笑顔」の欠片もなく、小難しい会話を淡々と繰り広げている。

いや、単に大人の真面目な会談中だからじゃね？ってだけのことかも知れないが、妙齢の女性がカイルの前で彼の色気に全く動揺していませんよの図というのが、もうそれだけで超レア感ばりばりなのだ。

因みに有紗に関しては、以前カイルが昼寝をしているときにはたんぱたんと地面を叩いていた彼の尻尾で、それこそ猫じやらしで遊ぶ猫のように猫パンチで遊んでしまったため、騎士団の中では「ああ・・・子どもには、団長のフェロモンも通用しないんだね」と微笑ましく見られてしまっている。

すみませんね、お子様で。

それはさておき。

何だか、騎士さん達の様子が、変。

「い……犬系……」

「そ、そうか……。どこの店でも、騒いでるのって猫系のコか人族のコばかりだったから、大人しくしてるカノジョ達のこと全然目に入ってたか……!」

「そうだ……。!犬系の女の子、オレ達の天使はすぐそこにいたんだ!」

ちよ、大丈夫ですか、皆さん。

何だか目がイっちゃってますよ?

あ、猫系の騎士さん達はますますどんよりと。

それと反比例するように人族、犬系獣人族の皆さんは、これから魔族討伐に出陣ですかって勢いで盛り上がっている。

……。きつと、明日から街では犬系獣人族のお嬢さん方に、前代未聞のモテ期が到来するに違いない。

猫系獣人族の騎士さん達に、幸あれ。

数日後、各地の魔族討伐隊から現状の情報収集を行った監察官達の報告を受け取った国の上層部は、今回の繁殖期は収束したと判断した。

ヴァンフレッド以下第四師団の面々にも王宮への帰還命令が出て、一月余り世話になったこの離宮からも撤収することとなったのだが、良かった良かったと周囲が浮かれる中、有紗はひとり壁に懷いて青ざめていた。

「な・・・夏休みの課題・・・全然、やってない・・・!」

「あ？元の時間に戻れば休みなんて丸ごと残ってんだろ？」

そういう問題じゃないんですよ和馬さん！

継続は力なりって言うでしょう!？

アレは継続しなきゃ何の力にもなりませんヨーという有り難い教訓でもあるのだからして、夏休み前に授業で詰め込まれた数式やら公式やら年表なんてものが、現在の「み」みその中で検索不能な程薄れまくっているこの状況は、仮にも一応進学校に通っている高校一年生にとってはかなりヤバいお話なんですよ！

（自分は進学が決まって余裕だからって「っ!」）

思わず和馬に八つ当たりしたくなってしまったが、そんなことをしている場合ではない。

早く帰って勘を取り戻さなければ、新学期が始まってから一気に成績下降コースまっしぐらだ。

奨学金を頂いている身としては、断じてそんなことは避けなければ。

幸い、無事魔族の繁殖期も終わったようだし、ヴァンフレッドの死亡フラグも回避出来たと思っていいだろう。

当初の予定とは大分違ってしまっただけで、物凄く濃くて楽しい夏休みを過ごせた。

帰ったら山のような課題が待ち受けているのは・・・まあ、少々気が重いけど、どうにかなるだろう、きっと。多分。

いざとなったら和馬に家庭教師をしてもらおう。偏差値の高い恋人って素敵だ。

そうして、慌ただしくヴァンフレッド達に別れを告げに行くと、彼らは揃って「え？」という顔をした。

「狩りに協力してくれた礼もしていないというのに・・・もう少しられないのか？」

「んだよ、ようやく本格的に遊びに連れてってやろうと思っていたのによー」

「王都に戻ったら、私自慢の新鮮なフルーツをふんだんに使ったタルトを、是非味わって頂きたいと思っていたのですが・・・」



あ、あんまり誘惑しないで下さい！特にアルフォンスさん！そんな最終兵器を持ち出されたら、うっかりこの世界に永住したくなっちゃうじゃないですか！

「有紗」

「う・・・」

「また来ような？」

ぼん、と和馬の手が頭に乗る。

何だか物凄く子ども扱いされている気がするけれど、アルフォンスの手料理にがつつり餌付けされてしまった状態では、反論する気も起きやしない。

新鮮なフルーツのタルト・・・いやいや、ここで誘惑に負けたら本当にずるずると居着いてしまいそうな気がする。ここは我慢だ、頑張れ自分。学生の本分は勉強です。

夏休みは、ここでおしまい。

明日からはまた、元の世界で頑張ろう。

あ、なんかたこ焼きが食べたくなってきた。

### 第35話 呪文（前書き）

ゲロ甘です。ご注意ください。

だってタグに「溺愛」って入れてるし！と開き直って・・・っていやコレ、久しぶりにムーン様の方に投稿するモノを書こうかなーと思って書き始めたモノなんですけど、途中で力尽きてしまいました（汗）。

・・・和馬視点のエロって、需要はあるんでしょうか。うーむ。

### 第35話 呪文

透けるように白く滑らかな頬に、そつと触れる。

先程、和馬自身も覚えのある「これでもか」と言わんばかりの大量の課題をどうにか片付けた有紗は、そのまま沈没するように寝入ってしまった。

明確な「保護者」というものが存在しないからなのか、有紗は自分を甘やかすことが下手だ。

課題なんて新学期までに終わらせることが出来れば十分な筈なのに、カレンダーを確かめればまだ夏休みは半分近く残っている。

（全く・・・）

有紗が自分を甘やかさない分、彼女を甘やかすことを己の役割だと勝手に決めている和馬は、その華奢な体を抱き上げてベッドに乗せた。

その拍子に、さらりと柔らかな栗色の髪が枕に散って、その艶やかさに束の間、目を奪われる。

心臓を焦げ付けさせるような、ちりりとした熱。

・・・一昨日辺りから、だろうか。

それまでは安心しきった顔で眠る姿を眺めているだけで満たされていたのが、覚えのある飢餓感を覚え始めたのは。

甘い肌の香り。  
芳しい髪の匂い。  
誘うような、吐息。

夏の最中ということもあって、有紗が身につけているのはゆつたりとしたロングＴシャツと、ショートパンツだけ。

薄いタオルケット一枚では、その魅惑的な体の線を少しも隠すことなど出来はしない。

（まずい・・・な）

その愛らしい唇から目を背けるのに、苦痛に感じるようになってきているのは、かなりまずい兆候だった。

今日一日くらいは我慢出来るかと思っていたんだが、と思う間に勝手に動いた自分の右手が、頬から顎へ、それからしなやかな首筋へと滑っていく。

「ん・・・」

くすぐったそうに身動いだ有紗に、慌てて離そうとした和馬の手に、有紗の細い指が触れる。

酷く子どもじみた仕草で和馬の手を引き寄せて、酷く嬉しそうに頬をすり寄せる有紗の様子に、辛うじて「飢え」から気を逸らしていた意識が、揺れた。

「有紗・・・？」

可愛すぎるお前が悪い、なんて言ったらどんな顔をするのか、ちよっと見てみたい気もしたけれど、深くゆっくりとした呼吸を繰り返す唇に口づける方が先だった。

何度触れても、時々溶けて消えてなくなってしまうんじゃないかと怖くなる程柔らかな唇に、自分のそれをそっと擦りつける。

繰り返しそうしているうちに、自然と緩んだ唇の間に舌を忍ばせると、すぐに素直に応じてくる。

目を覚ましたのかと思ったが、そういうわけではないらしい。薄く甘い舌のひどく覚束ない動きは、まるでキスもろくに知らないかのようだ。

とろとろと甘えて、時折艶めいた吐息を零す。

「・・・あ・・・ず、ま・・・」

呼ぶ声の甘さに、ぞくりとした。

しかし余程疲れているのか、有紗は誘うような声で和馬を呼んだくせに、唇を離すとすぐに深い眠りの中に沈んで行こうとする。

このまま眠らせてやりたい気持ちと、腕の中に閉じ込めてもった甘い声を聞きたい気持ちとが胸の裡でせめぎ合う。

「有紗」

その名を呼ぶと、少し落ち着く。

まるで呪文のようだと時々思う。

たった三文字の、大切な音。これ以上にきれいな音の響きなんて、和馬にとっては何も無い。

愛しくて、愛しくて、ただひたすら大切にしたい。

甘やかしたい。

甘えて欲しい。

・・・触れたい。

「・・・有紗」

体を内側から蝕むような飢餓感を、無理矢理抑え込む。

何度も経験して、この体中から力がこぼれ落ちていくような不快感にも大分慣れた。

・・・大丈夫だ。これ位なら、まだ耐えられる。

この感覚を掴むことが出来るようになるまでに、何度も眩暈と苦痛に負けてしまったこともあったけれど、有紗が疲れて眠っているのに「腹が減った、抱きたいから起きろ」と言うのは・・・いくら何でも痛すぎる。

イキモノとしては正しくても、ヒトとして、というより男として駄目だろう。それはちよつと遠慮したい。

少しクセのある、指通りの滑らかな髪に指を絡ませる。

健やかに落ち着いた呼吸をゆっくりと繰り返す有紗の寝顔は、どれだけ見ても飽きない。

勿論、そのくると表情の良く変わる瞳が自分を映していると  
きが一番嬉しいのだけれど、こうして無防備に安心しきった顔を見  
せてくれるのが幸せだと思う。

傍にいただけで幸せをくれる有紗は、和馬の生きる理由そのもの  
だ。

・・・そのまま、どれ位そうしていただろう。

陽が落ち、あちこちで点されている灯りのせいで逆に濃い闇の中  
でも、和馬の目は世界をはっきりと映しているが、昼間に比べると  
仄かに藍色の紗が掛かったような感じがした。

強すぎる光の中よりも、むしろものを見るには楽な位で、有紗の  
長い睫毛がふると揺れるのがスローモーションのように見て取れ  
る。

「あ・・・れ？」

寝ぼけたままの、どこか幼い口調。

「ごめん・・・何か、落ちた・・・」

ふにゃあ、と手の甲で目を擦ってそんなことを言う有紗を見て、

和馬は自分の喉が鳴るのを覚えた。

普段は真っ直ぐに強い瞳がとろんと半ば閉じられていると、言っていることやしていることはむしろ子どもっぽくなっているのに、何故だか妙に色っぽい。

おまけに、先程と同じように和馬の手を探し当てた有紗は、それにすりすりと頬ずりしながら、「和馬の手、好きー」なんて言ってくれて。

・・・これで本人には誘っているつもりが無いのだから、本当に始末が悪い。

それは、分かっているのだが。

「有紗」

「んー？」

「・・・お前が悪い」

可愛すぎる。

そんな姿を見せつけられて、そんな可愛いことをされて、ぎりぎり保っていた糸で辛うじて押し留めていたなけなしの理性がすっ飛んでしまった自分は悪くない。・・・多分。



翌朝、和馬は腕の中に抱き込んでいた有紗がもぞもぞと動き出すのにつられて目を覚ました。

どうやら、腕の中から出ていこうとしているらしいことに気付いて、半ば無意識に引き戻す。

「・・・和馬さん」

「ん・・・？」

腕の中に丁度良く収まる柔らかな体は、どうにも手放しがたくて時々有紗に「抱き枕ですか」と呆れられる。

その有紗の、あのですね、と妙に折り目正しい口調に、ぼんやりと瞬く。まだ眠い。

「そりゃあ、こっちに帰って来てからずっと、課題に掛かりつきりで毎日沈没してた私が悪かったですよ？家庭教師してもらったことにも、力一杯感謝しておりますよ？」

「・・・ああ・・・？」

「でもですね・・・出来れば、空腹はこまめに訴えて頂きたいなあと、思う次第なのですよ」

そう、少し掠れた声で訴える有紗が、拗ねたように、恥ずかしそうに伏せた目元が淡く朱を滲ませていて、昨夜の少々濃かった熱を思い出させる。

確かに、かなり「お預け」を食らっていた上、課題の山から解放された有紗が妙に素直で可愛かったものだから、いつもより……まあ、ちよつとしつこくしてしまつたかもしれない。

しかし、その原因の大部分は和馬に縋り付いて、謔言のように和馬の名と「大好き」を繰り返す有紗の破壊的な（主に和馬の理性に対して）可愛らしさのせいであつて、空腹云々は大した問題ではない。

そう説明しようかとも思つたのだが、そんなことを言つたら「何を恥ずかしいことをするつと言つてくれてるんですかー!？」と真つ赤になつて叫ばれた上に、ベッドから叩き出されかねない。

不幸な結果しか招かないと分かつていて、わざわざ言うこともないだろう。

（……まあいいか）

その事実に当人がいつか気付くか気付かないかは知らないが、有紗が言っているのは、つまり今後は余り遠慮する必要はないと、そういうことで。

「か……和馬？」

つつ、としなやかな背中中のラインに指先を滑らせると、有紗が顔と声を引きつらせる。

「有紗」

「は、はい？」

うん、どうしたものか。

有紗らしくもない、少し怯えたようなその表情に、思い切りそえられる自分を自覚してしまった。

鬼畜系の言動は、どこぞの矢鱈とハイスペックなロン毛の副団長の専売特許だと思っていたのだが、ひょっとして鬼畜属性というのは感染するのだろうか。ちよつと嫌だ。

・・・いや、これは単にアレだ、不安げに揺れる大きな瞳がちよつと潤んでいるところだとか、その瞳がこちらの反応を見逃すまいと懸命に見詰めてくるひたむきな感じだとかが、男心をジャストミートにフルスイングで打ち抜いてくれるだけだ、きつとそうだ。

というわけで。

「腹が減った」

笑ってそう告げると、一拍置いて「嘔吐きー！」と絶叫しかけた有紗の唇を、和馬は問答無用で塞いでやった。

別に、嘔なんて吐いていない。

お前の言う通り、ちよつと、自分に素直になることにしただけだ。

### 第36話 趣味は人それぞれです。

夏休みも終わり、和馬にがつつり家庭教師をしてもらったお陰で（ええ、そりやもう色んな意味で）、どうにか無事、休み明けのテストも乗り切った。

そうになると、二学期というのはイベントの宝庫である。

体育祭、学園祭、その他諸々の体験学習。

その中で真っ先にやって来る体育祭は、まあ当然ながらスポーツクラスであるE組の独壇場だ。

他のクラスにしても、ムダに対抗意識を燃やすより、それぞれ有名どころの選手を力一杯応援する方が余程楽しいということで、一部女子などは手作りの応援グッズまで完備している。

ただし、これまた当然というべきか、一応建前上は「各クラス対抗で青春の汗を流しましょうネ」というのが体育祭の趣旨なのだからして、E組の面々は、それぞれが所属している部活動の競技には参加することは出来ない。

それでも、元々の運動神経と鍛え方が違う彼らのこと、どんな競技だろうと人並み以上にこなしてしまうわけで。

「いつけえええええ！」

「任せろっ！」

「……つあたーつく!!」「」

ギャラリーからのシンクロ率ばっちりの掛け声が体育館一杯に響いて、次の瞬間、バスケットボールがゴールネットを揺らしていた。

流石、バレー部のエース。

バスケットボールにアタックをかまして、見事にゴールを決めました。

この試合は絶対面白いから!と言う噂話に乗っかって、卓球で初戦敗退した有紗とささめは、一種異様な熱気に包まれている体育館に試合見物に来たのだが、これは確かに面白い。

何しろ、二年E組の現男子バレー部エースを擁するチームと、三年E組の元男子バレー部エースを擁するチームが対決しているのだ。

こんな愉快的試合は決勝ですもんじゃないかと思うのだが、そこはくじ引きの神様が決めたことだから仕方がない。

お陰でまだそれ程ギャラリーがいない中、彼らの派手な応酬を楽しむことが出来るのだから、神様に感謝だ。つるかめつるかめ。

「ふはははは!先輩、体がなまってるんじゃないっすか!?」

「ええい、生意気なクソガキが!見よ、必殺……!」

「うおおー!?!」

そうして、三年の元バレー部エースがぶん投げたバスケットボ―

ルは、そのまま見事にゴールネットを揺らした。W A I O。

あのー、あなた達ホントにバレー部なんですか？バスケットでも十分レギュラー張れそうですよ？

審判役をしている元バスケット部主将の和馬が、ホイッスル吹きながら呆れ返った顔してますよ？

「・・・先輩。『必殺！』の後、何て言ったんスか？」

「・・・いや。ここで何かを叫んだら、自分の中でナニかが終わるよーな気がしてな・・・」

そうっすか良かったっす、ああそうなんだ、とさりげなく視線を逸らしながらぼそぼそ言い合うふたり。

何だかとても仲が良さそう。

そんな彼らは、結構な有名人である。

確か、三年の元バレー部のエースは新藤、二年現バレー部エースは鈴川と言ったはずだ。

揃って実力もあり、バレー部らしくガタイも良くて見目もマル、おまけに社交的となれば、周囲の人気があるのも当然と言うもの。

「あー、あのヒトらのなあ。オレも試合、見たかったな」

大変見応えのあった試合が終わって教室に戻ると、こちらは先程サッカーで二回戦敗退した大輝が羨ましそうに溜息を吐いた。

男子バスケット部と男子バレー部は、体育館の使用時間が結構被るため、何だかんだと親しくしているのだから。

「普段からあんなノリなの？」

祭りのテンションではっちゃけていただけではないのかと問えば、大輝とランスレイルは揃っていんや、と首を振った。

「しょっちゅうラーメン賭けて、愉快的勝負してたしな」

「そうデスね、お二人にはラーメンの美味しい食べ方も教わったデス。ミソにはグレイテッドチーズ、ショーユにはタバスコ、シオにはソースが一番だそうデスが、ワタシはシオにもチーズが好きデス」

にこにこにこ。

・・・ああ、穢れないその笑顔が眩しい。

有紗は無言で、口元を引きつらせている大輝の襟首（今日は学校指定のジャージです）を引っ掴んだ。

「・・・大輝！？アンタがついていながら、何をバレー部のアホに勝手な真似をさせとるかー！」

味噌ラーメンに粉チーズはともかく、タバスコとソースはどうかと思う！

「ししし知らねーって！大体、オレはランスの保護者じゃねーぞ！？」

それはそうかもしれないが、何だかもう絶対、ランスレイルの中の「日本の高校生像」は愉快なことになっている気がする。

日米間の正しい相互理解の道は、遠い。

そんな中、でもお、と少し唇を尖らせてささめが首を傾げる。

「あのヒト達、しょっちゅうカノジョさんが変わるって話だよう？  
あたし、そーゆーヒトは好きじゃないなー」

ささめはどこから仕入れてくるのか、結構な情報通だ。

一学期の「大輝への告白事件」以来、E組のツカ系美少女杏子と  
もすっかり親しくなっているし、その人懐っこさが勝因だろう。

バレエ部の彼らについては有名人だけあって、有紗も時々噂話を  
耳にするのだが、確かにあのふたりの傍にいる女生徒は頻繁に入れ  
替わっているらしい。

まあ、世の中にはそういう輩もいるよね、と有紗は適当に聞き流  
していたのだが、夏休み中に久川と「祝 遊園地で初デート」を遂  
行し、恋する乙女成分が目下増量中のささめにとっては、少々不快  
な話のようだ。

しかし、ささめの言葉を聞いた大輝とランスレイルは、一瞬視線  
を交わすと微妙に落ち着かない様子でそわそわと指を動かした。

「ええと・・・な？」



「シンドウサンと、スズカワサンは・・・何と言っデスカ・・・」

大輝とランスレイルは暫し、『お前が言えよ』『いえ、ディーがどうぞデス』と何やら押しつけあっていたが、最終的にはじゃんけんで負けた大輝が、ぼそぼそと口を開いた。

よしよし、ランスレイルはちゃんと日本人のタシナミ、「じゃんけん」を覚えているな。

「最初はぐー！」の掛け声も完璧でしたよ、良かった良かった。

そして、敗者の大輝曰く、新藤と鈴川のふたりは、確かにしょっちゅうオツキアイする相手が変わっているのだそうだ。

おまけに、「付き合って下さい！」と告白するのは、常に女生徒からだと言っのだから、非モテ系男子や、中々女の子に告白する勇気を出せない純情系男子からすれば羨ましいどころの騒ぎではないだろう。

「けどなー・・・フラれんのもいっつもあのヒトラの方なんだよな」

「は？」

「ほえ？」

目を丸くした有紗とささめから、な？とランスレイルに視線を移した大輝に促され、ランスレイルが重々しく肯く。

「ワタシ達を知る限り、確率は百パーセント、デス」

それはまた、何と言うか。

「変な趣味やちよつとついていけない性癖の持ち主だとか、女の子の繊細なオトメゴコロをぶつちり踏みつぶすような、デリカシーに欠けたことを平気でしたり言ったりするヒトだとか？」

「実は秋葉系のオタクだとかー、アヤシイ新興宗教にハマってるとかー、美味しいパスタ食べながら寄生虫のおハナシしちゃうとかー、もしかしてそーゆーいやんなヒト達なのー？」

ささめは有紗の抽象的な発言を、見事に具体化してくれました、ありがとう。イメージって大事よね。

「・・・何でそーなる」

大輝ががくりと肩を落とす。

因みに、アメリカでも「OTAKU」は通じるそうです。

道理でランスレイルが微妙な顔をしているだけで黙っていると思っただ。

「いや、実際付き合ってみなきゃ分かんない、女の子が百パーセントどん引きする原因ったらこの辺りかなあと」

「ねー、怖いもん」

ささめと頷き合ってそう言つと、大輝は苦笑じみた表情を浮かべて、ぼりぼりと頬を掻いた。

「まあ、確かについていけねー趣味かもな。・・・あのヒト達、ふたりしてバンジージャンプが趣味なんだよ」

へ、と揃って間の抜けた声を漏らした有紗とささめに、ランスレイルもそうなのデス、と頷く。

「休みの日にアルバイトをしているのは、いつかマカオタワーに行く為だそうデス・・・」

マカオタワーというのは、中国にある世界一高いバンジージャンプがあるところなのだから。

・・・バンジージャンプ。

てつきりテレビのバラエティ番組で、罰ゲームとして行われているだけのものだとばかり思っていた。

確かに趣味・バンジージャンプな相手とオツキアイなんて、一般的なお嬢さんにはちょっと荷が重すぎる。

高いところが苦手なささめなど、想像しただけで「無理!」となつて青ざめているし、久川との遊園地デートでも、きつと微笑ましい乗り物ばかりをチョイスしていたに違いない。

まあ、世の中には色々なひとがいる。そういうヒト達には、いずれ趣味を同じくする、彼らに相応しいお嬢さんが現れてくれることだろう。

そんなことを考えていると、不意にランスレイルが何かを思い出

したように、ぱつと顔を上げた。

「そうデス！今度ステイツから、ワタシの姉が遊びに来るデスよ！」

「おお！あの美人のねーさんか！？」

途端に大輝が色めき立つのも無理はない。

以前、写真で見せてもらったランスレイルの四つ年上の姉上は、栗色の髪に弟と同じモスグリーンの瞳の、とても笑顔が素敵な美人さんだ。

現在は本国の大学で美術の勉強をしていて、日本美術、中でも江戸絵画に大変興味を持っているのだとか。

姉が来たら、是非会って下さいね、とランスレイルはにこにこと笑っているが、ごく一般的な日本の義務教育しか受けていない三人は、内心冷や汗を垂らしていた。

『日本画・・・？何か知ってる？』

『・・・見たら多分「ああ！」ってなるけど、タイトルは知らんってレベルだ』

『うー、名前まで覚えてるのって、大抵外国の絵だよう・・・』

全くもって、右に同じです。

しかし、今更付け焼き刃でちよろつとした知識を詰め込んだところで焼け石に水。

折角大学で勉強をしている方がいらっしゃると言うのだから、この際色々教えて頂く気持ちでお迎えしよう。

・・・こういうとき、日本の教育ってちょっと偏っていると思う。

自国の文化をろくに知らないって、なんか恥ずかしい。

### 第37話 ミリディアナ

次の日曜日、某国立美術館近くのカフェで待ち合わせをした一同は、約束の時間前に全員集合していた。

体育会系の大輝とランスレイルは時間厳守が身に染みついているのは勿論、有紗も時間にはマメな方だし、ささめは年の離れた兄上様達にぐりんぐりに猫可愛がりされていて、ちよつとでも約束の時間に遅れると大変オソロシイことになるため、皆十分前行動が基本なのである。

そう言えば、イスラム教のヒト達って、約束の時間を守らなくつても、「だって神様がそう思し召しだったんだもの」で許されちゃうんですって。

と言うより、「明日何々をしますからネ」と言っちゃいけませんよー、どうしてもつてときは「神がそうお望みならばね?」と言つておけば良いですよ、という戒律があるんだとか。

元々、それこそ砂嵐とかで「目的地にたどり着けるかどうかは神のみぞ知る!」って土地柄にお住まいの方々だから、そう言う風習がまかり通るのも分からなくはないけど、その理由が出がけに奥さんに、「ちよつとアナタ、玄関の電球が切れちゃったから取り替えてくれないかしら」と言われたからつてのはどうなのか。

それを堂々と仕事相手に主張するつてんだから笑っちゃうけど、そこで「なんでやねん!」とツツコんだら「神の教えを冒瀆する気!?」とか言つて、殺されかねない勢いでキレられちゃうつてんだからオソロシイ。

皆さん、イスラム圏を旅行するときは気を付けましょうね。郷に入っては郷に従えですよ。ツアコンのヒトがイスラム教徒だったら、約束の時間に遅れて来ても怒れませんからね？

だって、そのヒトの遅れた理由が「子どものおねしょ布団を干してたから」でも、「目覚ましが鳴らなかったから」でも、「着てきた服がなんか気に入らなかったから」でも、全部「神様の思し召し」なんですもの。

「初めまして。ランスレイルの姉の、ミリディアナ・フォゼットデス。ミリイと呼んで下さいネ」

そうして、ランスレイルと一緒にやって来たミリディアナは、写真よりずっときれいなひとだった。

かなり旅慣れているらしく、薄化粧にＴシャツにジーンズというラフな格好だが、さりげなく耳元で揺れているピアスや腰の細さを強調するチェーンベルトが、厭味無く大人の女性という感じた。

何より、ふんわりと落ち着いたもの柔らかな笑顔は、リラックス効果がハンパない。

赤ん坊並の 波とか出してるんじゃないだろうか。

ささめとは種類が違うが、癒やし系という同類項できっちり括れてしまう、男女問わずに誰からも愛されるタイプだ。

「・・・ディー」

想像以上に素敵な女性の登場に、揃ってミリディアナに見とれていた有紗達だったが、ランスレイルの奇妙に落ち着いた声に、はつと我に返った。

イカン、幾らランスレイルに一通り紹介されていたとはいえ、自己紹介もせずにぼけらったとしているなんて、失礼にも程があつたと慌てたのだが、その前にランスレイルがにっこりと言葉を続けた。

「ミリイのボーイフレンドに立候補するなら、先に痛々しいフィアONSEを、デイーの人生から完全に排除するデスよ？」

「……」

大輝の顔が盛大に引きつり、有紗とささめはぼん、と両側からその肩を叩いた。

いやだって、綺麗なおねーさんを見たときの青少年としては、大輝の反応は至って真つ当ですよ？

アメリカのハイスクールとは比べものにならないほど純情可憐な日本の高校生男子は、いきなりそんな高望みはしたりしませんよ、ランス君。それ位今までの付き合いで分かるでしょうに。

だからホラ、自慢の姉上様にちよつと見とれるくらいは許してあげてくれませんか？

（まあ、これだけ素敵なおねーさまだったら、番犬になりたくなる気持ちも分かるけどねー）

今日のランスレイルは、びしつと警戒態勢のお耳も凜々しい、ジ



ヤーマンシェパードモードです。

・・・それにしても、ランスレイルって威嚇するときも笑顔なんだな、気を付けよう。

こういうタイプが、実は怒らせると一番怖かったりするのだ。

ミリディアナは外見通りのおっとりさんなのか、まだ日本の空気感に慣れていないのか、マア、ディーにはフィアンセがいるのね、イタイタシイってどういう意味だったかしら、などと仰っている。

その辺は「奥義・日本人の曖昧なホホエミ」で誤魔化しながらカフェテラスに移動した一同は、十一時の開館時間までお茶をして時間を潰すことにした。

先週から始まった「江戸絵画展」を、ミリディアナは随分楽しみにしていたらしく、ランスレイルと同じ色の瞳がきらきらと輝いている。

「そうデスね、一般の学生サンが、日本画のことをベンキョーしたことがナイのは、仕方のないことだと思っデスよ」

これから訪れる予定の展覧会のパンフレットをテーブルに置いたミリディアナが、にっこりと笑って言う。

「普通の水彩画や油絵と違って、日本画に使われる絵の具は、とても高価デスから」

初めて聞く事実には、高校生一同は揃って「へー」と耳を傾ける。

例えば、とミリディアナはパンフレットに映っている、有紗達でも「あー、なんか見たことある」と言うような、華やかな鶏の絵が描かれた掛け軸の写真を指さした。

「ちよつと違う話になるデスが、少し前まで、どれだけオークションで日本画が持て囃されても、この素晴らしい作者の描いた絵の贋作・・・ニセモノは、存在しないだろうと言われていまシタ。何故だか分かるデスか？」

「・・・絵の具が高いから、ですか？」

この話の流れからはそうなのだろうとしか言いようがないが、そんなにぶつ飛んでお高いモノなのかと首を傾げる子ども達に、ミリディアナは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「この作品は、絹地に描かれているデス。描かれた当時と同じ素材、同じ染料を揃えようと思えば、日本円だと・・・そうデスね、五千万円位になると思うデスよ？」

「ごせんまん！？と驚愕を顕わにした一同に、ミリディアナはそうデス、と肯いた。

「だからこそ、贋作は存在しないと思われていたデスね。贋作作りの主な目的は、それを高く売って儲けることデスから」

しかし十数年前、サザビীরオークションで、それはそれは精巧な贋作が発見されたことから、その常識はひっくり返った。

現在でも海外のオークションでは日本画が人気を博しているが、近頃その真贋の鑑定が非常に困難なものになっているのだとか。

ミリディアナは小難しい話をこねくり回して知識をひけらかすような人ではなく、ちょっとした雑学めいた話を幾つもしてくれた。

「そう言えば、この間教授から聞いた話なのデスが、とてもとても古い日本の『ビョーブ』が、ヨーロッパの館から発見されたそうなのデスよ」

安土桃山時代、諸外国との交易で、華やかで大きく、しかも折りたたんで運搬できる屏風は、日本文化を面白がる当時の欧州においても、かなりの人気物件だったのだとか。

しかし、屏風というのは何しろ紙で出来ている。しかも当時の海外貿易は、命懸けの船旅である。

潮風と虫食いによって、運ばれていった多くの屏風が大変気の毒なことになってしまったらしい。

「そのため、ビョーブを運ぶ際には、近くに大量のチリペッパーを置いておいたそうデス」

グッジョブ唐辛子。流石、今でもお米の虫除けに活躍しているだけのことはある。

そうして無事到着した幾つかの屏風は、非常に高値で取引されることになり、殆どが金持ちや貴族に買われていった。

しかし、幾らお金持ちやお貴族様だって、盛者必衰、いつまでもブイブイ言わせていることなんか出来ません。

屏風は持ち主が変わる度に来歴が分からなくなり、とある東洋文化好きのお姫様が、「なんか中国っぽくって素敵だワ」と手に入れた屏風をバラして補強した後、お屋敷の壁の一部として組み込んだものが、近年豊臣秀吉時代の大坂城下町を描いたモノらしいと鑑定されたのだとか。

へー、へー、とミリディアナの話を聞いている内に、いつの間にか時間は過ぎ、美術館の開館時間となっていた。

ほぼ十一時ジャストに入館すると、少しひんやりとした独特の空気が肌を撫でていく。

美術品の保管は、温度湿度の管理が最重要課題だ。さぞ立派な空調設備が採用されているに違いない。

「ミリイさん、お話上手だねー」

すっかりミリディアナのファンになってしまったらしいささめが、ほう、と両手を頬に当てて息を吐く。

確かに、これだけ美人で物腰柔らかか、おまけに知識も知性も兼ね備えていますとなれば、憧れるなど言う方が無理だ。

有紗だつてきゅんきゅんときめきまくりだし、大輝など「世の中には、パーフェクトな美人っているもんなんだな・・・」と半分泣きそうになっている。

「最近、笑っちゃう位物・凄・く！残念過ぎる美少女とか、姐御系天然ロリ美少女とか、恐怖のヅカ系美少女にしか遭遇してなかったから、この世にはふつーの美人なんてモノは存在しねーのかと思っ

てたのに・・・！」

・・・おい、大輝。本音をダダ漏らすんなら、せめて時と場合と場所を選べ。

閑静な美術館、おまけに素敵レディのミリディアナさんがいらっしやるとあつては、丸めたパンフレットでしばらくことも出来ないじゃないか、卑怯者。

しかし、大輝の「パーフェクトな美人」発言を聞いたランスレイルは、展覧会会場に入るなり絵の前に立ち尽くし、うつとりと見入っている姉の後ろ姿をちらりと眺めて、小さく溜息を吐いた。

「・・・デイー。そう言ってくれるでしたら、本格的に痛々しいフィアンセをデイーの人生から排除してみませんか？」

ワタシに出来ることがあるでしたら、何でも協力するデスよ、と言うランスレイルに、三人は「へ？」と目を丸くした。

何ですかいきなり、番犬モードのランスレイルの発言とも思えない。

それは一体どうゆうこと？と三人が揃ってクエスチョンマークを浮かべると、ランスレイルはぼそぼそと歯切れ悪く口を開いた。

「ミリイは・・・一人ではダメなのデス。傍に誰かがいないと、生きていけないデス」

何だそりゃ。

普通誰だつてそうじゃないかと首を傾げると、ランスレイルは「ふ……」と珍しく遠い目をした。

「子どもの頃から、ミリイは何かに夢中になると、周りが目に入らなくなるヒトだったデス。プライマリースクールのとき、蝶の羽化を研究すると言つて、部屋中巨大な芋虫とサナギだらけにしたときは、ママが泣いていたデスね……」

ひいひいひい！

反射的に、同じように真っ青になったささめとがっしと抱き合う。

何それ、何のホラーハウス！？

いーやー！想像しただけで鳥肌が立つ！

「それ位だつたらまだ良かったのデスが」

それ位！？部屋中巨大芋虫だらけが、「それ位」！？

「FBIでアンリールサルウェポンが開発されているという話を聞いたときは、それがどれ程の威力があるものなのか、実地で試してみると言い出したデス。……あれが一番辛かったデス」

アンリールサルウェポンというと、非殺傷武器。

銃社会のアメリカで、それは画期的な話ではなかるうかと思うのだが、それは一般人に試すことが出来るモノなのか。

あ、何だかこれ以上話を聞いてはいけない予感がひしひしと。

「・・・臭いのデス」

「「「・・・は？」」」

「催涙弾の悪臭バージョン、とえばいいデスカ。それは世界中のあらゆる悪臭を放つ物体を組み合わせで、どんな凶悪犯でも悶絶する悪臭を、と言うコンセプトで開発された最終兵器だったのデス」

その材料はと言えば、有名所ではフルーツの女王と呼ばれるドリアン、アラスカのアザラシの漬け物キビヤック、日本のクサヤも候補に挙げられたそうだ。

「最終的に、ドリアンと腐敗した魚、人間の排泄物を組み合わせた臭いは、どんな人種の人間も耐えられない悪臭と感ぜるとかで」

流石に人間の排泄物は家族総出で止めさせたデスが、と呟くランスレイルは、当時のことを思い出しているのか、ちよつと虚ろな目をしていた。

「兎に角、ミリイは一人にしてはいけないヒトなのデス。傍に誰がいなければ、必ずや恐ろしいことが起きるのデス」

一人では生きていけないって、そう言う意味ですか。

あははー、日本語って難しいですね？

「デスから、ミリイの心を魅了してくれた日本美術、そして日本に、ワタシ達家族はとても感謝しているのデス！」

力一杯、それはもう魂の叫びを籠めて言うランスレイルに、日本人三名は未だうつとりと絵画を眺めているミリディアナの後ろ姿を、今までとはちょっと違う気持ちで振り返った。

・・・大輝君、コメントをどうぞ。

「・・・美人って」

はい？

「・・・怖い」



### 第37話 ミリディアナ（後書き）

作中に出てくるFBIの最終兵器は、実在します。

アメリカは多民族国家なので、どんな人種の犯人でも悶絶するような悪臭を開発するのは大変だったらしいですよ。

### 第38話 トライウム。(前書き)

後半、マッチョ好きの方は、少々ご不快になる表現が御座います。

そう言った方はお読みにならないようお願い申し上げます。

灯乃は今まで、ナルシストでないマッチョな方とお目にかかったことがナイので、ちょっと苦手です。

### 第38話 トラウマ。

高校生活最大のイベントと言えば、やはり学園祭だ。

義務教育時代と違って手作りの飲食物を扱うことも許されるようになるし、格段に手の込んだ衣装を用意することも出来る。

特にこの藤沢学園高校は、お坊ちゃんお嬢ちゃんの通うオカネモチ学校なので、各クラスにかなり高額予算を与えられ、それを如何に運用して利益をあげるかのシミュレーション的な要素もあるとかないとか。

まあ、そんな裏事情なんてものは、せーしゅん真っ盛りな現役高校生が知ったことじゃないわけで。

「和馬のクラスは、何するかもう決まった？」

もうすぐ学園祭ですヨー、生徒一同気張って青春しようね という告知が生徒会執行部から出たのは、もう五日前のこと。

それ以来、有紗の一年F組は何をするか、やいのやいのと騒ぎ合っているだけでサッパリ話が進んでいないのだが、有紗の部屋に遊びに来ていた和馬は「ああ」とあっさりと肯いた。

「うちのクラスには、斉藤がいるからな」

「斉藤さん？」

誰だそれは、と首を傾げると、和馬は少し困ったように苦笑を浮

かべた。

「あー・・・知らねえか。斉藤健吾つつつて、ウチの名物野郎なんだが」

その斉藤氏は、入学当初から異彩を放つ人物であつたらしい。

有紗と同じく奨学金による入学者で、入試の成績はトップ、新入生代表で体育館のステージに斉藤氏が現れた途端、女生徒達の盛大な悲鳴が上がったのだとか。・・・真っ黄色の。

「オレも、最初は何で女子が男子の制服着てるんだって驚いたからなあ」

しみじみと、昔を懐かしむように腕を組んで頷く和馬曰く。

その美人な斉藤氏は、美人だけでなく、行動力にも溢れたとっても愉快な人物なのだとか。

「一年の学祭るとき、それまで無かった女装コンテストの開催を生徒会に申請して、どういう手段を使っただか全校規模で派手に開催した挙げ句、満場一致で優勝搔っ攫って行つてな」

「へー」

それはまた、随分と突き抜けたお人のようだ。

女子高生というイキモノが、「女装男子（ただし美形に限る）」に成層圏をマッハで突破する勢いで萌えることを、正確に理解していたに違いない。

学園祭を盛り上げるのに、これ以上のネタがあるだろうか。残念ながら、有紗の辞書にそんなモノはない。

勿論、去年のコンテストでもぶっちぎりの優勝で、今年もそんなことは間違いのないと言われているらしい。

何しろ、どこから手に入れているのか、「どこのお城の舞踏会ですか」と言うようなドレスを、それはもう見事に着こなしてステージに現れるというのだから、ちよつと青春の笑える思い出に出てみようかな という程度の少年達に太刀打ち出来る筈もない。

その斉藤氏がお祭り野郎として君臨しているお陰で、毎年和馬のクラスは大盛況。

一年時は中国風ホラーハウス、二年時は観客参加型の舞台劇を華々しく成功させて、歴代トップの売り上げを叩き出している。

今年は彼のディナーショーを開催予定で、既に常連の他校の生徒達からは「前売りチケットお願い！」と言う声が売り切れご免の勢いで上がっているのだと言う。

何その学園伝説。

「普段から松 聖子式スキンケアを実施してるって豪語してて、こちらの女よりよっぽど白くてぴかぴかしてるし」

マジですか。それは凄いな、お化粧しない男のひとが、きちんとメイクしている女子に勝てるってよっぽどですよ。

・・・和馬のクラスのおねーさま方が、斉藤氏をどう思っているのか、ちよつと気になる。

美少年を愛するのは目に楽しいけれど、男のひとに「女」として負けるのはちよつと悔しい。オトメゴコロは複雑です。

「えーと・・・それは流行の男の娘とか、そーゆー人種なの？」

戸惑い半分、わくわく半分で訊ねてみたのだが、それには和馬はどうなんだかなと首を捻った。

「アイツ、一年の頃からカノジョいるしなあ」

「いや、男の娘とゲイは違うでしょ」

「どう違うんだ？」

不思議そうに問い返されて、う、と詰まる。

残念ながら、もややんとした曖昧なイメージがあるだけで、両者の違いを説明出来る程の深い知識はありません。

・・・明日、誰かに聞いてみます。

「それはね、あーちゃん！ゲイとオカマさんと男の娘の間には、それはもう、厳然！とした違いがあるのよー！」

ぐつと両手で握り拳を作り、軽くファイティングポーズを決めてそう仰るのは、確かに我らがロリ巨乳、今日もぷくぷくほっぺが可愛らしいささめさん、なのですが。

いや別にささめに訊くつもりはなくてね、そういう話に詳しいのってクラスに誰がいるかな？って話を振っただけなのよ？

え、何？何でそんなにつぶらなお目々をきらきら輝かせてるの？大輝とランスレイルが思い切り引いてるよ？

しかし、ささめはその愛くるしいほっぺをぷう、と膨らませて腕を組んだ。

「ええー、あたしはむしろ、あーちゃんが知らないコトにびっくりだよ？」  
「いっつもあたし達に微妙にただれたツッコミするくせにー、女子高生の必須知識に欠けているのはどうかと思うのー」

「・・・必須知識なの？」

そうなのか、それはちょっと知らないのは恥ずかしいな。

是非ご教授下さい、ささめさん。

「いやそれ、別に必須ってわけじゃ・・・」  
「ないと思うデスよ・・・？」  
と中途半端に上げた手を海中のワカメのように彷徨わせる大輝とランスレイルを余所に、ささめはよーし、と力強く頷いた。

そうして、ささめが懇切丁寧に語ってくれた話を大雑把にざっくり纏めるならば、その三者の違いと言うのは、自意識と恋愛対象の相違に要約出来そうだ。

自分を男だと思っていて、恋愛対象も同性なのがゲイ。

自分を本当は女だと思っているから、当然恋愛対象が『異性』である男なのがオカマさん。

自分を男だと思っていて、単に女の子の格好をするのが好きなだけだから、恋愛対象も普通に女の子であるのが男の娘。

ふむ、すつきり。後で和馬にも教えてあげよう。

「最近、テレビでもホントに女の子にしか見えない男の娘っているもんねー。まあ、あーゆー可愛いコは、極々！一部だと思っけどー」

「？普通の男のコが、趣味でスカートとか穿いてるだけなんじゃないの？」

女装を趣味とする位なのだから、それなりに自分に似合うと思っ  
てやっているのではないのかと言う有紗の素朴な疑問に、ささめは  
くわつと目を見開いた。

「甘い！甘いよ、あーちゃん！？」

「はい！？」

いやだから、何でそんなにエキサイト！？



既に机ごと物理的に引いている大輝とランスレイルの傍に、一緒に引きたくなっちゃうよ！？

しかし、ささめは「ふん！」と小さな拳を握り締めてファイティングポーズを取ると、言った。

「骨格も筋肉の付き方もまるで違う上に、ヒゲやら喉仏やらスネ毛腕毛なんかのムダムダしい余計なオプションがひつつきまくりの男のコが、衣装だけで『可愛い女の子』になれるわけないじゃんー！そんなのはタダの視覚の暴力！ある意味犯罪！ひとりでコッソリする分には好きにしてーだけど、人前に出没した時点で二度とそんな才口力な真似をしないよーに、可及的速やかに断固たる態度で慌てず騒がず、完膚無きまでに駆逐すべきなのようー！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

・・・あの・・・ね？

ホントにアナタの人生に何があったと言うの、ささめさん。

「男の娘のなりそこない」を、イニシャルGの黒い物体と同じ扱いをしたくなる程の、そんなに痛ましい事件があったとでも？

そそつとさりげなく大輝とランスレイルの近くまで移動して、ふー、ふー、と肩で息をしているささめを三人揃って遠巻きに見守っている、ふと我に返ったのか、ぽつりとささめが呟いた。

「ひらめちゃんがねー・・・」

『・・・ヒラメ?』

『何故、急におサカナの話になるデス?』

『ささめの上のお兄さんよ。「閃く」って字でセンさんだから、ひらめちゃん』

確か、現在二十四歳の社会人だ。もうひとり、その一つ年下に蛸と書いてケイさんと言うお兄さんがいるのだが、ささめは「ほたるちゃん」と呼んでいる。

彼らはトーゼンながら、年の離れた可愛い可愛い妹であるささめを溺愛しております。

その気持ちは物凄く良く分かるけど、他人事ながら、ちょっとヤバイレベルじゃないかなーと時々不安になったりします。

そして、そんな彼らを「ひらめ」だの「ほたる」だのと可愛らしい呼び方を出来るのはささめだけです。

だってふたりとも、高校から大学までずっとアメフト部所属のガチムチマツチヨなんだもの・・・ってまさかオイ。

「閃さんが女装に走ったとでも!?!」

それはダメだろう!

世の中にはやっていいことと悪いことがある!

そしてガチムチマツチヨの女装なんてものは絶対に後者だと断言

させて頂きます！

見たくない、見たくないよ、それはダメだよ確かにイニシャルGレベルに駆逐しても許されるよ！？

しかし、ささめはふつとそのロリ顔に似合わないアンニュイな溜息を吐いた。

え、やだなにやめて？ささめにはそんなブルーな表情は似合わないくつてよ？

ほら、いつも通りのきゅるんとらぶりーな笑顔を浮かべて下さいお願いします。

「ひらめちゃんが高校生のときにねー・・・」

ああ、やっぱり回想モードに入るんですね。

閃さんが高校生というと、私達は小学生だった頃ですか。

「アメフト部の出し物で、バニーガール喫茶をやることになったとかでねー・・・むっちむちのアメフト部員が沢山うちに集まって、網タイツなうさぎさんの衣装合わせとか、うっふんな接客練習とかを、毎日やっててねー」

さああああ、とうっかりその光景を想像してしまった三人の顔から、血の気が引く。

実際に目の当たりにしたわけでもないのに、脳内映像だけでトラウマになりそうだ。

しかし、幼気な子ども時代に、正にその地獄絵図のただ中に放り込まれていたささめの前で、そんなことはとても言えない。

ああ、なんてムゴい悲劇でございましょうか。

「ふふふ・・・部活帰りの男のコって、単品でもアレなのに、集団になるとさー・・・」

家畜臭いよね、と静かに呟いたささめに、現役バスケット部所属の子高校生である大輝とランスレイルが、ビクッと震えた。

いや、大丈夫だよふたりとも。

ウチの体育館シャワー室完備でしょ、今時の男のコだもん、ちゃんと部活の後にはシャワーを使ってるよね？

和馬だってそうだったもん、そうだって言っ

ささめに家畜認定されたくないでしょう？

### 第38話 トラウマ。(後書き)

作中の斉藤氏にはモデルがいます。

灯乃が遭遇した中で、間違いなくベスト3に入る愉快的先輩でした・  
・。

今現在、何をなさっているのかは存じませんが、松 聖子式スキン  
ケアは、彼のつるぴかお肌を見る限り、間違いなく有効です。

灯乃は面倒過ぎて挫折しましたけど。

### 第39話 男に二言は認めません。

しかし、ささめはそんなトラウマを抱えているにも関わらず、いやだからこそなのか、ちゃんと「男の娘」道を貫いているヒトビトには寛容であるようだ。

まあ、女装MEETS美少年に萌えない女子高生はいないから、そーゆーことなのだろう。

「だって、可愛いしー」

そうですね、ホラーなガチムチマッチョの女装姿と一緒にしたら、真面目な男の娘さん達に失礼ってモンです。

「でもー、大輝君とランスは、女装なんてしちゃダメだよ？」

きゆるんとようやくいつも通りの笑顔を浮かべて言うささめに、大輝とランスレイルがぶつぶつぶ、とそれはもう力強く肯く。

「しないしないしないするわけない」

「例え神に命じられてもしないデス」

落ち着け、ふたりとも。

普通に人生てくてく歩いているだけなら、女装なんて遠い世界のことだから。

神様は女装しろとか言わんから。

・・・でも、大輝もランスレイルも立派に「美少年」の括りに入る容姿をしているのだから、女装をしてもそれ程見苦しいことにはならないと思うのに、何故にささめはそんな「分かってんだろうなオラ」な目をなさっているのでしょうか。

「えー、だってふたりとも骨格ちゃんとしてるしー、上腕二頭筋も三頭筋も胸筋も背筋もしっかりしてるしー、第一肩幅があるから女の子の服着てもバランス悪くなっちゃうだけだしー、脚はニーハイ穿けば誤魔化せるかもだけど、やっぱりスネ毛とか気になるしー」

「そ、そう・・・」

「・・・」

「・・・」

「男の娘になるにはねー、よっぽど骨格に恵まれてないと無理だと思っのー」

それは、恵まれていると言っのだろうか。

大輝とランスレイルの顔色が益々アレなことになっているが、ささめは少し考える顔をして首を傾げた。

「お顔はね、よっぽど崩れてなければ、お化粧でどうとでもなるからいいのよう？でもねー、首から下は、やっぱり骨が細めで、筋肉とか最低限なカンジじゃないとダメだと思っのー」

やっぱりささめは、かなり長兄の女装姿がトラウマになっている

みたいです。

出来ればお肌もあんまり焼けてない方がいいなー、とささめは言うけれど、それはむしろもやしっ子と言うんじゃないだろうか。

まあ最近多いけどね、そう言う草食系男子。

特にうちのクラスは草食系含有率高いし、その気になればやれそうな連中も結構いそうだなと思っていて、突然背後から「うふふふ」と不気味な笑い声が響いた。

何事!?!と振り返ると、そこに何やらノートを丸めたものを握り締めて、クラス委員長の井内美保（趣味・パンダ。私物は殆どパンダグッズ）が、トレードマークのスタイリッシュなメタルフレーム眼鏡をきらーん!と輝かせて立っていた。

肩まで伸ばした真っ直ぐな黒髪も美しい、後輩が出来たら絶対「お姉様」と呼ばれるタイプの、実に頼りがいのある娘さん、なので。

あの一、何だか眼鏡の奥の瞳が据わってますよ？

「・・・よく言ってくれたわ、春日ちゃん」

「えー、なにー?」

美保は持ち前のクールビューティな仕草で、眼鏡のつるを揃えた人差し指と中指でクイッと上げると、それはそれはイイ笑顔を浮かべて見せた。



「中途半端な真似はしない。．．．それが、商売繁盛の鉄則ってモノよね」

はあ、それは全くもってその通りだと思います。

その何やら異様な迫力にざわついていた教室が静まり返り、クラス中の視線が女王様．．．いや、委員長・美保に集中する。

「話が纏まらなければ纏まらないだけ、どんどん学園祭の準備期間が圧迫されて、いずれ自分達の首を絞めるだけ。そんなことは分かりきっているというのに、未だにぐだぐだとクラスの出し物ひとつ決められない。そんなことが許されるのか？答えは、否！」

ばしーん！と丸めたノートで自分の手のひらを景気よく叩いた美保は、ぐるりと教室を見渡した。

「聞け。この教室内にいる全ての貧相な野郎共」

「『『『『『．．．！』『』『』『』」

わあ、クラス中の男子生徒が一斉にびくつきましたよ。

皆、貧相って程貧相な体つきをしているわけじゃないのだが、少なくとも美保の言葉に「オレ、実は脱いだら凄いです」と自己肯定を貫けるナルシストはいなかったらしい。良かった良かった。

そんな彼らを睥睨し、美保は更に言葉を続ける。

「いいか？世の中には、ちょっとカッコいいスポーツ系の男子相手には初々しくも気後れしてしまい、声を掛けられないお嬢さんは多

々あれど、可愛い女装男子に声を掛けられない女子高生はまずいい！」

それは確かにその通り。

ガタイのいい、「オレってカッコいいよね」的な男子には、緊張しちゃって見詰めるだけが精一杯の純情な娘さんでも、相手が女装男子となれば「きゃー可愛い！」となってしまうものだ。

何か、垣根が取っ払われる感じ？

少なくとも、相手に対する警戒心って、限りなくゼロに近くなる。

「そして、学園祭というシチュエーションで女装をしたところで、変態扱いするような女の子だって、今時どこにもいやしない」

そうですね。

女装男子を正しく異性と認識する女の子も、まずいないとは思いますが、その残酷な事実は今伏せておきましょう。

お前達、と美保がゆっくりと言葉を刻む。

「人生で一度位、女の子に取り囲まれてきゃあきゃあ持て囃されてみたことはないか・・・？」

次の瞬間。

きっと世にも珍しい、男子生徒自らの希望による「男の娘」をメインとした喫茶店が誕生することが、一年F組クラス委員長、井内

美保の名において可決された。

・・・その後、美保とささめの厳正なる審査の結果、「男の娘候補」が選抜されていったのですが、ガタイのいい男子高校生が女装を出来ないって言って本気で悔しがるのが図と言うのは、端から見るとちよつと気持ち悪かったです。

何はともあれ、クラスの男子生徒の半数が（多少、ささめが渋々妥協した部分もあるようだが）女装することになり、同じような仮装をした女子と入り交じつての「男の娘はだゝれだ カフェ」と言う微妙なネーミングながら、これ以上無く内容の分かりやすい名前が申請書に記入された。

大輝とランスレイルを含む女装しない男子については、一部女子から「執事のコスプレとかどうかしら？」な意見もちよつと出たのだが、そんなことをしたら男の娘をウリにする意味が無くなってしまうじゃないか、と美保が無言の圧力で黙殺した。

確かに、英国風執事スタイルなんて、ランスレイルなんかがやったらシャレにならない。

似合い過ぎて、普通にきゃあきゃあ言われてしまう。

女性客が集まるところには、自然と男性客も集まるものなんですよ、例えばそこが女装男子の巣窟でも。

何事も中途半端はよくありません、二兎を追う者は一兎をも得ずって言いますからね。

そうして、方向性が決まってしまうえば、一気に走り出すのが若さ

というもの。

見事に一致団結しているクラスの様子に、その頂点に君臨する美保は、正に女王様のように満足げ。

「ふ・・・何だかちょっとクセになりそうだわ」

調教って楽しいわよね、と呟いた彼女の声は、聞かなかったことにしました。今はクラスの団結が最優先事項です。

そんな美保とささめを中心に決定された衣装は、浴衣。

ボデイラインがまず分からず、むしろ寸胴である程よく似合うとされる、日本の誇る伝統美。

・・・ただし、「だって、お祭りだものー」と言う理由で、ミニスカタイプになっているアレですが。

それぞれのおうちから、もう着なくなった浴衣を持ち寄って再利用すればいいよねー、と仰るのは、確かにその通りかと思えますけれど。

（えええええ）

ちょ、ささめさん。アナタ、スネ毛は嫌とか言ってた？

何故にわざわざそんな危うい道を選択するの、と言う周囲からのクエスチョンマークに、ささめはにつこー、とそれはそれは愛くるしくも自信に満ちた笑顔を浮かべた。

「大丈夫だろう？」

え、何が？

「脱毛クリームだったら、全然痛くないからねー！すぐにつるつるぴかぴかになれるよう！最近のヤツはお肌も荒れにくくなってるし、何も心配いらないうー！」

・・・ハイ、ソウデスネ。

きらきらと明るい記憶か、ぎらぎらと黒光りする記憶になるかはまだ分からないけど、どちらにしろきつと、忘れられない青春の思い出になるに違いない。

さつき「女装出来なくて悔し泣き」していた男子生徒達も、俄然やる気を取り戻していますよ。

その分、男の娘要員の男子生徒は、思い切り青ざめていますけど。

一度やると決めたからには逃げるなよ、野郎共。

男に二言は無いんだろ？

## 第40話 浴衣のシンデレラ

あつという間に時は過ぎて、学園祭当日。

・・・お化粧の威力って凄いですね。

いや、ここまで来れば、もう特殊メイクの域だと思う。

何しろ、まだまだ成長過程なんです、遅くなるのは数年後からなので将来性に期待して下さい、という風情の、それでもどう見ても男子にしか見えなかったクラスメイト達が、どこから見てもスレンダーな女の子にしか見えなくなっているんだから、これをワザと言わずして何と言うのか。

色とりどりの浴衣に合わせた華やかな簪や髪飾りが、優雅に結い上げたカツラを彩り、しゃらりと涼やかな音を奏でている。

背が高めのコには、しつとりと大人っぽい紺色の地に水色の朝顔や上品なクリーム色の矢絨柄。

小柄なコには、可愛いピンクや黄色に明るいい花柄や、水色に流水と金魚。

お嬢様含有率が高いだけあって、提供された浴衣もミニスリ仕様にしちやうのが勿体ないような素敵なおモノばかり、着付けも複雑な帯の飾り結びも完璧です。

どこもかしこもつるつるに脱毛された上にマニキュアペディキュアもしっかり施され、丸みは無いがムダもない、真っ直ぐな脚線美

を披露する男の娘達に、ダイエットに夢中の女子からは怨念めいた視線が向いております。

男の子って、意外と足のラインがキレイなもんですね。

これなら全然大丈夫です、むしろアリです。

と言うか、ささめの主張がしみじみと正しいものだの実証されました。

ささめにダメ出しを食らった男子が数名、巫山戯てそのごつごつしいボディに浴衣を羽織って「どーお？」とシナを作った瞬間、近くにいた女子数名が迷わずそれぞれ手にしていたブラシやドライヤーやヘアスプレーを投げつけましたから。

けど正しく選抜された男の娘の中からは、メイクを担当した女子が「・・・負けたッ」と完敗宣言を吐き出した美少女も数名発生して、そんな彼らに女の子にしか見えない女装男子が見とれている様子は、何だか百合のようでカオスです。

今回のイベントを切欠に、新たな世界へ踏み込んだじゃう奴がいたとしたら・・・うん、それはとっても楽しそうだ。

誰か勇気を出して、最初の一步を踏み出してくれないだろうか。クラスを上げて応援するぞ？

そんなちよっぴりカオスな「男の娘はだ〜れだ カフェ」のシステムは至って単純。

ウェイトレスがそれぞれナンバーを記したプレートを胸に付け、

客は「これは男の娘でしょう！」と思った子のナンバーを三つ、お帰りの際に所定の紙に書いて係に提出。

それが全部当たっていたら、一番お好みの男の娘と記念撮影が出来ます。さあ、アナタの鑑定眼を試してみませんか？というモノだ。

因みに、一番人気が高かった男の娘は、打ち上げのカラオケ代金を免除ということで、皆「うふふ、勝つのはこのアタクシよ！」「おほほ、冗談はそのお顔だけになさい！」とすっかりお嬢様キャラが定着している模様。

うん、実に楽しそう。どうやら皆、無事開き直りに成功したようだ。

因みに、「お嬢様キャラ」は今回、男女問わず必須です。

実際やってみるとちょっと楽しくて、それこそクセになりそうですわよ、オホホの水。

こういうのって、深く考えずに楽しんだ者の勝ちなんですね。

男の娘達も皆、大分裏声が板に付いてきています。声変わりがまだのこなんて、正体を知っているクラスメイトでさえうつかりしたら間違えそう。

そして、衣装が浴衣なだけに、提供する飲食物も和菓子と日本茶。

抹茶だろぅが煎茶だろぅが焙じ茶だろぅが番茶だろぅが玄米茶だろぅが、オーダー次第でどんと来い。その辺で出てくるモノとはひと味も二味も違うモノを提供させて頂きます。



ミニス力浴衣を「ちよつとそれは・・・（ぽつ、と初々しく頬を染めて下さいました、ごちそうさまです）」と辞退して裏方に回った面々のお嬢様スキル、本領発揮です。手際の良さがハンパないです。きつと彼女達はいいい奥方になるに違いない。

有紗自身は、浅黄色の地に桔梗柄というちよつと大人っぽい雰囲気きふきの浴衣で、短めの裾の下にはしっかりとスパッツを着用している。

他の女子は大抵、見えても大丈夫な下着を穿いているから、このせいで男の娘に間違えられるかもしれないけれど、まあそれはそれで面白そうだし問題ない。

いつ下着が見えてもおかしくない格好でふらふら歩き回って、和馬の機嫌が氷点下になるよりずっとマシだ。

その辺、ほんとココロが狭いからなー。

「うおーい、有紗ー」

皆の支度もそろそろ終わった頃、シフト表を確認していた有紗は、女装を免れ、顔色も足取りも明るく祭りの準備に勤しんでいた大輝とランスレイルが、困惑した表情を浮かべてやって来るのに首を傾げた。

「どうかした？」

それが、とふたりが顔を見合わせる。

「ささめが更衣室から出て来ねーんだ」

「中で、イウチサンがササーメイを宥めている声は聞こえるデスが・  
・」

何ですと？

あの二人は、今回のイベントの旗振り役だ。その彼女達が揃って引き籠もり状態というのは、全くもってよろしくない。

この「男の娘はだ〜れだ カフェ」の成否に関わりかねん。

慌てて女子用更衣室として確保していた空き教室に向かうと、確かにその扉の向こうから、美保の弱り切った声が聞こえてきた。

今回、「委員長」から密かに「女王様」にジョブチェンジした美保とも思えない様子に疑問を抱きつつ、「入るよー」と声を掛けて扉を開く。

「ああ・・・七瀬ちゃん」

教室の隅、上品な薄藤色に撫子柄の浴衣が良く似合う美保が、途方に暮れたような、安堵したような顔で振り返る。

その彼女の傍で、桜色に小花模様も可愛らしい浴衣姿のささめが、膝を抱えて丸くなっている。

「・・・どしたの？ささめ」

「・・・」

こちらからは殆ど、その背中にふつくと丸く結ばれた帯しか見えないが、そのまま「えいや」と転がしたくなる程の愛くるしさが漂っているというのに、一体何をいじけているのやら。

更衣室に残っていたのは美保とささめだけ。

ふたりとも既に着替えを終えていたため、開いた扉はそのままにしておいたのだが、ちよつと閉めた方がいいだろうかと思っていると、ささめが何やらぼそつと呟いた。

「え？何？」

よく聞こえずに問い返すと、今度はもう少しはつきりと聞こえた。

「・・・あーちゃんも、みーちゃんも、ズルい」

みーちゃんと言うのは、美保のことですか。

いやいやそんな、いきなりズルいと言われても意味不明ですよ？

「・・・好きでちっちゃいわけじゃないもん。毎日牛乳だって飲んでももん。・・・きつと、ひらめちゃんとはたるちゃんに、おつきくなる遺伝子情報を全部おかーさんの中から持って行かれちゃったんだもん」

ぶつぶつぶつ。

え、何？何でいきなり、ちっちゃくてらぶりーきゅーとなアイデンティティと向き合ってるの？

恐らく事情を知っているだろう美保に「一体何が？」と目顔で問うと、うむ、と頷きを返した美保が唐突に丸くなっているささめの脇の下にぐいっと手を入れ、そのままいせと持ち上げた。

おお、力持ちですね。

女子の中では結構背が高い部類の美保に背後から持ち上げられると、ささめの小柄な体はまるで小学生・・・って。

(・・・ええええええと)

何かを諦めたように、でろんと力を抜いたささめを持ったまま、くるりと美保がこちらを向いた途端、その場に何とも言い表しようのない沈黙が落ちた。

・・・世の中の男性諸氏は、近頃体型が欧米化してきている若い女性が浴衣を着るとき、ソレ用の下着で胸を潰すか、腹回りに「どりゃあああ！」とばかりにタオルなんかをぐるぐる巻きにしていることをご存じでしょうか。

浴衣美人の中には、男の人の夢とアコガレじゃなくて、タオルがみっちり詰まっているんですよ。

哀しいことですけども、それが切ない現実です。

そうしておかないと、帯を締めたときに、お胸が「もいーん」と乗っかつちゃうんですよ。

エロ系のマンガなんかでは全然アリかもしれませんが、現実ではただもっさりして、下品でカッコ悪くなるだけなんです。

それでもそれなりに背丈があれば、多少タオル巻きになって寸胴になっても、帯を高めに締める作りも相俟って視線が上に行くから、浴衣っていうのはちゃんとキレイに着こなせるようになっていて、のですけども。

・・・ささめは、巨乳である。ついでに小柄である。とどめに童顔だったりする。

幾ら童顔でも今までちゃんと年相応に見えていたのは、どうやらそのばーん、きゅぼん！なナイスバディの為だったらしい。

ささめのイメージに合わせた可愛い桜色の浴衣を纏うべく、恐らく大量のタオルを巻き付けたのだらう。

その結果、小柄、寸胴、童顔の三拍子揃ったささめは・・・どこからどう見ても、「ちよつとふくふくした小学生」だった。

（あー、うー、おー）

世の中には、越えられそうで決して越えられない、広く深い川と言つものが存在する。

そして、その大河は確かに「小学生」と「小学生みたいな高校生」の間にも存在していた筈だった。

しかしささめはその大河を、いとも簡単に飛び越えてしまった。

「寸胴さんこそワタシのシンデレラよ」と優雅に微笑む浴衣と言つ存在の、底知れないパワーによって。

(・・・ダメだ・・・ッ)

のーみそをどれだけフル回転させても、今、目の前にある現実を  
フォローする言葉が見つからない。

と言うか、こんなさめにウエイトレスをさせたりしたら、客か  
ら「何で小学生が・・・？」と奇異の目で見られて、イベントど  
ころではなくなってしまうそうだ。

そんな、触れたら砕け散りそうな緊迫した空気の中、「オウ・・・  
」とヒジョーに聞き慣れた感嘆の声が響いた。

「ササーメイ、とってもキュートデスよ？ええと、この間テレビで  
見た、アレのようデス」

ほこほこと孫を愛でるじーさまのような表情を浮かべたランスレ  
イルに、その場の全ての視線と期待が集中した。

彼の隣では、今すぐこの場からダッシュで逃げ出したいけど出来  
ずに固まっております、という顔をした大輝の額に、くだらたと汗  
が滲んでいる。

ランスレイルのにこやかな笑顔が、これ程頼もしく思えたことが  
あっただろうか。いやない。

『・・・っお願い、ランス！欧米人の女性礼賛スキルを持つてるア  
ンタになら、この状況を打開出来る筈！いえ、アンタにしか出来な  
いわ！』

『頼む！オレはフォローしようとして言ったことがどツボに嵌まって、益々事態を悪化させちゃう生粋の日本人なんだーっ！』

そんな二人の必死の祈りを受けつつ、エエト、と何かを思い出そうとするように眉を寄せていたランスレイルは、不意にそうデス！と顔を輝かせた。

「まるで、ストロベリーサンのようデス！」

そのとき、確かに時間が砕け散る音を聞いた気がしました。

『『……ランス……』』

ストロベリーサン イチゴサン（恐らく多分）シチゴサン。

即ち、七五三。

そのオヤジギャグのような結論に辿り着いた有紗と大輝は、生まれて初めて「よよよ……」と床に崩れ落ちた。

『……どうしよう、大輝。私今、目の前の霧がスツキリ晴れた気分になってるんだけど』

『先入観の無い素直な感性って、物事の本質を的確に抉り出すんだな……』

そこはかかない敗北感にも似た寂寥感にふたりが打ちひしがれている中、硬直した美保の手からぼたっと落ちたささめが、再び壁に向かって膝を抱え、まあるくなった。ああ、可愛い。

「ああッ、皆、どうしたデス!？」

どうもしないよ、ランスレイル。

キミは何にも悪くない。

ただちょっと、可愛いロリ巨乳より、男の娘の方が浴衣を着こなせるんだという事実にびっくりしただけさ。



#### 第41話 学園祭開始十分前の攻防。

その後、美保は一体どういうツテを頼ったものか、学園祭開始二十分前には、ささめにとつても良く似合う「不思議の国のアリス」な衣装を用意してくれました。

水色のパフスリーブワンピース、白いエプロンドレスに白黒ボーダーラインのニーハイソックス。

超上げ底の黒いエナメル靴を履き、ワンピースと同じ水色のリボンの付いたカチューシャで、くるくる巻き毛のカツラをしっかりと装着したささめは、本の世界から飛び出して来たんじゃないかと思うようなアリスでございます。

オプシオンには、タキシードにモノクルをかけた白ウサギのぬいぐるみもあつたりして、「えへへー、似合う？」とはに cand 笑顔を浮かべられた日にはもう、さあ、ハートの女王を悩殺してらっしゃい！と言つ愛くるしさだ。

「・・・ささ」

「なあにー？」

ささめが美保から新たに与えられた指令は、チラシを持つての宣伝係。

イベントの内容と全然関係のないコスプレでも、目立ちゃいいんだ文句あるかのポジションである。

周囲からの絶賛を受けてすっかりご機嫌になり、「一杯お客さんを呼んでくるからねー！」と新たな気合いに満ち溢れているささめの肩を、がっしと掴む。

「今日は、久川さんが来るんだよね？」

「う、うんー？来るよう？」

よーしよし。

任務中は基本誰かが一緒だし、あの強面久川と一緒に・・・にこのらぶりーきゅーとなアリスがいるところを想像するとちよつと微妙だが、少なくともあの御仁に正面切つて喧嘩を売るようなバカはそうすういまい。

久川が来たら、お帰りになるときには、必ず教室まで送り届けてくれるように念を押しておこう。

まあ、有紗がわざわざ言わなくても、きつとそうしてくれるだろうけれど。

コレにお祭りモードの校内をるんたつたとひとりで歩かせるのは、不安どころの騒ぎじゃない。

断食明けのオオカミの群れの中に、程よくこんがりジューシーに焼き上がった子羊の丸焼きを放置するようなものだ。

「ねーねー、あーちゃん？」

そんな決意を固めていた有紗に、ささめがきゅるんと首を傾げた。

・・・ふわふわもここのウサギのぬいぐるみを抱き締める、巨乳のアリス。うーむ、マニアが泣いて喜びそうだ。

「あのねー、いつこお願いがあるのー」

うん、何かなー？

そんな風にもじもじと恥じらいながら、ほっぺをぴんくに染めて上目遣いなんかされちゃったら、どんなヤローも一撃必殺だぞ

だからあんまり、余所でそう言うお顔をしちゃダメよ？久川さんの前でだけにしときなさいね？

「あのね、あのね、今度ね？・・・あーちゃん達と、ダブルデートがしてみたいのー」

ダメかなー？と見上げられて、有紗はちょっと戸惑ってしまった。

（デート・・・？）

と言うと、アレか。

恋人と外で待ち合わせをし、何処かへ遊びに行つてウフファハハと絆を深める恒例行事。

「・・・そう言えば」

腕を組んで脳内情報を検索してみたが、どうにもそう言った感じのモノが引つかからない。

「え？」

「和馬と、デートらしいデートって、したことないかも」

えええええ！？とささめがひっくり返った悲鳴を上げるが、ないもんはない。

今更自分達がインドア派だと気付くとは、ちょっと感慨深いものがある。和馬も人混みキライだもんな。

「えー、じゃあ、ええ？・・・お休みの日とか、会ったりしないのー？」

「ううん？大抵、うちにいるけど」

「う、うちって、あーちゃんのお部屋？」

「うん」

「あーちゃんのお部屋に、志波先輩が来るの？いつつも？」

「うん。そうだけど？」

それがどうかしたのかと首を傾げると、ささめのほっぺがぼぼぼと赤く染まっていく。

うーむ、ナニか想像してしまったらしい。

「な、なにしてるのー？」

おおつ、直球で訊いてきますか。

さて、どうしたものか。

一、アダルティな好奇心を力一杯満たしてあげる。

二、健全な高校生のフリをして、「慌てることはないのヨ」と安心させてあげる。

・・・はい、すみません。一は、学園祭開始直前の明るい教室で語るようなことじゃないですね。

エロ系の恋バナは、またの機会に致します。

「んー・・・。レンタルショップで借りてきた映画見たり、一緒にご飯食べたりもするけど、勉強見てもらうのが多いかなあ」

嘘は言っていませんよー。

何しろ和馬は、全国模試二桁の常連さんなのである。

教え方も上手だし、家庭教師としてはとってもハイレベルで有り難い。

おれにご飯を作ると、ちゃんと後片付けは手伝ってくれるし、本当に良く出来た恋人で私は幸せです。

につこり笑ってそう言うと、ささめは一瞬大きく目を睜ってにじり寄って来た。

「・・・あーちゃん、志波先輩にお勉強見て貰ってるのー？」

あ、今度はそっちに食いつきましたか。

「ひょっとして、昔のノートなんか貰ってたりしてー？」

「そ、それはないよ？」

それ位、頼めばくれるだろうけど、分からないことはすぐにその場で教えてくれるから、わざわざノートを貰う必要性が無いのだ。

きらきらと期待に輝いていたささめが、がっくりと項垂れる。

意味も無く謝ってしまいたくなる「しょんぼり」具合に慌てつつ、有紗は強引に話を戻した。

「だ・・・だからね？別に構わないんだけど、なんでわざわざダブルデート？」

デートなんてものは、恋人同士で行うものだと言われているのだからして、わざわざ二組揃って行く意味が分からん。

そんなことをしても、らぶらぶしい空気を出しにくだけなんじやなかるつか。

しかし、ささめは腕の中の白ウサギをぎゅうつと抱き締めると、それはそれは初々しくぽぽと頬を染めた。

・・・すいません、ちょっとカメラを持って来ていいですか？

カレシの久川じゃなくても悶絶しそうな愛くるしいイキモノがここにいますよ、シャッターチャンスは今ですよ。

「き・・・緊張しちゃうんだもんー」

「・・・へ？」

何を今更？夏休み以来、デートなんて何度もしてたんじゃなかったの？

その度甘酸っぱくも微笑ましいノロケ話を聞かされて、大輝とランスレイルと三人揃って、幸せ一杯夢一杯オーラでお腹いっぱいになったものですよ？

ランスレイルが「これが胃モタレというもののデスカ・・・」とげんなりしながら、初めてささめからちよっぴり距離を置いた瞬間だったよ？

しかしささめは、今この瞬間、その腕の中の白ウサギと成り代わるものならば死んでも構わん！と言い出す野郎共が大量発生しそうな勢いでそれを抱き締めながら、切羽詰まった様子で訴えた。

「ま、前は平気だったの！おにーちゃんとお出掛けするの楽しいし、嬉しいし、それだけだったの！」

あー・・・何でしょうか、物凄く胃薬が欲しくなる予感が致します。

胃もたれに一番効くのとて何だっけ。

て言うか、ささめは未だに彼のことを「おにーちゃん」と呼んでいるのか。

実の兄上達のことは名前で呼んでるのに、ただでさえシスコン気味の彼らに、久川サンが呪われちゃっても知らないぞ？

幾ら久川サンが喧嘩慣れしてても、ガチムチマッチョのアメフトガイズにタッグを組んで突撃されたら、回避不能なんじゃないかなー？

そんな風に若干現実から逃亡しかけている有紗に、ささめは容赦なく究極のメンタルアタック・「幼馴染みのおにーちゃんとのドキドキ 物語」初恋のほのかな香りを添えて」を繰り出してきた。

「でもね、でもね、最近、ダメなんだもん！おにーちゃんといるときどきしっちゃって、あんまりゴハンも食べられないし、手とか繋いでも、汗掻いて湿っぽくなっちゃってるんじゃないかとか気になっただけだし、ふたりになったら、何話していいか分かんなくなっちゃっしー！」

（・・・ああ・・・うん・・・）

世の中の恋バナって、みんなこんなに初々しくも甘酸っぱいモノなのか・・・。

なんだか、自分が世間の垢で汚れきっている気がしてきて、真っ直ぐにささめのキラめく瞳を見られないよ、ウフフフフ。

オトナになるって、キレイなものを直視出来なくなるってことだったんだね、初めて知ったよ、アハハハハ。新たな真実をありがと



う。

「だからねっ、あーちゃんはオツキアイのセンパイだし、それにそれに、あーちゃんが一緒だったら緊張しないかなーって・・・」

もじもじもじ。てれてれてれ。

（久川さん・・・私はアナタを尊敬します）

よくもまあ、こんな愛くるしいイキモノを目の前にしておきながら、ここまでキレイにキレイにささめの「恋心」を栽培することが出来たものです、心の底から感心します。いえ、むしろ感動します。

きつと久川には、成人男性百人分の強靱な理性が搭載されているに違いない。

・・・よし。

初対面るとき、ちよいと苛めてしまったお詫びに、今度は微力ながら一肌脱いであげようじゃありませんか。

いや別に、おふたりの微笑ましいデートを堂々とデバガメ出来るぜラッキー！なんて思っていますよ？

たまには和馬と普通の高校生カップルみたいなことをしてみたくもあるし、あなた方の初々しい空気を少し分けて貰いたいなーなんてことも思っていないですよ？

余所様と自分達を比べてもいいこと無いですしね、こちらはこちらでマイペースにやらせて頂きますよ、ハイ。

・・・でもちょっと位、「天然な小悪魔？カノジヨに振り回されて、ぐるんぐるん回っちゃう気の毒なカレシ」なーんて言う、少女漫画の王道をリアルで楽しむ位は許して下さい。

今まで胃もたれを通り越して、胸焼けまでいっちゃう位甘々しいノロケ話をずっと聞いていたんだから、これ位の役得があったっていいと思うんです。

## 第42話 扉が開くとき。

(・・・うーわー・・・)

辺りに漂う、しーんと静まりかえった空気が耳に痛い。

現在教室の床に完全に人事不省となつて伸びているのは、私服だからこの学校の生徒なのかはサッパリだが、派手な金茶色の髪をツンツンと跳ねさせ、重そうなシルバーアクセサリーを耳や鼻や首や手首に「これでもか!」とじゃらじゃら纏つた、まあ、所謂「不良少年」と言われる高校生だと思われれます。

事の起こりは数分前。

・・・いえ、我がクラスに発生した、「完成度激高男の娘」達を見た瞬間に、こういうことが起こっちゃうかもなー、という危惧が頭の片隅をちらつと掠めたりはしたのですけども。

要するに、彼らを頭つから女の子だろうと信じきつて、疑いもせずにナンパしちゃうお客様という、ちよつとアレな事態が冗談抜きに現実となつてしまったのです。

「ホントは男だから!」と幾ら言われても信じられない気持ちも分からなくもないけど、かなりしつこく口説いてきた挙げ句に「んなこと言つて逃げる気かよ?」とか逆ギレして手首を掴み、全然、全く、これっぽっちも頭つから信じない相手に、健全な高校一年生男子がキレても仕方がないと思います。

教室の真ん中では、不良少年の顎先に、ひじょーにキレのある動

きで鋭く真下から挟り込むよーにお盆の縁を叩き込んだ男の娘・図書委員の下沢真幸がぜいぜいと肩で息をしながら、据わりきった目つきで伸びた相手を睨み付けている。

その鳥肌がびっしりの細腕には、意外なパワーが秘められていた模様。

（・・・うーむ、やっぱり可愛い。シャレにならんくらい可愛い。おまけにそうやってアホを見下しきった目つきが壮絶に色っぽい）

目尻の泣きぼくろって、お色気ポイントとして最強ですね。

真幸がその細身の体に纏っているのは、水色の地に氷紋の、とても涼しげな浴衣である。

腰には山吹色の帯を締め、黒髪のカツラを右耳の上で緩くまとめ上げて少し巻いた毛先を垂らし、紫から薄青のグラデーションを見せる色とりどりの花を象った髪飾りを挿した姿は、ティーンズ誌の浴衣特集を飾っても全くおかしくない美少女っぷりだ。

そこには、「本を読んでいるときが一番幸せ」オーラを放ちながら、いつも教室の片隅で分厚い本を読みふけている地味系少年の姿はない。

メイク担当のクラスメイト達は、魔法使いだと思います。

「・・・」

（え？ちよっ・・・うわあ）

「ごす！ぐりぐりぐり。」

おもむろに真幸がその細い足を持ち上げ、低めとはいえ尖ったミユールの底で、不良少年の頭を踏みつける。

「起きろ、オラ」

声変わり前のその声が、こんなにも恐ろしく聞こえたのは初めてです。

あのー、女王様キャラは委員長的美保だけで十分ですよ？

ひとつの集団に、女王が複数誕生するのは混乱の元ですよ？

クラスメイト一同と、満員御礼の客達全員が固唾を呑んで見守る中、げし！と一際強く蹴りつけられた不良少年がぐぐもった声を上げて身動きする。

ああ良かった、生きてた生きてた。

「う・・・？」

「・・・てめえは、ナンパの仕方も知らねえのか？オレが男だったから良かったものの、女の子の腕掴んで脅すような真似を普段からやってるわけか、ああ！？味噌汁でツラあ洗って少しはのーみそに皺増やしてから出直して来い、この腐れ×××野郎が！」

（（（（・・・っそつちですかー！？））））

まさかのお怒りポイントに、その場にいた全員が、美少女の姿を

した男の子・・・いや、男の中の漢に心臓をぶち抜かれました。

効果音は勿論、リボルバーキャノンの銃声です。

てつきり、自分が女の子扱いされたことにキレたのかと思いきや、世の中の繊細な女性陣が言いたくても言えないことを、こうもズバンと言い切ってくれるなんて、まあなんてアニキなジェントルマン。

『やだ・・・あの子、カッコいい・・・』

『え、何番何番！？やだー、こっち向いてくれないと分かんないー！』

『・・・ヤベえ、オレ今、あいつのことアニキって呼びたくなっちまった・・・』

『う、大丈夫だ、オレもだ。見た目は美少女でやってることは女王様だけど、あいつは間違いなく、ウチのクラスで一番のアニキだ・・・！』

教室内の空気が物凄い勢いで桃色と紫色に染まる中、当の不良少年だけが一度真っ青に血の気の引いた歪んだ顔を、じわじわとどす黒く染め始めた。

あ、マズい。

「っざけんなよ、このカマ野郎ー！」

そのカマ野郎を力一杯ナンパしていたのはどこの誰ですか、とツッコんでいる場合では無い。

幾らアニキな男の娘でも、殴り合いなんてものと無縁の図書委員が、頭に血が上った喧嘩上等な単細胞不良少年に掴みかかれて避けられるわけがない。

喧嘩慣れしていない普通の高校生は、殴りかかれたらぎゅっと目を閉じるだけで精一杯だ。

浴衣の胸ぐらを掴まれた真幸もその例に漏れなかったが、有紗は不良少年の拳が彼に届く前に、手にしていた盆をフリスビーの要領で鋭く投じた。

ストライク。

「ごーん、と鈍い音を立てて不良少年の頭に直撃した盆は、床に落ちるとくわんくわんと踊りながら「任務完了!」と宣言した。

うむ、ご苦労。

立て続けの衝撃を食らって、不良少年は再びぼったりと人事不省となり、一拍置いて「おおおお!」と教室中に歓声が沸き上がる。

や、どーもどーも。

「あーちゃん、すごい! カッコいい!」

教室の入り口で、ぴよぴよと白ウサギを抱えて飛び跳ねるさめの賛辞に、おほほほ! とふんぞり返って高笑い。

メイク担当の、「ふっふっふ、設定年齢二十一歳、大人の色気も

感じさせつつ決して下品にはならない、誰もが振り返る絶世の美女にしてあげるからね・・・？ああッ、このお顔に心ゆくまでフルメイク出来るなんて・・・カ・イ・カ・ン」と仰るクラスメイトに若干引き気味になりながらも、その宣言通りのメイクを施された今の有紗には、高笑いがとつてもよく似合う。

「トーゼンよ！アタクシ達の仲間に出そうなんて下等動物は、この世に存在する価値はなくなつてよ！」

「そうよそうよ！」

「全く、ナンパした挙げ句に逆ギレして暴力を振るうなんて、男の風上にも置けませんわー！」

教室に渦巻くおーっほほほ！という高笑いの洪水。

うん、うちのクラスってほんとノリがいい。

お客様まで一緒に高笑いをして下さって、ご声援ありがとうございます。

「さあ、皆さん！こんな下等動物には、それに相応しい罰を与えてあげなくてはいいけませんわ！」

我がクラスの誇る最上級男の娘を、このアホはよりにもよって力マ野郎呼ばわりしてくれたのだ。

その罪、万死に値する。

有紗はデコラティブなネイルアートを施された指を軽く組み、に



っこりと極上の笑顔を振りまいた。

「どれ程手を尽くしたところで、下等動物には美しさなど手に入れることは叶わないのだと、その厳肅なる事実を身をもって証明して頂きましょう……？」

そう有紗が言い終えるなり、しゅびつと教室を飛び出したささめが、控え室から男の娘達のメイク直しをしていたクラスメイトを引っ張ってきた。

勿論、メイク道具一式も持参してます。

しかし事の次第を説明されるなり、その芸術的な技術を持つメイク担当・渡辺ちひろはすう、とその表情を消した。

「何ですって……？」

元々ベリーショートの髪型に、くつきりとした派手目の顔立ちという、見た目の印象がちょっとキツイ少女なのだが、無表情になるとその迫力がハンパない。

「……下沢君を？ナンパしたのは分かるわよ？それはもう、この世の真実というものだもの、全く当然というものよ？」

……あれ、ちひろさん？何か、瞳孔が開いて……。

「でも……それを、殴ろうとした、と。そればかりか、こともあろうに『カマ野郎』だなんて低俗下劣な言葉で愚弄した、と？この私の、最高傑作を……？」

(・・・)

申し訳ありません。

何か、とても開いてはいけない扉を開いてしまったみたいです。

すいません悪気は無かったです、ただちょっと彼女の素晴らしいメイク技術で、アホな不良少年にちょっと笑える化粧をして貰ってからお帰り頂きたいな、なーんて調子に乗ったことを考えてしまっただけなんですー！

そのちひろの言うところの「最高傑作」、真幸がその空虚な視線を受けて顔を引きつらせる。

「いつ、いや、別に殴られたわけじゃねーし！七瀬！ありがとうな！お陰で助かったぜ！」

「ふはは、気にするな！ピンチの時には助け合っのが仲間とゆーもんじゃないか！」

びしっとサムズアップを交わす、(一見)ふたりの美少女。

うふふおほほのお嬢様ワールドが崩壊し、何故か暑苦しい漢の友情が展開しつつある中、「え・・・何、あのコも男の子なの・・・？」「ウツソー、幾ら何でも・・・」「でもでも、あっちのコだって男の子なんだし・・・」とお客様の間で混乱が生じつつあったが、当人達の額にはだらだらと冷や汗が滲んでいた。

すっとう・・・と、まるで幽霊の如き足取りで、幸福にも未だにおねんね中の不良少年の傍にちひろが近づく。

『な・・・七瀬っ！？渡辺がこええっ！目が完全にイってる！』

『いいいいざとなったら殴って気絶させる！』

女の子を殴るのは物凄く気が引けるが、流石に教室を殺人現場にはしたくない。

ちひろが抱える、プロ並みのメイク道具がぎっしり詰まったジェルミンケースの輝きが、「ボク、結構重たいんだよ」と訴える。

あんなモノをまともに食らったら、とてもじゃないがタダでは済まない。

しかし、ちひろが不良少年まであと三歩、と言う距離に詰め寄ったとき、「ああああーちゃああああんっ！」と言うささめのひっくり返った叫び声が響いた。

「お客様ー！志波先輩が来たようーっ！？」

（・・・っ和馬あああっ！）

これぞ天の助け！と半分泣きそうになりながら振り返ると、そこにはバーテンダーのような格好をした和馬が、ランニングにジャージと言う、「体操のおにーさん」な格好の元バレー部エースの新藤（趣味・バンジージャンプ）と共にそこにいた。

「・・・何だ？この凍り付いた空気は」

「あれ、喧嘩かあ？」

首を傾げた彼らの疑問に答えるのは後回しにして、和馬のコスプレ姿に見惚れるのも我慢して、有紗はがっしとその腕を掴んだ。

「和馬！」

「・・・また、ものすげえ美人っぷりだな？」

ありがとうございます、でもひとりじゃ絶対出来ないからね、この化粧！

自分でも鏡見たとき「誰コレ」って思ったもん、いやマジで！

でも、そんな和馬の心からの賛辞にきゅんきゅんときめくのも後回しです！

今はどうにかしてちひろの気を逸らさねば！

「さあ和馬！誰がうちの自慢の男の娘か、一目で全部当てられるモノなら当ててご覧なさい！」

「・・・あ？」

（おーねーがーiiiiiiiiっ！今は何も言わずに協力してえええーっっ！）

訝しげな顔をする和馬に視線だけで懇願すると、何が何だかと言う顔をしながらも、ざっと教室内に視線を巡らせた和馬は、おもむろに口を開いた。

「三番、十二番、八番、二十四番、十九番」

全く迷いを見せずに正解を弾き出すのは、幾らお化粧をしたところで、和馬がイキモノの性別を間違えるわけがないお人なので当然です。

イカサマっぽくてすいません。

心の中ですいませんごめんなさいと手を合わせていると、クラスメイト達が「うわあ」と言う感じにざわめき出す。

「……す、すげえ……ちらつと見ただけで全問正解？」

「お、オレ、ちょっと自信あつたんだけどな……」

「いや……イケてると思うぞ？オレだってそんな悪くねーよかな？」

「ひょっとして化粧崩れとか？え、直して貰った方がいいのか？」

……スマン、男の娘諸君。

君らは立派に男の娘だよ、自信を持って大丈夫だよ。

そんな彼らの不安げな様子に、ちひろが何かしらの反応を見せてくれないだろうかと思ったのだが、やはり無理だったかと有紗が覚悟と拳をぐつと固めたときだった。

「自分達が原因で殺人事件が発生ですか！？それはイヤです！」とビビりまくっていた有紗と真幸の視線の先で、ちひろがふつと何

かに反応したように瞬いた。

「化粧崩れ・・・？」

（・・・つよっしゃああっ！）

力一杯、ガッツポーズ。

ふらりと完全にロックオンしていた不良少年から視線を外したちひろは、すぐ傍で硬直していた真幸に目をやると、先程のやりとりで着崩れた浴衣の胸元を見て眉を顰めた。

「・・・下沢君」

「ハイ！」

「・・・控え室」

今すぐ着付けを直してもらって来い、とのご命令に真幸が素早く従うと、ちひろは何事も無かったように化粧道具を抱えて去って行った。

神様、和馬、ありがとう。

お陰でこの教室が殺人現場になることは避けられました・・・うう、怖かった。

### 第43話 後始末。

さて、取り敢えず悲劇の発生を回避出来たものの、最後の面倒事としてまだ残っているのは、未だにのんびりお休み中の不良少年。

妙にガタイがいいので、かなりの床面積を占領しているのが鬱陶しい。

今更ながら、まさか有紗の投げた盆の当たり所が悪かったんじゃないあるまいなときどきしながら突っついてみたのだが、「うみゅう・・」と言う全く似合わん可愛らしい寝言を零したので大丈夫そうだ。ああ良かった。

しかし、その少年の寝顔を見て「あれ？」と首を傾げたのは、和馬と一緒にやって来た新藤だった。

「コイツ、北高の及川じゃん」

「北の及川・・って、ああ、去年クラブハウスで煙草吸って、バレー部を退部になったってアホか」

腕を組んで頷きながらの和馬の言葉に、何となく「ああ・・・」とその場の空気が痛々しい子を包み込むようなものになる。

北高と言えば、スポーツで有名な高校だ。そのバレー部と言えば、卒業生から実業団選手も多数輩出しているという名門中の名門。

未成年だとかそれ以前に、スポーツ選手が煙草なんか吸うな、アホんだら。煙草を吸う人間に、競技スポーツをする資格はない。

つまりは、喫煙問題で名門バレー部を退部になった挙げ句、分かりやすくやさぐれた不良少年が、ここで転がっている及川だと。

何人が一緒に来ていた連中がいたはずなのに、どうやら及川は彼らに見捨てられてしまったらしく、最早どこにもその姿はない。友達甲斐のない連中だ。

まあ、恥ずかしさの余り逃げ出したくなる気持ちも分からなくはないが、幾ら重そうだからって気絶した友達を置いて行くか、普通。持って帰れ、ポイ捨てするとは全くマナーがなっとらん。

迷惑だなー、早くさつき委員長が呼びに行った学校祭実行委員（トラブルシューターな便利屋さんとも言っ）が来ないかなー、と一年F組の生徒達が戸惑いながら見守る中、及川がぼっかりと目を覚ました。

勢いよく跳ね起きて悲鳴を上げる。

「うおおー!？」

「おー、お目覚めかー?」

「及川。美少年をナンパして断られ、逆ギレした上に振り返ちに遭った挙げ句、公衆の面前で気絶したことを広められなくなったら、今すぐ失せろ」

「……っ!」



顔見知りらしく、呑気にへらりと片手を挙げた新藤と、目覚めたばかりの及川が、淡々と告げられた和馬の言葉にビシッと凍り付く。

うーん、和馬の言っていることは端的に事実を表しているんだけど、そんな風に言つと及川が物凄く不憫で軟弱な変態さんのようだけど、しかし、和馬はアホな勘違い野郎に遠慮なんていたしません。

ああ、若干竜王モードの入った容赦ない横顔がステキです、惚れ直します。

「オレは、失せろ、と言つたんだが？」

いえ、聞こえていると思いますよ？ただ、及川の足腰が生まれたばかりの子羊のよーにガクブル状態で、中々立ち上がれないだけです、和馬さん。

暖かみの欠片も無い、超絶クールな冷え切つた声にうつとりしている、つんつんと浴衣の袖を引っ張られた。

何ですかもう。

只今恋人に絶賛惚れ直し中なんだぞ、ジャマをしないで下さいよと思ひながら振り返ると、女王様な委員長・美保が些か青ざめた面持ちでそこにいた。

「あ、お帰り」

その腕章を付けたおふたりが実行委員さんですか？ご苦労様です。

「な、七瀬ちゃん・・・！」

何故か声を潜めて、ぼそぼそと。

「何？」

「頼むからアンタのカレシを止めてくれ・・・！たかが頭の悪い不良高校生に、あの霸王な威圧感はいらんだろう！？」

（・・・おおう）

それもそうですね、和馬の竜王モードな視線は、暴れ狂う魔族でも「ヤバいマズい逆らったら死ぬ」となっちゃうモノなのだからして、ちよいと不良がかった高校生程度が耐えられるよーなモノじゃございません。

いや、和馬にしてみたらこの位でんで本気じゃないのだが、それでももう十分過ぎるだろう。

何だか今にも三度目の気絶に入りそうになっている及川が、ちょっと気の毒になってきた。

「和馬さん、和馬さん」

「ん？どうした？」

途端に相手を圧殺しそうな気配を消し、穏やかな笑みを浮かべた和馬に、周囲が揃って「はああああ」と大きく息を吐き出すのが聞こえた。・・・何だかすいません。

でも実際、これはクラスの問題なのだから、和馬に矢面に立つてもらうのはどうかと思うわけで。

「実行委員のヒト達が来たし、後はお任せしよう?」

実行委員の方々が腕章を付けて校内を練り歩いているのは、正にこういうトラブルを解決する為なのだから、利用出来るモノは利用させて頂きましょう。

・・・いや、そこでチツとか残念そうに舌打ちしない。それが正しい一般生徒の姿と言うモンです。

何せ、彼らにはそんな面倒事をこなす為に、それはもう様々な特権が付与されているのだから、その分働いて頂きたいと思うのはコレ人情。

だって、実行委員の腕章を付けていれば、どのクラスに行ってもタダ食い出来るんですよ。

その分の代金は生徒会執行部の予算から補填されるんですよ。

そりゃあ、「パトロールしてる間は遊べねーし、それ位役得があったっていいじゃん」ってお話なんでしょうけど、このパトロール任務に就いてるメンツってのが、当然ながら柔道部やら空手部やらレスリング部のバリバリの武闘派連中ばかりとなると、そのガタイでどれだけタダ飯食ってんだコノヤロウとか思っちゃっても仕方がないと言つものでしょう?

おまけに、これもやっぱりと言つべきなのか、女装したら即座に

ささめに駆逐されそうな体格の（要はマッチョの）実行委員のおふたりは、既にまな板に載った哀れな獲物（及川）を目にした途端、それはそれは嬉しそうなイイ笑顔を浮かべられました。

彼らが学園祭の間にどれだけトラブルを解決したによつて、生徒会執行部から出る報酬のランクが変わるらしいと言う噂話は、本当なのかも知れません。

「ほー、ナルホドナルホド。女装した男子生徒をナンパして断られ、逆ギレして暴力沙汰を起こした、と」

「はっはっは、会長もまさか、こんな事件は想定外だったんじゃないですかねー」

「会長から指示されたマニュアルは、きっちり頭に入ってるな？」

「当たり前だろー？この御仁が栄えある生け贄第一号ってわけだな」  
「！」

（・・・生け贄？）

それはまた何だか、不穏な響き。

夏休み明けに代替わりしたばかりの生徒会長殿は、お約束通りの眼鏡系知性派男子です。

先代の生徒会長が、普段はおっとりさんだけどシメるとこはちゃんとシメるよ？なお人で、優秀な仲間達に「信者ですか」な勢いで慕われていたのだが、その筆頭であった副会長が繰り上がりで新たな生徒会長となったのだ。

元々優秀なヒトだと言う噂話には事欠かない人物で、有紗は遠目にしか見たことはないが、如何にも伶俐、冷静、冷徹、冷淡と言ったひんやりした単語が似合いそんな雰囲気を持ち主である。

その生徒会長殿が、学園祭実行委員・トラブルシューター要員の面々にどんな指示を出したのか、と皆興味津々、わくわくしながら見守っていたのだが、常に二人一組で行動しているという彼らは、既に顔面蒼白になっている及川を「どっせい！」と言う掛け声と共にそのマツチヨな肩に担ぎ上げた。

（おおお！？）

前後に並んだマツチヨな実行委員は、仰向けになって呆然としている及川を担ぎ上げたまま、「それでは失礼！」と爽やかな笑顔を浮かべて教室を出て行くと、おもむろに腰に装着していた拡声器のマイクを取り出した。

『あー、あー、テスト。ただいまマイクのテスト中』

『テスト。・・・えー、校内の皆様ー、毎度お騒がせしております、こちらは当学園祭実行委員、樹川と、』

『小林と申しますー』

なんだか、ご町内をのんびり周回するちり紙回収車のような。

『えー、我々は現在、一年F組、「男の娘はだ〜れだ カフェ」において、問題行動を起こした人物を捕獲致したところで御座いますー』

『ご存じの通り、この一年F組では、女装した可愛らしい男子生徒がお客様をお待ちしておりますー』

『そこで、この人物はことあるうちに男子生徒を熱心にナンパ致しましてー』

『その男子生徒に断られたことに腹を立て、暴力行為に及んだとのことで御座いますー』

(うーわー・・・)

止める、降ろせ、と喚き散らす及川のわめき声が、時折マイクの音声に混じって聞こえる。

しかし、のしのしと校内を練り歩きながら、彼の行為を喧伝しているらしいマツチョなふたりは、そんなことは全く意に介していないようだ。

・・・物凄い晒し者の刑だ。これは恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

彼の人生で、本日の出来事はきつと、輝かしい黒歴史の一ページとなったことだろう。

こんなオソロシイ指令を出した生徒会長殿は、間違いなく敵に回してはいけないタイプだ、気を付けよう。触らぬ神に祟りなし。

そんなことを考えながら、何度か深呼吸して心の平穏を取り戻そうとしていると、有紗、と柔らかな声で和馬に呼ばれた。

「何？」

「良かったな。実行委員がお前達の宣伝、してくれてるぞ？」

「・・・おお！」

言われてみればその通り、と有紗は手のひらを拳でばきゅんと叩いた。

禍転じて福となす。これは立派な宣伝になる上に、「あんまりアホな真似したらこんな目に遭っちゃうよ、お行儀良くして楽しもうね」と言う抑止効果もばっちりだ。

グッジョブ実行委員、ナイスアイデア生徒会長、流石です。

しかし、良かった良かったと和馬と笑い合っていると、「お前ら・・・」とすっかりその存在を忘れていた新藤が呻いた。

そう言えば、何でこのひと和馬と一緒にだったんだろう。友達だったのかな、仲良さげだし。

「今を見て、言うことがソレか・・・？」

「？何がだ？」

「ありがたいですよ？感謝してます」

「・・・オレだったら、あんなことされたら恥ずかしくて、しばらく家から一步も出られねーぞ。登校拒否位ふつーにしちゃうぞ」

「んなの、自業自得ってモンだろう」

「男のひとって、意外と繊細なんですねえ」

そう言う問題じゃねーだろう、と肩を落とした新藤は、ふっと遠い目をして及川が連れ去られた廊下の向こうを見詰めた。

「オレ、昔あいつとゲーセンで、格ゲー対戦とかしたこともあったんだけどなー・・・」

ああ、青春のページを共有した仲だったんですね。

それはまた、何と言うか・・・ご愁傷様です。



#### 第44話 フリーダムなヒト。

和馬と新藤が連れ立ってやって来たのは、別に申し合わせたわけでもなんでもなく、単に有紗のシフト時間に合わせて和馬が迎えに来たとき、たまたま新藤が興味本位で「男の娘はだ〜れだ カフェ」を覗きに来ただけらしい。

それでも、元バスケット部とバレー部の主将同士、それなりに親交はあったと言つふたりが並んでいると、その長身も相俟ってかなりの迫力だ。

「へー。君が、噂の和馬のお姫様かー」

「噂？」

何となく流れで一緒に教室を出るなり、「ナルホドナルホド」と妙に訳知り顔で肯く新藤に首を傾げる。

「いやあ、と笑った新藤に和馬が何か言うより先、彼はけらけらと笑いながら口を開いた。

「コイツはねー。もう昔はなんてーのかな、女子に対しては人当たりはそこそこのけど全部上っ面なカンジで、告られても全部『面倒くさい』でばっさり切っちゃうひでー野郎だったのにねー」

「おい！」

「その和馬が！バレンタインに貰ったチョコを、纏めて全部焼却炉に放り込んだ外道伝説の持ち主が！まーさーか、教室の真ん中でべ

るちゅーして所有権がつつり主張しちゃう位、ガチで女の子にメロ  
っっちゃうなんてねー！」

うはははは！と笑い転げる新藤にとっては、和馬が入学当初にし  
でかしてくれたちよつと懐かしい思い出が、和馬をからかう絶好の  
ネタとなっていたようだ。

お・ま・え・は！と和馬がその「体操のおにーさん」なランニン  
グシャツをぎりぎり締め上げているというのに、それでも爆笑し  
続けているとは、随分と頑丈なお人である。

「さつき及川にキレたのだって、アイツがお姫様のクラスに迷惑掛  
けたからだろー？分っかり易ー！」

「啓介。お前のその思ったことを脳髓を通過させずに脊髄反射で口  
から出す短絡的な性格に、どれだけバレー部の連中が苦勞してきた  
か、細大漏らさず文書にして放送部に提出してやろうか？」

きつと一週間は昼の放送のネタに事欠かねえぞ、と低く低く言  
う和馬に、新藤がへ？と目を丸くする。

「オレ、ネタになるようなことなんて何かしたかー？」

心底不思議そうに首を傾げる新藤に、珍しく和馬が固まった。

「……啓介」

「何だよ？」

「……悪いことは言わねえ。一度、仲間と後輩達の前で、何も言わ

ずに土下座して来い」

えええー！？と目を丸くする新藤は、一体今までナニをやらかしていたのやら。

どこか疲れたような顔をして和馬が新藤から手を離れたとき、先程着崩れた浴衣を着付け直しに行っていた真幸（やつぱりどこから見ても可憐系美少女）が控え室から戻って来た。

「お疲れー」

「……ああ」

そこはかとなく疲労感の漂う風情が、また妙な色っぽさというか「守ってあげたいオーラ」となって真幸を取り巻いていて、すれ違う人々が男女問わず百パーセントの確率で振り返っている。

うーむ、これで中身は一本筋が通ったアニキなのだから、人は本当に見かけに寄らん。

「シフト交代でしょ？少し控え室で休んでたら？」

何だか疲れているようだし、その姿で下手に出歩いたらまた妙な輩に絡まれたりして気が休まらないんじゃないかと思ったのだが、真幸は「はああああ」とそれはそれは深々と溜息を吐いた。

「オレは今、よーやくその控え室から逃げてきたところなんだよ」

「はい？」

きよとんと目を丸くすると、真幸は些か恨みがましい目つきで有紗と和馬を見詰めてきた。

「……志波先輩が、オレら全員を一発で見抜いただろ」

「あ……ああ、うん？」

「それで、メイク担当の連中が燃え上がったまま……」

現在、控え室はそのプライドを刺激された彼女達の戦場と化しているらしい。

……うん。言われてみれば、確かにさっきまでよりお化粧は一層艶やかだし、髪型もずっと凝ったものになっている。

実に可愛い。「清楚可憐なお嬢様・完全版」と言ったところだろうか。

「うつわ君、男なの？マジでー？」

そこに、唐突に新藤の声が割って入って、間近に顔を覗き込まれる格好になった真幸がずざつと後退る。

ああ、これだから体育会系のおにーさんは。

文系少年は、基本的にパーソナルスペースの内側に不用意に入り込まれるのは苦手なんですよ。

だからこそ有紗は「ああッ、間近でじっくり観察してみたい！」とうずうずしながらも適度な距離感を保っていたというのに、新藤

は何故にそんな反応をされるのか分からなかったようだ。

「えっと……あれ？さっき、及川にナンパされた子、だよね？」

「……ええ、まあ」

警戒モード発令中の真幸に、新藤がふうん？と首を傾げる。

そうしてまじまじと真幸を見下ろしていたが、不意にかつと教育番組に相応しい朗らかな笑みを浮かべた。

「かわいいなあ。こりゃー及川が間違うのも仕方ねーわ」

「……どうも」

今日だけで一生分の「可愛い」と言う言葉を聞いたに違いない真幸は、そのまま軽く会釈してスルーしようとしたようだが、新藤はそんな真幸の腕をひょいと掴んで引っ張った。

「うおお！？」

「和馬ー、オレ、この子クラスの連中に見せてくるわー」

「「ちよーつと待ったーっっ！！」」

それはもうあっさりと真幸を自分の左腕に座らせ、所謂子ども抱っこ状態にしてそんなことをのたまう新藤に、有紗と和馬は同時にカ一杯ツツコんだ。

「お前は……！そのフリーダム加減を少しはどうにかしろっ！」

「下沢君、暴れるんじゃないわよ！？また着崩れたら控え室に強制送還コースよ！？」

有紗の指摘に、ただでさえ硬直していた真幸がびきつと凍り付く。

そんな真幸を腕に乗せたまま、新藤が不満げに口をとがらす。

「えー、駄目なのかあ？」

「そこで駄目じゃねえと思えるお前の思考回路の方が、オレは分かるん」

「そうですよ！ウチの大事な看板娘なんですから、観賞したければどうぞお店にお出で下さい！お持ち帰りは禁止です！」

ええええ、と残念そうに眉を下げる新藤の腕で、余りのことに機能停止していた真幸の思考回路が、ようやく再起動したようだ。

ひくひくと淡いパールピンクのルージュを塗られた唇が引きつって、その額に盛大なお怒りマークが浮かび上がる。

「……センパイ」

「んー？」

「今すぐ。降ろして。頂け。ませんか。ね？」

「えー、ヤだん」

「……」

……あのー、新藤さん。幾ら可愛くても、その口は男の子なんですけどいいんですか？それとも、男の子もイケちゃうひとなんですか？

有紗が思わず半目になって新藤を見ていると、隣で和馬がどこか遠くを見ながら深々と溜息を吐いた。

『……ビョーキが出た』

『へ？』

『アイツは善意のドSだ。無自覚にひとの嫌がるのが大好きなイキモノなんだ。カエルの苦手な後輩に「男はカエルを触れてこそ一人前なんだぞ、頑張つて訓練しような！」とか言つて、水槽一杯のヒキガエルを生物部からかつぱらつてくるよーなヤツなんだ』

え、嫌だなそれは。ドSなだけならまだしも、無自覚つてのが物凄く面倒くさい感が致しますよ？

バンジージャンプが趣味だなんて、てっきりMなヒトだと思つていたのに、予想外もいいところだ。

若干引き気味に見遣つた先で、新藤は何やら思い付いたような顔をして、よし、と肯いた。

「お持ち帰りが駄目なら、持つて歩こう！」

真幸の顔が、盛大に引きつる。

「……だ……っど……っ」

『……察するに、「だから、どーしてそーなる!？」ってところかなあ』

『多分な。オレでもそう言っ』

『ええ、和馬が新藤さんに抱っこされてるところは見たくないよ?』

『ンなもん想像するな、気色悪いっ』

好きでしたわけじゃないやい。

冗談抜きに全身に鳥肌を立てているらしい和馬に、「スマン」と片手を上げて謝罪の意を示していると、新藤があくまでもにっここと笑顔を絶やさずに言葉を続けた。

「おかしなナンパ男はオレがきっちり撃退してやるからな。安心していいぞ!」

……確かにそのウラオモテの無い笑顔は、「善意」とゆーモノに満ち溢れて見える。

ついでに、そんな羞恥プレイを提案された真幸が、ざあっと音が聞こえるような勢いで青ざめる。気の毒に。

「どこのアヤシイ変態だ、アンタは!?!男を持ち歩いて何が楽しい!?!」



「変態違う、オレはキレイで可愛いモンが好きだけー。いや、女の子だったらマジ好みなんだけどなあ」

「そのっ、発言の！どこがどう変態じゃないと！？」

「何を言うっ！こんなことを女の子にしたら、セクハラで通報されてしまっじゃないか！」

「何このヒト、日本語通じないんですけど！？」

キリッとした顔である意味正論ではあるものの、微妙に趣旨のずれた発言をする新藤に、真幸は半ば以上パニックに陥っているようだ。

しかし、そんな真幸には悪いが、この新藤というおにーさんは何だかあんまりお近づきにならない方がいい感じがする。

卑怯にも「頑張れ！」と軽く拳を振り上げて、そそつとその場を離れた有紗と和馬にもまるで気付かないようだった真幸は、一時間後、飛び入りで参加した（させられた）女装コンテストで準優勝に輝いていた。

今年も見事に優勝を果たし、有終の美を飾った斉藤氏（お色気たっぷりのチャイナドレスでした）が、スピーチで「初めてライバルらしいライバルに出会えて嬉しかったワ」ときつちリオネエ言葉でコメントしていたのに対し、真幸は彼からマイクを受け取ると、それはそれは可愛らしい笑顔を浮かべて、言った。

「ボクが今ここにいるのも、三年E組、元バレー部主将の新藤啓介センパイのお陰です　いきなり抱き上げられて「可愛い」を連呼さ

れたり、「マジ好み」とか真顔で言われたときには、ソツチの気がないボクでも、うっかりドキドキしちゃうところでしたー」

そうして、数秒間の沈黙の後。

「……っきゃあああああ！？」「……」

校舎前の前庭に設営されたステージ周辺は、女子高生達の腐敗臭漂う盛大な悲鳴に埋め尽くされ、その様子を少し離れたところで眺めていた有紗と和馬は、「肉を切らせて骨を断つ」を見事に実践した真幸の心意気に、心からの拍手を送っていた。

「自分のプライドを犠牲にしても、敵に一矢報いるとは……！」

「バレー部の連中にも、あれ位の気概があればな……」

その余りの盛り上がりように、後日広報部が売りに出した写真の人気上位は、絶対このコンテストの出場者で占められると思っていたのだが、堂々とその中でぶっちぎりの売り上げを叩き出したのは、大輝とランスレイルの「髪が触れ合うよーな至近距離で熱く見つめ合っています」なツーショット写真だった。

……ナニしてんの、あんだ達。

#### 第44話 フリーダムなヒト。（後書き）

次回、大輝視点で件の「写真」が撮られた経緯を（笑）。

灯乃の作品は、このように時々腐敗臭がほのかに香りますが、本格的なBLは敷居が高く感じるもので、ネタ的な扱いはしてもガチで語る予定はいまのところありません。

いえ、「読み物」としてのBLは余りえぐいものでなければむしろどんと来いなのですが、基本ハッピーエンド以外は書きたくない派なもので……。

ゲイの方をあからさまに差別するような浅ましい精神構造は持つていない自分を信じたいとはいえ、リアルにカレシを男性に寝取られたら、女性に寝取られるよりイヤだなあと考えてしまう辺り、全く差別意識がないとは言えないですし。

少なくとも同性が恋愛対象になる方々の苦悩というのは、灯乃には想像も出来ないほど過酷なものがあるのじゃないかと思います。

最近は大分世間的にも認められて来ているとはいえ、欧米諸国に比べればまだまだマイノリティを宿命づけられている彼らの真剣な恋愛を、女性である自分が軽く考えて安易に「ハッピーエンド」な物語を書くのも失礼な話かなーと……。

あ、時代モノなら大丈夫なのか。

江戸時代までは「衆道」と言えば、繁殖目的の男女の恋愛より崇高なものと考えられていたらしいですし……って、時代考証めんどく

さいから無理でした。はは。

## 第45話 マジで××する五秒前

クラスの出し物である「男の娘はだ〜れだ カフェ」において、女装を免除された一年F組の男子と言うのは、学園祭が始まってしまえばもう特にすることはない。

かなりカオスなことになっているだろう教室には、「極力近づかない方が身のためだね!」とこの学校に入学して以来、何だか妙に発達してしまった気がする自己防衛本能の命じるまま、大輝とランスレイルは極ふつーに学園祭を楽しむべく、二色刷のパンフレットを眺めながら校内をのんびり歩いていた。

一体、どこの誰が判定しているのかは知らないが、この学校の学園祭において、飲食関係については「金取っていいだけのモノ以外は提供するんじゃないぞ?」と言う通達が生徒会執行部から出ている為、何を食べてもハズレがないのが嬉しいところだ。

まずは前評判の高かった二年E組のシシケバブをゲットし、スパイスの効いた肉にかぶりつきながら渡り廊下を進んでいると、窓の外に見覚えのある水色が見えた。

「お、ささめじゃん」

「ええ、いつ見ても小さくてキュートデス」

ほのぼのとそんなことを言うランスレイルの横顔をちらりと見ながら、大輝は編入当初からランスレイルがささめに妙に懐いていた理由が、「あの黒くてまん丸い目が、子どもの頃、友達に貰ったマウス（よくよく話を聞いてみたら、どうやらハツカネズミの模様）

にそっくりなのデスよ」というモノだということは、絶対に有紗とささめには知られてはなるまい、と改めてココロに誓った。

あのふたりは、基本的に一般的な女子と比べれば呆れる程図太いくせに、虫だのネズミだのは普通に嫌がる。何故だ。さっぱり基準が分からん。

いや、授業中に現れたイニシャルGを、眉一つ動かさずに叩き潰す委員長のようになって欲しいわけではないから、それは別にいいのだが。そこまで最強になれたら、むしろ引く。

それにしても、せめてハムスター辺りだったならまだ良かったものを、何故にハツカネズミ。

アメリカではハツカネズミにチーズをやるのが、子ども達の間で通過儀礼だったりするのだろうか。

ここからはその小さな後ろ姿と、微笑ましく「お手々繋いで」状態の青年の大きな背中しか見えないが、ささめが浮かれているのかぴよんぴよんと落ち着き無く跳ねているせいで、何と言つか……。

「……親子だな」

「親子デスねえ……」

今は学園祭真っ最中の学校の敷地内だから、周囲も皆どんな組み合わせのカップルがようと完全スルーしているが、これが外だとしたら警察に通報されてしまいそうで、他人事ながらちよつと心配だ。

まあそれでも、当初の浴衣姿よりはマシだろう。アレは七五三というよりむしろ、テイスト的には座敷童だったと大輝は思う。

今後也和服を着ない人生をささめが歩めることを祈りつつ、ふたりは十六歳の若い胃袋を満たしに行くことにした。

広島風好み焼き、学食の厨房使用权を見事引き当てたクラスの本格ピッツアと、粉モノを連続で腹に収め、甘いものが欲しくなつてジェラートを購入すると、大分腹もふくれてきた。

「デューは結構、甘党デスよね」

同じジェラートはジェラートでも、甘さ控えめエスプレッソフレーバーをチョイスしたランスレイルにそう言われ、チョコレートとマスカルポーネのダブルをチョイスした大輝は、やかましい、と軽くランスレイルを睨み付けた。

「ガキの頃、あんまり甘いモンが食えなかったからな。その反動みてーなもんだ」

「?デューの家は、子どもには甘いモノを食べさせない教育方針だったデスか?」

「おやつと言えばピーナツバター、チョコチップ入りなら尚ヨシ」なアメリカ育ちのランスレイルにとって、子ども時代に甘いモノが身近に無いと言う事態は信じ難いものようだ。

しかし、大輝の幼年時代に、余り甘いモノが与えられなかったのは教育方針とか、そういう高尚な理由ではない。

「ささめんとこも、アニキと七歳だか八歳だか離れてるってんだから、結構離れてる方なんだろうけどな。オレんところ、兄貴は十七、姉貴は十三離れてるんだよ」

それはマタ、とランスレイルの瞳が丸くなる。

因みに、大輝の母親が兄を産んだのは十六歳。今の輝と同じ年である。

いたいけな少女にナニしてくれとんだアホオヤジ、殆ど犯罪じゃねーかと呆れたものだが、父にそう言うところ「ナニを言う！ かーさんが十六になるまで待った、このとーさんのすんばらしい忍耐力を褒め称えんか、バカもんが！」と力一杯どつかれた。痛かった。

まあそれはそれとして、大輝はぶっちゃけ「予定外の授かり物」だったわけで、両親や祖父母だけでなく、兄と姉にまで「かーわーいーいいいいいい！」といじり倒されて育つ羽目になった。

兄や姉など、大輝が物心つき始めた頃には「僕がパパだよ」「私がママよ！」などと巫山戯たことを言ってくれて、そのお陰で幼い頃は「ぼくのかぞくは、おとーさんと、おかーさんと、ぱぱとまます」だと本気で思っていた。

子どもが恥を掻く前にちゃんと訂正しろ、親。

しかし、いくら「ママよ」と言ったところで、姉の玲奈は大輝の幼少時、正に思春期真っ直中だったわけで、そうなるとお年頃の少女というものはダイエツトに励み出すと相場が決まっている。

『私が見えるところに甘いモノなんて置かないでちょーだい！ 置



いたりしたら……ふふふふ』と言う乙女の切実かつ脅迫じみた宣言は、彼女が就職して家を出るまで、城島家において遵守されることとなった。

兄の伊織は、『……大輝。ことダイエットというモノに関しては、女性の言うことに逆らってはいけないよ。時には命に関わるからね？』と物凄く実感の籠もった先人の知恵を授けてくれて、稀に姉が家にいないとき、兄が買ってきてくれるケーキがととても美味しく嬉しかった為、大輝はかなりのお兄ちゃんっ子だ。

両親や祖父母も、誕生日やクリスマスにはちゃんとケーキを用意してくれたが、ソレとコレとは別なのだ。

餌付けだ何だと言われようが、兄が大輝の好むものを覚えて、普段から気に掛けてくれているということのカタチがああなケーキだったのだ、文句あるか。

祖父の可愛がり方など、「うむ！大輝にはワシがすんならしい嫁を用意してやらねばのー！」などと言って持って来たのがあの婚約話なのだから、根本的に全てが間違っている。じーさん、少しは兄貴を見習ってくれ、切実に。

万年新婚夫婦の両親はそこはかとなく頼りにならないし、「大輝をあんな辛気くさい女にやるもんですか！」な姉が、常日頃から防衛ラインを引いてくれているからそれ程気にせず済んでいるが、その事実が普通に重いです。

そっぴや、と大輝は自分より少し背の高い友人を見遣った。

大輝も高校に入ってから大分背が伸びたものの、その分フランスレ

イルも伸びている為、余り身長差は縮まっていけない。ちょっとムカつく。少しは待ってろ、しんゆうだろうが。

「ランスは、弟がいるんだよね？ルーフエスだっけ？」

そう言つと、ランスレイルは何を思いだしたのか、小さく肩を揺らした。

「……ハイ。ワタシがニホンに行くことが決まった途端、ルーフエスは『お土産はマンガでいいから！』と叫びましたデス」

アレはちよつと寂しかったデスねー、とランスレイルが苦笑する。

「へー。何読んでんだ？つーか、日本語読めんの？」

「いえ、ルーフエスは日本語は少し話せるだけなので、ミリイが訳しているデスが……時々漢字の振り仮名がどうしてそうなるのか分からなくて、困っているようデスね」

「あー……」

マンガ独特の漢字の振り仮名と言つのは、結構……と言つか、かなりある。まあ、それも異文化交流の醍醐味というモノだろう。

日本で少し前に流行つた少年漫画がランスレイルの弟のお気に入らしいが、本国で英訳されたものは一冊千円近くするとかで、それは確かに子どもの小遣いではちよつと手を出しにくいお値段だ。

お土産にと強請る気持ちも、ちよつと分からなくはない。

「まあ、お土産に何を選ぶか、悩まなくていいのは楽デスけどね」

「そりゃそうだな。……んじゃ、次は物理部の方行ってみつか」

「いいデスねー、熱気球デスね？」

学園祭当日が晴れで風が無ければ、と言う条件付きで物理部が申請していたのが、黒いゴミ袋を何十枚も繋げてバルーンを作り、そこに送風機で空気を送り込んで燃料ナシの熱気球を飛ばすと言う実験コーナーだ。

幸い今日の天候はバッチリ、時間は午後二時からとなっているから、今からグラウンドに行けば丁度いいだろう。

途中、絞りたてのオレンジジュースを買い込み、すぐに飲み終えたそのコップをちゃんとリサイクルボックスに投入してからグラウンドに向かうと、白衣を着た物理部の面々が、わくわくした面持ちで巨大な送風機を引っ張り出して来ているところだった。

グラウンドには一体ゴミ袋を幾つ使ったものやら、これまた巨大なバルーンが「まだかー」とぺったり地面にひっついていてる。

……それにしても、この実験にあそこまで巨大な送風機は必要なのだろうか。風力を全開にしたら、人間くらい普通に吹っ飛べそう  
だ。

どこからあんなモノをレンタルして来たのやら、と思っていると、やはり物理部の面々も扱い慣れていないからなのか、「あれ？」「いや、こっちがこうだろ」「おーい、誰かマニュアル持って来てくれー」などと、何だかちよつと不安な感じだ。

と、漸く景気のいい駆動音が聞こえてきて、「おおー！」と歓声上がる。

しかし、次の瞬間。

（のわあっ！?）

送風口が若干下向きになったまま送風機を駆動させてしまったのか、乾いたグラウンドに叩き付けられた空気は大量の砂埃を巻き上げた。

歓声が悲鳴に変わり、物理部の「申し訳ありません、申し訳ありませんー！」と叫ぶ声がスピーカーでハウリングを起こしているが、大輝はまともにその砂埃を食らってしまった。

「だっ、大丈夫デスカ、デイー!？」

「い、いや……お前は？」

「ワタシは、どうにか……ああ、擦っては駄目デスー！」

痛む両目を開けていられなくて、咄嗟に擦ろうとした手首を掴まれる。

「う……さ、サンキュー」

周囲でも悲鳴だの苦痛の声だのがあちこちで上がっていて、なのに目が開けられないと言うのはかなりキツイ。

「ええと……水飲み場に行くデスよ？水で洗い流すのが一番早いデス」

「悪いー、頼むー」

ランスレイルに手を引かれ、痛む目を閉じたままどうにか校舎脇の水飲み場に辿り着く。

（あだだだ……ったく、ちくしょー）

冷たい水で洗い流すと、ようやく目を開けられるようになったものの、何だかまだひりひりする。

「酷い目に遭ったデスね……大丈夫デスか？」

「あー……どうにか？」

「目が赤いデス、保健室に行くデスか？」

気遣わしげに覗き込んでくるランスレイルに、別にそこまでじゃない、と言おうとしたとき。

パシャ、と聞き覚えのある機械音が耳に届いた。

（……なんですと？）

物凄く、それはもう物凄く嫌な予感がしてぎしぎしとそちらを見ると、まだ少し見難い視界に映ったのは、立派なカメラを構えた女生徒の姿と、その腕にデカデカと「広報部」と記された腕章。

「……ごちそうさまでした」

律儀にぺこりと一礼し、すたすたと去って行くその女生徒の後ろ姿に、ランスレイルは「あ、どうもデス？」などと言っているが。

「ああ、今のが学園祭の様子を記録して回っているという、広報部のヒトデスカ」

お仕事大変そうデスねー、なんて呑気に言っている場合じゃねーと思うぞ、ランスレイル。

近い将来の悲劇を正確に予測した大輝は、その場にへのへのと座り込みたくなった。

数日後。

「にははははは！だっ、大輝君、オトメー！これはオトメだよー！」

広報部が掲示板に貼りだした「欲しい写真があつたら、申込用紙にナンバーを書いて注文してね 一枚三十円」の中に、その写真を見つけたささめが瞬時に爆笑したのを、大輝は丸めたノートで力一

杯しばき倒した。

「いったーいいいいい！何でノートなんて持ってるのようー！？」

こうなることが予想出来たからに決まってるだろう、この天然小悪魔。いいから黙れ。

いくらうるうるお目々で見上げられても、それを毎日のように見慣れている大輝に対する攻撃力は、最早ゼロだ。ざまあみる。

そのささめが爆笑をかましてくれた写真ナンバー、198。

そこには、「目元を朱く染めて、何だかとっても頼りなさげ（不本意）な表情を浮かべている大輝と、至近距離で見つめ合っている（ようにしか見えない）ランスレイル」のツーショットがばっちり写し取られていた。

……この場合、恨むべきは物理部か、広報部か、それともその元締め of 生徒会執行部なのか、はたまた許可を出した教師連中か。

腐った女子しか喜ばないようなこんな写真を、堂々と売りに出してんじゃねえ。

「ササーメイ、ディーは砂埃に目をやられて、とっても大変だったデスよ？笑っては失礼デス！」

「うー……そうなのー？……っで、でも、コレって、コレってー！」

めーとささめを窘めるランスレイルに、しかしささめはぷるぷると震えてまたしてもナニか余計なことを口走ろうとしたため、大輝

は丸めたノートをぽん、と手のひらで弾ませた。

「……ささめ」

その、地の底を這うような低音に、ささめがぴょ！と跳び上がる。

「は、はいー？」

「あんまり、余計なことは、言うな？」

『……っあーちゃああんっ！大輝君が、大輝君が怖いようっつう  
ー！』

『……うん。あのねーささ、男の子にはね、コレだけは譲れねエっ  
ていう大事なモノがあるのだよ？その辺りの事情を斟酌して、今は  
そっとしておいてあげようね？』

ぽんぽんとささめの背中を叩いていた有紗が、小さく息を吐いて  
顔を上げる。

「大輝」

「んだよ」

「人の噂も七十五日よ？」

お前にしてはベタなフォローをありがとう、有紗。

「そうそう、この『マジでキスする五秒前』な写真の噂だって、い  
つかはきつと風化するから！」



「……っ お前なああああっ!!」

ぐっとサムズアップなんぞして、改めて言葉にするとますます攻撃力の上がった気がする現実を指摘してくる有紗の隣で、ランスレイルがオヤ、と首を傾げる。

「オウ……言われてみれば、そんな風にも見えるデスね？良かったデスね、ディー。これでワタシが女性でしたら、またおかしな噂が広まってしまうところデスよ」

にこにこにこ。

「……ランス」

「ハイ？」

「……いや、何でもないです」

お前はそのままできてくれ、ランスレイル。

相手が男のお前だからこそ、おかしな噂が広まりまくっているんだなんて言う腐った事実は、きっと知らない方が幸せだ。

#### 第45話 マジで××する五秒前（後書き）

次回は、久しぶりにムーン様の方を更新してみたいと思っています。

和馬視点ですが、相変わらず糖度がすごいことになっておりますので、十八歳以上の方はお気を付けてお出下さいませ（汗）。

## 第46話 初デート？（前書き）

年内最後の更新となります。

皆様、よいお年を！

## 第46話 初デート？

「和馬。今度、外でデートしよう？」

「……は？」

突然の有紗の申し出に目を丸くした和馬は、リビングのローテーブルで広げていた、有紗の幼い頃の写真を収めたアルバムを閉じると、いきなり何だと首を傾げた。

「どこか、行きたいところでもあるのか？」

「いや別に」

「あ？」

和馬が部屋に来るようになってから欠かすことのなくなったミネラルウォーターに、レモン果汁を少し混ぜたものを注いだグラスをテーブルに置くと、当然のように抱き寄せられ、既に定位置となっている腕の中に落ち着く。

（まあ、「おうちデート」なら、現在進行形なんだけどねー）

先日の学園祭の開始直前、ささめの「ダブルデートがしてみたいのー」と言う可愛らしいお願いに、有紗は深く考えることもなく安易にOKしてしまったわけだが、改めて考えてみると、初デートと言うものはやっぱり和馬とふたりがいいな、と我ながら少々オトメちっくなことを思ってしまったのだ。

そう言つと、人間椅子になつていた和馬がくくつと笑つて、頬に落ちかかつていた有紗の髪をさらりと耳に掛けてきた。

「そりゃあそうだな」

「でしょう？……つてこら、いきなり耳を囓るな、胸を揉むなっ」

「いや、お前があんまり可愛いこと言うから」

「え、ちょ、んん……っ」

……我ながらちよつと似合わないな―と思つたオトメ的思考を披露した結果は、久しぶりの「エロ竜モード」でした。

しかし基本的に、有紗も和馬もいわゆるデートコースとされるような人混みにわざわざ行くのは面倒に感じてしまう方だし、遊園地のアトラクション等も、異世界で魔族討伐なんてものをしてしまつたふたりにとっては今ひとつそられるものがない。

映画館、アミューズメントパーク、有名所の公園なんかのそれっぽい候補を一通り挙げてみても同様だ。

いつそ海か山にでも繰り出すかとも思つたのだが、日帰り、もしくは土日の一泊で行ける範囲となると、やはり人混みが予想される上に移動だけで終わつてしまいそうだ。

「どうせなら、景色の綺麗なところがいいんだけどな」

「っても、近場だとなあ。こっちでも空を飛べるんだつたら、海だろつが山だろつがすぐ行ける……」

「……………」

いち、にい、さん。

「「それだ！」」

そういうわけで、記念すべき初デートは異世界探訪と相成りました。

前は運悪く魔族の繁殖期なんてものにバッティングしてしまっただが、あんなレアなことはそうそう無いだろうし、久しぶりにヴァンフレッド達の様子を見に行くのも悪くない。

ついでに、オススメのデートコースなんかを百戦錬磨のカイルに教えてもらえば一層楽しめることだろう、とうきつきしながら、今度は転移先の半径五十メートル以内に大型生物の生体反応がないことをきちんと確認してから移動したのだが。

(さ……っ 寒iiiiiiiiiiiiっ！！ 暖iiiiiiiiiiiiっ！！)

一瞬で体温を奪われるようなブリザードに見舞われ、更に次の瞬間には和馬の腕の中に抱き込まれて、何をどうしたものやら、兎に角とんでもない突風も雪も冷気も遮蔽された空間の中、有紗はひしとばかりに和馬にしがみついた。ああぬくい。

「びびびびっくりしたあ……………」

「すげえ雪だな……………」

今まで、余りこちらの世界との気候の差を感じたことはなかったのだが、こんな世界を白く染め上げるような猛吹雪なんて初めてだ。

「こっちはもう冬だったんだ。……ていうか、ここ、王都じゃないよね？」

目標であるヴァンフレッドの指輪からそう離れた場所ではない筈なのに、どちらに目を向けてもまるでシベリアのような雪原と針葉樹林が広がるばかり。

幾ら雪のせいで景色が違って見えるにしても、あの壮大な王宮や、それを幾重にも取り巻く見事な町並みが、僅かも確認出来ないなんてことがあるのだろうか。

「ヴァンに連絡取れないのか？」

「ん、ちよつと待って。…… 意思疎通 ・ 遠話」

二人とも、以前この世界で入手した衣服を着ているものの、有紗は裾の切り替えが可愛いワンピースとカーディガンにブーツ、和馬は黒のパンツとブーツ、生成りのシャツにジャケットを羽織っているだけで、とてもこんな「THE・冬！」に対応した格好ではない。

残念ながら今回はここでのデートは無理のようだが、折角来たのだから友人の顔くらい見て帰りたい。

有紗の「呼びかけ」にヴァンフレッドが応じるつもりがあるなら、ぴこぴこと光る指輪の宝石部分に触れてくれれば話が出るようになるから、と伝えておいたのだが、中々応答が無い。

ひょっとして今は手近に置いていなかったのかな、と諦めかけた頃、脳裏に相変わらずの美形声が響いた。

『……アリサか？久しぶりだな、元気にしていたか？』

何だろうな、顔が美形な連中って大抵声もいい気がする。やっぱり整った骨格とかが、そういう声を作ってるんだろうか。

「あ、王子様。元気ですよー、そっちは？」

ああ勿論、と応じるヴァンフレッドに、今から会いに行っても大丈夫か、と問う前に、ぐいと和馬に頬を挟まれて深く唇を奪い取られた。

「んん……っ」

『？アリサ、どうした？』

「……よう、ヴァン。聞こえるか？」

『ああ、聞こえるぞ。カズマも元気そうだな』

（い、この……っ）

しれっとした顔で術式を共有してヴァンフレッドと会話する和馬に、有紗はふるふると拳を固めた。

不意打ちで持って行かれるキスなんてもう数え切れない位だといふのに、妙なしてやられた感があって、何だかむかつく。



むかついたので、足の甲でも踏んでやろうかと思っただけで、それで和馬が吹雪を防いでくれている壁が崩れたら困るのでやめた。  
チツ。

……ええそうですよ、今ちよつと思考回路がオトメモード優先状態だったから、「好きだよ」じゃないキスをいきなりされたのが何だか嫌だったんですよーだ。

やっぱり、馴れない思考回路なんて使うもんじゃないかもしれな  
い。さっさと通常モードに復帰しよう。

まあそうして、「僕も暇だから、顔を見せてくれるとありがたい  
な」と言うヴァンフレッドの言葉に、「あ、じゃあ今から行くねー」  
という話になったのです、が。

「……………は?」

一面の雪原に、そこだけ違う時間が流れていそうな威容を誇る、  
その要塞としての姿を隠すことのない城の名は、ヒルデガルド。

それまでに訪れた王宮や離宮とは明らかに雰囲気異なる、この

質実剛健を絵に描いて枠に入れたような風情の城は、周辺の森に住まう人々からはただ「砦」と呼ばれているのだと言う。

勿論、その中に入れば相変わらずの完璧な空調設備が整えられている為、重厚な家具で統一された応接間で迎えてくれたヴァンフレッドを始め、お馴染みナイス執事のヴィクトール氏、お色気猫耳団長のカイル、肩にらぶリーな使い魔ノーラを乗せたアルフォンスも二人と似たような生地の上着を着ていたが、そんなことはどうでもいい。

彼らの話を聞いて、「へえ……」と口元だけで物騒な笑みを閃かせた和馬が、もしヴァンフレッドの父親である国王と対面することがあったなら、きっと有紗が頼まなくても、髪だけでなく、眉毛まできれいなサツパリハゲ散らかしてくれることだろう。

ヒルデガルド城があるのは、この国で最北の地、ミユス力。

点在する鉱山と木材による収入はそこそこあるものの、王都から遠く離れた辺境と言っても過言ではないこの極寒の土地を、ヴァンフレッドが「魔族討伐の報償」として与えられ、自ら赴いて治めるべし、と要は思い切り僻地にトバされたのは、彼が魔族討伐で活躍し過ぎた為であるらしい。

それまでは、母親が庶出ということで、王宮内の勢力争いからは一歩外に出た位置にいたヴァンフレッドだが、そんな事情など知ったことじゃない国民は正直だ。

「イザというときに体を張って魔族と戦ってくれた王子様」であるヴァンフレッドと、「その間ずっと安全な王宮でぬくぬくしてました」なその他の王族。

どちらがその心を驚掴みするかなど、正に火を見るよりも明らかに、そうなると思えるに敏い貴族達も、手のひらを返したようにすり寄って来始めたのだそうだ。

「僕は元々、いずれルカの補佐に就くと宣言していたから、別にそれは構わないと思っていたんだが……」

はあ、とヴァンフレッドが溜息を吐く。

「想像以上に、貴族達の動きが大きくなってしまっただけ。このままでは王宮内で余計な紛争が起きかねんと言っただけで、まあこういうことになった次第だ」

「いやもう、マジで凄かったぜ？オレやアルの屋敷まで、殿下と繋ぎをつけたがる連中の賄賂で溢れかえったもんなあ」

「賄賂なら賄賂らしく、すばつと現金で寄越せと言っただけですよ。趣味の悪い絵画や骨董は売りに出せばいいとしても、ご本人の原形を留めているのかも分からない見合い用の肖像画など、精々暖炉の焚きつけにしかならないと言っただけに、全く困ったものです」

……燃やしたんですか。

この国の暖炉って、飾りというか、雰囲気を楽しむための工芸品だと思っただけですが、まあこれ程立派な暖炉で燃やされたなら、お気の毒な肖像画達もきつと成仏出来たことでしょう。

でもどうせならそんな肖像画、小学生男子の教科書並の落書きをして、まとめて王都の壁に貼り出してやれば良かったのに。けつ。

## 第47話　ゼノン

しかし、再会早々そんな「巫山戯てんじゃねエぞオラ」な話を聞かされて、それはもう力一杯はらわたが煮えくり返ったものの、当事者であるヴァンフレッド達がもう済んだこととして納得している以上、有紗達がぶつちぎれて余計な騒ぎを起こすわけにもいかない。

……話を聞いている間、覚えてただけで実際に使ったことは一度も無い戦略用術式をあれこれ検討していたことは、取り敢えず黙っておこう。

彼らがこの城に移動してきたのは一月ほど前のことで、その頃はまだ雪も無く、少し離れたところにある美しい湖の水で仕込んだ穀物酒をぱーっと振る舞う祭りもあったりして、北国らしく素朴で大らかな気質の住民達と親交を深めて楽しむ余裕もあったらしい。

あの酒は美味かったなー、と思い出すだけでその素敵尻尾をくねくねさせているカイルの様子に、和馬があからさまに「いいなあ」と言っ顔をする。

元の世界ではちゃんと「お酒は二十歳になってから」を守っている和馬だが、こちらに来る度、アルコール度数ばっちりの果実酒を筆頭に、色々なお酒を楽しんでいる。

おかしいな酔い方をしたことはないから別にいいのだが、有紗が即座に「無理っス」と白旗を掲げるようなシロモノを男達だけで楽しまれると、何だかやつぱりちよつと悔しい。

この際、少しお酒に馴れてみようか、と未成年にあるまじきこと

を有紗が思ったときだった。

（え）

突然、ソファの隣に腰掛けていた和馬が弾かれたように立ち上がり、その腕に攫う勢いで抱き寄せられた。

何を、と思う間に視界の端で白い光が弾けて、それがそれまでアルフォンスの肩の上でまったりしていたノーラが瞬時に実寸大の戦闘形態を取り、大きく広げた純白の翼だと知る。

爛々と紅く輝く瞳。いつでも敵に飛びかけられるように低く伏せたしなやかな体躯を覆う毛皮は総毛立ち、羽根の一枚一枚までを震わせて牙を剥き出しにしながら、未だ降り止まない吹雪ばかりを映す大きな窓から注意を外さないその様子に、ヴァンフレッド達がささず立ち上がって「魔族狩り」を起動させる。

しかし、そんなことよりも。

（和馬、が……）

緊張、している。

いや、緊張、なんてものじゃない。

有紗を抱き締める腕は強張り、押しつけられた体から直接伝わってくる感情は、恐怖に近い。

息苦しい程に強く抱きすくめられ、どうにか視線だけ動かして和馬の顔を見上げると、ノーラと同じように窓から僅かも逸らさない

その瞳が、鮮やかな金色に染まっていた。

どうして。

一体、何が。

「ノーラ」

「……マスター、逃げて」

微動だにしないままそう応じるノーラに、アルフォンスがちらりとカイルに視線を投げ、それに軽く頷いて応じたカイルが、おい、と声を掛けて来る。

「カズマ、アリサ。悪い。殿下を連れて逃げてくれ」

「カイル！？お前、何を……」

「カイル」

ヴァンフレッドが顔色を変えてカイルを振り返るより先に、今まで聞いたことのない、和馬の乾いた声が部屋の空気を震わせた。

「もう、遅え。……お客さんだ」

（……………っ）

ざわ、と全身の皮膚がそそけ立つ。

一気に、部屋の重力が増した気がした。それ程の、圧迫感。

窓の外は、白。

ただし、そこには既に風に舞う細かな雪片の織りなす濃淡はなく、代わりに磨き抜かれた水晶のような、或いは鍛え上げられた金属のように艶やかな光沢と、その白銀の輝きの中、更に美しく煌めく黄金の輝きがあつた。

和馬の瞳と、同じ黄金。

それは、一抱えほどもある巨大な宝玉にも似て、しかしその中心に一層濃い黄金を宿すそこには、明らかな知性の光があつた。

その視線の重みに、息が詰まる。

（竜……）

四角く切り取られた窓から見えるのは、その瞳と顔の一部だけ。

もし全身を見ることが叶うなら、きっとこの城と遜色ない大きさがあることだろう。

いや、もしかしたらそれよりもずっと大きいのかもれない。ここから見える部位だけでは、全体像を想像するなんてとても無理だ。

……一体どうやって重力に耐えているんだろう。これだけでかいと、体の向きを変えるだけで一苦労だろうに。

ああ、そう言えば竜だから魔法を使えるんだよね、基本でしたね  
すいません、と有紗が思い切り力の限り現実逃避していると、縦長





ゼノンと呼んでくれ、と低く渋い美声で仰ったのは、仄かに蒼みを帯びて輝く、正に雪のような白銀の髪を短く刈り込み、北国独特の刺繍を施された風雅な衣服を纏う男性体となった竜のヒト。

勿論、彼が親から頂いたという長ったらしくも大切なお名前はちゃんと別があり、ゼノンと言うのは他者と関わるときの通り名のよきなものらしい。

「いやあ、市の噂でこの巢にヒトの王の子が入ったと聞いて、一度会いたいと思っていたのだが、いきなり我がコンニチハと行ったら驚かれるかと思ってな。そうしたら、何やら同族の気配がしたものだから、ならば大丈夫だろうとこうして訪れた次第だ」

そう朗らかに仰るゼノンは、人型となってもとんでもないラージサイズで、二人がけのソファに腰掛けているというのにそれが丁度良く見える位の巨漢だった。

見た目の印象は、三十代半ばの男盛り。

もしルネッサンス美術の彫刻モデルがいたなら、こんな感じだろうか。

ゆつたりとした衣服の上からでもその隆々たる筋肉美が予想出来る、正に偉丈夫と言うに相応しい、男性からは問答無用に羨望と憧憬の眼差しを、女性からはその好み次第だが概ね好意的な視線を集

め、子どもからは間違いなく「くまー！」泣き出されてしまいそうな迫力満点の御方である。

そんな荒削りな印象ながら、正に漢！と言う風情の剛胆さが滲み出る風貌のゼノンだが、そのいかにも豪快そうな見かけに寄らず、意外と気遣いのヒト(?)であるらしい。

はあ、と応接室に新たに設けた席にどっしりと腰掛けるゼノンを迎えていたヴァンフレッドが、そつと未だに若干緊張を滲ませている和馬に目を向ける。

同族、という言葉にカイルとアルフォンスも同様に意識を向けて来るのが分かったけれど、以前余りに非常識な和馬の力について、「特殊な術で竜石の力を取り込んでいる」と、嘘ではないが真実でもない言い訳をしていたせいか、それ以上のリアクションが無いのが有り難い。

距離感を間違えない大人のひとつで、素敵だと思います。

(でも、どうしたのかな……)

さつきから、和馬の表情が硬いままなのが、少し気になる。

ゼノンがこちらに害意を持っていないこと位、有紗にでも分かる。

なのに、和馬の横顔はきつく引き締まったままで、殆ど瞬きすらせずにゼノンから僅かも目を離さない。

臨戦モードこそ解除しているものの、ノーラもアルフォンスの足元で実寸大のままじっと伏せているし、やはりまだまだ警戒は解い

ていないらしい。

カイルとアルフォンスが一見平常モードなのは、別に彼らが鈍いわけではなく、実戦経験豊かなオトナであるからだろう。多分きつと。

しかし、ある意味有紗が知る限り、最も肝が据わっている人類であるヴァンフレッドは、それでは、いつもと同じような調子で白竜の化身に向き直った。

「ゼノン殿。竜の御方が私のような若輩者に、どのようなご用でしょうか？」

以前和馬から、天然モノの竜は、それぞれの属性に合った土地に巣を構え、自然の気を取り込むだけで生きている仙人ばりの生態をしているようだと言ったことがある。

動物、と言うよりはむしろ精霊に近い存在であるらしく、書物によつては、自然そのものの具現と言う表現をしている記述もあったらしい。

そのときは随分不思議なイキモノだなあと思っただけだったが、その実物を見て妙に納得した。

人間なんて簡単に指先で「ぷち」と出来そうなあの巨体を、他の生き物を補食して維持しようと思っただけの肉が必要なことやら。

あっという間に地上全ての生物が竜のお腹に収まって、エサの無くなった竜が餓死していました、と言う何とも哀愁漂う結末が訪

れてしまうに違いない。

実際のところ、和馬も人間ベースの竜族（？）だから、普通にご飯を食べた程度では生命維持にはとても足りず、本来ならしょっちゅう森林浴だの海水浴だのをして体内の魔力を活性化させなければならぬらしい、のですが。

……いえ、竜が「契約」済みの場合は、伴侶との性交渉だけが魔力の循環と活性化の方法となっているから、特に自然の中でまったりする必要はないとか、それは別にいいんですけどね。

最近和馬が「腹減った」って言うてくるとき、妙に楽しそうというか前より随分余裕っぽいというか、本当に空腹なのかと密かに疑問に思っていたりとか、気持ち良すぎて困るからたまには少し手加減してもらえませんかと思っているとかも、他人様に愚痴ったら「ノロけてんじゃねーよバーカ」の世界ですよ、分かってます。

しかし、最近久しぶりの活動期に入り、ヒトの世界も随分様変わりしたものだと思味深く思っていたというゼノンは、実は、と些か困ったように眉を寄せた。

「私の住処は、向こうの山を越えたすぐのところにあるのだが」

向こう、と先程ゼノンが登場した窓の方を指さすと、ヴァンフレッドが不思議そうな表情を浮かべた。

「それでしたら、グラン首長国の所領ですね？何故わざわざこちらにまで？」

「？」

「……失礼致しました、どうぞお続け下さい」

はい、そうですね。

休眠期に入ると平気で数年単位で巣の中でごろごろしている竜が、人間の引いた国境なんて気にするわけが御座いませんね。

だから尚更、基本的に気ままな単独行動、他種族どころか同族との交流も殆どゼロと言う引き籠もり一族である竜が、何故にわざわざヴァンフレッドに会いに来たのやら、と言う疑問を一同が覚える中、ゼノンは溜息混じりに口を開いた。

「それが……住処の近くで、ヒトの子を拾ってな」

「子ども、で御座いますか」

うむ、とゼノンが重々しく頷く。

「暫くは我が育てていたのだが、やはりヒトの子はヒトの中で育つべきだろう。それで、いきなりこんな申し出をするのはどうかとも思うのだが、その子がヒトの世で生きていけるよう、世話をして貰えぬものだろうか？ヒトの王の子よ」

……どうやら突然やって来た白竜のくまさんは、森のくまさん並にいいひとだったみたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7419u/>

---

NEXT TO YOU

2012年1月5日21時40分発行